

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
01000-1	北海道		<p>【災害名】北海道南西沖地震災害                      【発生日時】1993年(平成5年)7月12日                      【被災地】北海道石狩、渡島、檜山、後志、空知、宗谷、胆振の7支庁60市町村                      【災害の概要】北海道南西沖(北緯42度47分、東経139度12分)で発生したマグニチュード7.8の地震及び津波による災害(震源の深さ34km、最大波高は21mを記録した。)(被害の詳細については、添付資料1-1を参照)                      【教訓等】震源に近い奥尻島では、昭和58年5月26日発生の日本海中部地震の際に津波による被害(奥尻町青苗地区で4mを超えたところがあったものと推測された)を受けており、住民は自らの判断で地震発生直後から着のみ着のまま高台へ避難するなど、その時の教訓が生かされた。しかし、津波の来襲が極めて早く、また、その規模も予想をはるかに上回る大きな津波であったことから、多くの人々が逃げ遅れ多くの生命を失う結果となった。</p>	・文献資料	・北海道『平成5年(1993年)北海道南西沖地震災害記録』平成7年3月発行 ・奥尻町『北海道南西沖地震奥尻町記録書』平成8年3月発行
01000-2	北海道		<p>【災害名】有珠山噴火災害                      【発生日時】1663年(寛文3年)7月13日(旧暦)以降8回                      【被災地】北海道伊達市、虻田町、壮瞥町                      【災害の概要】1663(寛文3)年噴火、1769(明和5)年噴火、1822(文政5)年噴火、1853(嘉永6)年噴火、1910(明治43)年噴火、1943-45(昭和18-20)年噴火、1977-78(昭和52-53)年噴火、そして2000(平成12)年噴火と少なくとも8回の噴火を数えている。(被害の詳細については、添付資料1-2参照)                      【教訓等】有珠山では、2000年の噴火を含め、これまで少なくとも8回の噴火しており、過去多くの被害が発生している。こういった経験から、住民が有珠山の噴火について高い意識を持っており、平成7年9月には、全戸にハザードマップを配るなど行政・専門家の取組も進められていた。このような背景と噴火前に各市町長から出された避難指示などにより、建物等の被害は大きかったが、噴火による直接の死者・負傷者はいなかった。(家屋被害850棟、被害総額28,663,658千円。)</p>	・文献資料(記録書・書籍)	北海道総務部総合防災対策室防災消防課・北海道総合企画部有珠山火山活動災害復興対策室『2000年有珠山噴火災害・復興記録』平成15年3月発行
01000-3	北海道		<p>【災害名】平成5年(1993年)釧路沖地震                      【発生日時】1993年(平成5年)1月15日(金)20時06分                      【被災地】北海道釧路、十勝、根室、日高、胆振、網走、渡島、上川、石狩、空知、檜山の11支庁99市町村                      【災害の概要】北海道東方沖(北緯42度54分、東経144度22分)で発生したマグニチュード7.8の地震被害(最大有感距離約1,200kmで、北海道から東北、関東甲信越地方のほぼ全域で有感となる強い地震であった。)                      【教訓等】震源に近い道東地方は、過去にも震度3~4程度の地震が数多く発生するなど、地震発生直後にはストーブ等の火を消すという住民の地震に対する防災意識が高い背景にあり、本地震及び翌年に発生した東方沖地震においても、家庭においてストーブ等の火を消す行動が取られたり、耐震装置による自動消火がされたなど、火災による二次被害が少なく、地震の揺れの程度から見ると人的な被害が少ないという特徴がある。</p>	・文献資料(記録書・書籍)	・北海道釧路支庁『平成5年(1993年)釧路沖地震報告書』平成6年1月発行 ・北海道総務部防災消防課『平成5年(1993年)釧路沖地震災害記録』平成7年3月発行 ・北海道総務部防災消防課『平成6年(1994年)北海道東方沖地震災害記録』平成8年3月発行
01000-4	北海道		<p>【災害名】寛保津波                      【発生日時】寛保元年(1741年)7月19日                      【被災地】北海道松前郡松前町、檜山郡江差町、爾志郡熊石町等                      【災害の概要】日本海上に浮かぶ離島大島が突如大噴火を起こし、松前弁天島から熊石村(当時)までの諸村に大津波が襲来した。この津波による被害は、溺死1,467名、家屋倒壊790戸、破船大小1,521艘にのぼり、日本災害史上、記録的な大惨事となった。                      【教訓等】殉没者の慰霊碑が建立され、大津波の惨状が今に伝えられている。慰霊碑については、北海道の有形文化財に指定されており、貴重な歴史的資料として保存が図られている。                      (慰霊碑の名称及び所在地)                      ・法華寺寛保津波の碑(北海道檜山郡江差町)                      ・正覚院寛保津波の碑(北海道檜山郡江差町)                      ・光明寺寛保津波の碑(北海道松前郡松前町)                      ・泉龍院寛保津波の碑(北海道松前郡松前町)                      ・無量寺寛保津波の碑(北海道爾志郡熊石町)</p>	・その他(教育委員会告示)	・平成4年4月1日付け北海道教育委員会告示第31号 ・平成13年3月30日付け北海道教育委員会告示第23号 ※上記については、いずれも同日付けの北海道教育委員会公報号外に掲載されている。

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
01100 2-1	北海道	札幌市	<p>【災害名】56水害（台風12号・集中豪雨、台風15号）</p> <p>【発生日時】昭和56年（1981年）8月3～4日、同年8月21～23日</p> <p>【被災地】真駒内、川沿、東米里、藤野、茨戸、藻岩等</p> <p>【災害の概要】樺太（サハリン）中部に発達した低気圧から南にのびる前線が北海道中央部に停滞し、これに北上した台風12号の影響が加わって豪雨となった。石狩川流域では3日夕方から6日朝まで雨が降り続いた結果、その総雨量は札幌で294mmを記録し、大洪水を引き起こした。さらに、約2週間後、追い討ちをかけるように台風15号が襲い、総雨量229mmもの豪雨が再び発生し、二度目の記録的な大洪水をもたらした。</p> <p>【教訓等】これらの大洪水は、観測史上最大の降雨量、流量を記録し、北海道全域で死者3人、氾濫面積614平方キロメートル、被害家屋約30,991戸もの甚大な被害を及ぼした。この洪水の特徴は、石狩川の一部で、水が堤防を越えて溢れ出したばかりでなく、水位が増した石狩川に流れ込めない支流や排水路などの水が溢れる被害が目立った。</p>		
01367 6-1	北海道	奥尻町	<p>【災害名】北海道南西沖地震</p> <p>【発生日時】平成5年7月12日</p> <p>【被災地】奥尻町全域</p> <p>【災害の概要】北海道南西沖（北緯42度47分、東経139度12分）で発生した地震及び津波災害（震源の深さは34km、マグニチュード7.8、最大波高は29mに達した。）</p> <p>【教訓等】この地域においては、昭和58年5月26日発生の日本海中部地震の際に津波の来襲を受け、住宅83戸他の被害を受けた。そのため、住民はそのときの経験から地震が生じた際、高台へ避難する意識が形成された。</p>	・文献資料	タイトル：『北海道南西沖地震奥尻町記録書』発行：奥尻町役場 発行年：1996年3月1日
01371 4-1	北海道	せたな町 (北檜山町、瀬棚町、大成町が合併)	<p>【災害名】北海道南西沖地震</p> <p>【発生日時】平成5年7月12日</p> <p>【被災地】北海道久遠郡せたな町</p> <p>【災害の概要】奥尻島北西沖を震源とする地震で発生した地震・津波災害 ・マグニチュード7.8 ・津波7メートル</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料	災害記録書
01452 4-1	北海道	鷹栖町	<p>【災害名】明治31年の水害</p> <p>【発生日時】明治31年9月6～8日</p> <p>【被災地】北海道上川郡鷹栖町（当時鷹栖村）</p> <p>【災害の概要】強風をともなう大暴風雨（6日から8日までの総降雨量が163.1mmに達した。）</p> <p>【教訓等】鷹栖村では水害の発生とともに被災者292名に炊き出しを行い、また救恤米を94名に給与したほか、164名に食料米を貸与し、8戸に小屋掛料を貸し付けるなどの救済措置を講じた。</p>	・文献資料	鷹栖町史、昭和48年、p318-319
01452 4-2	北海道	鷹栖町	<p>【災害名】昭和30年の豪雨</p> <p>【発生日時】昭和30年8月16～21日</p> <p>【被災地】北海道上川郡鷹栖町（当時鷹栖村）</p> <p>【災害の概要】17日には旭川地方気象台開設以来の最高記録である183.2mmという降雨量となった。この雨は21日まで降り続いたので、7月からの再三に渡る増水で抵抗力が弱まっていた各河川は、たちまち決壊して大水害を引き起こした。</p> <p>【教訓等】町内各地に緊急避難所を設けて炊き出しを行い、自衛隊第二管区旭川駐屯部隊施設大隊、旭川警察署の救援を得て、水中に孤立した8戸、21名を救出した。緊急に水害対策本部を設置した村では、ただちに災害救助法の適用を受け、さらに上川支庁や道、政府および国会に対して各種の要請運動をつづけた。</p>	・文献資料	鷹栖町史、昭和48年、p324-325

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
01469 9-1	北海道	美深町	<p>【災害名】美深町大火                      【発生日時】昭和3年7月23日                      【被災地】中川郡美深町（市街地）                      【災害の概要】昭和3年、旱天続きの7月23日午後1時40分頃駅前を火元として637棟が焼失、483戸が被災し市街地600戸余のうち、その約8割が2時間ほどで灰燼に帰した。（災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照）                      【教訓等】昭和3年の大火を終生忘れないようにと、毎年7月23日には「鎮火際」挙行しており、50年間警報サイレンにより同時刻に町民に周知し、現在は消防車の広報により周知を行っている。一望焼け野原となった市街地の再建にあたり、地主や関係者の協力を得て、当時としては思い切った市街地中心部の道路区画が行われ敷地幅は2倍となり、生活道路は基盤の目を形成している。又、市街地全域に防火用水路も張り巡らされ消火栓・防火水槽が整備された現在においても幹線水路の管理を続けている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> <li>・写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北海道美深町：美深町史 1971 p.810-816、834 「第2節 火災」昭和3年の大火</li> <li>・美深町百年記念写真集 1998 p.138、142、140、245 「第10章 災害・治安」</li> <li>・美深神社境内 昭和13年7月23日大火 10周年記念</li> <li>・写真（「鎮火碑」）</li> </ul>
01482 6-1	北海道	小平町	<p>【災害名】平成16年台風18号                      【発生日時】平成16年（2004年）9月8日～9日                      【被災地】北海道小平町全域                      【災害の概要】半世紀ぶりといわれる台風災害。多くの家屋が一部損壊した。国道は高波の影響で一部損壊し、多くの漂流物で通行不能となり通行止めとなった。鬼鹿地区では半日間停電となった。 ※一部損壊家屋 232棟 ※被害総額 6億5千万円                      【教訓等】台風災害を経験した者がほとんどなく、台風情報を的確に掌握できなかったことから、以降の台風情報には重大な関心を持ち、適切な対応を図る意識が高まった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・写真（画像）</li> </ul>	町役場に保存している保存用画像（CD-R）
01482 6-2	北海道	小平町	<p>【災害名】留萌支庁南部の地震                      【発生日時】平成16年（2004年）12月14日                      【被災地】北海道小平町（鬼鹿地区）                      【災害の概要】当町においては、地震災害は経験がない。こうした中、留萌支庁南部（小平町字鬼鹿富岡）を震源とする震度6弱（マグニチュード6.1）の地震に見舞われ、256棟の家屋が損壊した。鬼鹿地区全戸600戸は断水となり、全面復旧まで3日間を要した。 ※被害総額 2億7千万円                      【教訓等】地震災害の恐ろしさが教訓となり、地震・津波災害に対する住民意識が向上した。この結果、鬼鹿地区では「自主防災組織」の必要性が高まり、町内会単位での組織づくりが行われた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・写真（画像）</li> </ul>	町役場に保存している保存用画像（CD-R）
01487 7-1	北海道	天塩町	<p>【災害名】昭和15年の津波                      【発生日時】昭和15年（1940年）8月2日                      【被災地】天塩町川向かい砂丘（夏期間漁師番屋）                      【災害の概要】北海道神威岬北西沖を震源地とする地震（マグニチュード7.0、天塩川口は2メートル津波に襲われた）（災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照）                      【教訓等】阿鼻叫喚の修羅地獄を現出した。天塩地方の被害は目下調査中なるも死者判明せるもの左の如し。松村初太郎妻トサ（40）、次女ミツ（17）、長男正美（10）、三男時男（4）、四女ツエ（1）以上五名死亡し、主人初太郎、三女フミヨ（12）、二男豊吉（7）は救われた。糸木漁場方石田市丈妻トヨメ（33）、長男庄司（5）、二男丈男（3）、長女ヒロ子（1）の四名は逃げ遅れて溺死。溺死者は、右の他に菅野徳次（67）もいて、10名であった。沿岸漁期の折から、川向かいの砂丘では、十数軒の番屋に漁師たちが寝泊まりしていた。バラック建ての番屋はひとたまりもなく押し流され、深夜であったことも災いした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料（添付文書から抜粋）</li> <li>・写真</li> </ul>	新編天塩町史より
01512 1-1	北海道	浜頓別町	<p>【災害名】大正8年の火災                      【発生日時】大正8年6月2日                      【被災地】浜頓別市街（当時の新市街）                      【災害の概要】浜頓別市街 312戸 木材7万石                      【教訓等】この日は季節風（ヒカタ）が風速約25mの強さで吹き、金ヶ丘方面で発生した野火は、たちまち強風にあおられ山林・原野を焼き、浜頓別市街地を襲った。焼失戸数・出火元には諸説があるが、『北海タイムス』では、「焼失家屋280棟340戸、焼失をまぬがれた建物は僅かで、被害総額145万円」と報じられている。浜頓別の新市街を焼き尽くした業火は、翌3日の降雨によって鎮火した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	浜頓別町史：P1002～1004 平成7年3月発行

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
01512 1-2	北海道	浜頓別町	<p>【災害名】オホーツク沿岸の高潮被害</p> <p>【発生日時】大正5年12月26日</p> <p>【被災地】頓別、斜内等（海岸線）</p> <p>【災害の概要】暴風雪による高潮被害 流出家屋40戸 損害家屋70戸 損害額約6万円</p> <p>【教訓等】『北海タイムス』では、「25日朝、日本海の南部に発生した760ミリの低気圧と同時に南海岸の沖に襲来した756ミリの低気圧が本州をはさんで北東に進み、未曾有の低気圧となって本道を通じたことにある。日本海の低気圧は、26日夜オホーツク海に出、日高沖の低気圧は本道の南東部をすぎ27日朝前者と合し、ますます発達し736ミリに下降した。一方、中国大陸の高気圧は発達しながら770ミリとなり高低の気圧差32ミリパールの大きさに達し、27日両低気圧の合すると同時に風速は増加し、正午ごろに暴風雪に変じ翌28日低気圧は千島付近を通過し、北太平洋に出た」と報じられている。また、「高潮は2階建ての橋本旅館の屋根を越えて裏手の豊寒別川へ滝のように落ちた」という記録も残されており、気象と地理的条件が最悪の条件で重なって起きたものと考えられる。</p>	・文献資料	浜頓別町史：P1004～1005 平成7年3月発行
01546 6-1	北海道	清里町	<p>【災害名】十勝岳の大噴火による降灰</p> <p>【発生日時】昭和37年6月30日から31日</p> <p>【被災地】清里町内</p> <p>【災害の概要】降灰による農産物の被害</p> <p>【教訓等】昭和37年6月30日朝7時過ぎから暗くなり、初めは何事かわからず、昼ごろになってようやく前日に十勝岳が大噴火したことが知らされた。セメントのような灰が降って、馬鈴薯やビートその他若葉を出したばかりの作物の被害は大きく、特に牧草の被害は甚大で、牛馬放牧の飼育農家は長期にわたり難渋した。翌日も斜里岳や江島山は煙ったような曇ではっきりと見えなかった。</p>	・文献資料	清里町史 昭和53年 P219
01563 6-1	北海道	雄武町	<p>【災害名】幌内ダム決壊</p> <p>【発生日時】昭和16年6月6日</p> <p>【被災地】雄武町幌内 幌内川周辺</p> <p>【災害の概要】6日夜半からの豪雨により、翌7日朝から幌内川が氾濫し幌内発電所貯水池ダムが決壊する。30戸113名の部落を飲み込み、60名の命を奪った。</p> <p>【教訓等】前後に60名もの命を奪った災害がなく、今現在もこの災害を経験した人達が健在している</p>	・文献資料	町史編纂誌（現在作成中：平成17年度末完成予定）
01563 6-2	北海道	雄武町	<p>【災害名】大火</p> <p>【発生日時】昭和29年5月23日</p> <p>【被災地】雄武町錦町</p> <p>【災害の概要】遊技場のポータブル石油ストーブより出火、開村以来の市街地大火となる。焼失戸数81戸 486人、焼死者1名。</p> <p>【教訓等】災害救助法の適用受ける。</p>	・文献資料	町史編纂誌（現在作成中：平成17年度末完成予定）
01563 6-3	北海道	雄武町	<p>【災害名】洞爺丸台風</p> <p>【発生日時】昭和29年9月26日</p> <p>【被災地】全域</p> <p>【災害の概要】瞬間最大風速43.8メートル、死者1名、住宅全壊33棟、非住宅全壊77棟、半壊32棟。</p> <p>【教訓等】最大風速43.8メートルを記録した為。</p>	・文献資料	町史編纂誌（現在作成中：平成17年度末完成予定）
01563 6-4	北海道	雄武町	<p>【災害名】大火</p> <p>【発生日時】昭和47年5月25日</p> <p>【被災地】雄武町幸町駅前商店付近</p> <p>【災害の概要】同日午後4時20分頃、幸町「谷金魚店」付近から出火、折からの強風で56棟焼失、170人が罹災、市街地一帯を焼き尽くす。</p> <p>【教訓等】雄武特有のフェーン現象と10メートルの強風にあおられ、消防署、警察派出所、郵便局など官庁関係も全焼する。雄武中学校の修学旅行中の3年生も予定を早めて帰町する。消火活動の消防団員、交通整理の警察も罹災しながらも任務を全う。災害救助法発令</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北海タイムス 昭和47年5月26日</li> <li>・北海道新聞 昭和47年5月26日</li> <li>・毎日新聞 昭和47年5月26日</li> </ul>
01563 6-6	北海道	雄武町	<p>【災害名】台風5号</p> <p>【発生日時】平成10年9月16日</p> <p>【被災地】雄武町全域</p> <p>【災害の概要】15日午後からの雨で、17日までの総雨量は165ミリと記録的な豪雨。住居床上浸水43戸129人、床下浸水29戸77人、非住居床上浸水4戸、床下浸水7戸</p> <p>【教訓等】災害対策本部設置。避難勧告が出る。遠軽・旭川自衛隊が給水活動の措置。国道通行止め。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雄武新聞50号</li> <li>・町史編纂誌（現在作成中：平成17年度末完成予定）</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
01563 6-7	北海道	雄武町	<p>【災害名】暴風雪                      【発生日時】平成16年1月13～16日                      【被災地】雄武町全域                      【災害の概要】暴風雪が断続的に襲い、過去に例のない大雪となり交通網の寸断等で農業関係で牛乳破棄、雪による牛舎・倉庫の倒壊などの被害                      【教訓等】海岸は波が高く護岸を越えてきたが、風向きとの関係で目立った被害はないもののその後、春からの魚期に災害時に波で海底が洗われた現象で、砂によるホタテ貝の死滅で漁獲量が大幅減となる</p>	・文献資料	町史編纂誌(現在作成中：平成17年度末完成予定)
01563 6-8	北海道	雄武町	<p>【災害名】台風18号災害                      【発生日時】平成16年9月8日                      【被災地】雄武町全域                      【災害の概要】最大瞬間風速51.5メートル(過去最高) 住居被害404件、非住居被害131件、町有施設被害50件、重傷4名軽傷8名、自主避難2日間で15世帯34名、8日～11日まで停電(地域によって異なる) 被害総額1,040,267千円                      【教訓等】災害対策本部設置</p>	・文献資料	町史編纂誌(台風18号の記憶)(現在作成中：平成17年度末完成予定)
01575 0-1	北海道	壮瞥町	<p>【災害名】1977年有珠山噴火                      【発生日時】昭和52年(1977年)8月7日                      【被災地】北海道壮瞥町・(伊達市・旧虻田町)                      【災害の概要】昭和52年8月6日より火山性地震が観測され、8月7日午前9時j12分有珠山山頂より噴火が始まった。その後噴火は翌年の昭和53年10月27日まで続き、山麓でも地殻変動、降灰やこの降灰による泥流(土石流)等で建物が破壊され、10月24日には旧虻田町において死者2名、行方不明者1名を出した。また、広範囲にわたって収穫直前の農作物や森林に被害を与えた。(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)                      【教訓等】昭和56年4月に災害発生時に備え災害応急対策及び災害復旧に関し、関係機関、相互間の連絡調整を図ることを目的として有珠火山防災会議協議会の設置、また有珠山が将来再び噴火を起こすことを想定し、予測される噴火の性質・規模、住民に周知することが重要であることと考へ、ハザードマップを作成するきっかけとなった。</p>	・文献 壮瞥町史(1385頁～1506頁)	・著書 壮瞥町史 ・タイトル 壮瞥町史 ・発行年月 昭和54年3月
01575 0-2	北海道	壮瞥町	<p>【災害名】1910年有珠山噴火                      【発生日時】明治43年(1910年)7月25日                      【被災地】北海道壮瞥町・(伊達市・旧虻田町)                      【災害の概要】明治43年7月19日より地震が多発し、7月25日夜、有珠山北麓の金比羅山より最初の噴火が始まった。その後噴火は当年8月5日まで続き、北麓でも地殻変動による家屋の半壊等、火山泥流による死者1名の犠牲者を出した。また、隆起、亀裂、泥流、降灰によるのは畑地、農作物や森林に被害を与えた。(災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照)                      【教訓等】当時、有珠山周辺の警察行政の所管の室蘭警察署署長であった飯田精一氏が有珠山の鳴動が起こると直ちに有珠山周辺三里(12km)の地点まで避難するよう命令を出し周辺自治体各首長に伝達方を指揮した。室蘭警察署長の勇断と各首長の住民を守る熱意により速やかに住民が避難したため地元住民は一人の死傷者もなかった。この教訓がその後の防災対応に活かされている。</p>	・文献 壮瞥町史(1296頁～1335頁)	・著書 壮瞥町史 ・タイトル 壮瞥町史 ・発行年月 昭和54年3月
01631 4-1	北海道	音更町	<p>【災害名】音更町長流枝地区山林火災                      【発生日時】昭和56年(1981年)5月2日                      【被災地】北海道河東郡音更町長流枝地区                      【災害の概要】長流枝地区の山林において火災が発生し、約70ヘクタールの山林を消失した。                      【教訓等】災害当時、自衛隊のヘリコプターにより、空中からの消火活動を行おうとしたが、音更町をはじめ近隣町村にも「空散布用消火剤」の備蓄がなく、これを調達するために時間を要し、火災が広がった。これを教訓に空中散布用消火剤をはじめとする林野火災用の消火機器等の配備を強化するとともに、毎年ゴールデンウィーク期間中は町職員による山林の見回りや、山林における火の取り扱い等の注意喚起を行っている。</p>	・文献資料	音更百年史 平成14年 P810-P816 発行：音更町 編集：音更町史編さん委員会
01644 6-1	北海道	池田町	<p>【災害名】十勝沖地震                      【発生日時】昭和27年(1952年)3月4日 午前10時23分                      【被災地】道東一体(十勝、釧路、日高)                      【災害の概要】地震動による災害(震源：十勝沖、襟裳岬東方約70kmの海底深さ10～45km、マグニチュード8.1、震度6烈震) 池田町内での家屋倒壊380戸(罹災戸数2,114戸)、死者1人(罹災人員12,174人)、農地等の地割れ、貨物列車脱線転覆、根本本線等不通過                      【教訓等】</p>	・文献資料(写し)	・池田町史・上巻(池田町) 1988年 p144他 ・池田町史・下巻(池田町) 1989年 p133他 ・池田町史・補遺版(池田町) 1998年 p30他 ・池田町懐かしのアルバム(池田町) 1992年 p546

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
01644 6-2	北海道	池田町	<p>【災害名】北海道東方沖地震</p> <p>【発生日時】平成6年(1994年)10月4日 午後10時23分</p> <p>【被災地】道東一体</p> <p>【災害の概要】地震動による災害(震源:根室東方沖180km、深さ20km、マグニチュード8.1、震度5) 特急運休、道道等通行止め、学校施設被災</p> <p>【教訓等】前年(平成5年1月15日)の釧路沖地震の教訓もあって、火災発生はなかった。</p>	・文献資料(写し)	池田町史・補遺版(池田町) 1998年 p.597
01644 6-3	北海道	池田町	<p>【災害名】平成15年十勝沖地震</p> <p>【発生日時】平成15年(2003年)9月26日 午前4時50分</p> <p>【被災地】十勝一体</p> <p>【災害の概要】地震動による災害(震源:十勝沖、北緯41°46.7' 東経144°4.7' 深さ42km、マグニチュード8.0、震度6弱) 各級道路通行規制、全町停電、電話不通、築堤損壊、鉄道不通、送水停止 全長断水、重傷2名、家屋全壊1棟半壊2棟</p> <p>【教訓等】全町断水については、水量・容器共に不足したことから、日本水道協会を通じ他市町村及び自衛隊に救済依頼。給水20%の容器はお年寄りや子供での搬送が困難のため、10%容器を多数備蓄する必要性を確認。灯油タンク転倒が数件発生したことから、転倒の未然防止と河川汚濁に備えたオイルマット等の備蓄も必要。避難所が被災し使用不能となり、耐震化が浮き彫りとなる。電話交換機が転倒故障し一時通話不可、更新を含めた対策必要。</p>	・文献資料 ・写真	平成15年十勝沖地震対応状況 総括 平成16年1月 池田町 役場町民課 デジカメによる写真画像 数点
01644 6-4	北海道	池田町	<p>【災害名】大雨水害・大洪水</p> <p>【発生日時】大正11年(1922年)8月20日～25日</p> <p>【被災地】十勝一体</p> <p>【災害の概要】十勝川水位が池田付近で1丈7尺(5.5m)、千代田・利別・川合地区が一大湖沼と化し、市街全域が腰までつかる洪水 17箇所の避難所設置、857名収容、炊き出し実施</p> <p>【教訓等】十勝川の治水事業早期着手の大きな要因となる</p>	・文献資料	・池田町史・上巻(池田町) 1988年 p.118他 ・池田町史・補遺版(池田町) 1998年 p.17他
01662 4-1	北海道	厚岸町	<p>【災害名】天保の三大地震(通称)</p> <p>【発生日時】天保10年3月18日、同12年7月18日、同14年3月26日</p> <p>【被災地】厚岸地方(厚岸町、浜中町)</p> <p>【災害の概要】10年は、強震(震度不明)で、寺院内の全燈籠等飛散。12年の詳細は不明。14年は、津波を伴う大地震で、家屋倒壊、地割れ、余震5～6回反復し、津波により海岸辺の民家がほとんど流出した模様。厚岸では男女34人、浜中では45人流死。【日鑑記より】</p> <p>【教訓等】この災害記述が国泰寺「日鑑記」に残されたことで、当地における災害状況や蝦夷三官寺として建立された当該寺の立地環境が語り継がれている。(なお、教訓となる記述は特にない。)</p>	・文献資料 ('厚岸町史' 785-786頁)	北海道指定有形文化財『日鑑記』 ※六代日鑑記(礼)
01662 4-3	北海道	厚岸町	<p>【災害名】根室南方沖(北緯42度東経146度)地震</p> <p>【発生日時】明治27年3月22日午後7時23分烈震</p> <p>【被災地】釧路国厚岸郡(釧路市、釧路町、厚岸町、浜中町)</p> <p>【災害の概要】M7.6、震度5～6、大津波を伴い厚岸地方が最大被害地とされているが、状況は不明。【官報:明治27年3月27日付より】</p> <p>【教訓等】「日鑑記」以来記述されている背景によって、「地震＝津波」という意識が、当町の歴史の中に息づいている。('地震の後には津波がくる(かもしれない)という意識が教訓といえる。)</p>	・文献資料 ('厚岸町史' 787頁)	「官報」(明治27年3月27日)
01662 4-4	北海道	厚岸町	<p>【災害名】空前の大風雪(通称)</p> <p>【発生日時】明治41年3月7日～9日</p> <p>【被災地】厚岸地方(厚岸町、太田村)</p> <p>【災害の概要】北東から北風の烈風雪により、積雪が民家の庇を越え、家屋倒壊や圧死者をだす惨事となる。太田村で死亡者1名(「殉難の碑」あり) 厚岸町で死亡者8人、負傷者9人、潰家(全壊)34戸、半壊7戸</p> <p>【教訓等】明治時代は特に交通難、客体の把握職員の不足、税觀念の欠如もあって滞納者が多く、同年代後半には町税の戸別割から所得に応じ課税したりいろいろな変遷と障害が伴い、税法改正伝達は重要な行政事務となっていた中、明治41年3月6日釧路から厚岸へ税法改正説明に向った釧路税務署員井上耕介(32才)氏が片無去(太田村)で当該暴風雪に襲われ殉げられたことで、毎年「殉難の碑」前で参拝が行われている。(災害ではなく、公僕精神貫徹の教訓として継がれている)</p>	・文献資料 ('厚岸町史' 788頁) ・碑文	「釧路新聞」(明治41年3月11日) 「殉難の碑」文は釧路税務署が所管

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
01662 4-5	北海道	厚岸町	<p>【災害名】十勝沖地震                      【発生日時】昭和27年 3月 4日午前10時24分                      【被災地】北海道全域（厚岸町では床潭地区）                      【災害の概要】床潭地区（太平洋に面した集落）では、地震の約30分後、沖合いから波頭を見せた津波来襲（高さ不明）、流出・倒壊家屋44戸、死亡者3人、重傷者18人、津波は入り江から500m奥の沼岸まで流入、第一波来襲後に沖合い100m程潮が引いて、第一波の3分の1程度の高さで津波が反復された。厚岸町市街地では、地震の約42分後、湾岸集落（苦多村、門静地区）に当たった第一波が海岸線沿いに流れて、厚岸湖内に流入し、氷結した湖面氷が棒立ちで倒れる凄惨な状況で、あふれた海水は尾幌川を約10km逆流して上流水とぶつかり噴水状態となったという。（第一波が引いた後30分の間隔があり、海岸線の路上にアサリ貝が集積した模様）、市街地の井戸は約1m減水し、後20日間は汚濁により飲用不可となったという。（また、湖内カキ島植物群が地盤沈下により水没した一因とも考えられている。）全町の罹災人員893人、罹災戸数182戸、漁船被害165隻、他漁具・養殖施設に甚大な被害あり。                      【教訓等】「日鑑記」以来記述されている背景によって、「地震＝津波」という意識が、当町の歴史の中に息づいている。（「地震の後には津波がくる（かもしれない）」という意識が教訓といえる。）これ以降、護岸工事に防波堤・沖合い消波堤が構築されることとなり、「すぐ高台へ避難する」という防災体制構築に多くの教訓が生かされている。</p>	・文献資料 （「厚岸町史」788-792頁）	「十勝沖震災誌の緊急措置編」（著者不明）
01662 4-6	北海道	厚岸町	<p>【災害名】チリ沖地震津波                      【発生日時】昭和35年 5月24日午前 4時45分                      【被災地】厚岸地方の太平洋沿岸一帯（浜中湾・琵琶瀬湾は甚大）                      【災害の概要】ハワイで津波警報があったが、日本中央気象台への連絡は無く、十勝沖地震で津波被害に見舞われた床潭郵便局（管轄の電話加入者）からの「潮引き」の通報により、警報を発することができたようである。3m～4mの津波来襲、厚岸町の被害はさほど無く状況把握ができていないが、浜中村沿岸は甚大な被害を受けた。厚岸町・浜中村を併せた被害状況は、人的に死者6名、行方不明者5名、家屋は住宅流失・倒壊・浸水等計562戸、倉庫等計323棟、漁船流失61隻、橋梁流失3ヵ所、その他流出海産物、漁業生産施設等被害多数。                      【教訓等】この津波災害により、「地震＝津波」の基本的認識は、当該地域だけのものではなく、「地上のどこかで地震がおきたら、津波が来る（かもしれない）」という、地球規模の感覚で考えなくてはならない意識が根づいた。※折りしも、2004年12月末の「スマトラ沖地震」による甚大な被害は、その津波情報の沿岸国への伝達がなかった行政的な問題と、「潮が急に引いたら怖い（津波が来る）」という、沿岸住民や旅行者のグローバルな感覚が乏しかったことが大きく起因していたのではないかと、改めて認識したところである。</p>	・文献資料 （「厚岸町史」792-794頁）	
01662 4-7	北海道	厚岸町	<p>【災害名】厚岸本町の大火（通称）                      【発生日時】明治16年、同38年10月                      【被災地】厚岸町（湖南地区）                      【災害の概要】※明治16年の災害程度は不明 明治38年の大火では、若竹町地区で92戸焼失                      【教訓等】明治16年の大火により、従来の四間道路が八間に拡張されている。※街区整備において、防火対策としての「道路拡張」の必要性が認識された。</p>	・文献資料 （「厚岸町史」794頁、773頁）	
01662 4-8	北海道	厚岸町	<p>【災害名】平成15年十勝沖地震                      【発生日時】2003年9月26日                      【被災地】厚岸町                      【災害の概要】人的被害 軽傷者 10名 住家被害 一部破損 88棟（88世帯、228名）                      【教訓等】昭和27年の十勝沖地震津波、昭和35年のチリ沖地震津波などで被害をうけているが、これらの経験から今回の津波は自分のところに被害は及ばないと思われた方が結構多いようであった。最近では平成6年の東方沖地震で津波警報が発令されたが、津波の規模が小さく、被害が無かったという経験も影響しているだろう。</p>		
01691 8-1	北海道	別海町	<p>【災害名】北海道東方沖地震                      【発生日時】1994年10月4日                      【被災地】北海道 別海町内全域                      【災害の概要】北緯43度22分 東経147度40分で発生した地震（マグニチュード8.1 震度6）                      【教訓等】この地震が発生する前年に釧路沖地震（震度6）が発生しており、その時の影響で家屋が老朽化しており家屋に多数がでたと思われる。人的被害については前回の教訓がいかされ、少ないものとなった。</p>	・写真	1994年 町職員により撮影

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
016918-2	北海道	別海町	<p>【災害名】十勝沖地震</p> <p>【発生日時】2003年9月26日</p> <p>【被災地】北海道 別海町内全域</p> <p>【災害の概要】北緯41度47分 東経144度05分（釧路沖）で発生した地震（マグニチュード8.1 震度6）</p> <p>【教訓等】当町は過去、多くの地震に遭っており町民全体の地震に対する意識が高い傾向にある。そのため、被害にあった住民は少数にとどまった。その後立て続けに震度5クラスの地震が発生したが、同様に被害は少ないものとなった。その反面、地震に対する「慣れ」が出てきているという対応の特徴がある。</p>		
02000-1	青森県		<p>【災害名】土雪流又は雪泥流（土砂混じりの雪による洪水）</p> <p>【発生日時】昭和20年3月22日23時頃</p> <p>【被災地】青森県西津軽郡赤石村（現在の鱒ヶ沢町）大字大然</p> <p>【災害の概要】土雪流（雪泥流）が大然地域を直撃し、20戸が流失または、埋没し、一瞬にして88名の死者を出した。</p> <p>【教訓等】大災害にもかかわらず記録としては、ほとんど残っておらず生存者によって語り継がれているのみである。天然ダムの決壊による土雪流災害は、近年発生事例が無く生存者の体験記録は貴重な記録である。</p>	・文献資料（書簡）	岩壁（くら）— 昭和20年・大然部落遭難記録 — 著者 鶴田要一郎 発行 青沼社 昭和63年12月20日 初版発行
020001-1	青森県		<p>【災害名】十勝沖地震</p> <p>【発生日時】1968年5月16日</p> <p>【被災地】青森県内広域</p> <p>【災害の概要】1968年5月16日09時50分ころ、M（マグニチュード：地震の規模）7.9の大地震が発生した。青森県東部と北海道南西部を中心に震度5以上の地震が襲い、同10時20分ころから三陸沿岸を中心に津波が襲来した。（災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照）</p> <p>【教訓等】この地震による被害は、前日まで三陸沖に停滞した大型低気圧による大雨で地盤がゆるんでいた青森県下のシラス地帯で被害が大きく出たことのほか、築後日の浅い鉄筋コンクリート構造物の破壊、石油ストーブ転倒による出火の多発、津波によるタンカーの損傷による重油の流出など広範に及び、以後の地震防災対策に貴重な教訓を与えることとなった。</p>	・文献資料	青森県 「青森県の地震総覧」平成10年3月
020001-2	青森県		<p>【災害名】日本海中部地震</p> <p>【発生日時】1983年5月26日</p> <p>【被災地】青森県内広域</p> <p>【災害の概要】1983年5月26日12時00分、秋田県能代の西方沖約100kmでM（マグニチュード：地震の規模）7.7の大地震が発生した。深浦・むつで震度5の強震、青森・八戸で震度4の中震を観測した。また、発生後7分で日本海側に引き波の津波（高さ5～6m）が到達した。死者は17名。（災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照）</p> <p>【教訓等】当時、日本海側では、津波による大きな被害がなかったことによる住民の津波認識の乏しさと、津波が警報発表前に到達したことを教訓として津波対策の強化が進み、特に沿岸市町村への市町村防災行政無線の配備が促進された。</p>	・文献資料	青森県 「青森県の地震総覧」平成10年3月、青森県 「昭和58年（1983年）日本海中部地震災害の記録」
020001-3	青森県		<p>【災害名】三陸はるか沖地震</p> <p>【発生日時】1994年12月28日</p> <p>【被災地】青森県内広域</p> <p>【災害の概要】1994年12月28日21時19分ころ、三陸はるか沖のごく浅いところを震源とするM（マグニチュード：地震の規模）7.7の地震が発生した。八戸で震度6、むつ、青森、盛岡で震度5を観測したほか、北海道から中部にかけての広い範囲で有感となった。死者は3名。（災害・被害の詳細については、添付資料1-3を参照）</p> <p>【教訓等】本県ではこれまで経験したことのない震度6を八戸市で記録し、建物の倒壊、交通網の途絶、水道・電気等のライフラインの供給支障など、この地震は社会生活全体に大きな打撃を与えた。</p>	・文献資料	青森県 「青森県の地震総覧」平成10年3月、青森県 「マグニチュード7.5の衝撃」
020001-4	青森県		<p>【災害名】台風第19号</p> <p>【発生日時】1991年9月28日</p> <p>【被災地】青森県内広域</p> <p>【災害の概要】台風第19号は、9月28日未明本県に向かって進み、台風の接近に伴い、県内は急激な横なぐりの雨と猛烈な風が吹き荒れ、約3時間にわたって県内全域がこの自然の猛威に晒された。（災害・被害の詳細については、添付資料1-4を参照）</p> <p>【教訓等】台風第19号による痛ましい貴重な体験を踏まえ、防災思想の普及、りんご等の防風対策及び電力通信施設等の防風対策、情報収集伝達体制の確立に力が入れられた。</p>	・文献資料	



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
02000-2	青森県		<p>【災害名】明和地震                      【発生日時】明和3年(1766年)1月28日(新暦3月8日)                      【被災地】青森県津軽地方全域                      【災害の概要】津軽平野を震源とするマグニチュード7.25の直下型地震により、津軽地方全体で家・土蔵の全半壊及び焼失6100棟余、死者1200人余の被害を出した。                      【教訓等】冬季の積雪の多い時期の発生であり、屋根雪の荷重による建物の倒壊が多かったことから、この地震が教訓となり屋根の雪下ろしの習慣が生まれたという。また家の構造も敷居・鴨居のはめ込みについて、曲尺三分から五分に改められたという。</p>	・文献資料	青森市役所『青森市沿革史』上巻1909 631頁～634頁 青森県『青森県史 自然編 地学』2001 524頁～527頁
022012-8	青森県	青森市	<p>【災害名】明治43年の大火                      【発生日時】明治43年(1910年)5月3日                      【被災地】青森県青森市                      【災害の概要】5,000戸余が焼失し、死者26名、負傷者160名の甚大な被害をもたらした。この火災では、軍隊による消火と救援活動が積極的に実施されたことから、いくつかの公共施設が火災から逃れることができた。                      【教訓等】この大火をきっかけに、火災に強い青森市を建設する必要性が改めて認識され、「青森市建築取締り規則」が制定されたほか、市街地の区画整理事業が実施され、広い防火線が完成した。</p>	・文献資料	青森市：「新青森市史 資料編6 近代(1)」平成16年3月発行 p632～644
022012-9	青森県	青森市	<p>【災害名】1968年十勝沖地震                      【発生日時】昭和43年(1968年)5月16日                      【被災地】青森県青森市                      【災害の概要】青森県八戸市の東方約180キロメートルの地点、震源の深さ約40キロメートルで発生した地震(マグニチュード7.9、青森市では震度5を観測)青森県内全域で死者46名、行方不明者2名、負傷者671名、全壊911棟、半壊4,851棟、被害総額が約470億円となり、青森市を含む県内12市町村に災害救助法が適用された。(青森市では、死者5名、全壊5棟、半壊888棟などの被害となり、被害総額が約35億円に達した。特に上水道施設が壊滅的な被害を受け、自衛隊や弘前市、秋田市、仙台市などからの応援を得ながら運搬給水を行った。)                      【教訓等】</p>	・文献資料	・青森市地域防災計画 総則・災害予防計画編平成14年修正版 p42 ・青森県：「青森県の地震総覧」平成10年3月発行 p635～695
022021-1	青森県	弘前市	<p>【災害名】昭和50年、52年集中豪雨                      【発生日時】昭和50年、52年                      【被災地】青森県弘前市等                      【災害の概要】昭和50年、52年に集中豪雨や台風崩れの大雨により中小河川が氾濫し、住家・農地・家畜・橋梁・商工・観光・運輸・通信・電気・ガス・水道等様々な面で多大な被害をもたらした。(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)                      【教訓等】岩木川を主流とする多くの中小河川は昔から、大雨になる度に氾濫し洪水になり、周辺地域に多大な被害をもたらした。中でも弘前市内を流れる土淵川は何度も氾濫し洪水になった河川である。そして、50年と52年の集中豪雨をきっかけに国の助成のもとに土淵川と岩木川を結ぶ放水路をつくり、他にも後長根川も改修工事をする等、この災害をきっかけに河川の改修が至るところで行われた。</p>	・文献資料 ・碑文(添付資料1-1) ・写真(添付資料1-1)	1.建設省東北地方建設局青森工事事務所：津軽平野と岩木川の歩み 岩木川治水史：平成11年3月、309頁 2.「新編 弘前市史」編纂委員会：新編 弘前市史 資料編5(近・現代編2)：平成14年12月20日、1394～1395頁
022021-2	青森県	弘前市	<p>【災害名】平成3年台風19号                      【発生日時】平成3年9月28日                      【被災地】青森県弘前市等                      【災害の概要】中心気圧945mb、中心付近の最大風速45m/sという強い勢力。当市では、瞬間風速が風速計の計測限界である35m/sを超え、最大瞬間風速は不明。                      【教訓等】強い風台風の経験が少なかったことにより予想以上の被害を受けた。なかでも収穫間近のりんごが九割近く落下し、リンゴ農家は大きな被害を受けた。これにより、風害に強いリンゴの園地づくりがなされるようになった。また、電柱の折損等により電力復旧にかなりの時間がかかることとなったことから、復旧要員割り当て表等を作成し、早期に復旧できるように体制を整えるようになった。</p>	・文献資料 ・写真(被害状況をとらえたもの)	青森県：台風第19号 その記録と教訓、1993
022039-1	青森県	八戸市	<p>【災害名】十勝沖地震                      【発生日】明治43年5月16日                      【被災地】市内全域(主に尻内、豊崎地区)                      【災害の概要】八戸沖東方200kmで、北緯40.7°、東経143.7°、震源の深さ20km。発震時刻5月16日9時48分55秒、マグニチュード7.9。                      【教訓等】○地震がおこる3日前から大雨が降り、地盤が軟弱になっていたため水分を含んだ表土が激しい震動でずり落ちたのが尻内・豊崎地区での土砂くずれにつながった。  ○人的被害は山崩れ住宅の倒壊によるものがほとんどで、津波の被害がほとんどなかった。これは、津波の襲来が干潮時の日中であったこと、チリ地震津波以後に着工した防潮堤が、津波の防壁になったことなどによるものであった。</p>	文献(古文書、書簡等)	「タイトル」 地震 十勝沖震災の記録 「発行」 昭和44年5月16日 「発行者」 八戸市

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
02204 7-1	青森県	黒石市	<p>【災害名】台風19号</p> <p>【発生日時】平成3年(1991年)9月28日</p> <p>【被災地】青森県黒石市等</p> <p>【災害の概要】大型台風19号の影響により津軽地方が暴風域となり、本市では午前5時38分頃最大瞬間風速62m(市庁舎風速計)を記録し、停電・電話不通等の壊滅的な被害をもたらした。また、市内で収穫前のりんごの落下・樹上被害が約31,000トン、倒木が約54,000本にも上り、りんご被害だけで約65億円に及んだ。</p> <p>【教訓等】県内各地でも甚大な被害となり、りんご栽培史上最悪の被害となったため、俗称ではあるが「りんご台風」と言えばこの台風19号を呼ぶようになった。また、台風被害に際し、全国からいただいた支援に感謝するため、平成4年(1992年)5月9日県りんご試験場(現名称:農林総合研究センター、所在地:黒石市)において、「台風19号全国支援感謝大会」を開催し、後世にわたって記憶に止めるために試験場内に「青森県りんご全国支援感謝メモリアルガーデン」を設置した。</p>	・文献資料	青森県黒石市・台風19号 風魔の記録・1992年
02205 5-1	青森県	五所川原市	<p>【災害名】五所川原の大火</p> <p>【発生日時】昭和19年11月29日</p> <p>【被災地】五所川原市上平井町</p> <p>【災害の概要】正午零時30分頃、木工工場より出火。この火災で、五所川原役場、郵便局、五所川原駅、五所川原女子部国民学校など町の象徴であったものを次々と焼失した。</p> <p>【教訓等】翌日より、約300人の勤労動員がなされ、焼け跡の整理などの活動に専念。なかには、印鑑を焼失した罹災者へ無料贈呈した印鑑店もあった。翌年商工経済再出発の諸施策を講ずることを目的とした五所川原町復興促進期成同盟会を結成した。</p>	・文献資料	五所川原市史(通信編2) 編集・発行は五所川原市 写真は東奥日報社より提供 昭和21年
02205 5-2	青森県	五所川原市	<p>【災害名】五所川原の大火(2度目)</p> <p>【発生日時】昭和21年11月23日</p> <p>【被災地】五所川原市錦町(民家)</p> <p>【災害の概要】午後7時40分頃、錦町の民家から出火。火は北西の強風に煽られて幾島町から柏原町、平井町へ。管内の警防団を始め、遠くは青森、鱒ヶ沢、藤崎、弘前、尾上、近くは金木、木造、板柳署管内の応援を得て消火にあたったが、強風と水利不便のため、手の施しようがなかった。鎮火したのは出火から7時間後だった。</p> <p>【教訓等】臨時防火建築規則の施行。また、私設の五所川原消防組では、消防演習を行い防災意識の昂揚に一層努めた。さらに、防火用水協議会では、火災期とされる冬から春にかけては用水堰を止め、常時満水にして非常時に備えることとし、五所川原町常備消防団所には電話が設置され、緊急連絡の便をととのえた。</p>	・文献資料	五所川原市史(通信編2) 編集・発行は五所川原市 写真は東奥日報社より提供 昭和21年
02205 5-3	青森県	五所川原市	<p>【災害名】日本海中部沖地震(旧市浦村地区)</p> <p>【発生日時】昭和58年5月26日</p> <p>【被災地】旧市浦村(十三湖付近)</p> <p>【災害の概要】当時正午、秋田県、青森県をマグニチュード7.7の地震が発生した。海岸より水が沖へひいてしまい、その数分後に大津波が来襲し、海岸沖にいた釣り人が津波にさらわれ6人の命が奪われた。</p> <p>【教訓等】数名の釣り人が大津波にさらわれる際、十三大橋へ偶然人がおり、写真撮影をした。その2枚の写真は残された村民、村役場、消防署等に衝撃的な印象を与え、災害に強い村づくりを目指す起点となった。また、大津波にさらわれた一人の方は、木材につかまり助かることが出来た。</p>	・大津波襲来の写真2枚	五所川原市(旧市浦村所有の写真)
02207 1-1	青森県	三沢市	<p>【災害名】昭和三陸地震津波</p> <p>【発生日時】昭和8年3月3日</p> <p>【被災地】青森県三沢市(当時三沢村)三川目、四川目</p> <p>【災害の概要】午前2時30分頃に強い地震があり、その後太平洋に面する集落が津波に襲われた。津波の高さは三川目で6m、死者・行方不明者は26名。住家流失33棟、全壊1棟、半壊8棟、非住家流失41棟、半壊17棟。</p> <p>【教訓等】被災地は、明治29年の三陸津波でも甚大な被害を受けており悲惨な経験を重ねたことから、震嘯災記念碑を建立し、「地震海鳴り ほら津波」の警句を刻み、地震の後には津波が来ることを常に忘れないように戒め、後世に伝えている。</p>	・文献資料 ・碑文	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三沢市教育委員会:三沢市史中巻 昭和40年</li> <li>・三沢市:三沢市史通史編 昭和63年</li> <li>・震嘯災記念碑</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
02207 1-2	青森県	三沢市	<p>【災害名】三沢大火</p> <p>【発生日時】昭和41年1月11日</p> <p>【被災地】青森県三沢市</p> <p>【災害の概要】14時14分、中央通りの商店から出火。強風のため瞬く間に延焼し、19時55分鎮火。幸いにも死者はなかったが、450戸・828世帯が焼失。重傷者2名、軽症者11名、焼失面積95,040㎡、罹災者2,152人、被害額15億6,560万円。</p> <p>【教訓等】三沢米軍基地の消防隊、自衛隊、隣接市町村の消防隊の応援出動を受けて被害拡大を食い止めたことや、大火の実況や焼け跡の惨状がテレビ、新聞等により全国になまなましく報道されたことにより、大量の救援物資、義捐金が寄せられるなど、多くの方々の善意により復興を成し遂げることができた。</p>	・文献資料	<p>・青森県三沢市役所：三沢大火誌 昭和42年</p> <p>・三沢市：三沢市史通史編 昭和63年</p>
02207 1-3	青森県	三沢市	<p>【災害名】十勝沖地震</p> <p>【発生日時】昭和43年5月16日</p> <p>【被災地】青森県東部</p> <p>【災害の概要】午前9時49分、八戸東方沖を震源とするマグニチュード7.8の地震発生。三沢市の被害は死者1名、負傷62名、焼失3棟、全壊家屋79、半壊家屋676、被害総額52億5,749円。岡三沢小学校、三沢商業高校の校舎が倒壊、道路の陥没等多数、東北本線不通。</p> <p>【教訓等】十勝沖地震は古老もかつて経験したことがないほどの大災害であった。当市では、現在までも十勝沖地震を超える地震は発生していないことから、人々に語り継がれている。また、各地から届けられた多くの救援物資、義捐金に励まされたことを忘れず、災害に苦しむ地方の方々に「恩返し」として善意を届ける市民も多い。</p>	・文献資料	三沢市：三沢市史通史編 昭和63年
02208 0-1	青森県	むつ市	<p>【災害名】1968年十勝沖地震</p> <p>【発生日時】昭和43年（1968年）5月16日</p> <p>【被災地】青森県むつ市全域</p> <p>【災害の概要】午前9時49分、震度5の揺れが当市を襲い、大きな被害が発生した。電気、電話が使用不能となったほか、国鉄大湊線、大畑線が不通、さらに国道279号と338号が通行不能となり、むつ下北地方は陸の孤島と化した。死者1名、負傷16名、住家全壊189戸、住家半壊347戸、住家一部損壊583戸、非住家被害342棟、その他に市役所、学校、病院等公共建物、土木施設、港湾施設、農業施設、水産業施設、上水道施設、農作物、商工業品に甚大な被害が発生した。</p> <p>【教訓等】当市においては、過去における最大の地震災害であり、これを機に防災に対する市民意識が高まり、公共団体、民間企業等で防災訓練（避難訓練等）が活発に行われるようになり、現在にいたっている。当時、震災を経験した方々からは、現在もその恐怖心等が語り継がれている。</p>	・その他	むつ市地域防災計画（地震編）等
02209 8-1	青森県	つがる市	<p>【災害名】日本海中部地震</p> <p>【発生日時】昭和58年（1983年）5月26日</p> <p>【被災地】青森県つがる市（当時車力村、木造町）</p> <p>【災害の概要】秋田県能代の西方沖約100kmでM7.7の地震。被害総額（車力村：8,356,785千円）災害救助法適用（木造町：4,955,744千円）災害救助法適用</p> <p>【教訓等】歴史的災害にもめげず、たくましく復興に立ち上がり、夢だにできなかった尊い教訓をかみしめ、大惨事を後世に伝えると共に不断の備えに心する事を希って石碑を建立した。</p>	・写真	デジタルカメラによる写真画像3点
02321 3-1	青森県	鱒ヶ沢町	<p>【災害名】鱒ヶ沢町昭和の大火</p> <p>【発生日時】昭和7年（1932年）1月17日</p> <p>【被災地】青森県鱒ヶ沢町新地町（当時柳町）、漁師町、釣町他</p> <p>【災害の概要】午後10時10分、新地町（当時柳町）から発生し、折からの十二メートルの強風にあおられ、上・下共に燃え広がって行き、翌十八日朝の三時過ぎに鎮火。炬燵火の不始末によるこの大火で、戸数246戸、非住家16棟、貸座敷、永昌寺、法王寺等が焼失。</p> <p>【教訓等】町では、1月17日を大火記念日とし、町民の防火思想の徹底を図るため、例年、防火・消防行事を実施している。</p>	・文献資料	鱒ヶ沢町：『鱒ヶ沢町史』第二卷 昭和59年（1984年）253頁～255頁
02323 0-1	青森県	深浦町	<p>【災害名】岩崎本村大火</p> <p>【発生日時】昭和30年11月16日</p> <p>【被災地】青森県深浦町（当時岩崎村）</p> <p>【災害の概要】火災により岩崎本村で178戸焼失</p> <p>【教訓等】焼失件数が多かったため</p>	岩崎村地域防災計画	岩崎村史年表 平成4年1月31日発行 編集：岩崎村史編集委員会

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
023426-1	青森県	相馬村	<p>【災害名】低気圧による集中豪雨</p> <p>【発生日時】昭和50年8月20日</p> <p>【被災地】青森県中津軽郡相馬村全域</p> <p>【災害の概要】停滞した寒冷前線に台風5号から変わった熱帯性低気圧が乗り、津軽南部と十和田湖付近に集中豪雨をもたらした、甚大な被害を与えた。(相馬村中心部の総雨量230mm)</p> <p>【教訓等】平穏な相馬村に突如として、局地的豪雨が襲い未曾有の大惨状を引き起こした。中小河川が大洪水に見舞われ、各所が決壊、溢水し、流失家屋6戸など道路、水路、農林関係が甚大な被害をこうむった。幸いなことに死者がなく人的被害が少なかった。この災害を記録した石碑に「転禍為福」の碑文を刻み過去の水害に際しての教訓を記した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文(相馬村役場前)</li> </ul>	相馬村災害復旧事業概要
023817-1	青森県	板柳町	<p>【災害名】明和地震</p> <p>【発生日時】</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照</p> <p>【教訓等】明和地震は震源地に近く、ちょうど積雪の時期でもあったため、死傷者・潰家が多数続出、加えて火災発生という惨状となった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料(別紙町誌参照)</li> </ul>	板柳町・板柳町誌・昭和52年発行
023841-1	青森県	鶴田町	<p>【災害名】平成3年台風19号</p> <p>【発生日時】平成3年9月28日</p> <p>【被災地】町内全域</p> <p>【災害の概要】暴風によりりんごが大量に落果。9,800ト。被害額17億9,881万円。</p> <p>【教訓等】当町の主力産業であるりんご産業が史上最大の被害を受け、後年に影響を及ぼす大災害となった。これを教訓に暴風に対する警戒心がさらに高まった。</p>		
024058-1	青森県	六戸町	<p>【災害名】十勝沖地震</p> <p>【発生日時】1968年5月16日</p> <p>【被災地】青森県内東部広域</p> <p>【災害の概要】1968年5月16日09時49分頃、M(マグニチュード):地震の規模)7.9の大地震が発生した。八戸での震度は5であり、余震最大のは16日午後7時39分のマグニチュード7.5であり八戸での震度は4である。発生から翌17日正午までに47回の余震があった。六戸町の被害は、重軽傷7人、家屋の全壊18棟、半壊82棟や相坂川(奥入瀬川)の堤防きれつ、決壊が34箇所へのぼり、前日までの200mm前後の雨で地盤がゆるんでいたことや、田植え時期に当たり、植えたばかりの苗が浮き上がって流出した。被害総額は14億4,590万円。</p> <p>【教訓等】長雨で地盤が緩んだところへ大規模な地震が発生したため、山から田んぼへ地すべりが起き、道路も寸断された。この地すべりから田植えをしていた人が生き埋めとなり、消防団員が必死の救助作業を行った経緯もある。当町としてこうした大災害を風化させないためにも、災害や防災に対する知識向上及び地域住民の地震防災対策の強化を図ってきた。</p>	文献	六戸町史 上巻 第一編 平成5年3月
024058-2	青森県	六戸町	<p>【災害名】三陸はるか沖地震</p> <p>【発生日時】1994年12月28日</p> <p>【被災地】青森県内東部広域</p> <p>【災害の概要】1994年12月28日21時19分頃、M(マグニチュード):地震の規模)7.7の大地震が発生した。八戸での震度は6であり、北海道から中部にかけての広範囲で被害が起きた。六戸町の被害は、軽傷1人、家屋の一部破損147棟、道路15箇所、河川及び水路の破損5箇所、舘野公園内の亀裂等である。十勝沖地震よりは被害は全体的に最小限防ぐことができたと思われる。に少なく済んだ。被害総額は3億4,990万円。</p> <p>【教訓等】被害状況からみても公共施設等の一部破損が多く、都市型震災の特徴が見られる。今後の防災対策について、災害等で被害にあった電気・ガス等のライフラインの復旧の早急な対応について改めて考えさせられた災害だった。</p>	その他(町で作成したものを中心に)	平成6年三陸はるか沖地震の記録(町で作成・綴り)
024066-1	青森県	横浜町	<p>【災害名】昭和48年集中豪雨</p> <p>【発生日時】昭和48年9月24日</p> <p>【被災地】横浜町全域</p> <p>【災害の概要】集中豪雨(370mm)により建物の全壊流失12戸、床上浸水80戸、国道279号線決壊、鉄道流失等の被害を受けた。</p> <p>【教訓等】過去に幾度も大雨による水害を受けていたが、これを契機に河川改良等を行い、これ以降は大きな災害は発生していない。</p>		
024261-1	青森県	佐井村	<p>【災害名】台風9号</p> <p>【発生日時】昭和44年8月23日</p> <p>【被災地】佐井村全域</p> <p>【災害の概要】大雨により河川が氾濫。住家床上浸水75戸、床下浸水153戸が被害。大佐井橋崩落し、災害救助法発動。</p> <p>【教訓等】大佐井川の河川改修を実施し、氾濫防止に努めた。</p>		

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
02426 1-2	青森県	佐井村	<p>【災害名】低気圧（高潮）</p> <p>【発生日時】昭和48年12月22日</p> <p>【被災地】佐井村字磯谷</p> <p>【災害の概要】強風波浪により、小型動力船が流出の危機。消防団出動し船揚作業従事中、団員一名大怪我を負い病院搬送中死亡。沿岸漁船40隻被害。</p> <p>【教訓等】災害時における消防団員の出場時の安全対策について検討し、複数名での巡回を徹底するとともに、防災無線を設置し、二次災害防止を図った。</p>		
02426 1-3	青森県	佐井村	<p>【災害名】50年災害（大雨）</p> <p>【発生日時】昭和50年7月27～28日</p> <p>【被災地】佐井村全域</p> <p>【災害の概要】青森県における大雨災害が当村にも被害を及ぼし、災害救助法発動。大雨により河川が氾濫し古佐井橋崩落。家屋全壊2戸、半壊3戸、床上浸水157戸、床下浸水256戸の被害。土砂災害による危険地帯から20戸が防災のため集団移転する。</p> <p>【教訓等】古佐井川の河川改修を実施するとともに、土砂災害危険地帯の地すべり調査を実施した。また、毎年度植林を実施し、山地の保水力の確保に努めている。</p>		
02444 9-1	青森県	名川町	<p>【災害名】剣吉の大火</p> <p>【発生日時】昭和23年5月12日</p> <p>【被災地】青森県三戸郡名川町（旧北川村）大字剣吉字上町</p> <p>【災害の概要】西風（十二米）にあおられ火災の規模を大きくした。全焼259戸 被害額126,740,880円 被害人口：男613人 女680人 住家：180戸 非住家：313戸 世帯数：240世帯 坪数住家：5,540坪7合5しゃく 非住家：2,409坪2合5しゃく</p> <p>【教訓等】蒸気機関車の飛び火が原因と考えられる大火が発生、折からの西風（12米）にあおられ火の手は見る見る燃え広がり剣吉目抜き通りの駐在所、郵便局、出町酒店、上野医院など259戸を焼き尽くす。その教訓から地元消防力の強化が図られ、現在においては毎年、剣吉大火記念日と称し慰霊祭が行われている。</p>	・文献資料	名川町誌 第1巻 本編I 平成5年8月31日発行 P589-P590
02444 9-2	青森県	名川町	<p>【災害名】十勝沖地震</p> <p>【発生日時】昭和43年5月16日</p> <p>【被災地】名川町全域</p> <p>【災害の概要】死者6名（内旧剣吉中学校生徒4名） 被害総額4億7千万円 旧剣吉中学校校舎使用不能となる。</p> <p>【教訓等】地震発生直前の5月13日、14日、15日の三日間にわり長雨が100ミリ以上の雨量を越え、地盤がゆるんでいたところに十勝沖地震に見舞われた。</p>	・文献資料	名川町誌 第5巻 平成9年3月21日発行 P340-P341
03000 7-1	岩手県		<p>【災害名】貞観11年地震・津波</p> <p>【発生日時】貞観11年(869年)7月13日</p> <p>【被災地】三陸沿岸</p> <p>【災害の概要】地震による津波災害（マグニチュード8.3）・陸奥国地大いに震いて城邑を破壊し、海嘯嘯吼して溺死者多し。（『震災予防調査会報告』第46号）・陸奥国地大いに震動し、流光屋の如く隠映し、少事して人民叫呼、伏して起る能はず。或は屋倒れ死す、或は地裂け牛馬駭き走り、或は昇踏し、城郭倉庫門墻垣、頽落顛覆するもの数を知らず。海上嘯吼の雷霆に似たり。驚涛涌潮澎湃溢し、忽ち城下（地名不明）に至り、海を距る数百里浩々其涯際を知らず、原野道路随って隠濤したり。船に乗ずるに違あらず、山に登るに及び難く、溺死する者数千人、資産苗稼殆ど子遺なし。（『震災予防調査会報告』第11号）</p> <p>【教訓等】三陸沿岸に襲来した津波のなかで、記録に残る最古のもので、資料が少なく詳細不明</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・盛岡地方気象台・岩手県：岩手県災異年表、1979年 P2</li> <li>・岩手古文書研究会：岩手古文書館 巻五、1999年 P135</li> <li>・伴信友校訂：三代実録 巻第十六、1883年（明治16年）</li> <li>・震災予防調査会報告（第11号、第46号）</li> </ul>
03000 7-2	岩手県		<p>【災害名】慶長16年地震・津波</p> <p>【発生日時】慶長16年(1611年)12月20日</p> <p>【被災地】岩手県沿岸全域</p> <p>【災害の概要】三陸沖地震の津波災害（マグニチュード8.1）被害は軽微だったが、津波が午前10時から午後2時頃まで来襲し、伊達領内で溺死者1783人、南部・津軽藩で人馬死3000余。（災害・被害の詳細については、添付資料1-1参照）</p> <p>【教訓等】資料が少なく詳細不明</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三陸町史編集（刊行）委員会：三陸町史 第四巻津波編、1989年 P62-73</li> <li>・宇佐美龍夫：新編日本被害地震総覧、1987年</li> </ul>
03000 7-3	岩手県		<p>【災害名】盛岡大火</p> <p>【発生日時】享保14年(1729年)4月2日</p> <p>【被災地】岩手県盛岡市</p> <p>【災害の概要】盛岡城下の大火。全焼1933戸、死者6人。「諸士屋敷九十二軒、町家一千三百三十九軒、御組町百軒余、山伏寺院庵共二十一カ所、土蔵五十一カ所、穴蔵十四カ所、東中野村諸士百姓家五十一カ所、人馬数え尽くしがたし」（日本近世飢饉史）</p> <p>【教訓等】当時、盛岡城下では茅葺き、葎葺き、あるいは杉皮葺き屋根が大半だったが、この大火と享保17年の相次ぐ大火の教訓から南部藩では瓦葺き屋根は火災防止のうえに効果があるので、瓦で屋根を葺いてもよいという布告をだした。</p>	・文献資料	盛岡市消防史編さん委員会：盛岡消防史、1998年 P105

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
03000 7-4	岩手県		<p>【災害名】 明治三陸地震津波</p> <p>【発生日時】 明治29年(1896年)6月15日</p> <p>【被災地】 岩手県沿岸全域</p> <p>【災害の概要】 三陸沖地震の津波災害(マグニチュード8.5、沿岸部の最大波高は38mに達した。)(災害・被害の詳細については、添付資料2-2参照)</p> <p>【教訓等】 事前の地震が弱かったので(震度2~3)、津波を予測したものが1人もなく、全く不意を突かれて大きな被害になった。親が子を助け、子が親を助けようとするなどで、共倒れになったケースが非常に多く、その教訓から「津波てんでんこ」の言い伝えになって、後の昭和の津波の際に活かされた。</p>	・文献資料	岩手古文書研究会：岩手古文書館巻五 明治三陸大海嘯関係文書、1999年、P9-160
03000 7-5	岩手県		<p>【災害名】 昭和三陸地震津波</p> <p>【発生日時】 昭和8年(1933年)3月3日</p> <p>【被災地】 岩手県沿岸全域</p> <p>【災害の概要】 三陸沖地震の津波災害(マグニチュード8.1)(災害・被害の詳細については、添付資料3-2参照)</p> <p>【教訓等】 明治の津波の教訓が生かされたものの、冬の真夜中の発生であったため大惨事となった。強烈な地震だったため、殆どの人が目覚めたが、「冬に津波は来ない」「強い地震の時は津波はない」などの誤った言い伝えを信じた者もいた。三陸はこの津波と明治三陸地震津波とで、津波常習地として世界的に名が知られ、「Tsunami」という国際語ができた。</p>	<p>・文献資料(災害記録、行政資料)</p> <p>・碑文(内容) 大地震の後は津浪が来る、地震があったら此処へ来て一時間我慢せ、津浪に襲われたら何処でも此の位能高所へ逃げろ、遠くへ逃げては津浪に追付かる、常に近くの高い所を用意して置け(他多数)</p> <p>・フィルム(津波デジタルライブラリ)</p> <p>・写真</p>	<p>・三陸町史編集(刊行)委員会：三陸町史 第四巻津波編、1989年 p.243-425</p> <p>・岩手県災害関係行政資料 I p.53-268</p> <p>・津波デジタルライブラリ作成委員会：津波デジタルライブラリ、2003年</p> <p>・「昭和三陸大津波」被災記録(写真集)</p>
03000 7-6	岩手県		<p>【災害名】 アイオン台風による水害</p> <p>【発生日時】 昭和23年(1948年)9月15日~17日</p> <p>【被災地】 岩手県一関市、宮古市等</p> <p>【災害の概要】 台風接近による豪雨等による大水害(災害・被害の詳細については、添付資料4-1参照)</p> <p>【教訓等】 前年のカスリン台風で、全国的に被害を受けた。関東地方では前年の教訓から被害を最小限におさえることができたが、戦後、間もない時期であり、特にも財政力のない東北地方では災害復旧がすすまないうえに警報連絡体制も万全ではなかったため大きな被害となった。迅速な災害復旧の必要性はもとより、いち早い洪水警報の伝達、関係機関の連絡体制の整備等の対策が重要であることを示した。</p>	・文献資料	高崎哲郎：修羅の涙は土に降るカスリ・アイオン台風/北上川流域・宮古 大洪水の秋(とき) 1998年
03000 7-7	岩手県		<p>【災害名】 チリ地震津波</p> <p>【発生日時】 昭和35年(1960年)5月24日</p> <p>【被災地】 岩手県沿岸南部(特に気仙地区)</p> <p>【災害の概要】 チリ沖地震の津波災害(モーメントマグニチュード9.5)(災害・被害の詳細については、添付資料5-1参照)</p> <p>【教訓等】 世界最大級の地震であり、太平洋での津波発生と日本への到達時刻の推定はされたが、日本から約17,000km隔てたチリでの地震だったため、同様の地震で過去に被害を及ぼすような事例がなかったことで津波警報が遅れたこと、また、体感地震を伴わなかったため、大きな被害となった。この地震津波を契機に環太平洋諸国による津波早期警報システムが確立された。</p>	<p>・文献資料</p> <p>・碑文</p> <p>・写真(画像データファイルあり)</p>	<p>・気仙地区調査委員会：チリ地震津波記念 三陸津波誌、1961年</p> <p>・津波デジタルライブラリ作成委員会：津波デジタルライブラリ、2003年(「地震がなくとも潮汐が異常に退いたら津波が来るから早く高い所に避難せよ」との記述あり)</p> <p>・「チリ津波記念碑(浄土が浜) チリ津波記念碑(浄土が浜)</p>
03000 7-8	岩手県		<p>【災害名】 宮城県沖を震源とする地震</p> <p>【発生日時】 平成15年(2003年)5月26日</p> <p>【被災地】 岩手県全域(南部中心)</p> <p>【災害の概要】 マグニチュード7.1 負傷者91人、家屋全壊2棟、半壊10棟</p> <p>【教訓等】 災害発生から数時間は、固定電話、携帯電話が輻輳したため、災害状況の把握、伝達に支障をきたしたことから、県では可搬型衛星電話及び車載型衛星電話の配備数を増やすとともに可搬型衛星通信端末等一式を新たに配備するなど通信体制の充実を図った</p>	・文献資料・HP	<p>・岩手県総務部総合防災室：平成15年中の岩手県災害被害状況報告書、2004年 p.21-35</p> <p>岩手県ホームページ <a href="http://www.pref.iwate.jp/~hp010801/osirase/saigai/h15saigai/H15-houkokusyo.pdf">http://www.pref.iwate.jp/~hp010801/osirase/saigai/h15saigai/H15-houkokusyo.pdf</a></p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
03202 6-1	岩手県	宮古市	<p>【災害名】明治三陸地震津波                      【発生日時】明治29年6月15日                      【被災地】田老村、宮古町、鉾ヶ崎村、重茂村                      【災害の概要】死者・不明者 田老村1,859人 宮古町69人 鉾ヶ崎村137人 重茂村496人 計2,561人                      罹災戸数 田老村294戸 宮古町46戸 鉾ヶ崎村547戸 重茂村103戸 計990戸                      流失等船数 田老村540隻 宮古町103隻 鉾ヶ崎村268隻 計911隻                      宮古湾で約4.6～8.5m、田老湾で約15mの津波有り。                      【教訓等】田老村において、津波から身をもって免れたのは、全人口約2,000人のうち36人のみであり、これも多少の傷を負った。負傷しなかったのは、当夜1海里余の沖合いの鮪網に出た船15隻の乗組員60人と、北海道に出稼中の漁夫若干名だけであった。</p>	・文献資料	・知る知る宮古（平成16年3月宮古市発行） ・宮古のあゆみ（昭和49年3月宮古市発行） ・地域ガイド（平成17年3月 田老町発行）
03202 6-2	岩手県	宮古市	<p>【災害名】昭和三陸地震津波                      【発生日時】昭和8年3月3日                      【被災地】田老村、宮古町、磯鶏村                      【災害の概要】死者・不明者 田老村911人 宮古町2人 磯鶏村2人 計915人                      罹災戸数 田老村505戸 宮古町15戸 磯鶏村7戸 計527戸                      宮古湾で約4～8m、田老湾で約6～10mの津波有り。当時の田老村の全戸数は834戸、人口は4,983人。田老村においては、家族全滅の戸数66戸、その家族数333人（死者163人、不明者170人）に上る。また、田老村の被害額（田老村役場発表）は、2,908,755円の巨額であった。                      【教訓等】田老村においては、地震後約30分で津波があった。津波襲来の前には急激な退潮（退潮位30～50m）があった。夜明けまでに大小3～7回の津波の襲来があった。田老村では、復興にあたり、防潮堤の建設を行った。現在の田老地区（当時の田老村）の防潮堤延長は1,350mに及ぶ。また、街の区画の整理を行い、避難が容易となるよう交差点の隅切りを行い、海辺に防潮林の植栽を行った。</p>	・文献資料	・知る知る宮古（平成16年3月宮古市発行） ・宮古のあゆみ（昭和49年3月宮古市発行） ・地域ガイド（平成17年3月 田老町発行）
03202 6-4	岩手県	宮古市	<p>【災害名】アイオン台風による水害                      【発生日時】昭和23年9月15～17日                      【被災地】宮古市                      【災害の概要】宮古市 死者92人 負傷者172人 家屋流失171戸                      罹災総数5,570戸（18,002人）                      宮古市の24時間降水量は249.33mmであった。閉伊川とその大小支流が氾濫し、大きな被害を受けた。特に藤原地区が大きな被害を受けた。岩手県内では、宮古市が最も被害がひどく、当時の古老も未だかつて知らないほどのものだった。山田線が寸断され、昭和29年11月の復旧まで市民は相当の不便を強いられることとなった。                      【教訓等】</p>	・文献資料	・知る知る宮古（平成16年3月宮古市発行） ・宮古のあゆみ（昭和49年3月宮古市発行）
03202 6-5	岩手県	宮古市	<p>【災害名】チリ地震津波                      【発生日時】昭和35年5月24日                      【被災地】宮古市                      【災害の概要】宮古市 死者1人 家屋流失76戸 罹災者853世帯                      宮古湾で約5m、田老湾で約3～5mの津波有り。内湾の高浜地区を中心に、金浜、赤前、津軽石地区の被害が大きく、家屋の流失、漁船の流失等のほか、養殖施設が全滅した。高浜小学校の被害が大きく、復旧費は650万円であった。災害後、児童は、一次磯鶏小学校を借りて授業を行った。その後、被災校舎の応急措置を行い、授業を再開したが、地区住民から校舎移転の強い要望があり、南高台に校地を決め、翌年6月20日にブロック造校舎が完成した。津軽石河口近くから高浜まで987mの国道兼用の大規模な防潮堤工事が進められ、県営3ヵ年継続事業で完成した。                      【教訓等】地震がなくても津波が来る。</p>	・文献資料	・知る知る宮古（平成16年3月宮古市発行） ・宮古のあゆみ（昭和49年3月宮古市発行） ・地域ガイド（平成17年3月 田老町発行）
03202 6-6	岩手県	宮古市	<p>【災害名】三陸フェーン大火                      【発生日時】昭和36年5月29～31日                      【被災地】宮古市、田老町、新里村                      【災害の概要】死者 宮古市2人 田老町1人                      負傷者 宮古市79人 田老町1人                      家屋の全焼 宮古市81戸 田老町519戸                      5月29日は、台風4号の通過に伴い、風速20～30mの風が吹いていた。最高気温は29.6度まで上がった。新里村の炭焼き小屋から出火した火が飛び火しながら燃え広がった。宮古市では、田代地区から津軽石地区まで延焼した。特に崎山地区が大きな被害を受けた。被害総額は、17億5421万円だった。田老町では、上記被害のほかに、山林被害5,860ha、大家畜被害45頭、小家畜被害122羽、漁船被害78隻の被害を受けた。被害額は21億6340千円だった。フェーン現象により火が広がったことから、三陸フェーン大火と呼ばれている。                      【教訓等】</p>	・文献資料	・知る知る宮古（平成16年3月宮古市発行） ・宮古のあゆみ（昭和49年3月宮古市発行） ・田老町地域防災計画（平成10年度 田老町防災会議） ・新里村地域防災計画（平成15年度 新里村防災会議）

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
03203 4-1	岩手県	大船渡市	<p>【災害名】チリ地震津波                      【発生日時】昭和35年5月24日                      【被災地】大船渡市大船渡町・赤崎町・末崎町・盛町・三陸町                      【災害の概要】大船渡沿岸で最大浸水深約5.3mを記録 死者行方不明者53名                      【教訓等】昭和37年6月にチリ地震津波の被災状況を「大船渡市災害誌」として、編さんし、今日までの記録として保管・伝承されている。また、平成2年5月には、チリ地震津波30周年事業として、チリ地震津波体験者の体験談をまとめた、「この教訓を永遠に」を編さんし、今日に伝承している。また、8mカメラによる撮影フィルムが保管されている。</p>	<p>・文献資料・チリ地震津波被災状況写真(ネガ・パネル)                      ・チリ地震津波被災状況写真(ネガ・パネル)</p>	<p>「大船渡災害誌」発行大船渡市「この教訓を永遠に」                      「被災写真」寄贈</p>
03209 3-1	岩手県	一関市	<p>【災害名】アイオン台風による水害                      【発生日時】昭和23年9月15日～17日                      【被災地】一関市                      【災害の概要】アイオン台風の接近に伴い、岩手県でも15日夜から雨がふりだし、16日の午後には県下全般にもすごい豪雨となり、各河川は増水し、昨年のカザリン台風を上回る大水害となった。一関市は濁流にのまれた直後、同市地主町中川油店より出火し、降雨中16戸を焼失し、水と火で逃げられず34名が焼死するという被害まで重なった。                      一関市における被害状況                      罹災者総数 25,888名                      人的被害(名)死者260、行方不明193、重症160、負傷、4,800                      住家の被害(戸)全壊517、流失617、半壊394、床上浸水2,006、床下浸水505、非住家被害959                      水田(ha) 流失埋没158、冠水7,115                      畑地(ha) 流出埋没550、冠水417                      【教訓等】カザリン・アイオン両台風が契機となって北上川総合開発計画が実施されることとなった。</p>	<p>・文献資料</p>	<p>○一関市史編纂委員会：「一関市史第3巻」S52 (345p～371p)                      ○一関市：「一関市水害復興誌」S27 1冊 62p                      ○磐井川堤防補強促進協議会：「一関水害写真集 大洪水」S56 1冊 48p                      ○一関の年輪刊行委員会：「写真記録集 一関の年輪」1990 (116p～149p)</p>
03209 3-2	岩手県	一関市	<p>【災害名】一関大火                      【発生日時】明治9年5月9日                      【被災地】旧一関村                      【災害の概要】大槻街磐根屋敷より出火。おりからの強い南風にあおられて磐井川を越えて前堀村まで延焼。焼失家屋700戸という一関村の大半を焼く。                      【教訓等】教訓 この火事から当時柳沢専治氏を組頭とした一関村ポンプ組が発足。</p>	<p>・文献資料</p>	<p>○一関市史編纂委員会：「一関市史第3巻」S52 (341p)                      ○一関市消防団結成30周年記念編纂委員会：「消防いちのせき30周年記念誌」S53 (27p)</p>
03210 7-1	岩手県	陸前高田市	<p>【災害名】チリ地震津波                      【発生日時】昭和35年5月24日                      【被災地】陸前高田市高田町、気仙町、米崎町、小友町、広田町                      【災害の概要】最大波高(小友町三日市)約5.5mを記録 死者8名                      【教訓等】当時の記録写真をパネルにし、保管・伝承されている。また、平成18年5月には、道の駅でパネル展を開催した。</p>	<p>・チリ地震津波被災状況写真(ネガ・パネル)</p>	<p>「被災写真」寄贈</p>
03211 5-1	岩手県	釜石市	<p>【災害名】明治三陸地震津波                      【発生日時】明治29年(1896年)6月15日                      【被災地】岩手県沿岸全域                      【災害の概要】三陸沖地震の津波災害(マグニチュード8.5、沿岸部の最大波高38mに達した。)                      【教訓等】</p>	<p>・文献資料</p>	<p>・釜石市誌編纂委員会：「釜石市誌(通史)」昭和52年3月10日発行                      ・新沼裕：「本郷津波検証の集い」平成17年11月10日発行</p>
03211 5-2	岩手県	釜石市	<p>【災害名】昭和三陸地震津波                      【発生日時】昭和8年(1933年)3月3日                      【被災地】岩手県沿岸全域                      【災害の概要】三陸沖地震の津波災害(マグニチュード8.1)                      【教訓等】</p>	<p>・文献資料</p>	<p>・釜石市誌編纂委員会：「釜石市誌(通史)」昭和52年3月10日発行                      ・新沼裕：「本郷津波検証の集い」平成17年11月10日発行</p>
03215 8-1	岩手県	奥州市	<p>【災害名】アイオン台風                      【発生日時】昭和23年(1948年)9月16日                      【被災地】水沢区 北上川沿川地域(羽田町、黒石町、姉妹町等)                      【災害の概要】15日未明より降り出した雨は、台風の接近とともに雨勢を強め、特に16日午後2時頃から猛烈な豪雨となって深夜まで降り続いた。その間の雨量は、盛岡市147mm、水沢285mmで、特に水沢、遠野、宮古以南は記録的な豪雨であった。被害は甚大で死者392人、行方不明者296人、傷者1403人、家屋全壊550戸、半壊1668戸、流出家屋840戸、床上浸水家屋14000戸近く、床下浸水家屋12000戸弱、堤防決壊1800箇所、道路決壊860箇所、橋梁流出1500箇所、冠水田4.0万町歩、冠水はた地2万余町歩弱・耕地埋没流出7700町歩であった。水沢市の被害は、流出家屋10戸、床上浸水2186戸、床下浸水2528戸、田畑冠水1254町歩</p>	<p>・文献資料</p>	<p>水沢市地域防災計画資料編</p>



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
03482 7-1	岩手県	山田町	<p>【災害名】明治三陸津波</p> <p>【発生日時】明治29年6月15日 午後7時32分30秒</p> <p>【被災地】船越村田の浜地区、船越村大浦地区、織笠村、山田町、大沢村</p> <p>【災害の概要】死者が2,950名負傷者1,370名、家屋全半壊、流出家屋977戸 最大波高 田の浜9.11m</p> <p>【教訓等】明治29年6月15日は陰暦5月5日で端午の節句で休日であった。午後7時30分地震を感じ数回の小地震を感じたという。丁度鮪漁期連日大漁で、当日は休業して祝盃を挙げていたという。また、湧き水や、井戸の水が二三日前から枯れはじめたという。</p>	・文献資料	山田津波誌 編集：山田町津波誌編集委員会 発行：山田町教育委員会 発行年月日：昭和57年4月30日
03482 7-2	岩手県	山田町	<p>【災害名】昭和三陸津波</p> <p>【発生日時】昭和8年3月3日 午前2時31分</p> <p>【被災地】船越村田の浜地区、船越村大浦地区、織笠村、山田町、大沢村</p> <p>【災害の概要】死者13名負傷者12名、行方不明者5名、流出家屋523戸 最大波高 田の浜6.0m</p> <p>【教訓等】井戸水は、2月末頃から濁る井戸や、普段は、濁り水が数日前から、澄んだ水になるなどの前兆があったという。当時、電話を持っている家が136戸あり、山田局の電話交換手が3人で宿直で勤務中であった。釜石方面から電話連絡で津波襲来の予報があるので山田地方も警戒せよという連絡があり、3人で相談して、136個の加入者に、津波が来るので早く避難するようにと必死に電話したその結果山田湾内の住民ほとんどが避難したところへ大津波の来襲となった。交換手3人の機転と敏速な行動がなければ、明治29年の大津波で受けたような大惨事になっていた。</p>	・文献資料	山田津波誌 編集：山田町津波誌編集委員会 発行：山田町教育委員会 発行年月日：昭和57年4月30日
03482 7-3	岩手県	山田町	<p>【災害名】チリ地震津波</p> <p>【発生日時】昭和35年5月24日 午前2時47分</p> <p>【被災地】船越村田の浜地区、船越村大浦地区、織笠村、山田町、大沢村</p> <p>【災害の概要】流出家屋48戸(人員239人)全壊家屋88戸(人員415人)半壊家屋210戸(人員1,111人)床上浸水家屋(911戸)人員5,011人床下浸水家屋126戸(人員675戸) 最大波高 織笠4.0m 山田3.1m 大沢2.7m</p> <p>【教訓等】この日は、若布解禁の日で漁師たちは早朝より浜に出ていて引き潮の異常には気づいていた、第1波が2時30分頃、第2波が3時頃であり、異常な引き潮に気づき津波だと叫んで、近くの屯所の鐘や、魚市場のサイレンを鳴らして大事を知らせた。3時30分消防署の警鐘、サイレンの吹鳴により、他の消防団員も出動し、避難誘導にあたった。実際には、午前4時頃の第3波が大きな津波であり、気象台が4時58分に津波警報を出している。当町では、漁師の消防団の人達が海の異常に気づいたおかげで死者を出さずにすんだ。</p>	・文献資料	山田津波誌 編集：山田町津波誌編集委員会 発行：山田町教育委員会 発行年月日：昭和57年4月30日
03485 1-1	岩手県	普代村	<p>【災害名】明治三陸地震津波</p> <p>【発生日時】明治29年(1896年)6月15日</p> <p>【被災地】普代村沿岸全域</p> <p>【災害の概要】</p> <p>【教訓等】</p>	・碑文など	<ul style="list-style-type: none"> <li>・太田名部地区「津波記念塔」</li> <li>・太田名部地区「坂下家墓石」</li> <li>・普代地区「津波防災之碑」</li> </ul>
03485 1-2	岩手県	普代村	<p>【災害名】昭和三陸地震津波</p> <p>【発生日時】昭和8年(1933年)3月3日</p> <p>【被災地】普代村沿岸全域</p> <p>【災害の概要】</p> <p>【教訓等】</p>	・碑文など	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妙相寺「三陸海嘯溺死者諸精霊供養塔」</li> <li>・太田名部地区「津波記念塔」</li> <li>・普代地区「津波防災之碑」</li> <li>・普代地区「大海嘯記念碑」</li> </ul>
03487 8-1	岩手県	川井村	<p>【災害名】アイオン台風による水害</p> <p>【発生日時】昭和23年9月15日</p> <p>【被災地】岩手県川井村</p> <p>【災害の概要】台風による大水害</p> <p>【教訓等】前年猛威を振るったカザリン台風の被害復旧もまだ完成されない翌年、再びアイオン台風の襲来により甚大な被害を蒙った。この台風により最も降水量が多かったのは一関と宮古を結ぶ線上であり、その中心線にあった本村は物凄い豪雨であった。最も被害が大きかった地区では、人家密集地区の8割が流失するという惨状で、恐怖の一夜を明かす人々でいっぱいであった。</p>	・文献資料	タイトル：川井村郷土誌 編集：川井村郷土誌編集委員会 発行年：昭和37年9月20日

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
03501 7-1	岩手県	軽米町	<p>【災害名】10・28豪雨災害</p> <p>【発生日時】平成11年10月28日</p> <p>【被災地】軽米町大字上館・軽米（町中心部）</p> <p>【災害の概要】台風並みに発達した低気圧の影響により、平成11年10月27日から28日にかけて軽米町にあつては、200年に一度といわれる、最大時間雨量30.5mm、総雨量230mmに達する集中豪雨が町を襲い、軽米町を貫流する雪谷川が全域で氾濫し甚大な被害が出た。全壊住宅25棟、半壊住宅5棟、床上浸水住宅456棟、公共土木施設、農林関係等で被害額265億円となった。</p> <p>【教訓等】200年に一度と言われるように大きな水害がなかったため川沿いに家が立ち並ぶ住宅形成であった。災害を契機に始められた雪谷川河川改修事業に合わせて「災害に強いまちづくり」の観点からさまざまな事業が進められるようになった。河川改修事業とともに、川沿いにあつた住宅等を移転させるため集団移転地を整備した。災害を契機に、洪水ハザードマップを作成、避難所、避難経路等を明示するとともに、非常時の行動指針や日常の防災意識など、町民への啓発を行った。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> </ul>	1999年軽米町10・28豪雨災害復興誌 10・28豪雨災害－災害から復興への記録 平成17年3月発行
03502 5-1	岩手県	種市町	<p>【災害名】明治三陸地震津波</p> <p>【発生日時】明治29年（1896年）6月15日</p> <p>【被災地】岩手県九戸郡種市町</p> <p>【災害の概要】三陸沖地震の津波災害（マグニチュード8.5）地震による被害はほとんど無く、津波による被害は町内において死者254名にのぼっている（小子内地区内にて波高が20mに達した）（災害・被害の詳細については、添付資料1-1P9～P16を参照）</p> <p>【教訓等】この津波が来襲した6月15日は、旧暦の5月5日の端午の節句にあつており、昔からの習慣で奉公先などから帰ってきた人達と皆でお祝いをしているところを津波に襲われている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・供養塔 町内3箇所（宿戸公葬地 添付資料1-2P3、4）（八木北町公葬地 添付資料1-2P7、8）（小子内地区内 添付資料1-2P10、11）</li> <li>・供養塔写真</li> </ul>	著者：種市町歴史民俗資料館（酒井久男） タイトル：津波－語りつぐツナミ－ 発行年：昭和63年3月
03502 5-2	岩手県	種市町	<p>【災害名】昭和三陸地震津波</p> <p>【発生日時】昭和8年（1933年）3月3日</p> <p>【被災地】岩手県九戸郡種市町</p> <p>【災害の概要】地震による被害は少なかった。しかし津波による被害は甚大であった。死者107名（川尻地区内にて波高が7mに達した）（災害・被害の詳細については、添付資料1-3P17～P48を参照）</p> <p>【教訓等】明治29年の津波と比較すると、鉄道が防潮堤の役目をしたことと明治29年の津波の経験者がいたので死者の数は少なかった。この津波により、後に部落移転、避難道路、防波堤、防潮林等の対策が計られた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・慰霊碑 町内6箇所（川尻地区内 添付資料1-4P1、2）（大浜地区内 添付資料1-4P5、6）（八木北町公葬地 添付資料1-4P7、8）（八木南町地区内 添付資料1-4P10、11、12）</li> <li>・慰霊碑写真</li> </ul>	著者：種市町歴史民俗資料館（酒井久男） タイトル：津波－語りつぐツナミ－ 発行年：昭和63年3月
03502 5-3	岩手県	種市町	<p>【災害名】チリ地震津波</p> <p>【発生日時】昭和35年（1960年）5月24日</p> <p>【被災地】岩手県九戸郡種市町</p> <p>【災害の概要】他市町村の甚大な被害に比べると当町の被害は少なく建物流出が1件、床上浸水1件、となっており、人的被害は報告されていない。（種市地区内にて波高が5.1mに達した）（災害・被害の詳細については、添付資料1-5P49～P55を参照）</p> <p>【教訓等】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	著者：種市町歴史民俗資料館（酒井久男） タイトル：津波－語りつぐツナミ－ 発行年：昭和63年3月
03503 3-1	岩手県	野田村	<p>【災害名】昭和三陸地震津波</p> <p>【発生日時】昭和8年（1933年）3月3日 2時31分地震発生</p> <p>【被災地】城内地区</p> <p>【災害の概要】三陸沖を震源として発生した津波災害 ・流失家屋58戸（572戸中）・死者6名（4,264人中）負傷者4名</p> <p>【教訓等】近世の記録として残るものでは、明治三陸大津波につぐ被害を出した大津波であったが、津波の規模や流失家屋等の割合に対して人的被害が少なかった。それは、明治の教訓が生かされ、地震後に津波の襲来を予測して地震後に避難の準備をしていたものが多かったためである。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	野田民俗誌 =たぐましいふるさとの先人たち= 昭和54年3月30日発行 発行者：野田村教育委員会
03503 3-2	岩手県	野田村	<p>【災害名】明治三陸地震津波</p> <p>【発生日時】明治29年（1896年）6月15日 19時32分地震発生</p> <p>【被災地】城内地区</p> <p>【災害の概要】三陸沖を震源として発生した津波災害 ・流失家屋138戸（411戸中）・死者261名（2,590人中）負傷者62名</p> <p>【教訓等】近世の記録として残る津波災害では、最大の被害を出した大津波である。当時、多くの者は津波の迫る音を聞いてから避難をしたということであり、そのため、逃げ遅れた者が多数出たことにより被害が甚大になったということである。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	野田民俗誌 =たぐましいふるさとの先人たち= 昭和54年3月30日発行 発行者：野田村教育委員会

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
04000 2-1	宮城県		<p>【災害名】明治三陸地震津波                      【発生日時】明治29年(1896年)6月15日                      【被災地】宮城県本吉郡、桃生郡、牡鹿郡                      【災害の概要】三陸地震津波は、波高2.5メートルに達し、本県の被害は死者3,453人、負傷者1,241人、流失家屋985棟に及んだ。(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)                      【教訓等】三陸沖を震源とする地震が発生した。陸上での揺れは、さほどではなかったものの、その後20分ほどで怒濤のように津波が押し寄せ、船舶家屋はもちろんのこと巨樹や大石もごとく海中に流された。</p>	・文献資料	宮城県公文書館：宮城県公文書館企画展パンフレット「公文書は語る 宮城の災害～先人はいかに災害を乗り越えてきたか～」
04000 2-2	宮城県		<p>【災害名】昭和三陸地震津波                      【発生日時】昭和8年3月3日                      【被災地】宮城県本吉郡、桃生郡、牡鹿郡、亶理郡                      【災害の概要】発震から約30分後に北海道日高海岸と三陸海岸に津波が襲来した。震源は金華山沖東北東約28kmのタスカロラ海溝の浅所で、根室・網走及び岩手・宮城・福島3県と八丈島・浜松・長野は強震であった。地震のための直接の被害はほとんどなかったが、津波による被害は甚だ大きく、本県では死者315人、負傷者151人に達した。(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)                      【教訓等】昭和三陸地震津波後、牡鹿郡雄勝町では、被災状況を踏まえ高台に住宅を建てたり、道路を改良するなどの対策が行われた。これにより地震津波による被害を最小限に食い止めていくことができた。</p>	・文献資料	宮城県公文書館：宮城県公文書館企画展パンフレット「公文書は語る 宮城の災害～先人はいかに災害を乗り越えてきたか～」
04000 2-3	宮城県		<p>【災害名】チリ地震津波                      【発生日時】昭和35年5月24日                      【被災地】主に三陸海岸(北海道、青森、岩手、宮城等)                      【災害の概要】昭和35年5月23日4時11分(日本時間)、チリ国中部の西方海上を震源とする巨大地震(M9.5)により、津波が広く太平洋岸全域に伝播し、24日早朝に我国太平洋岸の殆ど全域で津波が観測された。宮城県内では、志津川町を中心に3市8町で死者・行方不明者が53人に上ったほか、負傷者625人、流失破損船舶779隻という大きな被害を受けた。                      【教訓等】-</p>	・文献資料・記録フィルム	・山下文男：哀史三陸大津波，1982(外図書40冊) ・宮城県立農業試験場：チリ地震津波による農作災害の実態・チリ地震津波における防湖林の効果に関する考察(雑誌)，1961 ・福井英夫：三陸海岸中南部地域におけるチリ地震津波について，1960(外論文12冊) ・宮城県政ニュース：特報「津波宮城県を襲う」・「チリ地震津波特報-災害を越えて-」，1960
04100 9-05	宮城県	仙台市	<p>【災害名】享保3年の大火                      【発生日時】享保3年(1718年)4月7日                      【被災地】大町、南町、柳町、北目町、染師町 ほか                      【災害の概要】侍屋敷73軒、町屋敷185軒焼失。                      【教訓等】立て続けの(4月1日)火災であった。</p>	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.128』 『伊達治家記録』
04100 9-06	宮城県	仙台市	<p>【災害名】享保12年の大火                      【発生日時】享保12年(1727年)3月16日                      【被災地】城下中心部、東部                      【災害の概要】侍屋敷443軒、足軽屋敷493軒、町同心屋敷50軒、町屋敷204軒、門前町177軒、寺院54軒、下級家臣や職人の屋敷など104件、合計1525軒焼失。町屋敷に比べ侍屋敷や寺院の被害が大きかった。                      【教訓等】激しい西風にあおられ延焼した。町屋敷の被害に比べ侍屋敷・寺院の被害が大きかったことが特徴である。</p>	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.128』 『伊達治家記録』
04100 9-07	宮城県	仙台市	<p>【災害名】延享3年の大火                      【発生日時】延享3年(1746年)2月22日                      【被災地】北山、二日町、北二番町、堤通 ほか                      【災害の概要】侍屋敷188軒、寺院9軒、門前町20軒、足軽・職人屋敷など69軒、町屋敷60軒。焼死者やけが人は皆無。                      【教訓等】昼火事のため死傷者なし。</p>	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.128』 『伊達治家記録』
04100 9-08	宮城県	仙台市	<p>【災害名】宝暦二年の大火                      【発生日時】宝暦二年(1752年)2月6日                      【被災地】焼失範囲不明                      【災害の概要】侍屋敷19軒、町屋敷358軒、1527戸焼失。死者なし。侍屋敷に比べ町屋敷の被害が大きかった。                      【教訓等】強風にあおられ延焼した。</p>	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.128』 『伊達治家記録』
04100 9-09	宮城県	仙台市	<p>【災害名】明和元年の大火                      【発生日時】明和元年(1764年)10月27日                      【被災地】城下東部～宮城郡小泉村                      【災害の概要】892戸焼失。死者2名。                      【教訓等】保春院・泰心院などいくつかの寺院も類焼した。</p>	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.128～129』 『伊達治家記録』

現在までに語り継がれる『災害』について

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
04100 9-10	宮城県	仙台市	【災害名】安永元年の大火 【発生日時】安永元年（1772年）1月26日 【被災地】大町、立町、肴町、南町 【災害の概要】651戸焼失。 【教訓等】烈風が吹く中の火災であった。	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.129』 『伊達治家記録』
04100 9-12	宮城県	仙台市	【災害名】慶長16年の地震 【発生日時】慶長16年（1611年）10月28日 【被災地】仙台市内 【災害の概要】津波で1783名、牛馬85頭溺死。推定マグニチュード8.1 【教訓等】この津波によって荒れた土地を開墾したのが、現在の若林区荒浜・下飯田・三本塚などの地域と言われている。	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.131』 『仙台市史 特別編1 自然 P.470』 『伊達治家記録』
04100 9-15	宮城県	仙台市	【災害名】宝永7年の地震 【発生日時】宝永7年（1710年）8月20日～26日 【被災地】 【災害の概要】20日の地震で仙台北本丸西門西脇石垣崩落。22日の地震で仙台北城付近の数カ所で石垣が崩落。その後26日まで余震が続く。 【教訓等】宝永6・7年は地震が頻発した時期であった。	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.132』 『伊達治家記録』
04100 9-19	宮城県	仙台市	【災害名】文久元年の大地震 【発生日時】文久元年（1861年）9月18日 【被災地】 【災害の概要】仙台城が破損。マグニチュード6.4 【教訓等】破損した仙台城復旧のため、仙台藩は幕府から3万両借用した。	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.132』 『伊達治家記録』
04100 9-20	宮城県	仙台市	【災害名】宮城県沖地震 【発生日時】昭和53年（1978年）6月12日 【被災地】宮城県（仙台市・石巻市）岩手県（大船渡市）等 【災害の概要】昭和53年6月12日17時14分頃、宮城県沖にマグニチュード7.4の地震が発生。ブロック塀などの倒壊により死者13名。重軽傷者9,300名。住宅全半壊4,250戸、部分壊74,000戸。その他ライフラインの切断。 【教訓等】コンクリートブロック塀や石塀の倒壊により、多くの児童が生命を失ったことを教訓にし、ブロック塀の補強や撤去、生垣緑化等が推進された。	・文献資料	・『仙台市史 特別編1 自然 P.474～482』 ・仙台市編集「'78宮城県沖地震1災害の記録」1979年発行
04100 9-21	宮城県	仙台市	【災害名】元和3年の水害 【発生日時】元和3年（1617年）4月11日 【被災地】仙台市内 【災害の概要】広瀬川の大橋・花壇橋流失。 【教訓等】その約半月後の4月24日にも洪水が発生している。	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.134』 『伊達治家記録』
04100 9-22	宮城県	仙台市	【災害名】寛永14年の水害 【発生日時】寛永14年（1637年）6月26日 【被災地】藩域全体 【災害の概要】広瀬川の大橋・花壇橋流失。「舟丁等の橋」も残らず流失。不作となり飢饉にみまわれた。 【教訓等】寛永検地の実施目的の一つと言われている。	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.134～136』 『伊達治家記録』
04100 9-24	宮城県	仙台市	【災害名】天保6年の洪水 【発生日時】天保6年（1835年）閏7月7日 【被災地】仙台市内 【災害の概要】町家2416戸流失、溺死者27名。広瀬川の大橋・中の瀬橋・評定橋・長町橋流失。 【教訓等】城内各所の土手の崩壊や増水による大橋の流出の危険があったが、奉行・藩の重臣の水防活動によりまぬがれた。	・文献資料	『仙台市史 通史編5 近世3 P.136』 『伊達治家記録』 『天保飢饉録』 『天保七年凶年日記』
04100 9-25	宮城県	仙台市	【災害名】明治2年の火災 【発生日時】明治2年（1869年）1月28日 【被災地】宮町一円 【災害の概要】67軒焼失。 【教訓等】この火災以来、夜番が始まった。	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.696～697』 『仙臺消防誌』
04100 9-26	宮城県	仙台市	【災害名】北山大火 【発生日時】明治9年（1876年）3月5日 【被災地】北山 ほか 【災害の概要】寂光寺、輪王寺、資福寺、覚範寺、東昌寺、福安寺など焼失。強烈な季節風が吹く中、山火事からの飛び火で燃え移った。原因不明の大火 【教訓等】勢いを増した大火に「土から湧いたか、天から降ったか」と怪しむ者もいた。	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.697』 『仙臺消防誌』

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
04100 9-27	宮城県	仙台市	【災害名】河原町大火 【発生日時】明治10年(1877年)3月27日 【被災地】河原町～小泉 【災害の概要】焼死1名。市内中枢部に次ぐ地帯であったことから、被害額が巨額になった。 【教訓等】当時の河原町は軍隊の御用商人その他大商店の立ち並ぶ地帯であった。	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.697～698』 『仙臺消防誌』
04100 9-28	宮城県	仙台市	【災害名】仙台北大火 【発生日時】明治15年(1882年)9月7日 【被災地】仙台北 【災害の概要】仙台北全体9割焼失。鎮台仮営が一時片平丁公園地の元勸工場に置かれた。 【教訓等】各町の消防組の活躍で、火薬庫への延焼はまぬがれた。	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.698～699』 『仙臺消防誌』
04100 9-29	宮城県	仙台市	【災害名】明治22年9月11日仙台北大洪水 【発生日時】明治22年(1889年)9月11日 【被災地】仙台北市内 【災害の概要】市内全域に被害が出たが、瀬橋流失など特に広瀬川付近に大きな被害が出た。住民や防衛活動の下士卒など溺死。 【教訓等】広瀬川筋の架橋流失により、川内との交通が途絶、元支倉方面の貧民街が懸念され市は師団に炊出救出を依頼した。	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.699～701』 『仙臺消防誌』
04100 9-30	宮城県	仙台市	【災害名】明治23年1月14日芭蕉の辻火災 【発生日時】明治23年(1890年)1月14日 【被災地】芭蕉の辻東南角 【災害の概要】13歳の子守を頭に5人の児童が焼け死ぬ。 【教訓等】被害者が幼い児童たちであったことから、世間に大きな刺激を与えた。	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.702～703』 『仙臺消防誌』
04100 9-31	宮城県	仙台市	【災害名】明治41年1月24日県立第一中学校の火災 【発生日時】明治41年(1907年)1月24日 【被災地】県立第一中学校 【災害の概要】御真影を火災から守り移そうとした学校書記が焼死した。 【教訓等】当時の仙台市長が呼びかけた弔慰金に多額の義金が寄せられ、盛大に葬儀が催された。	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.703』 『仙臺消防誌』
04100 9-32	宮城県	仙台市	【災害名】明治43年8月11日仙台北大洪水 【発生日時】明治43年(1910年)8月11日 【被災地】仙台北市内 【災害の概要】市内各地に浸水被害。山崩れのため山形街道不通。各所で道路陥没・がけ崩れがおきた。市内(当時)の総浸水家屋2,105戸(床上349、床下1,756)。 【教訓等】鉄道利用者の宿泊に対し、各旅館では低料金で便宜を図った。	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.703～706』 『仙臺消防誌』
04100 9-33	宮城県	仙台市	【災害名】大正8年3月2日南町火災 【発生日時】大正8年(1919年)3月2日 【被災地】南町 ほか 【災害の概要】707戸焼失。死傷者なし。焼失地域に重要な官庁・会社・住宅などを含んでいた 【教訓等】他町村から多数の応援を受けた。	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.710～712』 『仙臺消防誌』
04100 9-34	宮城県	仙台市	【災害名】昭和23年9月26日アイオン台風 【発生日時】昭和23年(1948年)9月16日 【被災地】仙台北市内 【災害の概要】市内電車、軌道運行不能。仙台駅・長町駅の滞留客を小学校などに収容し炊き出しを行った。農作物にも大きな被害を及ぼした。 【教訓等】この時の降雨量は県下一般には100mm内外であったが仙台市では358mmを記録している。	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.712』
04100 9-35	宮城県	仙台市	【災害名】昭和25年8月4日大水害 【発生日時】昭和25年(1950年)8月4日 【被災地】広瀬川沿岸 ほか 【災害の概要】豪雨により広瀬川の水嵩が急激に増加、市内各所に氾濫を起した。広瀬側沿線が住宅地などに高度利用されていたことなどから、被害総額見積は当時の貨幣価値で7億6千万円と言われるほどとなった。 【教訓等】この水害をうけて、宮城県は、昭和26年以降大規模な護岸工事を施し、再度の災害防止に努めた。	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.713～717』

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
04100 9-36	宮城県	仙台市	<p>【災害名】昭和27年1月22日仙台銀座大火</p> <p>【発生日時】昭和27年（1952年）1月22日</p> <p>【被災地】東二番丁（通称「仙台銀座」）</p> <p>【災害の概要】仙台銀座12棟98世帯、隣接類焼12棟9世帯。耐火建築の延焼防止が確認される一方、火災対策が不十分な建造物により被害が拡大した。</p> <p>【教訓等】防火壁も無い一大集団木造建築として、全国都市にも類の少ない危険な建物であった。</p>	・文献資料	『仙臺市史2 本編2 P.717～718』
04205 6-1	宮城県	気仙沼市	<p>【災害名】明治三陸地震津波</p> <p>【発生日時】明治29年（1896年）6月15日</p> <p>【被災地】気仙沼市（波路上地区）</p> <p>【災害概要】震度2～3の弱い地震の後、約10mともいわれる大津波が沿岸を襲った。本市の海沿いの集落では442名が亡くなり、ほとんど壊滅に近い状態となった。</p> <p>【教訓等】その後には「地震があったら津波の用心」という、言い伝えがなされ、昭和8年の昭和三陸地震津波の際の被害を軽減させたという。</p>	文献（気仙沼市史） 碑文（気仙沼市岩井崎「大震災記念」碑等）	1993年発行・気仙沼市史（P212～222） 碑文の写真
04205 6-2	宮城県	気仙沼市	<p>【災害名】昭和三陸地震津波</p> <p>【発生日時】昭和8年（1933年）3月3日</p> <p>【被災地】気仙沼市（波路上地区）</p> <p>【災害の概要】震度5程度の地震の後、大津波が襲った。本市では66名が亡くなり、流失家屋が300を超える被害が出ている。</p> <p>【教訓等】「地震があったら津波の用心」 「大地震それ来るぞ大津浪」 「大津波どんと沖鳴りそら津浪」 地震後の津浪についての教訓を示した物。 また、場所によっては津波が襲う前に「どん」という沖鳴りが聞こえたとの伝承。</p>	文献（気仙沼市史） 碑文（気仙沼市鹿折地区「大震災記念」碑等）の写真	1993年発行・気仙沼市史（P212～222） 碑文の写真
04206 4-1	宮城県	白石市	<p>【災害名】白石大火</p> <p>【発生日時】明治32年5月14日午前2時5分</p> <p>【被災地】新町、短ヶ町、亘理町、長町、中町、鍛冶町、本郷、裏町東益岡、中益岡、西益岡</p> <p>【災害の概要】新町の借家から発火、5時間以上燃え続けた。最乾燥期に加え当日は烈風が吹き荒れており、容易に草葎や板屋根に飛び火したことから、当時の白石市街地約1100戸の内868戸が焼失、罹災人口は6936名にのぼった。焼死者は2名（後に重傷者が死亡し、火事が原因で亡くなったのは最終的に3名）、重軽傷者は24名で、大火の割に人的な被害が少なかったのが不幸中の幸いであった。被害額は当時の金額で約100万円。</p> <p>【教訓等】白石町の8割近くが焦土と化したこの大火に際し、県内各地から義援金や救援物資が送られ、皇室からも御見舞金一封を賜り町民一同復興に努力した。その事を記しこのような災害を再び繰り返さないよう戒めるため、大火後益岡公園に移った神社（神明社）境内に一对の大火記念燈が建立された。また、この火事で土蔵造り・瓦葎の建物が耐火力に優れていることが確認されたことから、大火後の建物はこうした造りになっていった。</p>	・文献資料 ・写真	・宮城県白石市：白石市史1 通史篇P468～472；1979.3.20 ・白石大火記念燈デジタル写真画像1枚
04209 9-1	宮城県	多賀城市	<p>【災害名】集中豪雨による水害</p> <p>【発生日時】昭和61年（1986年）8月5日</p> <p>【被災地】市内各所</p> <p>【災害の概要】台風第10号から変わった温帯低気圧による大雨 総雨量394mm 最大時間雨量37mm 【罹災】 3, 130世帯 10, 092人 【家屋】 住家一部破損1棟 床上浸水3, 130世帯 床下浸水1, 632世帯 非住宅・公共建物浸水3, 090棟</p> <p>【教訓等】多賀城市がかつて経験したことの無い集中豪雨で、総雨量は394ミリにも達した。幸い死傷者はいなかったが、家屋の破損、床上・床下浸水などの住宅被害、道路崩壊、田畑の冠水および多数のがけ崩れなど、宮城県沖地震以来の大きな被害をもたらした。</p>	被害状況の写真	
04209 9-2	宮城県	多賀城市	<p>【災害名】集中豪雨による水害</p> <p>【発生日時】平成6年（1994年）9月22日</p> <p>【被災地】市内各所</p> <p>【災害の概要】低気圧接近による集中豪雨 総雨量304.5mm 最大時間雨量118.5mm（過去最高） 【罹災】 1, 571世帯 3, 966人 【家屋】 住家 床上浸水669世帯 床下浸水902世帯 非住宅284棟</p> <p>【教訓等】時間雨量で過去最高の118.5mmを記録し、幸い死傷者はいなかったが、家屋の被害がひどく大きな被害をもたらした。</p>	被害状況の写真	

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
042129-1	宮城県	登米市	<p>【災害名】宮城県北部地震</p> <p>【発生日時】昭和37年4月30日</p> <p>【被災地】登米市迫町、豊里町、米山町、石越町、南方町</p> <p>【災害の概要】昭和37年4月30日 宮城県北部地震M6.5 震度6を記録。</p> <p>千貫地区の被害が甚大で道路の亀裂や陥没、家屋の全壊、半壊等の被害が発生。</p> <p>【教訓等】災害救助法が適用され、災害復旧事業が昼夜の別なく1ヶ月余り実施された。家屋の全壊者には仮設住宅を建設する等の対策が講じられた。</p>	文献	迫町史・昭和48年発行 (P.272~275) 南方町史・昭和48年発行 (P.81~82)
042145-1	宮城県	東松島市	<p>【災害名】チリ地震津波</p> <p>【発生日時】昭和35年5月24日早朝</p> <p>【被災地】太平洋沿岸</p> <p>【災害の概要】5月14日南米チリに発生した地震による津波</p> <p>【教訓等】旧鳴瀬町においては、野蒜、宮戸に被害を受けたので災害対策本部を設置し、被害等の対策にあたった。旧矢本町においても、矢本町災害対策本部を設置し被害の対策にあたった。</p>	・文献資料	・旧鳴瀬町誌 ・旧矢本町史
042145-2	宮城県	東松島市	<p>【災害名】宮城県沖地震</p> <p>【発生日時】昭和53年6月12日</p> <p>【被災地】東日本全域</p> <p>【災害の概要】仙台湾沖を震源とする地震 (マグニチュード7.4 震度5)</p> <p>【教訓等】旧鳴瀬、矢本町において災害対策本部を設置し被害箇所の復旧作業等に取り組んだ</p>	・文献資料	・旧鳴瀬町誌 ・旧矢本町史
042153-1	宮城県	大崎市	<p>【災害名】宮城県北部地震</p> <p>【発生日時】昭和37年4月30日</p> <p>【被災地】大崎市古川、田尻</p> <p>【災害の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大崎市古川 死者2名、重傷者7名、軽傷者84名。損害額3億5728万円。全壊9戸、半壊42戸、江合川周辺で液状化が発生。</li> <li>・大崎市田尻 死者2名、負傷者19名、全壊176戸、半壊444戸、被害総額5億5,179万円。</li> </ul> <p>【教訓等】死者が発生したこと、復興費が後の町財政に重い負担となったことが語り継がれた背景と思われる。</p>	文献 (田尻町史・下巻)	昭和58年3月25日発行 田尻町史・下巻 (P.766~773)
044636-1	宮城県	鹿島台町	<p>【災害名】8・5豪雨災害</p> <p>【発生日時】昭和61年8月5日</p> <p>【被災地】鹿島台町志田谷地・内ノ浦地区他</p> <p>【災害の概要】前日から降り続いた雨により吉田川が増水し、堤防が決壊。</p> <p>【教訓等】前日は、かなり激しい雨が降っていたものの、8月5日の早朝には水位は上がっていなかった。しかし3~4時間のうちに急激に増水し決壊した。下流では雨が上がったあとも、十分な警戒が必要だということ、改めて感じさせられた。</p>	記録集	編集・発行：鹿島台町総務課 タイトル：吉田川洪水の記録 発行年：昭和62年8月5日
045047-1	宮城県	美里町	<p>【災害名】宮城県北部地震</p> <p>【発生日時】2003年7月26日</p> <p>【被災地】宮城県遠田郡南郷町</p> <p>【災害の概要】7月26日、午前0時13分から午後4時56分までの間に、震度5強~震度6強の強い地震が3回発生。住宅の全壊140棟(73世帯) 半壊489棟(225世帯) 住宅一部損傷1,313棟(765世帯) 避難箇所最大4箇所、最大避難者615人、延べ2,123人 期間7月26日~8月23日まで 仮設住宅設置戸数20戸、入居人員72人、設置期間 8月24日~平成17年7月25日</p> <p>【教訓等】これまで地震が発生しても、単発であったが、この時は連続した震度5以上の地震で、その後、数ヶ月にわたって余震が続いた。かつて経験したことのない地震で、家屋等の建物が甚大な被害を受けた。これにより、住宅の改築、新築の際には、瓦葺きの屋根は少なくなった。特に、住宅内の火の始末と家具の転倒防止に備え、地震があった場合に対応するようになった。</p>	災害発生から、その後の救護活動、避難状況の写真有り (南郷町役場で保管)	南郷町役場に保存用記録写真と災害の記録写真

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
04505 5-1	宮城県	美里町	<p>【災害名】宮城県北部地震</p> <p>【発生日時】昭和37年4月30日</p> <p>【被災地】美里町（旧小牛田町）</p> <p>【災害の概要】重傷者3名、軽傷者20名、家屋全壊32戸、家屋半壊227戸、家屋一部損壊953戸。金額にしておよそ1億8889万円の被害。文教・公共施設の被害もきわめて大きく、特に中埠地区の被害がいちじるしかった。</p> <p>【教訓等】「突然足の裏にエア・ハンマーでも当てたかのような強い衝撃を感じた」との証言や、貨物列車が横転した等、激しい有感地震であった。</p>	文献（小牛田町史下巻）	昭和48年発行・小牛田町史下巻（P.661～673）
04603 5-1	宮城県	本吉町	<p>【災害名】明治三陸地震津波</p> <p>【発生日時】明治29年（1896年）6月15日</p> <p>【被災地】宮城県本吉郡本吉町（蔵内、歌生、二十一浜、平磯、大谷）</p> <p>【災害の概要】三陸沖地震の津波被害 町内での波高は次のとおり今朝磯13.6m（宮城県最高） 蔵内11.5m 平磯10.0m 大谷8.6m</p> <p>【教訓等】当時はまだ庶民の生活の基準であった旧暦の5月5日、ちょうど端午の節句の夜8時頃のことでした。日の長い初夏の宵のくちです。津波の30分ほど前に地震がゆ～らゆ～らとゆっくり揺れる感じでありましたが、たいした地震ではないと、あまり気にする人もいませんでした。ましてや津波と結びつけて考えた人など誰もなく、突然ドドンという大きな音が2、3度し、家を蹴り倒すような勢いで、山のような大津波が押し寄せ、人も家も船もすべてが狂瀾怒涛によって、わずか30分から1時間のうちに捲きつくされました。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文（津波記念誌より）</li> <li>・写真（津波記念誌より）</li> </ul>	蒼浪の軌跡：本吉町三陸大津波100周年記念事業実行委員会・平成8年3月発行（P.21～31）
04603 5-2	宮城県	本吉町	<p>【災害名】昭和三陸地震津波</p> <p>【発生日時】昭和8年（1933年）3月3日</p> <p>【被災地】宮城県本吉郡本吉町（蔵内、二十一浜、大沢、大谷）</p> <p>【災害の概要】昭和三陸地震の津波被害 町内での波高は次のとおり 蔵内7.5m 二十一浜3.7m 大沢3.0m 大谷3.0m</p> <p>【教訓等】強い地震のために、明け方の2時半という熟眠時であったにもかかわらず、ほとんどの人目を覚まし、とっさに地震に備える体制をとりました。また、明治の津波から37年経過しておりますが、大人たちの間にはその時の苦い体験から、「地震があったら津波を警戒しろ」という教訓が身につけており、地震と同時に海岸に出て沖を警戒したり、消防団がいち早く鐘を鳴らして人々の避難を促したため、多くの人々の避難を可能にし、人命を救いました。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文（津波記念誌より）</li> <li>・写真（津波記念誌より）</li> </ul>	蒼浪の軌跡：本吉町三陸大津波100周年記念事業実行委員会・平成8年3月発行（P.38～53）
04606 0-1	宮城県	南三陸町	<p>【災害名】昭和8年三陸地震津波</p> <p>【発生日時】昭和8年（1933年）3月3日</p> <p>【被災地】宮城県南三陸町（当時歌津町、戸倉村）等</p> <p>【災害の概要】発生日午前2時30分30秒、継続時間5分の強震（志津川観測所報告）があって、地震後30分以上経過後、津波が襲来した。志津川湾の平均波高は2.9m（最高波高5.4m）で、死者87名（宮城県下315名）の犠牲があった。被災家屋は流失67戸、全半壊21戸で、負傷者40名であった。</p> <p>【教訓等】この地方では、「晴れた日には津波は来ない」「寒い時期の津波はない」「地震後30分たったら津波はない」と語り継がれていたが、昭和8年の津波は地震発生から約30分後に襲来している。そこで、この地震を教訓とし、町内13箇所（本吉郡全部で39箇所）に義捐金の一部で「地震があったら 津波の用心」を刻んだ記念碑を建立している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・記念碑全景をとらえた写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・志津川町誌Ⅱ「生活の歓」P.344～368</li> <li>・汐見（松原公園内）に建立されている記念碑の写真</li> </ul>
04606 0-2	宮城県	南三陸町	<p>【災害名】昭和35年チリ地震津波</p> <p>【発生日時】昭和35年（1960年）5月24日</p> <p>【被災地】宮城県南三陸町（当時志津川町、戸倉村）等</p> <p>【災害の概要】地球の裏側、南米チリ沖で発生した地震による津波被害。M（マグニチュード）9.5は観測史上最大である。当時気象庁は、地震及びハワイ諸島での災害について確認していたが、日本までの影響は予測できず、津波注意報・警報は発令されなかった。被害状況は、死者41名、負傷者500名、家屋流失319戸、家屋倒半壊あわせて1023戸（ほとんどが当時の志津川町）であった。</p> <p>【教訓等】昭和8年三陸地震津波の経験から「地震があったら津波の用心」と言われてきたが、津波は地震がなくても来ることがあり、その前兆としての異常な引潮が見られたことから、「異常な引潮 津波の用心」が地震津波に対する教訓に加えられた。また、これらを忘れないよう毎年5月24日に全町をあげて津波防災訓練を実施している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・記念碑の写真</li> <li>・被害状況写真：志津川町チリ地震津波災害30周年記念誌より</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・志津川町誌Ⅱ「生活の歓」P.344～368</li> <li>・志津川町チリ地震津波災害30周年記念誌</li> </ul>



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
052019-1	秋田県	秋田市	<p>【災害名】 俵屋火事</p> <p>【発生日時】 明治19年（1886）4月30日</p> <p>【被災地】 秋田県秋田市（当時秋田市、八橋村、寺内村）</p> <p>【災害の概要】 民家から出火後、強風により燃え広がり全市街を焼き尽くした翌5月1日午前5時に至ってようやく鎮火した。この火災で秋田市街53町、八橋、寺内村を含む民家3,554戸、寺社80、戸長役場5、小学校、電信分局、駅通出張所、国立銀行、巡查派出所、などの多くの施設を焼失し、死者17人、負傷者186人に及んだ。</p> <p>【教訓等】 田原家と亀谷両家の間から出火したことから通称「俵屋火事」と呼ばれるが、その原因についてははっきりしていない。「俵屋火事」は、秋田における空前の大災害で、発展途上にあった若き秋田に大打撃をあたえた。</p>	・文献資料	秋田市 秋田市史 第4巻 近代史Ⅰ 通史編 平成十六年三月三十一日発行 P237
052019-1	秋田県	秋田市	<p>【災害名】 平成18年豪雪</p> <p>【発生日時】 平成17年12月～平成18年2月</p> <p>【被災地】 秋田県秋田市</p> <p>【災害の概要】 平成17年12月に累積降雪量が226cm、平成18年1月は107cmとなった。このため1月にはJRやバスなどの公共交通機関が全面運休になるなど、市民生活に大きな影響をもたらした。</p> <p>【教訓等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成18年1月に秋田市雪害対策本部を設置し、一人暮らし老人など災害時要援護者宅の雪下ろし等に消防・消防団・全庁的にも職員が対応したほか、自衛隊への災害派遣を要請した。</li> <li>・各方面より除雪資機材の応援を経て、バス路線、幹線道路の除雪にあたった。</li> </ul>	文献	d. デジカメによる写真画像
052019-2	秋田県	秋田市	<p>【災害名】 台風十五号（洞爺丸台風）</p> <p>【発生日時】 昭和29年（1954）9月26日</p> <p>【被災地】 秋田県全域</p> <p>【災害の概要】 25日夜から26日かけて、九州・四国地方を荒らし、中国地方を横断して日本海に入り、午後3時ごろから午後5時頃にかけて秋田沖を通過、近來にない大きな被害を与えた。</p> <p>【教訓等】 秋田地方を荒らし廻った台風15号はさらに北上し、北海道函館港内において青函連絡船洞爺丸を沈没させ、400余名の死者を出すなど大惨事を起こしたことは広く知られているところである。</p>	・文献資料	秋田市 秋田市史 第5巻 近代史Ⅱ 通史編 平成十七年三月三十一日発行 P496
052019-3	秋田県	秋田市	<p>【災害名】</p> <p>【発生日時】 昭和四十九年の一月から二月にかけて</p> <p>【被災地】 秋田市</p> <p>【災害の概要】 1月の最深積雪量は96センチ、2月は117センチで明治以来の記録になった。短期間でドカ雪が降ったため、交通網の寸断など市民生活に大きく影響した。</p> <p>【教訓等】 秋田市豪雪対策本部を設置しバス路線や道路の確保、雪下ろし援助および励行、除雪機動力の強化を図り、雪によるダメージは最小限に留めることができ、これは市の施策のみならず、町内会や業者の一致団結によるところも大きく、49年4月に市は55の業者に感謝状を贈っている。</p>	・文献資料	秋田市 秋田市史 第四巻 近代史Ⅰ 通史編 平成十六年三月三十一日発行 P756
052043-1	秋田県	大館市	<p>【災害名】 大館市大火（御成町一丁目大火）</p> <p>【発生日時】 昭和30年5月3日 午後1時25分頃</p> <p>【被災地】 大館市字二本杉下</p> <p>【災害の概要】 昭和30年5月3日午後1時25分、大館市字二本杉下から出火、連日の乾燥と強風にあおられ一瞬にして火の海と化し、国鉄大館駅をはじめ、小坂線大館駅、工場、旅館、映画館住宅等を約2時間半で焼き尽くした。 焼失面積175,975㎡、焼失建物面積38,217㎡、焼失棟数 特殊建物121棟、住家・非住家387棟、罹災世帯264世帯、罹災人員1,226名、死者1名、負傷者・重傷者7名、軽傷者17名、損害710,571,577円</p> <p>【教訓等】 大火の教訓 1、常備消防基準の絶対確保のため消防車並びに人員の増 2、分遣所又は出張所の配置 3、指揮連絡不徹底による各車への無線施設 4、火災報知機設置 5、防火的建築の徹底強化 6、水利の拡充根本対策 7、異常時訓練の徹底と戦術の向上 8、防火帯及び防火区域の設定 9、都市計画の実施 10、広告板類、防火塗料の普及徹底</p>	・一部写真	

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
05204 3-2	秋田 県	大館 市	<p>【災害名】大館市大火</p> <p>【発生日時】昭和31年8月18日 午後11時45分頃</p> <p>【被災地】大館市宇新地</p> <p>【災害の概要】台風9号が尾を引く18日午後11時55分頃、東大館駅前付近から出火、おりからの強風に放射線状に燃え広がり、市の中心商店街の大町通りを全焼したほか、常盤木町、新町、中町、馬喰町、長倉町、南町など主要町内をほとんど焼き尽くした。燃えさかること約6時間半、焼失面積221,100㎡、焼失建物面積156,967.8㎡、焼失棟数 特殊建物48棟、住家692棟、非住家629棟、罹災世帯数770世帯、約4,253名が焼け出された。死者なし、負傷者・外傷69名、洗顔425名、損害4,022,041,950円</p> <p>【教訓等】大火の教訓 1、危険物貯蔵の確認予防査察及び取締の厳 2、水利強化の根本的対策 3、常設消防力の根本的対策 4、戦術訓練の消防力強化の対策 5、火災報知機の設置 6、防火帯区域の設定 7、火災予防並びに防火思想の徹底強化の再検討 8、火気取扱器具及び設備の消防許認可制の検討 9、木造マーケット類の建設敷地の検討 10、気象観測の強化</p>	・写真	
05204 3-3	秋田 県	大館 市	<p>【災害名】大館市大火（御成町二丁目大火）</p> <p>【発生日時】昭和43年10月12日 午前11時16分頃</p> <p>【被災地】大館市御成町二丁目</p> <p>【災害の概要】昭和43年10月12日 午前11時16分頃御成町二丁目から出火、西南西の風7mの強風にあおられ、火は密集地帯を一瞬にして猛火に包み、約3時間にわたって住家216棟、非住家74棟、計290棟を焼失、建物焼失面積79,425㎡を焼失、罹災世帯248世帯918人が焼け出された。損害1,203,268,000円</p> <p>【教訓等】大火の原因 1、風速が強かつ湿度が低かった。2、付近一帯は木材工場が連立し、木材可燃部物が大量に集積し、これに延焼し一気に拡大、かつ周辺一帯が木造家屋の密集包囲体形をなし、飛び火によって大火の素因になった。3、工場、商店が楯比し容積率が大きかったこと。なお、当大火地域内の建築物は99.9%が木造建物であった。4、当地区は国道7号線主要線に沿い、側面背面とも外周道路が狭隘で、かつ風下進入部署の道路がなく、消防活動がままにならなかった。</p>	・一部写真	
05214 1-1	秋田 県	にか ほ市	<p>【災害名】文化元年 象潟大地震</p> <p>【発生日時】1804年（文化元年）6月4日</p> <p>【被災地】秋田県にかほ市象潟町ほか</p> <p>【災害の概要】死者 366名 住家被害 7,726軒以上</p> <p>【教訓等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・倒壊した家屋から人々を救い出すことができたため、まさかり、のこぎり等を必ず用意しておくこと。</li> <li>・この地震の数年前に町の背後にそびえる鳥海山の噴火があったことから、噴火後は地震に用心する。</li> <li>・出水や流水が少しぬるみだしたり、「金気くさく」になったら、数日後にも地震がある。</li> </ul>	文献	象潟町史 通史編上 編集・発行 象潟町 平成14年3月31日発行
05368 6-1	秋田 県	大瀧 村	<p>【災害名】日本海中部地震</p> <p>【発生日時】昭和58年5月26日</p> <p>【被災地】大瀧村地内</p> <p>【災害の概要】秋田県沖でマグニチュード7.7震度5の地震が発生した。</p> <p>【教訓等】本村の地震による被害は村の生命線である堤防をはじめ農地、農業施設、村道にかつて経験したことのない甚大な被害を受け、植え付け直後の水田では、苗が浮き上がったり泥をかぶったりもした。</p>		
06000 3-1	山形 県		<p>【災害名】酒田大地震（庄内大地震）</p> <p>【発生日時】明治27年10月22日午後5時37分</p> <p>【被災地】酒田を中心とする最上川下流域</p> <p>【災害の概要】「酒田市史一下巻一」p.359～362参照</p> <p>【教訓等】丁度、夕食時刻に起こった大地震で、大火災が発生し1,747戸が全焼し、死者162名にものぼる大惨事となった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・絵画</li> <li>・写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・荘内新報 明治27年10月31日号</li> <li>・酒田市史 一下巻一 平成7年1月発行</li> <li>・市指定有形文化財 『生駒大飛筆 酒田震災実況図』『酒田大地震写真』酒田の文化財一第3集一 昭和57年2月発行</li> </ul>
06000 3-2	山形 県		<p>【災害名】山形北部大火</p> <p>【発生日時】明治44年5月8日～9日</p> <p>【被災地】山形市七日町、旅籠町、六日町、薬師町等11町</p> <p>【災害の概要】県庁、市役所、警察署等主要官庁を含め、1,353戸の焼失戸数となった。</p> <p>【教訓等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・山形市の大火災は、4、5月の発生が最も多い。この頃は雨量が少なく、最も乾燥している時期でもあり、強風も多い。</li> <li>・県庁舎等の公共建物の不燃焼構築、民間家屋の不燃質物屋根の奨励。</li> </ul>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山形県史 第四巻 (p.650～)</li> <li>・山形市史 下巻 近代編 (p.912～)</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
06201 4-1	山形県	山形市	<p>【災害名】蔵王温泉火災</p> <p>【発生日時】昭和58年(1983年)2月21日</p> <p>【被災地】山形市蔵王温泉</p> <p>【災害の概要】未明、旅館二軒の六棟が全焼し、宿泊中のスキー客や旅館従業員ら11名が死亡。死者は県内の火災史上最多。</p> <p>【教訓等】数日來の寒波で貯水槽のふたが凍りつき開けるのに手間取ったこと、温泉街の風上にあたる南西の強風が吹いていたこと、「適」マーク交付のホテルにも関わらず館内非常ベルに直結する火災感知器の誤作動の多発による感知器電源の遮断等、悪条件が重なったの惨事であった。この火災以降、「適」マークを受けている木造の旅館・ホテル約3,000軒を対象とした消防庁による防火・避難施設の管理・運用の総点検が実施された。</p>	市立図書館閲覧用資料	昭和58年2月21日夕刊以降の地元紙(山形新聞)および各社新聞
06202 2-1	山形県	米沢市	<p>【災害名】米沢大火</p> <p>【発生日時】大正6年5月22日、大正8年5月19日</p> <p>【被災地】(大正6年)米沢市大町、立町等の38カ町 (大正8年)米沢市門東町、南堀端町等の30カ町</p> <p>【災害の概要】(大正6年)焼失戸数2294戸、焼死者10名。税務署、警察署、郵便局、興譲小学校等を全焼。(大正8年)焼失戸数1071戸、焼死者1名。市役所、南置賜群役所、上杉神社、上杉伯爵邸等を全焼。</p> <p>【教訓等】米沢市の大火は4月、5月の乾燥した時期に多い。特に西あるいは西北からの強風の日には大火となった。この大火を契機に、消防組織の再編と消防装備の充実が図られ、不燃性用材屋根の奨励(屋根制限令の遵守)が行われた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> </ul>	著者：米沢市 タイトル：米沢市史 近代編 531P～560P 発行年：平成7年
06203 1-1	山形県	鶴岡市	<p>【災害名】新潟地震</p> <p>【発生日時】昭和39年6月16日</p> <p>【被災地】山形県鶴岡市</p> <p>【災害の概要】震源地：新潟県粟島南西約10km、深さ約40km マグニチュード：7.5 鶴岡では震度5(当時の観測)の地震を観測 加茂地区では津波2mの津波を観測</p> <p>【教訓等】鶴岡市全域で被害を受けたが、特に大山・西郷・上郷地区は地盤が悪いこともあり被害が大きかった。この地震により5名の方が亡くなり、京田地区では倒壊したブロック塀により園児3名が犠牲になった。鶴岡は地震による被害が少ない地域であることから、新潟地震の経験は貴重なもので人々に長く語り継がれている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	「新潟地震の記録(鶴岡市を中心として)」発行年：昭和40年3月 発行者：鶴岡市長 ※非売品
06203 1-2	山形県	鶴岡市	<p>【災害名】庄内沖地震(天保4年の羽前・佐渡地震)</p> <p>【発生日時】天保4年10月26日(1833年12月7日)</p> <p>【被災地】山形県</p> <p>【災害の概要】特に山形県と新潟県の県境において、地震と津波の被害を受け、津波は庄内地方沿岸をはじめ北海道沿岸をも襲ったとの記録がある。被害状況：(1)新潟県佐渡で津波などにより家屋の全半壊460家屋流出79戸 (2)山形県南部で水死38人、家屋の流失158戸、船の流出305艘</p> <p>【教訓等】10月26日昼八時半頃(午後4時頃)に大地震が発生した。地震の前に兆候があり、五ツ時(午前6時～7時)から塩が引き始め(日本海がカラになる珍事ありと記述有)、八ツ時(午後2時すぎ)に津波となって沿岸を襲った。(文献によると「七ツ時大地震」とも名づけられている。)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	「酒田新聞地震物語 湖翁」 「災害記 玄々堂叢書」
06204 9-1	山形県	酒田市	<p>【災害名】酒田大火</p> <p>【発生日時】昭和51年10月29日</p> <p>【被災地】酒田市内中心部(中町一丁目、中町二丁目、一番町、二番町、新井田町、相生町二丁目)</p> <p>【災害の概要】昭和51年10月29日夕刻酒田市内中心商店街にて発生した火災は、おりからの強風(北西風)にあおられ延焼、また火の粉が飛散、各所で飛び火による延焼着火が発生した。火災は29日夕刻の出火から翌早朝まで、およそ11時間にわたり燃え続け、22.5haを焼き尽くす大火となった。死者1名、負傷者1003名(重傷10名、軽傷993名) 罹災世帯及び人員 1023世帯 3300名 酒田市、山形県にて災害対策本部が設置された。</p> <p>【教訓等】酒田市は全国的にみても風の強い町であり、一度出火すると大火になることがしばしばだった。酒田大火当日も、発達した低気圧により強風に見舞われていた。強風により飛散した火の粉は、火の玉の吹雪のようであったという。出火場所の東、新井田川を最後の防ぎよ線とし、直上放水、飛び火の警戒を消防隊、住民らが必要に行い、ようやく火災はくい止められた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	酒田市「酒田市大火の記録と復興への道」昭和53年発行

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
06364 9-1	山形県	真室川町	<p>【災害名】真室川災害（通称：86災害（ハボクスガイ））</p> <p>【発生日時】昭和50年（1975年）8月6日</p> <p>【被災地】山形県真室川町</p> <p>【災害の概要】8月6日未明より降り続いた強い雨は、鳥海山系南側に当たる当町の小河川をいたる所で氾濫させ、土砂を含む沢水が激流となって、当町を縦断している真室川・小又川に流れ込み、川沿いの家、農地を押し流した。死者3名、重傷3名、軽傷24名。昭和51年激特事業の地域指定を全国で初めて適用される。</p> <p>【教訓等】従来の防災訓練を8月6日に実施し、この日を町の「災害の日」と位置づけ、町民を含めた訓練を実施することにより、被災の教訓を後世に語り継いでいる。また、全戸にハザードマップを配布し、避難場所などを確認している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文（碑文のテキスト）</li> <li>・写真（石碑、災害写真）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・真室川町史 平成9年版</li> <li>・碑文（真室川公園前「防災記念碑文」）</li> <li>・写真（水害の状況写真）</li> </ul>
06403 3-1	山形県	飯豊町	<p>【災害名】羽越水害</p> <p>【発生日時】昭和42年8月27日</p> <p>【被災地】飯豊町内全域（山形県中南部一帯）</p> <p>【災害の概要】8月28日の早朝から降り出した雨は、中津川の大阪集落等では、1時間に50ミリを越す記録的な集中豪雨となった。</p> <p>【教訓等】この洪水は、排水機能以上の降雨による低地への浸水に加えて、局地的な集中豪雨により三間峡谷に山崩れや土石流が生じ、いわゆる鉄砲水が発生し下流の被害を大きくした。飯豊山系の白川や荒川の流域で発生した水害の記録としては、過去の大洪水を上回る雨量と見られ、史上空前の「昭和の大水」となった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>「飯豊町史 下巻」飯豊町史編集委員会 平成7年発行 P848～</p> <p>「白川土地改良区史」白川土地改良区史編集委員会 昭和63年発行 P185～</p>
06403 3-2	山形県	飯豊町	<p>【災害名】三八豪雪</p> <p>【発生日時】昭和38年の年末から</p> <p>【被災地】飯豊町内全域（西置賜地方）</p> <p>【災害の概要】日本海中南部の冬型の寒気団は、年末から連日の降雪をもたらした。大雪となった。</p> <p>【教訓等】38年の年末から翌年の1月中旬までの連日の降雪により大雪となった。特に県下では西置賜地方の被害が大きく「三八豪雪」と呼ばれ、テレビで大々的に放映された。中でも、交通機能がマヒし、中津川地区や隣接の小国町は陸の孤島となり、1月30日から2月3日まで神町から自衛隊が出動し、萩生と手ノ子を基地にヘリコプターによる食料品等の空輸が行われた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>「飯豊町史 下巻」飯豊町史編集委員会 平成7年発行 P843～</p>
06428 9-1	山形県	庄内町	<p>【災害名】両羽地震（通称 酒田大地震又は両羽大地震）</p> <p>【発生日時】明治27年（1894年）10月22日</p> <p>【被災地】山形県庄内町（当時 余目村）</p> <p>【災害の概要】酒田沖で発生した地震（マグニチュード7.3）</p> <p>【教訓等】午後5時40分頃、突然雷鳴如き大音響と共に猛烈な震動の襲来。家屋の倒壊多数。そのいずれもが北に向かって倒壊。震動時間は10分余りにわたると思われた。その後5分、10分、20分位を隔てて、砲声如き音と共に地動を感じた。地震発生と共に大地には無数の亀裂が走り、地中より泥水が噴出し、噴水のごとく丈余にわたるものも見られた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>余目町史（下巻） 平成2年5月30日発行</p>
07000 9-1	福島県		<p>【災害名】磐梯山噴火</p> <p>【発生日時】明治21年(1888年)7月15日</p> <p>【被災地】現在の北塩原村、猪苗代町、磐梯町 桧原・雄子沢・細野・秋元原の各集落は火山灰で埋没</p> <p>【災害の概要】大磐梯と小磐梯が爆発、数回の爆発により約300億トンの岩石・土砂が吹っ飛び、当時の磐瀬村・大塩村など5か村11集落が火山灰を被り、桧原川・小野川・天倉川・中津川がせき止められた。死者は470名を超え、埋没または倒壊した住宅は166戸となった。（災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照）</p> <p>【教訓等】噴火の20日前頃から時々山鳴りや地震があり、その回数・頻度の多少が繰り返される現象があり、前日には地鳴りと地震が頻発し、気温が異常に高く蒸し暑かった。温泉の客は帰るものも多くいた。しかし、住民の多くは数百年来住み続けてきたことから、ほとんど危険を感じず避難せずにいる人が多かったという。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> <li>・その他</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明治期福島県庁文書「明治21年磐梯山噴火関係書類」6冊</li> <li>・福島県消防防災課「福島県災害史」昭和47年</li> <li>・福島県「福島県史」</li> <li>・磐梯山噴火の写真（福島県歴史資料館蔵）</li> <li>・天然記念物「美祢の大石」</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
07000 9-2	福島県		<p>【災害名】61. 8. 5水害</p> <p>【発生日時】昭和61年(1986年)8月4～5日</p> <p>【被災地】主に中通り、浜通り 特に福島市や郡山市など阿武隈川流域</p> <p>【災害の概要】台風10号から変わった温帯低気圧により、中通りと浜通りで200ミリ～300ミリ、多いところで400ミリを越す豪雨となったため、阿武隈川流域を中心に広範囲にわたって浸水し、死者3名、負傷者8名、浸水家屋14,000棟以上などの大きな被害をもたらした。(災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照)</p> <p>【教訓等】予想外の降雨量により河川が急激に増水したことから、広範囲にわたって浸水被害が生じ、多くの住民が孤立したが、消防等の救助活動により人的被害は食い止められた。河川情報の収集は現地調査中心だったが、災害規模の拡大に伴う交通網の寸断等により情報収集に支障をきたした。この水害を受けて、各地で河川改修が進められたほか、河川情報の収集伝達手段として河川流域情報システムの整備が進められた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> </ul>	福島県「61. 8. 5集中豪雨水害の記録」昭和62年 ・写真
07000 9-3	福島県		<p>【災害名】平成元年台風13号水害</p> <p>【発生日時】平成元年(1989年)8月5日～7日</p> <p>【被災地】主に中通り、浜通り、猪苗代町</p> <p>【災害の概要】台風13号の通過により、阿武隈山系や吾妻山系で総雨量が200～400ミリの豪雨となり、猪苗代町で車3台が川に転落して11人の死者・行方不明者が生じるなど、中通り、浜通り、猪苗代町に大きな被害をもたらした。(災害・被害の詳細については、添付資料1-3を参照)</p> <p>【教訓等】防災行政無線が気象情報の伝達や災害情報の収集伝達等で大きな役割を果たしたが、通信手段が音声に限定されていたために情報の収集伝達に限界が生じた。平成2年度以降、防災関係機関を結ぶ防災FAXや河川情報を提供する河川流域情報システム等の整備を行い、情報収集伝達体制を強化した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福島県：台風13号による水害の記録、平成2年</li> <li>・写真</li> </ul>
07000 9-4	福島県		<p>【災害名】平成10年8月末水害</p> <p>【発生日時】平成10年(1998年)8月26日～31日</p> <p>【被災地】西郷村、白河市など中通り中部・南部</p> <p>【災害の概要】8月26日から31日にかけて断続的に大雨が降り続き、特に中通り南部で記録的な豪雨となった。この豪雨により西郷村の社会福祉施設「太陽の国・からまつ荘」で土砂崩れのため5人が死亡するなど、中通り南部を中心に大きな被害をもたらした。(災害・被害の詳細については、添付資料1-4を参照)</p> <p>【教訓等】社会福祉施設における防災対策や、在宅の高齢者等に対する情報伝達及び避難体制など、災害時要援護者に対する災害予防・応急対策の必要性が浮き彫りになった。また、被災地では多数のボランティアが活躍したが、地元における理解及び受入体制は十分ではなかった。水害を受けて地域防災計画の修正等を行い、災害時要援護者対策やボランティア受入体制などの強化を図った。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福島県：平成10年8月末豪雨による災害の記録、平成11年</li> <li>・写真</li> </ul>
07203 6-2	福島県	郡山市	<p>【災害名】磐梯山の噴火</p> <p>【発生日時】明治21(1888)年4月15日</p> <p>【被災地】福島県耶麻郡等</p> <p>【災害の概要】噴火では、小磐梯の山体が吹き飛ばされ、明治以降では最大規模の477人の犠牲者を出した火山災害。</p> <p>【教訓等】現在の郡山市湖南町赤津に住んでいた幾太郎という青年が、磐梯山の噴火を予知した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>タイトル：『郡山の伝え語り』</p> <p>著者：郡山市教育委員会 発行年：昭和63年2月22日 242頁～245頁</p>
07204 4-6	福島県	いわき市	<p>【災害名】津波</p> <p>【発生日時】1847年(弘化4年)6月17日午後7時頃</p> <p>【被災地】水戸の平磯浜から磐城四倉浜にかけて</p> <p>【災害の概要】漁船多数破損、水主800人溺死</p> <p>【教訓等】天保・弘化・安政にわたる異変を詳細に綴る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>「いわき市史」第2巻 昭和57年 小野佳秀</p> <p>「小名浜変災記」小名浜字中明神町 佐川竹雄蔵 明治大学蔵</p>
07204 4-7	福島県	いわき市	<p>【災害名】雨</p> <p>【発生日時】1861年(文久元年)10月4/57日</p> <p>【被災地】いわき市内</p> <p>【災害の概要】大水が出て稲流出</p> <p>【教訓等】天保・弘化・安政にわたる異変を詳細に綴る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>「いわき市史」第2巻 昭和57年 小野佳秀</p> <p>「小名浜変災記」小名浜字中明神町 佐川竹雄蔵 明治大学蔵</p>
07204 4-8	福島県	いわき市	<p>【災害名】干ばつ</p> <p>【発生日時】1863年(文久3年)3月～5月</p> <p>【被災地】いわき市内</p> <p>【災害の概要】日照りによる植え付け不能</p> <p>【教訓等】天保・弘化・安政にわたる異変を詳細に綴る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>「いわき市史」第2巻 昭和57年 小野佳秀</p> <p>「小名浜変災記」小名浜字中明神町 佐川竹雄蔵 明治大学蔵</p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
07211 7-1	福島県	田村市	<p>【災害名】常葉大火</p> <p>【発生日時】昭和31年4月17日</p> <p>【被災地】福島県田村市（当時：常葉町）</p> <p>【災害の概要】・旧田村郡常葉町の大火</p> <p>【教訓等】昭和31年4月15日に朝鮮半島付近で発達した低気圧が、16日から17日にかけて日本海を発達しながら東北東のち北東へ進み全国的に南風が強く、気温が上がって乾燥した。福島県でも風速30メートルという強風の中、県下各地で14件にのぼる火災が発生、中でも常葉町の大火は戦後最大のものだった。町は一面焼け野原となり、町の中心街250余戸、約600棟が全焼。損害5億6千7百万にのぼった。</p>	・フィルム	インターネット検索（民友ニュース：常葉大火）
07211 7-2	福島県	田村市	<p>【災害名】林野火災（上移地内）</p> <p>【発生日時】平成8年4月15日</p> <p>【被災地】福島県田村市（当時：船引町）</p> <p>【災害の概要】大規模山林火災</p> <p>【教訓等】たき火の不始末により延焼。国有林80ヘクタール・民有林20ヘクタール、計100ヘクタール消失した。東京消防庁・自衛隊のヘリを要請し消火活動及び地元消防団、近隣市町村の消防団の懸命な消火活動により、約6時間半後に鎮火となった。</p>	・写真	
07303 2-1	福島県	国見町	<p>【災害名】1978年宮城県沖地震</p> <p>【発生日時】1978年6月12日</p> <p>【被災地】国見町全域</p> <p>【災害の概要】震度5、マグニチュード7.5の地震町内において、死者1名重軽傷22名の被害</p> <p>【教訓等】福島県最大の被害を受けた地震であり、その後この時の体験を忘れることなく、大きな地震の度に宮城県沖地震と比較することとなった。</p>	・文献資料	
07303 2-2	福島県	国見町	<p>【災害名】昭和61年8・5水害</p> <p>【発生日時】1986年8月4日～5日</p> <p>【被災地】国見町大字徳江、川内地内</p> <p>【災害の概要】国見町における記録的な大水害床上浸水16戸、床下浸水4戸</p> <p>【教訓等】阿武隈川において、水位の上昇が生じる度に昭和61年当時の状況を参考にして、水防活動を行っている。</p>	・文献資料	
07304 1-1	福島県	梁川町	<p>【災害名】8・5水害</p> <p>【発生日時】昭和61年8月5日</p> <p>【被災地】梁川町（字右城町、町裏、大町一丁目・二丁目、西塩野川、東塩野川、中町、北本町、南本町、山城館、白川田）（大字向川原、舟生、五十沢）</p> <p>【災害の概要】台風10号からくずれた温帯的圧による大雨により日最大192mm時間最大23mmを記録し、阿武隈川、広瀬川、塩野川、伝樋川の堤防が決壊した災害</p> <p>【教訓等】当時、戦後最大規模の災害と言われ、当町の被害も甚大であった。このような、大災害になると、機動力はマヒし、情報は混乱し、孤立する場所も多かったが、防災無線のおかげで、消防団員の移動がスムーズに運び、被害の拡大を防ぐことができた。このことから、携帯電話が普及されている現在においても、圏外の地域がある梁川町においては防災無線の必要性を重視している。また、一人暮らしや、寝たきり老人世帯を把握し、有事の際に適切な対応をしている。さらに、災害時の機動力を高めるため、班体制をとり、役場職員全員を防災活動要綱を定め配置している。</p>	・写真	平成2年度水防懇談会・昭和61年8月5日洪水を語る
07342 3-2	福島県	鏡石町	<p>【災害名】笠石部落の大火</p> <p>【発生日時】昭和22年4月17日 午後2時50分</p> <p>【被災地】鏡石町中町</p> <p>【災害の概要】笠石下地区内西側のわら小屋から子供の火遊びが原因で発生。69戸が焼失し、447名の罹災者が出た。この大火で3名の重傷者と20名の怪我人が出た。（災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照）</p> <p>【教訓等】この大火が発生した時期に、現在でも地元消防団が大火の教訓を生かし、地区内の消防設備（消火栓等）の点検作業を行っている。</p>	・文献資料	<p>・鏡石町史 第1巻 通史編 編集・発行：鏡石町 発行年：昭和60年3月25日</p> <p>・鏡石町史 第3巻 資料編2 編集・発行：鏡石町 発行年：昭和58年12月25日</p>
07361 0-1	福島県	田島町	<p>【災害名】台風災害</p> <p>【発生日時】昭和33年9月</p> <p>【被災地】田島町大字田島字鎌倉崎等</p> <p>【災害の概要】昭和33年9月台風22号・23号と相次いで襲った。</p> <p>【教訓等】災害時における庁内連絡体制及び防災関係機関との連絡体制の見直し、消防団の組織強化</p>	・文献資料（古文書、書簡等）	福島県災害誌田島町「広報たじま」

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
07364 4-1	福島県	檜枝岐村	<p>【災害名】昭和57年豪雨                      【発生日時】昭和57年8月2日                      【被災地】檜枝岐村                      【災害の概要】台風10号の影響で田代山観測所で200mmを超える降雨を記録し檜枝岐川は、警戒水位を突破し村内各地の堤防や道路が欠壊し支流は土石流や土砂流出が相次ぎ、大規模な土石流によって旅館1件破壊された。                      【教訓等】災害の1年前舟岐川上流に砂防ダムが完成していたため、村は、救われたと語り継がれている。この砂防ダムは30万立方メートルの貯砂容量をもっていたが一夜の一回の洪水で満砂状態になっていた。最近の研究で砂防ダムが無い場合を想定しシミュレーションした結果村の50%程度が浸水していたと予想される。</p>	・写真	舟岐川流域砂防ダム効果検討報告書 福島県土木部 昭和61年2月
07445 4-1	福島県	金山町	<p>【災害名】44年水害                      【発生日時】昭和44年8月12日                      【被災地】町内全域 特に山入地区（山入川流域）                      【災害の概要】奥会津一帯に集中豪雨が降り、被害総額は101億円に達した。町内では死者8名、全壊家屋22戸、半壊14戸、道路・橋梁・鉄道・通信施設は寸断された。町内の被害額は36億円余にのぼった。                      【教訓等】・河川の氾濫だけでなく、山崩れ、土石流による被害が大きかった。・地形・地質等を人為をもって改変することは不可能であるので、自然に適應し、利用するように対処し、開発にあたっては自然環境の破壊につながるようなものは避けて、自然保護に十分留意する。・河川の形態にどう対処して生活するか。・災害の発生を未然に防止する積極的な予防措置が重要。</p>	・文献資料 ・写真（広報担当課などで保存）	・金山町史（昭和51年） ・広報かねやま（昭和44年8・9月号）
07481 1-2	福島県	棚倉町	<p>【災害名】棚倉大火                      【発生日時】昭和15年3月28日                      【被災地】字古町、字鉄炮町、字千駄櫃、大字流字中豊                      【災害の概要】昭和15年3月28日午後1時30分ごろ、古町中心部より出火し、折からの強風にあおられ、古町はもとより鉄炮町、千駄櫃、中豊など延焼した。町内の消防団はもとより郡内、白河市、石川町などから約4千人団員が出動した。                      【教訓等】毎年3月28日を「棚倉大火記念日」と称し、町内神社で町、町議会、行政区長、関係消防団員などの関係者で無火災祈願をおこなっている。</p>	・文献資料	棚倉町史 第1巻 P996～999 昭和55年11月25日発行
07483 7-1	福島県	塙町	<p>【災害名】塙町・鮫川村林野火災                      【発生日時】昭和62年4月24日14:35頃                      【被災地】塙町大字東河内字権現地内及び鮫川村江流田地内                      【災害の概要】塙町大字東河内字権現地内で発生した林野火災は発見・通報の遅れと異常乾燥から鮫川村江流田地区の山林に延焼拡大した。消防本部、消防団の消火活動と災害派遣の要請を受けた自衛隊の空中消火活動により翌25日鎮火した。焼損面積204.8ha、損害額43,328万円                      【教訓等】発見・通報の遅れと、異常乾燥、強風の悪条件が重なった火災である。夜間の活動と広範囲のため状況把握に手間取り消火作戦に苦慮した。地形が複雑で道路が少なく夜間のため消火活動が困難を極めた。</p>	・その他（町役場で保存、昭和62年山林火災関係（東河内地内）綴）	昭和62年山林火災関係（東河内地内）綴
07504 3-1	福島県	浅川町	<p>【災害名】浅川の大火                      【発生日時】明治14年3月29日                      【被災地】浅川字荒町地内                      【災害の概要】午後11時頃荒町地内の馬屋から出火73戸焼失                      【教訓等】浅川町では、現在に至るまで大きな災害といえ、明治に起きた、「浅川の大火」と伝えられています。大火のため負傷者は出たが、幸いにも死者は出なかった。当時の様子は、浅川町史に詳しく掲載されています。</p>	・文献資料	浅川町史 第1巻 通史・各論編 平成11年3月19日発行
08202 3-1	茨城県	日立市	<p>【災害名】カスリーン台風                      【発生日時】昭和22年9月15日、16日                      【被災地】日立市宮田町大雄院日立鉱山社宅                      【災害の概要】被害戸数264戸 罹災者数1357人 死者28人                      【教訓等】秋雨前線の停滞と台風による集中豪雨が重なり、深夜に発生した土石流により、本山通り社宅が被害を受け、その後宮田川が氾濫し、日立鉱山社宅を中心に被害が大きくなった。</p>	・文献資料	①日立の災害記録 日立市生活安全課（H11） ②茨城の気象百年 水戸地方気象台 ③日立鉱山史 日鉱金属 ④キャスリーン台風の惨禍 日立市史（S54）
08202 3-2	茨城県	日立市	<p>【災害名】チリ地震津波                      【発生日時】昭和36年5月                      【被災地】日立市会瀬町、久慈浜                      【災害の概要】被害：人的被害、家屋被害なし 会瀬港：曳船（約1トン）1隻大破、モーター船4隻小破、テンマ船6隻小破 久慈港：漁船2隻大破、ドラム缶流出、魚のカステ（肥料用）180貫流失。                      【教訓等】会瀬港：津波の第1波は午前4時少し前。第3、4波が最大（高さ3m内外）、波の周期は40～50分位。久慈港：津波の第1波は午前4時少し前。5時30分までに4回の襲来があった。5回目は6時15分、6回目が8時20分。第4波、第5波が最大3m。</p>	・文献資料	①日立の災害記録 日立市生活安全課（H11） ②チリ地震津波速報 水戸地方気象台（S35.5.27）

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
082023-3	茨城県	日立市	<p>【災害名】竜巻</p> <p>【発生日時】平成11年10月27日</p> <p>【被災地】十王町（伊師浜・伊師）、高萩市島名、秋山</p> <p>【災害の概要】被害状況としては、家屋屋根の破損、倒木、ビニールハウス倒壊、KDDI衛星通信所の記録（瞬間風速35m/s 21時18分）。この竜巻は、県北部海上で発生し、十王町鵜の岬に上陸後、高萩市秋山に到達するまで約4km北北西の方向へ進んだ。陸上への到達は20時50分頃で寿命は30分程度。竜巻の幅：40～60m。最大瞬間風速33～50m/sと推定。</p> <p>【教訓等】伊師浜地区の人々の印象 ・27日20時頃から雷と風雨が強く21時前後から21時40分の間、地鳴りのような音、瓦が落ちる音がした。・風が強いときは一瞬。雨が一時休んだ。・強いときには家の畳が持ち上がったように感じた。</p>	・文献資料	竜巻に係る調査報告書 水戸地方気象台（H12）
082023-4	茨城県	日立市	<p>【災害名】助川山山林火災</p> <p>【発生日時】平成3年3月7日</p> <p>【被災地】助川山国有林</p> <p>【災害の概要】日立の災害記録参照</p> <p>【教訓等】日立の災害記録参照</p>	・文献資料	①日立の災害記録 日立市生活安全課（H12）
082171-1	茨城県	取手市	<p>【災害名】昭和25年 茨城県旧高須村大留地先小貝川堤防決壊</p> <p>【発生日時】昭和25年8月7日</p> <p>【被災地】茨城県 旧高須村、相馬町、六郷村、山王村、吉田村、井野村、小文間村、寺原村</p> <p>【災害の概要】昭和25年8月4日夜から5日未明にかけて静岡県東部の駿河湾から上陸した台風の通過に伴う大雨により河川増水が生じ、それにより被災地を流域とする「小貝川」右岸堤防が決壊し、濁流が襲いかかる。</p> <p>【教訓等】《決壊の前兆と教訓》 決壊前日、決壊し始めた地点より10mくらい離れた溝から、ごろん、ごろん、と水が漏れていた。それを発見したものは、迷った末に、関係者に告げずに去った。同日の宵のうち、「土手の近くの田んぼから水が溢れているぞ」と注意する者がいたので、複数の水防団員が確認に行っている。こぼん、こぼん、と水が噴き出ており、もりん、もりん、もりもりと水が膨らんでいた。田の中の方なので、工事するわけにもいかないからと、そのまま土手に戻ってしまった。堤防の底を通って水が漏れていたのである。そのため、漏水口が広がって、堤防の下側から決壊に至ったと推定される。もし、この漏水を徹底して食い止めていたならば、あるいは、大水害を未然に防止できていたのかもしれない。「土手（堤防のこと）の下を見る」、長年、小貝川の満水と闘い、昭和25年の苦い経験を踏まえた古老たちの言葉である。</p>	・文献資料	<p>・著者（編纂）：旧藤代町史民俗調査委員会 タイトル：旧藤代町史「暮らし編」第三節 昭和25年の水害 発行年：平成17年2月25日</p> <p>・著者（編纂）：旧取手市史編さん委員会 タイトル：旧取手市史余録「第六号」小貝川決壊時体験者紙上録音 発行年：昭和59年3月1日</p>
082244-1	茨城県	守谷市	<p>【災害名】台風7号</p> <p>【発生日時】昭和34年8月14日</p> <p>【被災地】茨城県守谷市</p> <p>【災害の概要】台風7号が去った後、利根川が増水し溢流堤を越えて、西板戸井地区に流入</p> <p>【教訓等】全長280mにおよぶ溢流堤のうち223mにわたって決壊した。このため、西大木地区の住民は全員が避難。また、大柏下から高野下の囲繞堤も決壊し、高野地区9戸が床下浸水した。</p>	・文献資料	守谷町町村制施行100周年記念誌
085642-1	茨城県	利根町	<p>【災害名】安政江戸地震</p> <p>【発生日時】安政2年（1855年）10月2日</p> <p>【被災地】江戸付近を震源の地震で、茨城県南部にも影響</p> <p>【災害の概要】マグニチュード6.9、本町の推定震度6 布川地区で「破損家あり」とされている。（災害・被害の詳細については、添付資料1-1参照）</p> <p>【教訓等】</p>	・その他（利根町地域防災計画の災害履歴に掲載）	平成11年2月利根町地域防災計画（地震対策編）P.16
085642-4	茨城県	利根町	<p>【災害名】関東大地震</p> <p>【発生日時】大正12年（1923年）9月1日</p> <p>【被災地】関東南部を震源の地震で、茨城県内にも影響</p> <p>【災害の概要】マグニチュード7.9、本町の推定震度5 本町でも木造建物の全壊率は1%に達している。（災害・被害の詳細については、添付資料1-1参照）</p> <p>【教訓等】</p>	・その他（利根町地域防災計画の災害履歴に掲載）	平成11年2月利根町地域防災計画（地震対策編）P.16



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
09000 0-4	栃木 県		<p>【災害名】天和3年5月日光地震                      【発生日時】天和3年(1683年)5月23・24日、9月1日                      【被災地】栃木県那須郡塩原町、塩谷郡藤原町、栗山村、日光市、今市市                      【災害の概要】5月23・24日・日光東照宮の石塔、石燈籠が倒壊、町並みの石垣が崩壊・天狗堂の仏岩が崩壊、赤薙山北斜面が崩壊 9月1日・日光東照宮の石塔、石燈籠が倒壊、堂塔の破損・戸板山(現葛老山)の崩壊により五十里湖が出現し、川沿いの集落が水没・地震の原因である関谷活断層系の断層崖沿いにある関谷宿(現塩原町古屋敷地区)の町並みに被害発生。宿の移転(現塩原町関谷)と塩原街道の道筋変更                      【教訓等】現関谷地区の住民に「かつて、古屋敷(断層崖沿いの地区、旧関谷宿)に居住しており、江戸時代の初め頃、現在の地に移った」という伝承が残る(旧関谷宿及び関谷断層の活動時期を把握する発掘調査が実施され、断層の活動時期は11世紀以降と判明、古屋敷地区では建物跡等が確認された)</p>	・文献資料	<p>・寒川旭・室井利一郎「街道・宿場の移転と地震」『考古学と自然科学』日本文化財科学会誌第21号, 1989(別添資料1-1)                      ・寒川旭「近世の地震とその痕跡—都市・村落研究の基礎資料として—『歴史の中の都市と村落社会』, 1994(別添資料1-2)                      ・寒川旭「古屋敷遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』25, 2003(別添資料1-3)</p>
09000 0-5	栃木 県		<p>【災害名】天和3年9月日光地震                      【発生日時】天和3年(1683年)9月1日 享保8年(1723年)                      【被災地】栃木県今市市                      【災害の概要】・天和3年9月1日の地震により河川がせき止められて出現した五十里湖が享保8年に決壊、下流域に水害が発生                      【教訓等】「民話 おしんぼ名主」五十里湖の決壊を恐れた各村の名主は、早馬により決壊のおそれを連絡することとしていた。享保8年の決壊の際、某村の名主が連絡を怠ったため、下流域の村での被害が拡大した。その名主をはじめ一家の者は凄まじい濁流を見て、驚きのあまり声を発しなくなってしまった。</p>	・文献資料	「杉並木物語」編集委員会『杉並木物語』今市市教育委員会, 1993(別添資料1-4)
09000 0-6	栃木 県		<p>【災害名】今市地震                      【発生日時】昭和24年(1949年)12月26日                      【被災地】栃木県今市市                      【災害の概要】・家屋倒壊、山崩れ、被害総額31億円                      【教訓等】「地震坂」例幣使街道では、杉並木ごと地表が移動して坂道状になった箇所があり、「地震坂」と呼称されている。</p>	・文献資料	「杉並木物語」編集委員会『杉並木物語』今市市教育委員会, 1993(別添資料1-4)
09000 0-7	栃木 県		<p>【災害名】享保8年日光地震(鬼怒川の水害)                      【発生日時】享保8年(1723年)                      【被災地】栃木県今市市                      【災害の概要】日光地震により形成された五十里湖が決壊したことによる水害                      【教訓等】「寄進碑」杉並木を植栽し東照宮に寄進した松平正綱の偉業を顕彰するため二男正信が建立した。そのうち大桑の碑は鬼怒川の洪水により二度流失しており、うち一度は五十里湖の決壊によるものとされている。</p>	・文献資料	<p>・「杉並木物語」編集委員会『杉並木物語』今市市教育委員会(1993)(別添資料1-4)                      ・下野新聞社『日光杉並木』下野新聞社, 1994(別添資料1-5)</p>
09201 1-52	栃木 県	宇都 宮市	<p>【災害名】キャサリン台風                      【発生日時】1947(昭和22)年9月15日                      【被災地】                      【災害の概要】15日夜半には降雨量214.9ミリに達し、田川・釜川・新川など市内の河川が氾濫、市内下町一帯が水びたしとなり、千手町まで増水                      【教訓等】</p>	・文献資料	<p>・宇都宮市史                      ・写真でつづる宇都宮百年</p>
09201 1-53	栃木 県	宇都 宮市	<p>【災害名】アイオン台風                      【発生日時】1948(昭和23)年9月14日                      【被災地】                      【災害の概要】降雨量は165.4ミリに達し釜川、田川増水                      【教訓等】</p>	・文献資料	<p>・宇都宮市史                      ・写真でつづる宇都宮百年</p>
09201 1-54	栃木 県	宇都 宮市	<p>【災害名】キティ台風                      【発生日時】1949(昭和24)年8月31日                      【被災地】                      【災害の概要】最大瞬間風速28.3mを観測                      【教訓等】</p>	・文献資料	<p>・宇都宮市史                      ・写真でつづる宇都宮百年</p>
09202 9-1	栃木 県	足利 市	<p>【災害名】カスリーン台風                      【発生日時】昭和22年(1947年)9月15日                      【被災地】栃木県足利市                      【災害の概要】キャサリン台風の襲来により、渡良瀬川・袋川の堤防が決壊し、濁流は市街を湖沼と化した。(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)                      【教訓等】</p>	<p>・文献資料                      ・モニュメント・水位表示の画像2点</p>	<p>・近代足利市史(栃木県足利市第二巻通史編 S53.1 第四巻史料編 S50.10)                      ・モニュメント 市街地における水位表示(国土交通省渡良瀬川河川事務所 設置)</p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
092118-1	栃木県	矢板市	<p>【災害名】 箒川鉄橋の列車転覆事故</p> <p>【発生日時】 明治23年10月7日</p> <p>【被災地】 矢板市・大田原市境の箒川</p> <p>【災害の概要】 台風の影響による大風被害</p> <p>【教訓等】 地形上常に北西の風が吹き抜ける場所であり、しかも、折からの台風による大風を軽視して運行したことが大惨事を招いたといわれている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> </ul>	「ふるさと矢板のあゆみ」平成元年3月25日発行
092134-1	栃木県	那須塩原市	<p>【災害名】 那須開墾社の季節風による大風被害</p> <p>【発生日時】 明治20年(1887)12月12～13日</p> <p>【被災地】 那須塩原市(当時那須野村、後の西那須野村)</p> <p>【災害の概要】 この地方では、冬から春先にかけて北よりの季節風がふき、時には大きな被害をもたらした。その中で、記録によって被害等の状況がわかるのが、明治20年の大風であった。当時の那須西原では原野の開拓が始まったばかりで、季節風によって入植した移住人の家などがたびたび壊されていた。その中でも、明治20年の強い季節風による被害は相当なものであった。</p> <p>【教訓等】 季節風を防ぐために、古くからこの地方では防風林が発達していた。しかし、開拓地では植林をしても風を防げるほど成長するのに時間がかかる。そこで、開拓地に移住してきた人々は、土手を築いて風を防いでいた。この防風用の土手は、現在も残っており開拓の歴史を物語る貴重な文化遺産となっている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西那須野古文書研究会編『那須開墾社農業日誌』平成元年発行</li> <li>・西那須野町史編さん委員会『西那須野町の自然』平成3年発行</li> </ul>
092134-2	栃木県	那須塩原市	<p>【災害名】 蛇尾川(さびがわ)の洪水</p> <p>【発生日時】 寛文11年(1671)～昭和41年(1966)</p> <p>【被災地】 那須塩原市藁沼、高林、横林～西沢沢付近</p> <p>【災害の概要】 蛇尾川の中流部は、ふだん流水がないが(伏流する)、大雨が降ると大量の水が流れたたびたび氾濫をひきおこした。</p> <p>【教訓等】 西沢沢やその上流部で氾濫した蛇尾水は、井口・槻沢・関根・東関根方面に流れた。そのため、槻沢にはかつて洪水よけの土手があり、関根にはかつてもっこ・かます・俵・かけやなどを入れた水防小屋があったといわれている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	西那須野町史編さん委員会『西那須野町の自然』平成3年発行
092134-3	栃木県	那須塩原市	<p>【災害名】 那須開墾社内の降雹被害</p> <p>【発生日時】 明治24年(1891)7月15日</p> <p>【被災地】 那須塩原市一区町付近</p> <p>【災害の概要】 那須開墾社の「農業日誌」に以下のようにある。 「晴、午後大雨雹ヲ交へ降ル(中略)第一区雹災日光新道南ニ限り、蕎麦皆無、大豆陸穂其他八分通り見認ム(中略)雹大中小ト区分シ(大式百五匁)(中百式拾目)小ヲ交へ河原ノ如シ」205匁は769g、120匁は450gで、降った雹がいかにかがわかる。</p> <p>【教訓等】 この被害は郡役所に届け出、10日後に郡役所から救助金が出された。被害届が出されたこともあり、資料によって被害面積が詳細に把握できる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・那須開墾社関係文書</li> <li>・西那須野町史編さん委員会『西那須野町の自然』平成3年発行</li> </ul>
093661-1	栃木県	藤岡町	<p>【災害名】 カスリン台風による堤防決潰</p> <p>【発生日時】 昭和22年9月15日</p> <p>【被災地】 部屋村一帯</p> <p>【災害の概要】 カスリン台風による異常な降雨を集めた利根川と渡良瀬川の水は、昭和22年9月15日夜半、大字部屋野地先八拾米と大字緑川地先百米及びこの堤防を決潰し、部屋村一帯を水底に没した。</p> <p>【教訓等】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・碑文</li> </ul>	部屋巴波川堤防 決潰口跡碑「決潰口跡」(刻字内容および写真添付)
100005-1	群馬県		<p>【災害名】 寛保2年の洪水</p> <p>【発生日時】 寛保2年(1742年)8月1日</p> <p>【被災地】 群馬県内</p> <p>【災害の概要】 寛保2年8月1日に信濃・武蔵・上野国内に被害をもたらした風水害。県内河川の氾濫など。</p> <p>【教訓等】 「戌年の洪水」と呼ばれ、口伝えに語られてきた近世最大の風水害。このときに損亡した田畑が長く復興出来ないなど、大きな被害をもたらしたため。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料(古文書、記録等)</li> <li>・絵図</li> <li>・HP</li> </ul>	群馬県立文書館資料検索システム検索結果一覧(※他に、行政文書1点)当館ホームページで検索可能。他にも様々なキーワードで検索可能

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
10000 5-2	群馬県		<p>【災害名】天明三年浅間焼け                      【発生日時】天明3年(1783年)7月8日(旧暦)                      【被災地】群馬県吾妻郡嬭恋村等吾妻川・利根川流域始め群馬県内等                      【災害の概要】浅間山の噴火による降灰と「土石なだれ」及び洪水(災害・被害の詳細については、出典文献資料を参照)                      【教訓等】鎌原村の五百数十人の村人の内、477人が「火石泥砂」に巻き込まれ亡くなったが、あなどらずに行動した人は生き延びた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> <li>・HP</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・群馬県立歴史博物館『図録第52回企画展 天明の浅間焼け』</li> <li>・『研究紀要』16号 平成11年3月 関俊明・諸田康成「天明三年浅間災害に関する地域史的研究-北東地域に降下した浅間A軽石の降下日時の考古学的研究-」</li> <li>・『研究紀要』21号 平成15年12月 関俊明「7月27日～29日降下As-A軽石「鍵層」としての位置付け-天明三年浅間災害に関する地域史的研究-」</li> <li>・『遺跡に学ぶ』18号 平成14年2月 須田正久「219年前に忽然と消えた屋敷 玉村町上福島中町遺跡」</li> <li>・『埋文群馬』34号 平成12年3月 関俊明「掘り起こされた古代の息吹「天明三年」を掘る」</li> <li>・『埋文群馬』37号 平成13年12月 須田正久「上福島中町遺跡-泥流の下から現れた江戸時代の家と屋敷-」ほか6点</li> <li>・三十三回忌供養碑(蜀山人の浅間やけ碑) 嬭恋村鎌原に建てられている。</li> </ul>
10000 5-3	群馬県		<p>【災害名】明治43年の大水害                      【発生日時】明治43年8月10日～11日                      【被災地】群馬県内                      【災害の概要】8月6日～14日までの間に2つの台風が相次いで接近、通過し、長雨をもたらした。このため県内河川の氾濫や山崩れが発生、大被害をもたらした。死者・行方不明者306人。                      【教訓等】水害は、一府十四県連合共進会の開催を一か月後に控えた時期(予定通り開催)に発生し、東海地方以北の東日本全体に及んだが、本件は被害が大きかった県の一つであった。県内の義捐金のほか、天皇からの「御下賜金」も罹災者の救助にあてられた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料(行政文書、行政資料、記録等)</li> <li>・HP</li> </ul>	群馬県立図書館資料検索システム検索結果一覧 (※他に、行政文書12点) 同館ホームページで検索可能。
10000 5-4	群馬県		<p>【災害名】昭和10年の水害                      【発生日時】昭和10年(1935年)9月25～26日                      【被災地】群馬県内(被害が大きかったのは県西部)                      【災害の概要】台風の影響で不連続線(前線)により雷雨を伴う豪雨となった。吾妻川・烏川・九十九川・碓井川・沼尾川沿岸一体では、水害と山津波との二重の災禍にみまわれた。死者254人、流失崩壊住宅700戸。                      【教訓等】明治43年以来の大水害で、県内に甚大な被害をもたらしたため。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料(行政文書、行政資料、記録等)</li> <li>・HP</li> </ul>	群馬県立図書館資料検索システム検索結果一覧 (※他に、行政文書11点) 同館ホームページで検索可能
10000 5-5	群馬県		<p>【災害名】カスリン台風による水害                      【発生日時】昭和22年9月14日～15日                      【被災地】群馬県内                      【災害の概要】カスリン台風により前橋市で総雨量387.4mmを記録。戦争中の河川整備の放置による荒廃など、戦後の悪条件下での台風被害で、死者592人、行方不明者107人にのぼる。床下浸水3万9938戸、床上浸水3万1019戸。                      【教訓等】戦後間もなくの大水害であり、その被害が甚大であったため。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料(行政文書、行政資料、記録等)</li> <li>・HP</li> </ul>	群馬県立図書館資料検索システム検索結果一覧 (※他に、行政文書19点) 同館ホームページで検索可能。
10000 5-6	群馬県		<p>【災害名】アイオン台風による水害                      【発生日時】昭和23年9月16日～17日                      【被災地】群馬県内                      【災害の概要】カスリン台風の被害の復興も進まない翌年にアイオン台風により県下に被害が発生した。床下浸水5389戸、床上浸水835戸、死者8名、行方不明者3人。                      【教訓等】カスリン台風に続き、復旧も終わらぬまま、また被害を受けたから。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料(行政文書、行政資料、記録等)</li> <li>・HP</li> </ul>	群馬県立図書館資料検索システム検索結果一覧 (※他に、行政文書19点) 同館ホームページで検索可能。
10000 5-7	群馬県		<p>【災害名】キティ台風による水害                      【発生日時】昭和24年10月1日                      【被災地】群馬県内                      【災害の概要】カスリン、アイオン台風が続いてキティ台風が上陸。大きな被害を受けた。床下浸水2615戸、床上浸水1071戸、死者47人、行方不明者3人。                      【教訓等】戦後間もなく3度にわたる台風被害を受け、県財政も大きな影響をあたえた。当時、群馬県は全国一の災害県といわれた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料(行政文書、行政資料、記録等)</li> <li>・HP</li> </ul>	群馬県立図書館資料検索システム検索結果一覧 (※他に、行政文書19点) 同館ホームページで検索可能。

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
10201 6-1	群馬県	前橋市	<p>【災害名】寛延4年の大火</p> <p>【発生日時】寛延4年（1751年）2月20日</p> <p>【被災地】堅町（現千代田町）、板屋町、妙安寺、高岑院</p> <p>【災害の概要】寛延4年2月20日に、堅町から出火し、堅町、板屋町計47軒を焼失、妙安寺と高岑院が類焼した。この翌日の21日には孝順寺の借寺していた長昌寺から出火した。前橋市史3巻</p> <p>【教訓等】松平氏入封以後の藩日記に記録されている。</p>	・文献資料	<p>・発行：前橋市 編集：前橋市史編纂委員会 書名：前橋市史3 発行年：昭和50年10月1日</p> <p>・発行：煥乎堂 編集：前橋市立図書館 書名：翻訳 松平家記録</p>
10201 6-2	群馬県	前橋市	<p>【災害名】安永9年の大火</p> <p>【発生日時】安永9年（1780年）11月16日</p> <p>【被災地】向町、（現在の住吉町一丁目）細ヶ沢町、板屋町、横町、等</p> <p>【災害の概要】向町から出火し、細ヶ沢、広瀬河岸に移り、さらに堅町、板屋町、横町、桑町、萱屋町、榎町、本町等中央部を焼き、鍛冶町、連雀町、白銀町、田町、片貝町等を焼き、前代田に飛び火し、合計482軒の被災者を出して鎮火した。この火事で寺3軒（了寛寺、高岑寺、神宮寺）が類焼、堅町では橋が焼け落ちたので、広瀬川に舟を出して通行の便を図った。前橋市史第3巻</p> <p>【教訓等】松平氏入封以後の藩日記に記録されている。</p>	・文献資料	<p>・発行：前橋市 編集：前橋市史編纂委員会 書名：前橋市史3 発行年：昭和50年10月1日</p> <p>・発行：煥乎堂 編集：前橋市立図書館 書名：翻訳 松平家記録</p>
10201 6-3	群馬県	前橋市	<p>【災害名】宝暦6年の大火</p> <p>【発生日時】宝暦6年（1756年）5月13日</p> <p>【被災地】百軒町、天川町</p> <p>【災害の概要】巳中刻前（現在の午前10時前）百軒町（朝日町一、二丁目）井上繁蔵宅より出火、組長屋その他を類焼、午下刻（午後零時半頃）鎮火した。この火事で小役人より足軽屋敷など342軒焼失、久野善兵衛組佐藤長太郎の母が焼失した。城主朝矩も自ら出馬し、鎮火後帰城した。類焼の家臣に大しては一人前老分二朱、町人に対しても手当金を支給し、類縁者は十八郷の正光寺、本町東福寺及び同町明屋敷、十八郷養行寺、百軒町長栄寺に収容された。</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料	<p>・発行：前橋市 編集：前橋市史編纂委員会 書名：前橋市史3 発行年：昭和50年10月1日</p> <p>・発行：煥乎堂 編集：前橋市立図書館 書名：翻訳 松平家記録</p>
10201 6-4	群馬県	前橋市	<p>【災害名】宝暦十一年田町の火事</p> <p>【発生日時】宝暦十一年（1761年）12月18日</p> <p>【被災地】田町（本町一、二丁目及び表町の一部）</p> <p>【災害の概要】宝暦11年12月18日卯刻（午前6時）過ぎ田町から出火したが、風烈しく大火となり、田町及び裏通りまで延焼して侍屋敷12軒、町家51軒、合計63軒を焼失した。前橋市史3巻</p> <p>【教訓等】松平氏入封以後の藩日記に記載。</p>	・文献資料	<p>・発行：前橋市 編集：前橋市史編纂委員会 書名：前橋市史3 発行年：昭和50年10月1日</p> <p>・発行：煥乎堂 編集：前橋市立図書館 書名：翻訳 松平家記録</p>
10201 6-5	群馬県	前橋市	<p>【災害名】明和4年の大火</p> <p>【発生日時】明和4年（1767年）4月</p> <p>【被災地】柳町（大手町3丁目の一部）</p> <p>【災害の概要】明和4年4月朔日亥刻（午後10時）過ぎ、柳町内池平太方から出火し、風烈しく柳町から堅町、横町、板屋町、紺屋町、桑町、本町、片貝町、鍛冶町、白銀町、連雀町、田町砂塚等の各町を焼き、翌朝卯之刻（午前6時）漸く鎮火した。この時の被害者は、侍屋敷8軒、給人屋敷51軒、足軽屋敷37軒、町家476軒、寺5カ寺となる。城主朝矩は、川越移城前のこともあり、城下の大災害復興のため、各町内にある古家、空き家を領民の住居にあて、新築用材は利根川上流の山元から切り出し、広瀬川へ筏を以て運上金なしで運ばせ、八幡宮の被災に対しては、再興資金として銀50枚を寄進した。</p> <p>【教訓等】家臣及び類焼の町人へ食糧の給与も行っただと思われるが、具体的な記録がない。しかし、前橋町内の大半を焼失したので、藩主が川越移城を決意する直接の動機となったという。</p>	・文献資料	<p>・発行：前橋市 編集：前橋市史編纂委員会 書名：前橋市史3 発行年：昭和50年10月1日</p> <p>・発行：煥乎堂 編集：前橋市立図書館 書名：翻訳 松平家記録</p>
10201 6-10	群馬県	前橋市	<p>【災害名】安永3年前橋陣屋焼失の火事</p> <p>【発生日時】安永3年（1774年）12月23日</p> <p>【被災地】前橋陣屋付近の代役人近藤惣兵衛方、曲輪</p> <p>【災害の概要】安永3年12月23日午後12時頃、前橋陣屋付近の大役人近藤惣兵衛方湯殿から出火し、御作事役所並びに隣家を焼失、その後西北の強風が吹き出して御陣屋に燃え移り、陣屋を焼いた上、帯曲輪まで焼き、侍屋敷など30余りの類焼者を出して漸く鎮火した。</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料	<p>・発行：前橋市 編集：前橋市史編纂委員会 書名：前橋市史3 発行年：昭和50年10月1日</p> <p>・発行：煥乎堂 編集：前橋市立図書館 書名：翻訳 松平家記録</p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
10303 9-1	群馬県	富士見村	<p>【災害名】カスリン台風による水害</p> <p>【発生日時】昭和22年9月15日</p> <p>【被災地】群馬県勢多郡富士見村大字原之郷（原東）及び小沢地区</p> <p>【災害の概要】カスリン台風による連日の500mmにも及ぶ豪雨により、富士見村を流れる唯一の川である白川が氾濫。本村だけで死者104人、重・軽傷者102人にのぼる。流失家屋50戸、全・半壊家屋37戸、床上浸水71戸、床下浸水179戸。</p> <p>【教訓等】赤城の大洞に源を發し、川巾5m、水流僅か1mに満たない白川が台風の影響による連日の豪雨で、赤城山に降ったあらゆる水をここへ流し、15日午後3時半、ついに4ヶ所で決壊し、下流に甚大な被害をもたらした。改修工事は、昭和23年1月に着工し、延長3,700m、川巾20.5m、深さ3.5mとし、床土工59基、道路橋 県道2橋、村道4橋を架橋、工費9,110万円、労力343,000人と2年3ヶ月余りを費やし昭和25年5月に完了した。</p>	・文献資料	群馬県勢多郡富士見村：富士見村誌、昭和53年1月1日発行 P1105～P1133
10424 8-1	群馬県	長野原町	<p>【災害名】天明三年浅間山大噴火</p> <p>【発生日時】1787年7月</p> <p>【被災地】長野原町（当時：小宿村及び吾妻川沿い羽根尾、長野原、坪井、新井諸村）</p> <p>【災害の概要】大噴火による火砕流及び噴煙の影響のための冷害</p> <p>【教訓等】天明三年の大噴火では、夥しい量の巨岩を含めて大溶岩流が上州側に流出した。泥流（火砕流）は1000度に近い高温で巨岩大石と共に吾妻川へ流れ込み、いくつもの村を呑み込み更に利根川から太平洋まで流れ下った。沿岸の村々は大きな被害をだし、大勢の犠牲者を出した。その後この噴火による噴煙が亜成層圏まで達したと推定され、大冷害を惹き起こし、大飢饉である天明の凶年と繋がった。</p>	・文献資料	長野原町誌の写し
10424 8-2	群馬県	長野原町	<p>【災害名】集中豪雨</p> <p>【発生日時】1999年8月14～15日</p> <p>【被災地】長野原町大字横壁、長野原、北軽井沢</p> <p>【災害の概要】照月湖の堰堤崩壊、横壁地区東沢の土石流による家屋の崩壊、長野原地区の山崩壊</p> <p>【教訓等】8月14日未明から降り出した雨は、16日の朝方まで降り続き、総雨量364<sup>mm</sup>、時間最大雨量42.5<sup>mm</sup>を記録した。15日早朝警報が発令され災害対策本部を設置。消防団各分団に巡視の指示をだした。最初に災害が発生したのは、降り始めから30時間後の15日10時頃北軽井沢地区にある照月湖の堰堤が崩壊。近くのオートキャンプ場で宿泊していた約500人が避難。その後、19時頃長野原地区で急傾斜地崩壊危険箇所としても指定されていた山が崩壊し家一軒を呑み込む。その夜横壁地区東沢で土石流が発生。全壊2棟、半壊一部損壊2棟、床上床下浸水6棟という被害にもかかわらず事前の避難誘導により犠牲者はでませんでした。</p>		
10464 7-5	群馬県	玉村町	<p>【災害名】カスリーン台風</p> <p>【発生日時】昭和22年（1947年）9月15日</p> <p>【被災地】玉村町大字福島、南玉、芝根村</p> <p>【災害の概要】集中豪雨による濁流、戦争中の河川改修工事の中止、山林乱伐後の植林を怠ったことが起因して氾濫した。福島地区では福島橋上・下流右岸の堤防が決壊し、建物の流失や倒壊・浸水、耕地の流出・埋没。芝根村五料地区では床上・床下浸水、田畑や宅地への土砂の流入、農産物や家財道具・生活用品に至るまで被害を受けた。（災害・被害の詳細については、添付資料1～5を参照）</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料 ・碑文	玉村町誌 通史編 下巻 一、1995年 P.826-830
10521 0-1	群馬県	板倉町	<p>【災害名】明治43年の大水害</p> <p>【発生日時】明治43年8月10日～14日</p> <p>【被災地】群馬県板倉町（当時海老瀬村、伊奈良村、大箇野村）</p> <p>【災害の概要】利根川及び渡良瀬川の数カ所で堤防が決壊し、行方不明者1名をだし、長期間浸水したため農作物の被害は甚大であった。</p> <p>【教訓等】利根川・渡良瀬川の改修と堤防の補強工事を促進させるため沿岸の町村で「渡良瀬川水害予防組合」を結成し、政府に要求した。また、渡良瀬川沿岸では、洪水がでるたびに足尾銅山から排出される鉱毒水のため、農作物が枯渇し、人体にも影響がでてきた。そのため根本的な治水事業が検討され、河川改修と堤防の補強、遊水池を造成することになったが、その結果、栃木県谷中村の強制買収が行われ、他方、水害罹災農民の北海道への集団移住も行われた。</p>	・文献資料	・板倉町史（通史 下巻） ・板倉町史（別巻4）

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
10521 0-2	群馬県	板倉町	<p>【災害名】カスリーン台風による水害</p> <p>【発生日時】昭和22年9月15日</p> <p>【被災地】群馬県板倉町（当時 海老瀬村、伊奈良村、大箇野村、西谷田村）</p> <p>【災害の概要】関東地方一帯に襲来したカスリーン台風により利根川、渡良瀬川が増水氾濫した。板倉町では、渡良瀬堤防が2箇所決壊し、死者4名、負傷者50名、流失全家屋82戸、流失半壊家屋34戸、床上浸水677戸、床下浸水345戸等の被害をもたらした。</p> <p>【教訓等】カスリーン台風の被害が大きかった理由として、未曾有の降雨量により利根川の計画高水位を上回ったことと、利根川上流域の戦時中からの森林の乱伐により、川水がより異常に土砂を含み破壊力が強かったことが原因といわれている。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・板倉町史（通史 下巻）</li> <li>・板倉町史（別巻4）</li> <li>・板倉町とカスリーン台風</li> </ul>
11000 1-1	埼玉県		<p>【災害名】寛保2年の洪水</p> <p>【発生日時】1742年8月27日（旧暦7月27日）</p> <p>【被災地】埼玉県秩父郡西部山地、長瀨町、行田市（当時 忍町、上・下中条村）、栗橋町、北川辺町、熊谷市（当時 熊谷宿）</p> <p>【災害の概要】典型的秋台風であり、利根川、荒川堤防の敷力所が決壊。江戸期一二を争う大洪水となった。長瀨町にある「寛保洪水摩崖標」に刻まれた水位は現在の河床上から2.4mにもなり、関東での減収は80万石にも上った。</p> <p>【教訓等】この災害により二百十日が強く意識されるようになったという。</p>	・文献資料（図書）	<ul style="list-style-type: none"> <li>『利根川事典』新人物往来社 1994 p51</li> <li>『埼玉近世史話』[埼玉近代史研究会] 1978 p122~125</li> <li>『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p143</li> </ul>
11000 1-2	埼玉県		<p>【災害名】天明3年の浅間山噴火と洪水</p> <p>【発生日時】1783年7月16日、8月2日（旧暦6月17日、7月5日）</p> <p>【被災地】熊谷市（当時 久下、万吉、上之、佐谷田村）、深谷市（当時 深谷宿）、庄和町（当時 上金崎村）、蕨市（当時 蕨宿）</p> <p>【災害の概要】この年は異常気象が続いた年であり、利根川筋、荒川筋で水害が発生、その後、浅間山の噴火により広範囲に被害が及び、6月初めから続く降雨により大水害となった。噴火では、上之村で1坪に一石余りの砂が積もり、佐谷田村で1坪6から7斗の砂が積もった。</p> <p>【教訓等】文献a 2に引用されている「松村家日記」によると「戸田土手より蕨宿まで深水」「上州何レ之所哉らも大水二而」とあり、被害は広範囲に及んだ。寛保2年のものよりも「強き由也」と記されるほどのものであった。</p>	・文献資料（図書）	<ul style="list-style-type: none"> <li>『利根川事典』新人物往来社 1994 p50</li> <li>『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p144~147、178</li> <li>『埼玉近世史話』[埼玉近代史研究会] 1978 p125~126</li> </ul>
11000 1-3	埼玉県		<p>【災害名】天明6年の洪水</p> <p>【発生日時】1786年8月5日（旧暦7月12日）</p> <p>【被災地】幸手市（権現堂堤）、栗橋町、松伏町</p> <p>【災害の概要】浅間山の大噴火による火山灰の大量の泥流が利根川に流入したことにより河床が上昇したことが原因である。7月中旬の長雨により上流・下流の各支派川で破堤、中条堤、権現堂堤も決壊した。栗橋、羽生、岩槻、草加等の被害は甚大であり、関東大洪水ともいべき程をなした。</p> <p>【教訓等】このことにより利根川は荒廃した川となり、その濁水は江戸市中に及び永代橋等の流出を見たという。</p>	・文献資料（図書）	<ul style="list-style-type: none"> <li>『利根川の洪水』山海堂 1995 p40~43</li> <li>『利根川事典』新人物往来社 1994 p51</li> <li>『埼玉大百科事典 3』埼玉新聞社 1974 p129</li> </ul>
11000 1-4	埼玉県		<p>【災害名】安政2年の大地震</p> <p>【発生日時】1855年11月10日（旧暦10月2日）</p> <p>【被災地】幸手市（当時 幸手宿、権現堂） 杉戸町（当時 杉戸宿）</p> <p>【災害の概要】この地震は江戸を中心に関東各地に大災害をもたらし、江戸の死者は4293人にもなった。現在の埼玉県域では県南部を中心に各地で甚大な被害があり、幸手宿では怪我人1724人にも及んだ。</p> <p>【教訓等】各地での家屋の倒壊破損が多く、特に奥州街道沿いの被害は甚大で、10月末までの余震は12回以上もあったという。</p>	・文献資料（図書）	<ul style="list-style-type: none"> <li>『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p62、150~151、184</li> </ul>
11000 1-5	埼玉県		<p>【災害名】明治23年の台風・洪水</p> <p>【発生日時】1890年8月22~23日</p> <p>【被災地】行田市（当時 忍町）、北川辺町、渡良瀬川周辺</p> <p>【災害の概要】大暴雨により河川が決壊し、埼玉県下の被災町村は326にも及び大被害となった。渡良瀬川周辺でも各所で堤防が切れ、橋梁流失212箇所、死者16人、家屋流失72戸、田畑の甚大な被害という結果をもたらした。</p> <p>【教訓等】利根川、荒川の破堤多数、濁水地多数と言われている。</p>	・文献資料（図書）	<ul style="list-style-type: none"> <li>『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p186</li> <li>『埼玉大百科事典 3』埼玉新聞社 1974 p129</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
11000 1-6	埼玉県		<p>【災害名】川越町の大火</p> <p>【発生日時】明治26年(1893)3月17日</p> <p>【被災地】川越町中央部</p> <p>【災害の概要】川越町南町養寿院門前附近から出火し、西北からの強風におおられ付近に延焼。火勢猛烈なため多数の消防隊は傍観するしかなく、1302戸という町内の4割を消失する被害となった。</p> <p>【教訓等】多くの建物が消失する中、いくつかの土蔵が焼け残ったことから、復興時に土蔵が多く建てられ、現在の蔵造りの街並みを形成するきっかけとなった。</p>	・文献資料(図書)	『大火の歴史と街づくり』川越市立博物館 1993 『川越大事典』国書刊行会 1988 p195
11000 1-7	埼玉県		<p>【災害名】明治40年の台風・洪水</p> <p>【発生日時】1907年8月21～28日</p> <p>【被災地】熊谷市(当時 佐谷田村)、秩父市(当時 尾田蒔村)、戸田市(当時 植水村、大久保村)、栗橋町</p> <p>【災害の概要】この時期に起きた二つの台風のために本県の西部山地帯を中心に長期の降雨となり、大洪水が起こった。荒川、利根川等が破堤氾濫。死者12人、負傷者11人、行方不明29人、家屋被害多数で農業被害は2万町歩・432万円となった。被災町村は195に及んだ。</p> <p>【教訓等】7日間雨が降り続き、安政6年以来の大出水と言われている。</p>	・文献資料(図書)	『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p188 『埼玉大百科事典 3』埼玉新聞社 1974 p130 『埼玉県の気象災害』埼玉県総務部消防防災課 1970 p65 『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p155
11000 1-8	埼玉県		<p>【災害名】明治43年の水害</p> <p>【発生日時】1910年8月1～16日</p> <p>【被災地】埼玉県全域、児玉郡(当時 旭村、仁手村)、比企郡(当時 吉見村)、大里郡(当時 大森生村、吉岡村、八基村、新会村、男沼村、妻沼村)等</p> <p>【災害の概要】二つの台風と低気圧の停滞による大風雨で県下に大水害をもたらした。被災町村は県内全域に及び、利根川筋、荒川筋の各地で被害が見られ、死者249人、負傷者187人、行方不明者98人、橋梁流失902、家屋・道路の損害は数知れずであり、農業被害1402万円、総被害額2042万円となった。</p> <p>【教訓等】規模の大きさから、明治最大の大洪水と言われた。</p>	・文献資料(図書)	『明治43年埼玉県水害誌』埼玉県 1912 『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p155～156 『埼玉大百科事典 3』埼玉新聞社 1974 p130 『埼玉県の気象災害』埼玉県総務部消防防災課 1970 p189
11000 1-9	埼玉県		<p>【災害名】明治44年の台風</p> <p>【発生日時】1911年6月19日、7月25日、8月4日</p> <p>【被災地】熊谷市(当時 熊谷町)、秩父郡</p> <p>【災害の概要】九州に上陸後北東進、宮古付近から太平洋に抜けた台風の影響による災害である。6月19日の台風は熊谷町で16mmにすぎなかったが、強風のため平野部に大きな被害をもたらし家屋の全壊、半壊、破損が多数あった。7月25日の台風は床上浸水106戸。8月4日の台風は流失家屋2、床上浸水909戸となっている。</p> <p>【教訓等】この一連の台風で大きな農業被害があったと伝えられている。</p>	・文献資料(図書)	『埼玉県の気象災害』埼玉県総務部消防防災課 1970 p70 『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p156 『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p189
11000 1-10	埼玉県		<p>【災害名】大正元年の台風</p> <p>【発生日時】1912年9月21～23日</p> <p>【被災地】埼玉県全域、熊谷市(当時 熊谷町)、飯能市(当時 名栗村)</p> <p>【災害の概要】四国東部を北上し、能登から北海道に進んだ台風による大風雨災害。強風による被害が全県下に及び、家屋全壊950戸、半壊1652戸、一部破損17777戸、流失1戸。雨量は名栗で158mmを見たが、雨の被害は少なかった。死者6人、負傷者31人となっている。</p> <p>【教訓等】強風被害が今に伝えられている。</p>	・文献資料(図書)	『埼玉県の気象災害』埼玉県総務部消防防災課 1970 p72 『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p189 『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p157
11000 1-11	埼玉県		<p>【災害名】暴風雨(台風)</p> <p>【発生日時】大正2年(1913年)8月26～27日</p> <p>【被災地】県内全域</p> <p>【災害の概要】関東地方の東岸に沿って北上した台風の影響による被害。死者16名、負傷者19名、行方不明者3名。住家屋全壊60棟、半壊115棟、流失115棟。住家浸水床上10,730棟、床下9,602棟。農業被害面積58,000町歩、農業被害金額440万円。</p> <p>【教訓等】県内では荒川流域がより被害が甚大だったため、当時未着手だった荒川上流部の改修工事早期着工を願う声が高まり、これ以後数次にわたり埼玉県議会は治水対策の意見書を政府に提出した。(着工は大正7年)</p>	・文献資料(図書)	『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p157 『荒川 人文2』埼玉県 1988 p19 『中川水系 人文』埼玉県 1993 p564

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
11000 1-12	埼玉県		<p>【災害名】暴風雨（台風）</p> <p>【発生日時】大正6年（1917年）9月29日～10月1日</p> <p>【被災地】北足立・入間・比企</p> <p>【災害の概要】駿河湾から浦和付近を通過し、北上した台風による被害。死者11名、負傷者31名、行方不明者2名。住家屋全壊669棟、半壊191棟。住家浸水床上668棟、床下1,510棟。道路埋没・流失56箇所、破損264箇所。橋流失70箇所、破損135箇所。農業被害金額168万円。</p> <p>【教訓等】熊谷測候所で本件観測上最低気圧959.3mbを記録した。県内はこの時期毎年のように水害に襲われており、特筆される教訓等が確認できないのは、水害が常態化した当時の状況の反映とも考えられる。</p>	・文献資料（図書）	『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p159 『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p97,102 『中川水系 人文』埼玉県 1993 p563～5
11000 1-13	埼玉県		<p>【災害名】関東大地震</p> <p>【発生日時】大正12年（1923年）9月1日</p> <p>【被災地】入間・北埼玉・南埼玉・北葛飾</p> <p>【災害の概要】被害は東京に隣接する県南部から東部にかけて激しく、古利根川、元荒川流域の川口町、粕壁町（現春日部市）、幸手町が県下の三大被害地といわれた。土地の隆起、陥没も少なかったが、県下では火災はほとんどなかった。死者341名、負傷者493名。住家屋全壊4,739棟、半壊4,029棟。</p> <p>【教訓等】県内罹災者に対する救護と共に東京方面からの避難者の救護のために県内に120箇所あまりの救護所が設置され、鉄道の復旧も相まって県南部は東京方面に対する救護基地として機能した。救護人員は24万人以上といわれる。また、流言飛語により朝鮮人の虐殺が起きるなど痛ましい事件も起きた。県南部は、震災を期に人口が急増し、急速な都市化のきっかけとなった。</p>	・文献資料（図書）	『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p197 『新編埼玉県史 通史編6』埼玉県 1989 p398～428 『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p69
11000 1-14	埼玉県		<p>【災害名】西埼玉地震</p> <p>【発生日時】昭和6年（1931年）9月21日</p> <p>【被災地】本庄・深谷・児玉・熊谷・吹上・鴻巣・菖蒲・白岡</p> <p>【災害の概要】11時20分、埼玉県中部を震源とし、マグニチュード6.9。熊谷をはじめ県内各地で震度5を記録。被害は深谷・吹上・児玉などの町村で大きかった。有感余震は同日中40回、9月末までに81回。死者11名、負傷者114名。住家屋全壊62棟、半壊123棟。</p> <p>【教訓等】埼玉県内における関東大地震以来の大規模地震で、地震直後から熊谷測候所による現地調査がなされた。</p>	・文献資料（図書）	『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p197 『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p66～68 『西埼玉強震報告』埼玉県熊谷測候所 1932
11000 1-15	埼玉県		<p>【災害名】暴風雨（室戸台風）</p> <p>【発生日時】昭和9年（1934年）9月21日</p> <p>【被災地】県内全域</p> <p>【災害の概要】四国に上陸後、新潟沿岸から秋田付近に再上陸し北海道の南東海上に抜けた台風による被害。死者4名、負傷者23名。住家屋全壊103棟、半壊109棟。住家浸水3棟。農業被害面積61,134町歩。</p> <p>【教訓等】明治43年の大水害以降、政府によって埼玉県内河川の改修が行われていたが、その間も毎年のように水害に襲われ、半ば常態化していた。本水害に特筆される教訓等が確認できないのは、このような当時の状況の反映とも考えられる。</p>	・文献資料（図書）	『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p162 『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p112 『中川水系 人文』埼玉県 1993 p563
11000 1-16	埼玉県		<p>【災害名】暴風雨（台風）</p> <p>【発生日時】昭和13年（1938年）8月30日～9月1日</p> <p>【被災地】県内全域</p> <p>【災害の概要】富崎沖から鎌倉付近に上陸し、所沢付近を通過して妻沼付近を北上し、日本海に抜けた台風による被害。死者74名、負傷者40名。住家屋全壊469棟、半壊835棟、流失170棟。住家浸水床上4,750棟、床下5,880棟。農業被害面積75,968町歩。</p> <p>【教訓等】荒川改修工事は、戦時体制下にあつて停滞していたが、荒川流域を襲った洪水により改修の必要性を再認識され、政府に対して工事再開と利根川・中川の治水対策を求める治水対策推進運動が展開された。その結果、荒川改修工事が再開されることとなった。</p>	・文献資料（図書）	『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p163 『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p102～103 『荒川 人文2』埼玉県 1988 p26,109 『中川水系 人文』埼玉県 1993 p568



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
11000 1-17	埼玉県		<p>【災害名】大雨・大洪水（カスリン台風）</p> <p>【発生日時】昭和22年（1947年）9月14日～15日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】房総半島をかすめ、停滞していた前線を刺激して北東へ去った台風による被害。利根川は栗橋付近で破堤、荒川は田間宮村、熊谷市久下新田で破堤、入間川など中小河川50余箇所破堤。利根川の濁流は、北埼玉地方から白岡付近で荒川からの濁流と合流し、3kmの水幅となって春日部から吉川町まで達した。県内316市町村の72%の228市町村に被害がおよび、被災人員は348,827人上り、被害総額は約100億円。死者101名、負傷者1,430名。住家屋全壊725棟、半壊2,116棟、流失396棟。住家浸水床上44,855棟、床下34,647棟。</p> <p>【教訓等】明治43年以来の大災害といわれる。破堤しなかった地域では逆に堤によって排水が妨げられ、県東部ではかなり広い地域で6日以上の冠水状態が続いた。この後も台風（アイオン、キティ）の襲来による洪水が相次ぎ、利根川・荒川の治水事業の見直しが行われるきっかけになった。</p>	・文献資料（図書）	『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p166 『新編埼玉県史 通史編7』埼玉県 1991 p25～30 『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p103～105 『昭和22年9月埼玉県水害誌』埼玉県 1950
11000 1-18	埼玉県		<p>【災害名】暴風雨（キティ台風）</p> <p>【発生日時】昭和24年（1949年）8月30日～9月1日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】小田原西方に上陸後秩父地方を経て日本海に抜けた台風による被害。死者12名、負傷者12名。住家屋全壊154棟、半壊639棟、流失4棟。住家浸水床上326棟、床下1,390棟農業被害面積16,472町歩、農業被害金額15億4,000万円。</p> <p>【教訓等】利根川・荒川などから出水し県下に被害を与えた。相次ぐ洪水の発生は県内河川の治水事業の見直しが行われるきっかけになった。</p>	・文献資料（図書）	『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p167 『新編埼玉県史 通史編7』埼玉県 1991 p25～30 『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p105
11000 1-19	埼玉県		<p>【災害名】暴風雨（伊勢湾台風）</p> <p>【発生日時】昭和34年（1959年）9月25日～27日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】潮岬付近に上陸後、北上し日本海から青森県を通過して、北海道東方に抜けた台風による被害。死者8名、負傷者55名。住家屋全壊351棟、半壊1,155棟、一部破損5,883棟。住家浸水床上291棟、床下1,497棟。農業被害面積30,537町歩、農業被害金額6億2,893万円。</p> <p>【教訓等】秩父山地の被害が特に大きく、三峯神社の檜の大木が激しく倒れ、景観を一変するほどだった。</p>	・文献資料（図書）	『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p172 『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p105
11000 1-20	埼玉県		<p>【災害名】暴風雨（台風第26号）</p> <p>【発生日時】昭和41年（1966年）9月24日～25日</p> <p>【被災地】大里・児玉・入間・比企・北足立</p> <p>【災害の概要】御前崎付近に上陸後、秩父地方を通過し、東北地方から三陸沖へ抜けた台風による被害。死者28名、負傷者694名。被災世帯数10万1,060世帯、被災者数44万2,240名。住家屋全壊1,235棟、半壊6,679棟、流失1棟。一部破損8万262棟。住家浸水床上740棟、床下10,548棟。農業被害面積68,466町歩、農業被害金額25億8,395万円。道路損壊708箇所、橋流失102箇所、破堤101箇所、山（崖）崩れ257箇所。</p> <p>【教訓等】秩父地方を直撃したため、山間部の崖崩れや倒木による負傷者が多く出た。</p>	・文献資料（図書）	『埼玉県の気象百年』熊谷地方気象台 1996 p177 『新編埼玉県史 別編3』埼玉県 1986 p105～107 『埼玉県地域防災計画 資料編3』埼玉県防災会議 1992
11100 7-1	埼玉県	さいたま市	<p>【災害名】荒川出水</p> <p>【発生日時】明治43年（1910）8月10日</p> <p>【被災地】旧指扇村大字宝来</p> <p>【災害の概要】荒川の出水は繰り返し発生している。特に明治43年の洪水は宝来地区での堤防が決壊し、下流域に大きな被害をもたらした。同時に綾瀬川・芝川等も氾濫し、流域に被害をおよぼした。</p> <p>【教訓等】8月7日から降り続いた雨は12日まで止まず、指扇村大字宝来の「宝来堤」が決壊、指扇村・馬宮村・植水村・大久保村に被害がおよび、家屋流失、農作物に多大の被害をあたえた。</p>	・文献資料	・大宮市史 第四巻 昭和57年 ・浦和市史 通史編Ⅲ 平成2年 ・与野市史 通史編下巻 昭和63年
11100 7-2	埼玉県	さいたま市	<p>【災害名】浦和大火</p> <p>【発生日時】明治21年（1888）3月15日</p> <p>【被災地】旧浦和宿</p> <p>【災害の概要】浦和宿の火災はたびたび発生しているが、明治21年は特に規模が大ききものであった。宿内の常盤町の青物市場での焼き火が原因で、市街地の3分の2を焼き尽くした。全焼366戸、幸いに焼死者・怪我人は無かった。</p> <p>【教訓等】午前9時頃発生した火災は折からの西風のなか市街地に広がり、午後3時過ぎに鎮火した。当時の消火活動といっても私設消防組の「竜吐水」「雲竜水」といった消火器具であり、対抗しきれないものであった。当時、師範学校生徒の活躍が注目されている。</p>	・写真（浦和宿大火焼失者救助の褒賞状）	浦和市史 通史編Ⅲ 平成2年

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
11100 7-3	埼玉県	さいたま市	【災害名】指扇村の大旋風（たつまき） 【発生日時】大正15年（1926）9月4日 【被災地】旧指扇村・西新井村・宮原村 【災害の概要】当日は折からの台風により各地で被害が発生していたが、指扇村の大塚古墳付近で突然大旋風が発生した。この大旋風では死者8名、家屋倒壊144軒と大きな被害をもたらした。 【教訓等】午前9時頃突然発生した大旋風は、幅50から100mで、全長7kmにわたり人家・樹木をなぎ倒し、宮原村内で消失した。	・写真（大旋風の被害（大正15年・指扇村））	大宮市史 第四巻 昭和57年
11225 9-2	埼玉県	入間市	【災害名】大洪水 【発生日時】明治43年8月10日 【被災地】野田地区 【災害の概要】（災害・被害の詳細については、添付資料1-3、1-4を参照） 【教訓等】添付資料1-3、1-4のとおり	・文献資料	・入間市史 通史編 ・さやまのむかしばなしー西沢順三著
11230 5-1	埼玉県	新座市	【災害名】安政大地震 【発生日時】1855年 【被災地】新座市片山地区 【災害の概要】安政二年（1855年）の安政大地震によって数万戸が倒壊焼失した。 【教訓等】栗原村の地頭であった木村氏が、安政大地震によって被害をうけ、村に上納金を課したものの。	・文献資料	新座市史 第二巻 近世資料編 1985 P504
11442 1-1	埼玉県	宮代町	【災害名】安政の大地震 【発生日時】安政2年10月2日 【被災地】宮代町大字東桑原 【災害の概要】安政2年10月におこった大地震。 【教訓等】安政の大地震により、土蔵の屋根や壁等が落ちてしまった。	・文献資料（古文書：岡安家文書No.703「土蔵修復積明嘆願書」）	宮代町文化財調査報告書第12集「岡安家文書」宮代町教育委員会 平成15年3月28日発行
11442 1-2	埼玉県	宮代町	【災害名】明治43年の大水 【発生日時】明治43年8月12日（上流の堤防決壊は11日） 【被災地】東・中・金原・西原・中島・蓮谷・道仏・松ノ木島・柚ノ木・内野・姫宮・戸崎 【災害の概要】8月7日から降り続いた雨は11日になってようやく降り止んだが、この日既に村内の河川は刻一刻と増水し、「洪水の状態を現出」していた。被害を少しでも抑えるために土嚢を積むなどの作業に追われたが、午前11時過ぎには「これが決壊してしまうと村を守るすべがなくなってしまう」という中條堤防決壊の報が入り、人々は家財道具の流出を防ぐ準備をするのに精一杯となってしまった。翌12日の朝には濁流が百間村の大部分を呑みつき、村内をさまざまな危難が襲った。村が出した救助船などの活躍により、一人の溺死者も出さなかったのは、不幸中の幸いであった。 【教訓等】大正2年、水害の傷も次第に癒えてきた百間村は「本村当時の状況を叙し以て後日の参考に資」するべく、役場や学校に保存されていた水害関係資料を基にして、出水・被害状況、救出活動、水害後の状況について『百間村水害誌』を編さんした。	・文献資料	百間村『百間村水害誌』大正2年
11442 1-3	埼玉県	宮代町	【災害名】関東大震災 【発生日時】大正12年9月1日 【被災地】全域 【災害の概要】住宅の全壊17戸・半壊19戸、住宅以外では全壊58戸・半壊66戸、須賀村役場が半壊、神社2社も全壊した。道路被害が百間村で決壊1箇所、亀裂が須賀村で15箇所・百間村では20箇所、陥没2箇所であった。堤防の決壊は5箇所・亀裂は3箇所。橋梁にも墜落や亀裂等9箇所の被害があり、陥没・隆起あわせて40箇所を救えた。 【教訓等】民俗伝承から「地震のときは竹やぶに逃げろ。竹は根が張っているので竹やぶに逃げ込めば安全だ。→揺れているときはうちの竹やぶの中でジッと伏せていた。揺れが収まったので起き上がって和戸宿のほうを見ると、屋根瓦が潰れて真っ赤なケムリが立っていた。」「関東大震災のとき、畑が割れてバクバクして、そこから青い水が噴出したと聞いた。」	・文献資料（『宮代町史 通史編』P524）	宮代町教育委員会『宮代町史 通史編』平成14年3月31日
11442 1-4	埼玉県	宮代町	【災害名】関東大震災 【発生日時】大正12年9月1日 【被災地】中州島・柚木・川島地方 【災害の概要】 【教訓等】土地潰れ裂け、砂噴きあがり、家屋に泥土流れ込む。斉藤家文書に残る資料の中に、9月1日から3日にいたる3日間の様子を、短く記している。	・その他	宮代町教育委員会『水と緑のみやしろ～宮代町史 ビジュアル版』平成16年3月31日 P68

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
11442 1-5	埼玉県	宮代町	<p>【災害名】カスリーン台風（による洪水）</p> <p>【発生日時】昭和22年9月16日</p> <p>【被災地】中島地区、国納八河内、須賀辰新田ほか</p> <p>【災害の概要】カスリーン台風による豪雨により、利根川や古利根川など主要河川の決壊がおこり、戦後の復興に伴う山林の過伐採により山林の保水機能が著しく低下していたことから、未曾有の被害となった。</p> <p>【教訓等】百間村では大洪水を予想し、警戒に相当の人員や資材を配置、中島地区の決壊場所に迅速に対応でき、被害を最小限にとどめることができた。農業倉庫内の食料についても、安全な場所に移動することができた。橋梁の流出2箇所、大破11箇所もあり交通がまったく機能しないときも一時あった。須賀村では、全村ほとんど浸水した。防衛作業を進めていたものの、急な増水に手の施しようがなかった。</p>	・文献資料	宮代町教育委員会『宮代町史通史編』平成14年3月31日P618)
12000 6-01	千葉県		<p>【災害名】元禄地震</p> <p>【発生日時】元禄16年(1703年)11月23日</p> <p>【被災地】長狭郡、朝夷郡、夷隅郡、長生郡、山武郡、銚子、浦安、船橋</p> <p>【災害の概要】元禄地震による地割れ。元禄地震による津波災害。</p> <p>【教訓等】千葉県にとって最大級の地震であり有史以来、一番大きな津波被害を与え、今でも数多くの津波供養碑が現存している。津波水死者は九十九里浜に一番多かった。鯛の浦や野島崎も、元禄地震の地殻変動によって現出している。</p> <p>なお、館山市～南房総市の海岸段丘地形図により元禄地震以前の海岸線位地図を復元することができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> <li>・絵画</li> <li>・写真</li> </ul>	<p>千葉県総務部消防防災課（当時）元禄地震 一十九里大津波の記録－昭和50年</p> <p>千葉県安房博物館企画展図録「地震と津波」－平成15年</p> <p>高崎浦津波記録－富山町町史</p> <p>館山市～南房総市の海岸段丘地形図</p>
12000 6-02	千葉県		<p>【災害名】元禄地震</p> <p>【発生日時】元禄16年(1703年)11月23日</p> <p>【被災地】長狭郡、朝夷郡、夷隅郡、長生郡、山武郡、銚子、浦安、船橋</p> <p>【災害の概要】房総の災害史。元禄地震及び津波災害。</p> <p>【教訓等】房総の災害史について、元禄地震と津波を中心に書かれている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> <li>・絵画</li> <li>・写真</li> </ul>	千葉県郷土史研究連絡協議会編 房総災害史 一元禄の大地震と津波を中心に－昭和59年
12000 6-03	千葉県		<p>【災害名】関東大震災</p> <p>【発生日時】大正12年(1923年)9月1日</p> <p>【被災地】千葉県全域</p> <p>【災害の概要】関東大震災による甚大な被害。布良では地震発生後20分にして高さ5～6mの津波が押し寄せた。</p> <p>【教訓等】富樫家伝来の文書であり、大正10年代から昭和戦前期にパイロットであった富樫千代吉が公私にわたり撮影した写真である。関東大震災直後の東京区内を撮影した航空写真。</p> <p>南房総市延命寺断層に関東大震災時の活断層を見ることができる。</p>	・写真	<p>富樫千代吉 富樫家文書 大正12年～昭和45年</p> <p>南房総市延命寺断層―一部市指定記念物</p>
12000 6-04	千葉県		<p>【災害名】カスリーン台風による災害</p> <p>【発生日時】昭和22年9月上旬</p> <p>【被災地】利根川・江戸川流域</p> <p>【災害の概要】昭和22年9月8日に発生した台風が秋雨前線を刺激し、関東地方に大きな被害をもたらした。15日夜半現大利根町の堤防決壊をきっかけに久喜・杉戸・粕壁（春日部）・栗橋・幸手等、埼玉県東部の市街地を洪水が襲い、4日後には東京下町一帯を水没させた。</p> <p>【教訓等】利根川水系は、これまで、たびたび氾濫を引き起こしてきた暴れ川であり、その都度、国は、利根川改修計画を見直し、計画高水量の増加を見込まれるに至った。人々も過去の経験から、洪水時の対応として、水塚や備蓄米の準備を積極的に後世に伝えるようになった。</p>	・写真・カスリーン台風水害パネル	絵はがき・・・詳細不明
12000 6-07	千葉県		<p>【災害名】昭和46年台風25号</p> <p>【発生日時】昭和46年九月七日から八日</p> <p>【被災地】千葉県香取市（当時小見川町）</p> <p>【災害の概要】台風25号に伴う暴風雨による災害（総雨量323.5mm）。</p> <p>死者15名、負傷者6名、家屋全壊37棟、家屋半壊13棟</p> <p>【教訓等】9月7～8日香取市（当時小見川町）を襲った台風25号は、323.5mmという雨量を伴った暴風雨となり、15名もの尊い命を失う大惨事となった。町には災害対策本部が設置され、東、南地区山間部を中心として各地に起こった家屋の倒壊、がけ崩れにより負傷者発生、このため、7日23時30分に災害救助法が適用され、自衛隊、警察機動隊の応援を得て復旧作業に当たった。</p>	その他(広報おみがわ)	広報おみがわ（昭和46年10月10日号）

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
12000 6-08	千葉県		<p>【災害名】富士山（宝永山）噴火（宝永山噴火による火山灰被害）</p> <p>【発生日時】宝永4年(1707)11月23日(12月16日)～12月12日(1708.1/1)</p> <p>【被災地】千葉県木更津市大成</p> <p>【災害の概要】富士山の噴火に関して、11月23日から12月12日における天候や噴火に伴う様子(降灰・稲妻・雷・地震等)を、時刻とともに記録したもの。特に降灰については、一坪当たりの降灰量が記されており、24日は2斗8升8合、28日は5升4合、29日は、1斗4升4合といった降灰量の記載がある。</p> <p>人々の噴火に対する騒ぎは、12月12日になると治まったこともわかる。</p> <p>【教訓等】なし</p>	文献（古文書、書簡等）	「富士山辰巳方焼出シ候事」亥（宝永四年(1707)十二月十二日(1708.1.1)三枝〇〇
12000 6-10	千葉県		<p>【災害名】名内の大火</p> <p>【発生日時】明治24年4月24日</p> <p>【被災地】白井市名内</p> <p>【災害の概要】午後0時半頃出火 地区内の家並はほぼ全焼し、類焼は隣接する今井地区にも及んだ</p> <p>【教訓等】地区内に所在する東光院という寺院に、大火を免れたという伝説のある地藏菩薩立像が安置されており、「火伏せの地藏さま」として信仰を集めている。</p> <p>市指定文化財</p>	なし	
12000 6-11	千葉県		<p>【災害名】柏大火</p> <p>【発生日時】昭和30年12月25日</p> <p>【被災地】柏市柏</p> <p>【災害の概要】火災 全焼43棟 半焼3棟 罹災者33世帯 181人 焼失面積約3617㎡</p> <p>【教訓等】この火災を教訓に柏駅前通り商店街の防火建築化の実施。 消防の常設設置の開始。</p>	文献（古文書、書簡等）	柏市消防のあゆみ 柏市消防本部 柏市消防団
12000 6-9	千葉県		<p>【災害名】折立村の大火</p> <p>【発生日時】元禄14年5月</p> <p>【被災地】白井市折立</p> <p>【災害の概要】地区内の寺院をはじめ、家々の多くが焼失</p> <p>【教訓等】地区内に所在する寺院である来迎寺に、樹齢約400年の公孫樹(イチョウ)があるが、大火にあった際に焼け残ったため、火伏せの公孫樹と呼ばれ、信仰を集めている。</p> <p>現在も火災の影響で主幹が2つに分離し、一部炭化している箇所がみられる。</p> <p>市指定天然記念物。</p>	写真	・教育委員会が撮影した写真データ ・折立熊野神社の棟札に、地震に関する記述有り
12226 2-1	千葉県	富津市	<p>【災害名】元禄地震</p> <p>【発生日時】元禄16年(1703年)11月23日</p> <p>【災害の概要】元禄地震による津波災害。</p> <p>【被災地】富津市</p> <p>【教訓等】</p>	文献	「富津市史」通史(昭和57年3月31日発行)
12226 2-2	千葉県	富津市	<p>【災害名】関東大震災</p> <p>【発生日時】大正12年(1923年)9月1日</p> <p>【被災地】富津市（飯野村、富津町、金谷村、天神山村、吉野村）</p> <p>【災害の概要】市内各地区において住家全半壊、死傷者あり</p>	文献	「富津市史」通史(昭和57年3月31日発行)
12234 3-1	千葉県	南房総市	<p>【災害名】元禄地震</p> <p>【発生日時】元禄16年(1703年)11月23日</p> <p>【災害の概要】元禄地震と津波災害。最大波高8m。</p> <p>【被災地】南房総市（旧安房郡）</p> <p>【教訓等】</p>	文献	房総沖巨大地震（伊藤一男1983年）
12234 3-2	千葉県	南房総市	<p>【災害名】関東大震災</p> <p>【発生日時】大正12年(1923年)9月1日</p> <p>【被災地】南房総市（旧安房郡）</p> <p>【災害の概要】関東大震災による甚大な被害。</p> <p>【教訓等】関東大震災時の安房軍の被災状況及び軍知音の活動について述べられている。</p>	文献	安房震災誌（千葉県安房郡役所、大正15年3月31日）
12237 8-1	千葉県	山武市	<p>【災害名】元禄地震</p> <p>【発生日時】元禄16年(1703年)11月23日</p> <p>【災害の概要】元禄地震による津波災害。</p> <p>【被災地】山武市（旧成東町）</p> <p>【教訓等】元禄の大津波は九十九里沿岸に甚大な被害をもたらし、元禄大津波による犠牲者の霊は里人たちによって手厚く葬られ、埋葬地には供養碑が建設された。各地に建てられた碑は、俗に「津波塚」と呼ばれ、九十九里浜の場合、旧成東町の「松ヶ谷千人塚」を北限として一宮川流域までの間、伝承地を含め合計18ヶ所の合葬塚が認められた。</p>	・文献資料 ・碑文	「成東のむかしばなし」 供養塚(山武市) 等

現在までに語り継がれる『災害』について

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
13000 1-1	東京都		【災害名】安政江戸地震 【発生日時】1855年11月11日(安政二年乙卯十月二日)午後10時過ぎ? 【被災地】関東地方一帯 【災害の概要】災害・被害の詳細は、出典文献情報参照 【教訓等】出典文献情報を参照	・文献資料	東京都：安政江戸地震災害誌(昭和48年3月)
13000 1-2	東京都		【災害名】関東大震災 【発生日時】1923年9月1日 【被災地】関東地方一帯 【災害の概要】出典文献情報を参照 【教訓等】出典文献情報を参照	・文献資料	東京都(公文書館)：関東大震災と情報(東京都公文書館所蔵関東大震災関係資料目録)，(平成8年12月)
13000 1-3	東京都		【災害名】三宅島噴火災害 【発生日時】1983年10月3日 【被災地】三宅島 阿古、坪田 【災害の概要】噴火に伴う溶岩流・降灰(出典文献情報を参照) 【教訓等】出典文献情報を参照	・文献資料	東京都：記録 昭和58年三宅島噴火災害(昭和60年9月)
13000 1-4	東京都		【災害名】チリ地震津波 【発生日時】1960年5月23日 【被災地】小笠原村父島 大村、奥村 【災害の概要】津波により住居他に被害 【教訓等】歴史の浅い小笠原では唯一経験者の記録が残る津波被害である。	・文献資料	渡辺偉夫(東京大学出版会)：日本被害津波総覧(1997)
13000 1-5	東京都		【災害名】伊豆大島噴火災害 【発生日時】1986年11月15日～ 【被災地】大島町全域 【災害の概要】噴火に伴う地震・溶岩流・降灰(出典文献情報を参照) 【教訓等】全島避難は初めてであった。	・文献資料	東京都：昭和61年(1986年)伊豆大島噴火災害活動誌(昭和63年3月)
13102 4-1	東京都	中央区	【災害名】明治5年の大火 【発生日時】明治5年2月26日 【被災地】京橋、銀座、築地 【災害の概要】類焼町数41カ所、罹災人口19,872人、焼死者8人、負傷者65人を出したこの火災が区内の一大革新の基となった。 【教訓等】惨事を繰り返さないため、半永久的建物の建設、銀座煉瓦街建設の決定をみた。	・文献資料	中央区史 昭和33年12月25日発行
13102 4-2	東京都	中央区	【災害名】白木屋の火事 【発生日時】昭和7年12月16日 【被災地】日本橋 【災害の概要】死者14名のうち墜死者が13名であり、都市型火災の原点となった火災である。 【教訓等】・高層建物の立体火災として未曾有のものであり、防火・消火・人命救助上の貴重な体験となった。・この火災により婦人洋服が普及し、服装の変遷上にも大きな影響を及ぼした。	・文献資料	中央区史 昭和33年12月25日発行
13102 4-3	東京都	中央区	【災害名】明治43年の水災 【発生日時】明治43年8月10日～11日 【被災地】日本橋浜町、霊岸島、月島 【災害の概要】明治年間を通じて最も被害の甚だしい大水であり、浸水戸数142,271戸に達し、区内でも多大な被害が出た。 【教訓等】治水に対する世論を呼び起こし、根本的な治水対策を促すこととなった。	・文献資料	中央区史 昭和33年12月25日発行
13102 4-4	東京都	中央区	【災害名】大正6年の風水害 【発生日時】大正6年10月1日 【被災地】佃、月島、築地、木挽町、湊町 【災害の概要】気象台開設以来の最低気圧を記録した台風は、満潮時と重なり、東京の北湾岸一帯には稀にみる大津波が押し寄せ、区内各町は大正風水災史上最大の被害をこうむった。 【教訓等】荒川の増水と満潮時における東の大風は隅田川の河口地域には禁物であり、それは「東風大水」の言葉となった。	・文献資料	中央区史 昭和33年12月25日発行
13105 9-1	東京都	文京区	【災害名】昭和56年7月22日の集中豪雨 【発生日時】昭和56年7月22日 【被災地】文京区一帯 【災害の概要】集中豪雨により、区内2,722世帯が床上又は床下浸水の被害を受け、9,032人が影響を受けた。また、災害救助法の適用がなされた。 【教訓等】初めて文京区に災害救助法が適用されたが、目黒区・新宿区よりも一日遅れで適用された。大規模水害の際、速やかに罹災世帯数の把握をすることが教訓となった。	・文献資料	昭和56年東京都文京区議会会議録 文京区・昭和57年

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
13105 9-2	東京都	文京区	【災害名】昭和56年10月22日の台風 【発生日時】昭和56年10月22日 【被災地】文京区一帯 【災害の概要】台風により、区内2,016世帯が床上又は床下浸水の被害を受けた。また、災害救助法が適用された。 【教訓等】昭和56年7月22日にも災害救助法が適用される大雨があり、3か月で二回災害救助法が適用される事態となった。区内のある地域では、首まで水に浸かってしまう程大きな浸水被害があった。	・文献資料	昭和56年東京都文京区議会会議録 文京区・昭和57年
13105 9-3	東京都	文京区	【災害名】昭和57年9月12日の台風 【発生日時】昭和57年9月12日 【被災地】文京区一帯 【災害の概要】台風18号により、区内1,606世帯が床上又は床下浸水の被害を受けた。また、災害救助法が適用された。 【教訓等】前年に引き続き、災害救助法が適用される事態となった。水害は同じような場所で繰り返し発生するため、対策として透水性舗装等を実施する検討を開始した。	・文献資料	昭和57年東京都文京区議会会議録 文京区・昭和58年
13107 5-1	東京都	墨田区	【災害名】関東大震災 【発生日時】大正12年9月1日 【被災地】東京・神奈川・千葉・静岡・埼玉・茨城・山梨 【災害の概要】震源：相模湾北部M7.9 【教訓等】	・文献資料 ・碑文 ・絵画 ・写真、写真絵葉書	
13107 5-2	東京都	墨田区	【災害名】カスリーン台風（キャスリン台風） 【発生日時】昭和22年9月15日 【被災地】東京墨田区・江東区・荒川区・板橋区・足立区・葛飾区・江戸川区 【災害の概要】死者7名、負傷者3名、行方不明7名 浸水被害；床上浸水1280戸・床下浸水6027戸 うち墨田区被害；床上浸水280戸・床下浸水2025戸 【教訓等】昭和22年台風で被害を受けた江東区亀戸の赤十字救護班による活動の様子を撮影した記録写真。寄贈者は昭和17年から37年まで赤十字で活動していた。	・写真	昭和22年撮影
13108 3-1	東京都	江東区	【災害名】大正6年の大津波 【発生日時】大正6年9月30日～10月1日 【被災地】砂村・洲崎 【災害の概要】9月24日に南太平洋パラオ諸島付近で発生した台風が10月1日払暁、京浜地方を通過。関東地方を風速34mの大暴風雨が襲い、砂村・洲崎方面に津波が押し寄せ、江東地域全域にわたって浸水し、床上2～3尺から低地では軒端に達し、家屋の倒壊多く、多数の死者が出た。江東区史 中巻（平成9年発行）506P 【教訓等】東と南の間からくる風を「辰巳風」といい、これが吹くと大雨がくる。雨が2、3日降ると、みんな丸太を買ってきて打ちつけて、その上に畳をあげた。	・有形文化財「砂村波除地蔵由来碑」所在：江東区南砂2-23-9波除地蔵尊堂 ・有形文化財「大正六年海嘯横死者供養塔」所在：江東区北砂4-22-6持宝院	・江東区史（平成9年） ・古老が語る江東区の災害（昭和62年） ・江東区の文化財（有形・有形民俗文化財 昭和61年）
13116 4-1	東京都	豊島区	【災害名】水久保の大洪水 【発生日時】大正3年（1914年）8月 【被災地】豊島区東池袋四丁目付近（当時高田村雑司ヶ谷） 【災害の概要】8月12～13日、24日、26日の三度の大雨により神田川、神田上水、千川上水、藍染川などが氾濫した。このため、戸塚から小石川、本郷通等まで被害が広がった。死者41名、負傷者116名、浸水家屋19万4,889戸であった。 【教訓等】巢鴨監獄の東側崖下に集まった濁流が、水久保一帯に押し寄せ、当時はこの辺に多かった棟割長屋を水漬けにした。トタン屋根上の逃げ遅れの人々を田舟で救出したという。	・文献資料	豊島区立豊島図書館 郷土シリーズ・第3集『豊島の歳時記』昭和53年3月30日
13116 4-2	東京都	豊島区	【災害名】関東大震災 【発生日時】大正12（1923年）年9月1日 【被災地】豊島区 【災害の概要】関東大震災 【教訓等】関東大震災による豊島区内の被害 死者11人、重傷4人、軽傷6人、全壊78戸、半壊22戸、全焼1戸	・碑文内容 ・写真（碑文全景）	豊島区史編纂委員会編 『豊島区史通史編二』昭和58年11月30日
13116 4-3	東京都	豊島区	【災害名】水久保の大火事 【発生日時】大正15（1926年）年3月15日 【被災地】豊島区東池袋四丁目付近（当時高田町雑司ヶ谷） 【災害の概要】焼失家屋600戸、罹災者2,000人を超えた 【教訓等】水久保付近はかつて小さな棟割長屋がひしめいていた。路地の幅も約1mほどであった。たびたび、火災がおこることで有名だったが、3月15日夜に起こった火事は翌日の昼頃にやっと鎮火した程大規模だったが、人身に被害はなかった。罹災者は町立高田第四尋常小学校（旧日出小）に収容した。	・文献資料	豊島区立豊島図書館 郷土シリーズ・第3集『豊島の歳時記』昭和53年3月30日

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
13118 1-1	東京都	荒川区	<p>【災害名】日暮里大火</p> <p>【発生日時】昭和38年(1963年)4月2日</p> <p>【被災地】荒川区東日暮里(当時日暮里町)</p> <p>【災害の概要】マッチでたばこの火をつけた社員が、マッチの燃え殻を床に捨てたところ、容器に入れてあったシンナーに引火し、出火した。この大火で36棟、5,098㎡が焼失した。当日は北の風10.5メートル、湿度17%で火災警報発令中であったため、たちまち燃え広がった。午後3時頃出火し、午後10時頃鎮火した。出火が昼間だったせいもあり、幸い死者がなかった。(けが人約220名)</p> <p>【教訓等】被災された方の中である方は、ブリキ製の箱に入れておいた紙幣は灰になったが、日本銀行へ持参すると、灰の重さを量り、新しい紙幣と交換してくれたという。この経験から、紙幣を保管する時は、金属の入れ物に入れておくことにしているとのことである。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・HP</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・荒川区史 著作：荒川区 発行：平成元年</li> <li>・東京消防庁荒川消防署ホームページ</li> </ul>
13122 9-1	東京都	葛飾区	<p>【災害名】浅間山噴火</p> <p>【発生日時】天明3年(1783)7月6日～8日</p> <p>【被災地】関東地方一帯</p> <p>【災害の概要】浅間山の噴火は、関東地方に大きな被害を与える。山津波と大降灰によりできたダムが決壊し、下流は大洪水となり死者約2,000余人、埋没個数は1,800戸にのぼる。</p> <p>【教訓等】特に、江戸川、利根川の被害が大きく、最下流の当地域も同様で、土流からの死者も少なからず漂着した。その供養のために村人たちによって碑が建立された。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・碑文(柴又5-8 題経寺墓「浅間山噴火川流溺死者供養碑」)</li> <li>・写真(石碑全体)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「葛飾の文化財」葛飾区教育委員会1995ほか</li> </ul>
13122 9-2	東京都	葛飾区	<p>【災害名】安政大地震(江戸)</p> <p>【発生日時】安政2年(1855)10月2日</p> <p>【被災地】江戸</p> <p>【災害の概要】直下型大地震。M6.9、死者1万人。区内では亀有の被害が大きい。</p> <p>【教訓等】この地震によって石造地蔵も破損し、住職たちが喜捨を募って安政4年に新たに造立されたことが台石に記されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・碑文(西新小岩5-21-20 東光寺)</li> <li>・写真(地蔵像全体)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>葛飾区教育委員会「葛飾の文化財」1995</li> </ul>
13122 9-3	東京都	葛飾区	<p>【災害名】安政大地震(江戸)</p> <p>【発生日時】安政2年(1855)10月2日</p> <p>【被災地】江戸</p> <p>【災害の概要】直下型大地震。M6.9、死者は1万人にものぼる。区内では亀有の被害が大きかったといわれる。</p> <p>【教訓等】この地震によって細田稻荷神社の石造鳥居も倒壊したが、文久2年(1862)氏子に人々によって再建されたことが記されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・碑文(細田3-17-6 細田稻荷神社「石造鳥居」)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>葛飾区教育委員会「葛飾の文化財」1995</li> </ul>
13123 7-1	東京都	江戸川区	<p>【災害名】丙午の大水</p> <p>【発生日時】弘化3年(1846年)6月～7月</p> <p>【被災地】江戸川区区内では旧下平井村、旧上一色村、旧本一色村、興之宮村</p> <p>【災害の概要】6月上旬から関東に雷雨を含む長雨、下旬に豪雨がいった。28日に埼玉県本川俣村付近で利根川の堤が決壊。</p> <p>【教訓等】「丙午の大水」の通称を持つ水害で、江戸市中と周辺の低地帯が被災した。東葛西の南部に位置する本区では、各村間の伝達組織を使って上流部の情報を収集し、各村に的確な指示を出した。流言を予防し、村内の協力体制の早期確立にも裨益したものと考えられる。その結果、洪水の予想進路の松本・鹿骨領村域に急急の堤防(囲築)を設け、下流部の被害を防いだ。これは、長く災害を未然に防いだ「囲築」の伝承として伝えられている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料(関連する古文書の内容を含めて「江戸川区史」第3巻(昭和51年)にデータあり)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「利根川100年史」建設省関東地方建設局(昭和62年)297頁</li> <li>・「江戸川区史」第3巻(昭和51年)948頁</li> </ul>
13201 2-1	東京都	八王子市	<p>【災害名】八王子大火</p> <p>【発生日時】明治30年4月22日</p> <p>【被災地】八王子市元横山町から市街地一帯</p> <p>【災害の概要】午後3時40分出火、午後8時鎮火 焼失家屋3,341戸 焼失面積268,656平方メートル 死者42人(うち3人は溺死) 負傷者223人(東京消防庁調べ)</p> <p>【教訓等】当日は朝のうちから風が激しく、朝のうちは雨。午後から晴れ模様。風速は10メートル強だったと伝えられる。風が強かったため延焼も早かった。火の粉は東京中野から目黒付近まで飛んだという伝承もある。古い八王子の町をほぼ全滅させた大火で、八王子の都市計画に大きな影響をもたらした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『八王子市史』昭和43年発行 八王子市役所</li> </ul>
13203 9-1	東京都	武蔵野市	<p>【災害名】昭和33年台風22号</p> <p>【発生日時】昭和33年9月26日</p> <p>【被災地】武蔵野市吉祥寺周辺</p> <p>【災害の概要】昭和33年9月26日に台風22号が来襲、市内730戸が浸水し、罹災総数が3800人に達した。</p> <p>【教訓等】26日夕刻から職員の一部に夜間勤務、消防団の全員待機、警察に対する避難命令の発動の申請を行い、対策を行った。27日には、職員の半数を対策勤務に当て、消防団や日赤奉仕団と協力して排水及び救援活動を行った。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・写真</li> <li>・その他(調査カードを作り記録)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市報むさしの(昭和33年10月1日、15日号)</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
13205 5-1	東京都	青梅市	<p>【災害名】御岳山麓の洪水</p> <p>【発生日時】寛保2年(1742)8月1日 安政6年(1859)7月25日</p> <p>【被災地】御岳村滝本地区</p> <p>【災害の概要】寛保2年と安政6年、大雨のため御岳山麓の滝本川が氾濫して沿岸の北島家では家屋が土砂に埋まり大被害をこうむった。</p> <p>【教訓等】二回の水害による大被害を教訓に、六個の大自然石を運ばせて洪水進入路に立て並べ、「水防石」とした。</p>	<p>・碑文(水防石を置いたことを記念して、石のひとつに以下の文字を刻み込んでいる。「寛保二壬戌八月朔日百十八年日安政六己未七月二十五日大洪水二度共此所推懸依後世防禦今大石六引居置北島上家左門代」)</p>	「市内めぐりある記」—御岳山麓の水防石—広報青梅(昭和40年8月20日号)
13205 5-2	東京都	青梅市	<p>【災害名】今井馬場崎地区の浸水</p> <p>【発生日時】明治43年8月</p> <p>【被災地】今井3丁目(今井馬場崎地区)</p> <p>【災害の概要】今井馬場先地区は昔から長雨が降ると浸水に悩まされてきた。特に明治43年8月には畑が10万平方メートル、家屋10軒余が浸水の被害を受けた。地区の中心部は水深3メートルの深さまで水没した。</p> <p>【教訓等】浸水被害回避のための対策として、全長500メートル、最大深度4メートル、幅1.5メートルの掘割を作って排水し、後に土管を埋設して暗渠とする工事を行った。</p>	<p>・碑文(昭和44年5月、暗渠排水工事の完成を記念して今井馬場崎1,147番地に水窪排水記念碑を建設した。(現在、今井地区にある水窪公園内に移設))</p>	青梅市文化財ニュース第114号(平成9年4月15日発行)
13205 5-3	東京都	青梅市	<p>【災害名】新町の降雹</p> <p>【発生日時】昭和2年5月15日</p> <p>【被災地】新町地区一帯</p> <p>【災害の概要】昭和2年5月15日、新町地区一帯に激しい降雹があり、桑畑を中心に農作物に大きな被害が出た。</p> <p>【教訓等】新町地区の人々は、降雹のあったことを忘れず、再びこのような被害のないことを祈念し、昭和3年3月この塔を建立した。</p>	<p>・碑文</p>	「青梅再発見」—新町の降雹記念塔—広報青梅(平成8年4月15日号)
13208 0-1	東京都	調布市	<p>【災害名】関東大震災</p> <p>【発生日時】</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】「なまずの仕返し」8月に入って暑い日が続く年だった。子どもたちが多摩川で鮎をとっていると、大なまずが何匹も足元に浮き上がり、口ばくばくしていた。面白いからみんなで突っついたり。口の中に石を押し込んだりしていた。すると、翌日の9月1日に大地震が来た。川はもりあがり、赤い水が渦巻いた。</p> <p>【教訓等】動物の行動から地震が予測できる可能性があることを示唆しているものと思われる。</p>	<p>・文献資料</p>	調布の民話集 調布ブッククラブ民話研究会会員著 調布ブッククラブ 1984.06 116P
13219 5-1	東京都	狛江市	<p>【災害名】多摩川決壊</p> <p>【発生日時】昭和49年8月31日深夜から9月1日夕方にかけて</p> <p>【被災地】狛江市</p> <p>【災害の概要】昭和49年(1974)8月31日深夜から9月1日夕方にかけて、台風16号の影響により多摩川の水位が上昇を続けた。1日昼ごろに二ヶ領宿河原堰左岸下流の取付部護岸が一部破壊されたのを発端に、激しい迂回流が生じたため、最終的に本堤防260mを崩壊させたうえ、猪方地区の家屋19棟を流失させる被害をもたらした。</p> <p>【教訓等】この多摩川水害は、首都圏の住宅地で発生し、3日間という長時間にわたった特異な水害。</p>	<p>・文献資料</p> <p>・碑文</p> <p>・写真</p>	発行日 昭和50年9月1日 タイトル「多摩川堤防決壊記録」発行 狛江市役所
13361 2-1	東京都	大島町	<p>【災害名】元町大火</p> <p>【発生日時】1965年(昭和40年)1月11日</p> <p>【被災地】元町地区</p> <p>【災害の概要】瞬間最大風速36.2メートル、11日午後11時10分頃出火、翌12日午前6時45分鎮火。全焼584棟、焼失面積165,000平方メートル、罹災世帯408世帯1,273人</p> <p>【教訓等】大島町の火災の中で、最も大きな火災であった。冬の期間は、西よりの季節風が強く、吹き荒れる日が続くが、元町大火を教訓にその後大きな火災は発生していない。</p>	<p>・文献資料</p>	大島町史(通年編) 平成12年3月28日発行 768p
13361 2-2	東京都	大島町	<p>【災害名】伊豆大島近海地震</p> <p>【発生日時】1978年(昭和53年)1月14日</p> <p>【被災地】大島町全域</p> <p>【災害の概要】伊豆大島近海で地震群発、最大地震はM7.0、大島では震度5を記録。家屋一部損壊150棟、各所で崖崩れの発生。被害は伊豆半島に集中した。</p> <p>【教訓等】昭和53年1月13日の震度3をはじめ、14日には震度5を含め有感地震167回、15日震度3など43回、16日は19回と地震が群発して発生。この年の来島客は、群発地震の影響で前年比18万人の減少となった。</p>	<p>・文献資料</p>	伊豆諸島東京移管百周年史(上巻)926p(下巻)146p 昭和56年3月30日発行



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
13381 7-3	東京都	三宅村	【災害名】昭和37年噴火 【発生日時】昭和37年8月2日 【被災地】東京都三宅島三宅村島内(雄山) 【災害の概要】雄山山腹より噴火。その後、火山性地震が長期に続き、学童の疎開があった。 【教訓等】		
13381 7-4	東京都	三宅村	【災害名】平成12年三宅島噴火 【発生日時】平成12年6月26日 【被災地】東京都三宅島三宅村島内(雄山) 【災害の概要】雄山より噴火。その後、火山性ガスが長期に続き、全島民が島外へ避難。平成17年2月1日避難指示解除。また、避難指示解除後も火山性ガスの発生が続いている。 【教訓等】特になし		
13401 5-1	東京都	八丈町	【災害名】台風13号 【発生日時】昭和50年10月5日 【被災地】東京都八丈町 【災害の概要】八丈島を襲った「台風13号」は、最大瞬間風速67.8メートル、家屋の損壊2,403棟、農業施設・商工被害など、被害総額55億円の大火害となった。 【教訓等】八丈島では、湿気が多いため、高床式の家が用いられていた。基礎を打つことなく、玉石の上に柱を乗せただけの造りが昔から用いられていた。「13号台風」の強風によりこうした家は持ち上げられ、移動した。「家が動いた」という教訓により、その後、家を建てる者は基礎を打つようになった。	・文献資料	東京都八丈町(発行)台風13号の記録編集委員会(編集):八丈島台風13号災害の記録:昭和52年1月20日発行
13421 0-1	東京都	小笠原村	【災害名】台風17号 【発生日時】昭和58年11月6日 【被災地】小笠原村父島及び母島 【災害の概要】小笠原諸島に、過去最大級の甚大な被害をもたらした台風17号による台風災害(11月6日夜から7日朝にかけて父島~母島間を北東に進み、平均風速22.6m/s、瞬間風速58.6m/s、最低気圧932.5mbを記録した。) 【教訓等】この台風は、最大瞬間風速58.6mを記録しており、三日月山山頂の風速計では78.9mを記録し、その後吹き飛ばされてしまうほどの暴風であった。昭和58年の台風17号の被害は過去最大級であり、且つ甚大な被害を被ったため、チリ地震津波を体験した島民のなかにも、津波より台風が怖いと感じている方がいる。また、現在では、台風の接近に伴い、小笠原諸島に到達する24時間前にはどこの家庭でも台風養生を行い、台風に備えている。	・文献資料	1) 小笠原総合事務所、東京都小笠原支庁、小笠原村:小笠原諸島の概要、昭和61年12月 p.16 2) 小笠原村教育委員会:ひらけゆく小笠原、昭和63年3月 p.52
13421 0-2	東京都	小笠原村	【災害名】チリ地震津波(小笠原諸島) 【発生日時】昭和35年5月24日 【被災地】小笠原村父島及び母島 【災害の概要】チリ沖地震の津波災害(マグニチュード8.5、津波高3~4メートルと推定されている) ※小笠原は当時、米軍の施政権下に置かれており、小笠原のチリ津波被害が日本国内で話題になっておらず、また、その状況について、在来島民の話には聞くものの、まとまった記録が乏しくその真相が明確でない。 【教訓等】漁協側の海水が殆どひいたため海底が現れ、二見岩とオデコノ鼻の間から流れ出る海水が、二見港に音を立てながら滝のように流れ落ちていた。津波により流された家が木に引っ掛り、全損を免れた。津波がひいたあとには、ヘドロや様々なものが散乱し、魚も打上げられていた。津波がきたら高台に逃げるしかない、興味本位で海岸線に近づかないことが重要。	・文献資料	1) 東京都総務局総合防災部:津波浸水予測調査報告書(小笠原諸島)平成17年2月発行 P.15,16 2) 東京都立小笠原高等学校:東京都立小笠原高等学校 研究紀要第5~8号平成3~6年 p.39~46
14000 7-1	神奈川県		【災害名】嘉永6年の小田原大地震 【発生日時】嘉永6(1853)年2月2日 【被災地】箱根関所より東の方、特に小田原・大磯は被害甚大 【災害の概要】人家を倒し火事出来人死に多く、恐ろしきことに候とあり 【教訓等】出典情報資料の内容参照	・文献資料	・武蔵国橋本郡下菅田村川名家文書 武蔵国橋本郡下菅田村記録帳三番 嘉永6年2月2日の頃
14000 7-2	神奈川県		【災害名】相州大山大地震 【発生日時】安政元(1854)年12月31日 【被災地】相模国大山寺 【災害の概要】安政元年12月大晦日 安政2年1月2日前不動明王より末社寺院まで残らず焼け、また不動明王本社とも残らず焼失 谷間の寺がただ2軒残った 2,30人焼死 【教訓等】去年(安政元)11月に秦野へ煙草を買いに行った時その地の人が言うには、先だって大山殊の外震動鳴り、下田湊で津波があって諸人が難儀したこともあり、今度は山津波でもあるのかと奇異に思い用心していたとのこと それでも火事が起きたのは神慮のなすところで、凡夫の及ぶところではない	・文献資料	・武蔵国橋本郡下菅田村川名家文書 武蔵国橋本郡下菅田村記録帳三番 安政2年1月2日の頃 ・他に資料として、「伊勢原市史資料編続大山」伊勢原市p.416~、 ・「相州大山」内海弁次著、神奈川県新聞社p.238~240等

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
140007-3	神奈川県		<p>【災害名】安政3年の大風</p> <p>【発生日時】安政3(1856)年8月25日</p> <p>【被災地】県内のほぼ全域</p> <p>【災害の概要】今夕方より辰巳大風又西南大風 諸木人家などをことごとく吹き倒し荒れること誠に稀なることに候とある</p> <p>【教訓等】出典情報資料の内容を参照</p>	・文献資料	・武蔵国橘樹郡下菅田村川名家文書 武蔵国橘樹郡下菅田村記録帳三番 安政3年8月25日の頃 ・他に「神奈川県史料編10」に類似資料数点あり
140007-4	神奈川県		<p>【災害名】関東大震災</p> <p>【発生日時】大正12年(1923年)9月1日</p> <p>【被災地】ほぼ県内全域</p> <p>【災害の概要】震源地は北緯35.3度、東経139.3度、相模湾北部。マグニチュード7.9。最大震度6。</p> <p>【教訓等】大震災経験者の体験談を通じて「地震が起きた瞬時の恐怖、火事や余震の怖さ、水や食糧の確保、住宅の復旧、情報不足による混乱」などの教訓が多く語られている。</p>	・文献資料 ・写真(全108枚)	・金沢区老人クラブ連合会：二十一世紀への伝言―語り継ぐ関東大震災の思い出―(1991年) ※他に県内各地域で同様な体験記が刊行されている。(計10タイトル) ・「関東大震災被災関係写真帳」(1923年)(震災直後の被災状況を撮った現物写真)
140007-5	神奈川県		<p>【災害名】寛永十年の小田原地震</p> <p>【発生日時】寛永10年(1633年)1月21日</p> <p>【被災地】小田原地方</p> <p>【災害の概要】震源地は熱海沖、マグニチュード7.1と推定される。武蔵野国(現東京都)、相模国(現神奈川県)、伊豆国(現静岡県)一帯に起き、特に小田原は被害甚大だった。</p> <p>【教訓等】あつという間に家々が倒壊し、犠牲者が多く出たことから「地震の時は少しにても早く起きるが本手なり。思案する内に大動になると起きる事ならず。左右上下へ動く物なれば戸障子もあかず。地震と思はば先づ戸をあくるものなり。其の上火の用心兼て心得あるべきなり」と後世の人に教えを残した。 ※上記の内容は引用文献「日向変動記事」より。</p>	・文献資料	著者：播摩晃一編 タイトル：西さがみ地震《西さがみ庶民史録》地震記事総集 P.168-169 発行年：平成7年(1995年) ※上記文献の参考文献「寛永十年相模国大地震之図」は県立図書館所蔵。
140007-6	神奈川県		<p>【災害名】関東大震災</p> <p>【発生日時】大正12年(1923年)9月1日</p> <p>【被災地】神奈川県全域</p> <p>【災害の概要】同日午前11時58分に発生したマグニチュード7.9の初発地震と、その後2回連続して発生した同程度の余震により、県内全域で建物が倒壊し、火災の発生と延焼、海岸部での津波、急斜面での山崩れ等が発生し、多数の人的物的被害を生じた。</p> <p>【教訓等】関東大震災の被害については、県内各地で語り継がれており、また震災の犠牲者に対する供養塔や慰霊碑、あるいは復興記念碑が各地に建設され、現存するものが多数ある。神奈川県立歴史博物館の建物は震災で内部を焼失した旧横浜正金銀行本店であることから、その犠牲者の幽霊が出現するという噂が、昭和43年から現在まで新聞雑誌などで時折取り上げられている。</p>	・文献資料・慰霊碑・復興記念碑の所在リスト(未完成)・写真	・被害の体験記 ・特別展図録『80年目の記憶 関東大震災といま』(平成15年、神奈川県立歴史博物館) ・震災写真・絵葉書・写真帳各種
141305-1	神奈川県	川崎市	<p>【災害名】多摩川洪水</p> <p>【発生日時】1589(天正17)年旧暦9月</p> <p>【被災地】上丸子、沼部</p> <p>【災害の概要】洪水による流路移動で境界争い</p> <p>【教訓等】下流部での洪水により、流路移動し、村の境界をめぐる争いが発生</p>	・文献資料	増淵和夫(2002)多摩川の洪水と環境変動. 多摩川環境調査助成集, no.129, とうきゅう環境浄化財団, 294pp.
141305-2	神奈川県	川崎市	<p>【災害名】多摩川洪水</p> <p>【発生日時】1803(享和3)年、秋</p> <p>【被災地】菅をはじめ稲毛領21ヶ村</p> <p>【災害の概要】各所で破堤、菅をはじめ稲毛領21ヶ村官金千両</p> <p>【教訓等】破堤により被害大。18世紀中期以前に比べ、後期以降に右岸稲城市から多摩区登戸にかけての水害多くなる。これは、築堤により、集落や田畑は沖積低地に拡大し、そのため、破堤すると被害が大となったと思われる。</p>	・文献資料	佐保田家記録(小塚光治(1966)川崎史話 下巻 多摩史談会)
141305-3	神奈川県	川崎市	<p>【災害名】多摩川洪水</p> <p>【発生日時】1898(明治31)、8.24-26</p> <p>【被災地】宿河原</p> <p>【災害の概要】出水、取り入れ口大破損</p> <p>【教訓等】昭和49年8月31日から9月1日の泊江水害と同様に、旧河道に洪水流入。明治後半になると、洪水は規模の大きい水害となる傾向がある。沖積低地、特に多摩川デルタの交通路を含めて開発が進んだためと思われる。</p>	・文献資料	東京市史稿(1915)：東京市史稿 変災篇第二 東京市役所, pp1002
142018-1	神奈川県	横須賀市	<p>【災害名】明応の大地震</p> <p>【発生日時】明応7年(1498年)</p> <p>【被災地】神奈川県三浦市三崎町、同横須賀市神明町1-15</p> <p>【災害の概要】南海・東南海等に発生した著名な地震の一部 津波の発生を伴っていた</p> <p>【教訓等】三崎町本瑞寺の年代記のような記録中に、明応の大地震と推定される記述がある(未刊行)。また、実際に明応の津波跡と見られる発掘現場は、横須賀市神明町の蓼原東遺跡で見られる(報告書刊行済)。</p>	・文献資料	・横須賀市教育委員会編「蓼原東遺跡」(1995年) ・「本瑞寺文書」未刊

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
142018-2	神奈川県	横須賀市	<p>【災害名】元禄地震                      【発生日時】元禄16年(1703年)11月22日夜半                      【被災地】神奈川県横須賀市浦賀町、三浦市松輪、逗子市桜山                      【災害の概要】いわゆる元禄地震の際の特定地域での被害状況が判明する                      【教訓等】横須賀市浦賀地区では、東浦賀地区の被害状況が数字で押さえられる。また、三浦市松輪地区では、福泉寺境内墓地に地震発生日にいくつもの死亡者が見えるので、地震の被害によるものと推定できる。逗子市桜山では、陸地へ一里の津波が押し寄せたという。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文(三浦市松輪、福泉寺墓地墓碑群)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・横須賀史学研究会編「相州三浦郡東浦賀村(石井三郎兵衛家)文書」第4巻(1988)</li> <li>・逗子市編「逗子市史資料編1」1985</li> <li>・「石井三郎兵衛家文書」</li> </ul>
142018-3	神奈川県	横須賀市	<p>【災害名】宝永山噴火によるの火山灰被害                      【発生日時】宝永4年(1707)12月16日                      【被災地】三浦半島の相模湾側、鎌倉地区                      【災害の概要】火山灰による田畑への降石があり、後日周辺河川へ流入、堆積し、河床を押し上げ水害を発生させた。                      【教訓等】鎌倉市「嶋村家文書」のうち、宝永5年5月付け、鎌倉郡津村、腰越村名主より幕府御用金にて御普請願書の記事(未刊資料)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	鎌倉市「嶋村家文書」(未刊資料)
142018-4	神奈川県	横須賀市	<p>【災害名】享保年間の大雨                      【発生日時】享保元年(1716)8月12日～13日、同13年(1728)9月2日                      【被災地】神奈川県逗子市桜山                      【災害の概要】大雨により洪水。                      【教訓等】「大雨大川出申候」とのみ記載。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	逗子市編「逗子市史 資料編1」1985
142018-5	神奈川県	横須賀市	<p>【災害名】享保・元文年間の雹被害                      【発生日時】享保14年(1729)5月2日、元文5年(1740)5月3日                      【被災地】神奈川県逗子市桜山                      【災害の概要】隣村にかけておもさ30匁の雹が8寸積もる(享保14年)。また、重さ20匁の雹が5寸積もる(元文5年)。                      【教訓等】元文5年の際は麦作に被害発生とのみ記載。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	逗子市編「逗子市史 資料編1」1985
142018-7	神奈川県	横須賀市	<p>【災害名】安政地震                      【発生日時】安政元年(1854)11月4日、安政2年10月2日                      【被災地】神奈川県横須賀市太田和                      【災害の概要】いわゆる安政地震(二回)の地元における被害状況と津波の発生を具体的に知る。                      【教訓等】安政元年「(太田和村では)昼五ツ半時(午前9時頃)ニ地震始まり、九ツ半時(午後1時)頃迄大地震、夜ニ入り而も時々地震」「昼頃より大浪ニ而、尤、引塩(引き潮)も長井迄見渡候分引塩ニ成、昼頃はじめ忠兵衛、権左衛門作り迄あげ、次之塩は少々、三度目浪ニ而吉右衛門殿前道迄あげ、前通りは林(林村)大次郎、忠兵衛作り畑け下迄大田一面ニ浪打あげ、夫より之浪は少々引塩ニ成、大橋下四五寸迄あげ、はし杭不残落、寔ニ近年希なる珍鋪事」(十一月六日条)「昨四日、浦賀谷戸新地之辺、床之上へ水上り候よし、桜山たこい川(桜山村田越川)橋落、」安政二年「夜四ツ時ニ大地震、土蔵かへ痛、仏壇香ろふ(香炉)・花立不残落、時々少々ツ、震」「本家表土蔵はちまき南東通り不残落、外之土蔵も大いたみ」(十月三日条)「林大いみ(林村大いに痛み)のよし、上宮田御陣屋あら方つふれ、即死六人、乗馬壱ツ、けが人多分あり候よし、夜ニ入候而も少々ツ、震候」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	横須賀史学会編「浜浅葉日記」(二)1981
142018-8	神奈川県	横須賀市	<p>【災害名】関東大地震                      【発生日時】大正12年(1923)9月1日                      【被災地】旧横須賀市域                      【災害の概要】いわゆる関東大震災時の旧横須賀市域と鎮守府内被害報告の元原稿。                      【教訓等】大正13年(1924)12月発行「建築雑誌」464号の記事は、元原稿の発見により、海軍・陸軍の検閲箇所が明らかになり、同時に横須賀市の震災復興史の内容もそのまま信用しかねる部分の存在を示唆する。また、実際に改変前後の写真内容が知られる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	三輪幸左衛門発表原稿(建築雑誌464号)未刊資料
142034-1	神奈川県	平塚市	<p>【災害名】関東大震災                      【発生日時】大正12年9月1日                      【被災地】神奈川県平塚市(旧町村を含む)                      【災害の概要】死者565人、負傷者350人 家屋倒壊：全壊5259戸、半壊3771戸                      【教訓等】被害状況の伝承のみで、対応の特徴や教訓等の伝承は把握していない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・写真(家屋倒壊した町並みの様子)</li> </ul>	平塚市博物館『震災調査報告書』平成11年

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
14203 4-2	神奈川県	平塚市	<p>【災害名】金目川の洪水</p> <p>【発生日時】近世～戦前期</p> <p>【被災地】神奈川県平塚市金目地区</p> <p>【災害の概要】金目川は近世以来、頻繁に堤防の決壊、洪水を発生させてきた。明治3年8月の洪水では北金目村の大堤が切れ、北金目村の耕地だけで7町余が荒地となった。</p> <p>【教訓等】増水で土手が危険になると、役員がフレを出したり、神社の半鐘を鳴らして村人を集めた。男女とも出て、男は土手で決壊に備え、女は炊き出しをした。決壊への備えは近くの家の木や土手の桜木を切り、杭で繋いで土手の危険な箇所投げ込むナガシヤ、古畳を持って川に入り土手の内側を押さえるタタミブスマであった。タタミブスマでは押さえている人は手を離せず、水中で寒いで柄杓で酒を飲ませたり、口の中におにぎりを入れてやったりした。</p>	・文献資料	平塚市博物館『平塚市民俗調査報告書4－金目・金田』昭和59年
14206 9-1	神奈川県	小田原市	<p>【災害名】関東大震災</p> <p>【発生日時】大正12年（1923年）9月1日</p> <p>【被災地】神奈川県小田原市（当時小田原町ほか）</p> <p>【災害の概要】相模湾内の相模トラフを震源とする地震災害（マグニチュード7.9、最大震度6、山間部で山津波発生、沿岸部で小津波発生）（災害・被害の詳細については、添付資料1-1～1-3を参照）</p> <p>【教訓等】地震が発生した場合、まず出口を確保することが重要である。家が潰れたら出ることができないが、1つでも出口が開いていれば家が傾いていても外に出られる。また、2階より上にいたら、決して1階に降りようとしなくても大切である。この場合でも出口を確保しておく必要がある。当時は「外国人が襲ってくる」等の流言蜚語が発生したので、これらのデマに惑わされないことが大切である。地震後に海水が引いた場合、津波が襲来する前兆であるので海岸からすぐに逃げるのが肝要である。</p>	・文献資料 ・写真	<p>・著者：山王網一色地区自治会・公民館 タイトル：関東大震災体験記録集 発行：平成元年（1989）</p> <p>・著者：米神、江之浦地区自治会・公民館 タイトル：地震と戦争の記録 発行：江之浦（昭和56年（1981））米神（昭和57年（1982））</p>
14208 5-1	神奈川県	逗子市	<p>【災害名】昭和36年（1961年）集中豪雨</p> <p>【発生日時】昭和36年（1961年）6月24日～29日</p> <p>【被災地】神奈川県逗子市、鎌倉市</p> <p>【災害の概要】総雨量は約341mmと推定 28日午後10時30分大雨洪水警報発令 29日午前9時40分逗子市・鎌倉市に災害救助法発動 浸水面積約300ha、土砂崩れ40箇所、橋りょう流失2箇所、負傷者3人、家屋全壊3世帯、家屋半壊4世帯、床上浸水1,636世帯、床下浸水1,491世帯ほか（災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照）</p> <p>【教訓等】28日午後10時30分大雨洪水警報発令後、避難命令を発令した（避難した人数567人）。応急対策として、同時に池子米軍に水陸両用車の出動を要請し、万全を期した。市内を縦断する田越川及び支流の池子川、久木川は極度に氾濫し交通機関は途絶し、全市域の約18%にあたる300haが冠水した。特に、逗子、桜山、池子、久木地区は集中的に被害が発生し、平坦地は殆ど水没したといっても過言ではない状態になったが、死者、行方不明者等がなかったことは不幸中の幸いであった。</p>	・文献資料	平成6年度修正逗子市地域防災計画参考資料p656～659
14211 5-1	神奈川県	秦野市	<p>【災害名】関東大震災</p> <p>【発生日時】1923年9月1日</p> <p>【被災地】震源地は山北町～大井町の境界付近と考えられている</p> <p>【災害の概要】秦野市では火災が発生。232戸が全壊。その後9月15日の豪雨により二次災害が発生。震生湖が地震により形成された。</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料	秦野市史（平成4年）
14212 3-1	神奈川県	厚木市	<p>【災害名】玉川河川水害</p> <p>【発生日時】昭和16年7月12日</p> <p>【被災地】神奈川県厚木市小野</p> <p>【災害の概要】玉川氾濫による洪水</p> <p>【教訓等】堤防8箇所決壊、耕地の埋没又は流出、家屋流失倒壊30棟余、死者8名という甚大な被害があったことが確認できる。また、関東大震災により大山山塊にて山津波があったといわれている。この現象が、後に玉川の度重なる水害の要因になったと記されている。</p>	・文献資料	小瀬村初男「玉川河川水害史」平成元年9月23日
14214 0-2	神奈川県	伊勢原市	<p>【災害名】関東大震災直後の山津波</p> <p>【発生日時】大正12年9月16日</p> <p>【被災地】伊勢原市大山</p> <p>【災害の概要】同年9月1日の関東大震災において山肌に無数の地割れが生じ、そこに9月15日の大雨によって山崩れが起りはじめた。そして16日午前0時2分大規模な山津波が発生し、戸数70、棟数75が流された。しかし住民の多くは事前に避難をしていたため、犠牲者は1名にとどまった。</p> <p>【教訓等】巡査が大雨の中巡回をし、山崩れが起き始めているのを発見、すぐ住民に避難を呼びかけた。</p>	・文献資料	伊勢原町勢誌 伊勢原町 昭和38年

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
14214 0-3	神奈川県	伊勢原市	【災害名】水害 【発生日時】寛文6年7月29日 【被災地】伊勢原市大山 【災害の概要】水害により家屋が流出 【教訓等】子安村と替え地となり新町が建設される	・文献資料	原和之「近世伊勢原の災害年表」『伊勢原の歴史』第13号 平成14年刊
14218 2-1	神奈川県	綾瀬市	【災害名】関東大震災 【発生日時】大正12年(1923年)9月1日 【被災地】綾瀬村全域 【災害の概要】 【教訓等】前日の日中までは日照り続きで、晩になって急に大雨になった。当日朝もはげしい雨だったが11時ごろ急に晴れた。当時の農家の昼食は11時ごろで、もう済んでいた。ドロドロという音の後揺れだした。地震の前触れの地鳴りだったことに後で気づいた。下屋のある家は下屋が突っかえ棒になって潰れなかった。家を建てる場所は風除けや水の便を考え低地が好まれていたが、関東大震災で低地の家が倒れたため、地盤のいい台地を選ぶようになった。	・文献資料	神奈川県綾瀬市：綾瀬市史8(下)別編 民俗 2001 p. 57-60
14218 2-2	神奈川県	綾瀬市	【災害名】洪水 【発生日時】明治時代初期 【被災地】綾瀬市小園・早川 目久尻川沿い 【災害の概要】何度か洪水で家が流れ、死者が出た 【教訓等】「オオミズにあったのもっと上のほうに家を建て直した」などの伝承がある	・文献資料	神奈川県綾瀬市：綾瀬市史民俗調査報告書1早川の民俗 1991 p. 124
14341 3-1	神奈川県	大磯町	【災害名】関東大地震 【発生日時】大正12年(1923年)9月1日 【被災地】神奈川県大磯町 【災害の概要】関東大地震の災害(東京で観測した最大振幅14cm~20cm) (災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照) 【教訓等】大磯税務署、中郡役所、大磯町役場、大磯警察署は小破。大磯駅舎は全壊し、列車の待ち合わせ客数十名が下敷きになり、死者3名を出した。浜松発上り列車が高麗山下に差し掛かったとき、地震に遭遇し、機関車もろとも5両が水田中に墜落大破し、即死者5名と重傷者49名を出した。大磯町の死者37名、負傷者74名、全壊221、半壊874。大磯町の地盤は岩盤なりしたため、市街地の潰家は少なく、かえって山の手別荘地の被害甚だしく、全町の死者の過半は山の手方面に属せり。大磯海岸では隆起のため海水が2町余りも減退し岩石が突起し、漁船の出入りが困難になった。	・文献資料	大磯町史9別編 自然、平成8年、p747~748
14342 1-1	神奈川県	二宮町	【災害名】関東大震災 【発生日時】1923年9月1日 【被災地】二宮町全域 【災害の概要】相模湾南西部の海底の地殻の変動によって生じたM7.9の大地震。津波は、被害をもたらすものは、来なかった。 【教訓等】初動から、12秒後に激震となり、その後約10分継続し余震もその後多数発生した。大磯警察署の震災記録によると、全焼六戸、全壊四〇六戸、半壊三七六戸の計七三二戸の被害が出た。死者は、圧死が21人、焼死が4人重傷者は、26人と記録されている。また、川匂地区に居られた方が作詞した地震教え唄が伝えられ、震災の恐怖を伝えている。	・文献資料 ・写真	・二宮町近代史 ・震災記録
14383 9-1	神奈川県	真鶴町	【災害名】明治の大海嘯(だいかいしょう) 【発生日時】1902年(明治35年)9月28日 【被災地】国府津村から吉浜村に至る相模湾西部沿岸 【災害の概要】倒壊家屋38戸、死者1人、負傷者12人、難破船11艘の被害を被った。足柄下郡役所の調査によれば、救助が必要な戸数は780戸に上った。漁業者の被害では、損害を受けた船舶は418艘、被害総額35,600円余で、残りの453艘も修繕が必要で、また漁具の損害は24,600円余であった。漁業不能分を含めると総計250,000円以上になった。 【教訓等】数日前に沖縄南部に発生した低気圧に伴う暴風雨が北上し、この日の午前5時頃から風力を増し、9時頃には大海嘯を引き起こした。	・文献資料	真鶴町町史通史編
14383 9-2	神奈川県	真鶴町	【災害名】大正の大海嘯 【発生日時】1912年(大正元年)9月1日 【被災地】相模湾西部沿岸 【災害の概要】真鶴港に避難した船40艘のうち11艘が被害を受けた 【教訓等】前回(明治の大海嘯)より更に激しかった。	・文献資料	真鶴町町史通史編

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
14383 9-3	神奈川県	真鶴町	<p>【災害名】関東大震災                      【発生日時】1923年(大正12年)9月1日                      【被災地】町内全域                      【災害の概要】町内全域に被害を被ったが、津波の被害は「神奈川県震災史」によれば、流出戸数が総戸数653戸中19戸(約3%)なのに対し、岩村は総戸数245戸中59戸(約24%)と桁違いに大きかった。                      【教訓等】家屋や電柱の倒壊は猛烈な土煙を引き起こした。一時は土煙のために一寸先も見えないほどだった。こうした土煙のためか、雀や鳥も飛ぶことができず、空から次々と落ちてきた。土砂崩れも次々と発生していった。</p>	・文献資料	真鶴町町史通史編
14423 1-1	神奈川県	相模湖町	<p>【災害名】関東大震災                      【発生日時】大正12年9月1日                      【被災地】神奈川県相模湖町千木良                      【災害の概要】山崩れのため人家が家族ごと埋没し、1世帯4人が死亡。他部外者2名死亡、負傷者は2世帯であった。                      【教訓等】</p>	・文献資料	相模湖町史 p589
15000 2-1	新潟県		<p>【災害名】横田切れ                      【発生日時】明治29年7月                      【被災地】新潟県西蒲原郡分水町横田他                      【災害の概要】明治29年7月、長岡から新潟にかけて、南蒲原郡、西蒲原郡全域を襲った大洪水。死者48名、破壊建物1,648棟、床上浸水43,685戸、被害田畑58,742町歩                      【教訓等】他に例のないほどの大規模かつ広範囲に被害をもたらしており、その惨状は「洪水さわぎ」「流れの親子」「全身の蛇」「機織乙女」「屋根の男」等、多くのくどき節として伝えられている。</p>	・絵図(横田切れレプリカ)…新潟県立歴史博物館にて展示	・新潟県編集発行新潟県史通史編7、近代二、昭和63年 ・五百川清大河津分水双書第一巻横田切れ2002
15000 2-4	新潟県		<p>【災害名】寛延4年(宝暦元年)の高田大地震                      【発生日時】寛延4(1751)年4月25日                      【被災地】新潟県上越地方                      【災害の概要】震源は高田西方の山中、マグニチュード7～7.4と推定されている。「高田表大地震之節日記」(榊原文書)によると、5月9日までにとりまとめられた高田町以外の高田藩領の被害は、死者505人、怪我人262人、潰れ家2099軒、半潰れ家3162軒、用水江堤・堰・川筋等破損168ヶ所、山抜け崩れ・川欠け471ヶ所であった。                      【教訓等】-</p>	・文献資料	上越市史編さん委員会『上越市史』通史編3近世一(平成15年)
15000 2-5	新潟県		<p>【災害名】文政三条大地震                      【発生日時】文政11(1828)年11月12日                      【被災地】新潟県三条市周辺                      【災害の概要】地震の規模マグニチュード6.9の直下型地震。震源地は北緯37度6分、東経138度9分で、柴町芹山付近とみられる。被害地域は、信濃川に沿った長さ25kmに及ぶ楕円形の地域で、三条・燕・見附・今町・与板などの家屋はほとんど全壊した。被災地域全般で全壊1万2859軒、半壊8275軒、焼失1204軒、死者1559人、怪我人2666人、堤防の欠壊4万1913間という大きな被害であった。                      【教訓等】三条市八幡町にある真言宗泉薬寺境内に地震供養塔、東裏館の真言宗宝塔院境内には地震亡霊塔(市指定文化財)がある。また、地震から4年後の天保3(1832)年8月には、地震による多数の物故者を菩提のため、浄土真宗本願寺派の三条別院が建立された。年々、地震の日の11月12日を宗祖の報恩講の初日として、震災物故者の追悼供養が営まれてきた。さらに地震の翌年には、震災の惨状を詠み込んだ「ごぜくどき」が広く流布した。三条大地震にまつわるごぜくどきには、『ごぜく説地震の身の上』と『越後地震口説』の2冊の版本が現存する。</p>	・文献資料	三条市史編修委員会『三条市史』上巻(昭和58年)
15000 2-6	新潟県		<p>【災害名】善光寺地震                      【発生日時】弘化4(1847)年3月24日                      【被災地】新潟県妙高市大谷                      【災害の概要】善光寺地震の影響により、大谷集落後背地の蛇崩山が崩落し、人家15、6軒が大量の土砂に埋没した。死者は60人に達した。                      【教訓等】遭難後100日を機に、証念寺住職と聞称寺住職によって遭難者の「法名掛軸」が作成され、供養の読経が行われた。また、災害から23年後の明治2(1869)年、村人によって地震供養塚が建立され、以来毎年4月24日には集落を挙げて聞称寺で追善供養の法要が営まれている。地震供養塚は、大谷集落聞称寺境内の本堂前の村道側に建てられている。</p>	・文献資料	妙高市史編さん委員会『妙高村史』(平成6年)

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
15000 2-7	新潟県		<p>【災害名】寛文10(1670)年西蒲原郡地震</p> <p>【発生日時】弘化4(1847)年3月24日</p> <p>【被災地】新潟県西蒲原地方</p> <p>【災害の概要】震源は北緯37度8分、東経138度9分付近、マグニチュードは、文政三条大地震(1828年)と同程度(6.9)と推定されている。村上藩の之日記によると、倒壊家屋533、死者13人。</p> <p>【教訓等】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・その他</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・河内一男、大木靖衛「1670年西蒲原地震(M6 3/4)の震央の再検討」(『地震』第2輯第49巻、1996年)</li> <li>※村上市、新発田市等に照会のこと</li> </ul>
15000 2-9	新潟県		<p>【災害名】「名立崩れ」(宝暦の高田大地震)</p> <p>【発生日時】宝暦元年(寛延4年、1751年)4月26日</p> <p>【被災地】新潟県頸城郡名立町名立小泊(当時名立小泊村)</p> <p>【災害の概要】宝暦元年4月26日午前2時頃、高田付近を震央として越後西部に大地震が発生した。わが国の歴史的な大規模地震の一つに数えられている。名立小泊は旧高田市から西方へ1.6kmの位置にあり、この地震で付近一帯は山崩れなどの地変がはなはだ多く見られた。民家のほとんど全部が埋没、あるいは倒壊し、村人の80%近い人が横死した。名立小泊91戸中、被害を免れたのは3戸だけ、525人の住民中、406人が死亡し、全震域を通じての死者数2,000人のうち約20%を名立小泊で占めた。</p> <p>【教訓等】復旧に約100年を要する大惨事であり、名立小泊に犠牲者の慰霊供養塔が建ち、現在も参詣者の絶えることがない。また大正3年(1914)年岡本綺堂(劇作家)による戯曲「名立崩れ」が帝国劇場で上演され、一躍世の人に知られるようになった。その後も地域で語り継がれる大災害であったが、平成5(1993)年2月には、史跡「名立崩れ」として名立町の指定文化財となり、今にその惨状を伝えている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> <li>・絵画</li> <li>・フィルム</li> <li>・写真</li> <li>・HP</li> </ul>	<p>名立町史編さん専門医委員会編『名立町史』(平成9年3月発行) ※名立町ホームページ参照</p>
15000 2-12	新潟県		<p>【災害名】長岡地震</p> <p>【発生日時】昭和36年(1961年)2月2日</p> <p>【被災地】新潟県長岡市</p> <p>【災害の概要】長岡市の西部を中心とした狭い範囲を中心に死者5名、負傷者30名、住家の全壊220戸、半壊465戸、一部損壊804戸等の被害が発生した。</p> <p>【教訓等】</p>		
15000 2-13	新潟県		<p>【災害名】伊勢湾台風</p> <p>【発生日時】昭和34年(1959年)9月27日</p> <p>【被災地】新潟県南魚沼地方及び佐渡、西頸城地方</p> <p>【災害の概要】死者2名、重傷者23名、軽傷者92名の人的被害と全壊流出157戸、半壊844戸、一部損壊3502戸等の被害発生</p> <p>【教訓等】</p>		
15000 2-15	新潟県		<p>【災害名】第2室戸台風</p> <p>【発生日時】昭和36年(1961年)9月16日</p> <p>【被災地】県下全般</p> <p>【災害の概要】死者36人、住宅被害全壊2822戸、半壊19332戸</p> <p>【教訓等】</p>		
15000 2-17	新潟県		<p>【災害名】新潟地震</p> <p>【発生日時】昭和39年(1964年)6月16日</p> <p>【被災地】新潟及び岩船地方を主とした日本海沿岸及び信濃川沿岸</p> <p>【災害の概要】死者14名、全壊3277世帯、半壊10966世帯</p> <p>【教訓等】</p>		
15000 2-23	新潟県		<p>【災害名】平成16年7月新潟・福島豪雨</p> <p>【発生日時】平成16年(2004年)7月13日</p> <p>【被災地】新潟県中越地方(三条市及び長岡市を中心として)</p> <p>【災害の概要】死者15名、住宅被害全壊71戸、半壊5657戸</p> <p>【教訓等】</p>		
15000 2-24	新潟県		<p>【災害名】新潟県中越大地震(新潟県中越地震)</p> <p>【発生日時】平成16年(2004年)10月23日</p> <p>【被災地】新潟県中越地方(三条市及び長岡市を中心として)</p> <p>【災害の概要】死者59名、重軽傷者4795名、住宅被害全壊3175戸、大規模半壊2763戸、半壊11609戸</p> <p>【教訓等】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>新潟県：新潟県中越大地震の記録(H18刊行予定)</p>
15201 -1	新潟県	新潟市	<p>【災害名】安政4年加治川水害</p> <p>【発生日時】安政4年閏5月15日～6月28日(新暦7月7日～8月18日)</p> <p>【被災地】新潟市葛塚・木崎・内島見・鳥屋</p> <p>【災害の概要】新発田市鳥潟で破堤した加治川の水が旧豊栄市域に災害をもたらしたもので、広い地域で耕地が冠水したものの。</p> <p>【教訓等】この地域は、江戸時代中期より福島潟の開発を実施し、潟に流入する河川を改修したため、河川の堤防の破堤を繰り返していた地域であった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>新潟県新潟市：豊栄市史資料編2近世編 1990年 新潟県新潟市：豊栄年表資料第10集 1981年</p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
15201-2	新潟県	新潟市	<p>【災害名】 7・23水害</p> <p>【発生日時】 昭和33年7月23日～</p> <p>【被災地】 新潟市葛塚・新鼻・内沼沖等</p> <p>【災害の概要】 昭和33年7月19日から降り出した雨が台風11号に伴う停滞前線の影響で連日降り止まず、福島潟、新井郷川が増水した。市街地の湛水をポンプ排水するほか、堤防が軟弱化、決壊の恐れが生じ、水防活動を展開した。</p> <p>&lt;被害&gt; 重傷1人、軽傷13人、床上浸水95戸、床下浸水256戸、農地冠水面積823ha、農作物被害総額56千万円</p> <p>【教訓等】 23日前後約10日間の雨量が435ミリに達し、各河川で水防活動を実施。町役場、消防団、町民がこぞって土のうを築き防御した。佐々木村地内の町民が数百人出て防御した。</p>	・文献資料	新潟県新潟市：豊栄市史通史編1998年 新潟県新潟市：豊栄市地域防災計画 平成16年度修正
15201-3	新潟県	新潟市	<p>【災害名】 7・17水害</p> <p>【発生日時】 昭和41年7月17日～</p> <p>【被災地】 新潟市豊栄地区全域</p> <p>【災害の概要】 昭和41年7月16日未明から18日昼過ぎの3日間にわたり県北一帯に集中豪雨が発生。加治川の堤防は、西名柄で決壊。濁流が押し寄せ全市の8割が浸水、出穂期を目前にした水稻は、収穫皆無地2000haにも達し被害は激甚を極めた。</p> <p>【教訓等】 翌年発生する8・28水害と合わせて、2年連続全市の大半が浸水、大きな被害が出た水害。</p>	・文献資料	新潟県新潟市：豊栄市史通史編1998年 新潟県新潟市：豊栄市史資料編3 近現代編 1993年 新潟県新潟市：豊栄市地域防災計画 平成16年度修正
15201-4	新潟県	新潟市	<p>【災害名】 8・28水害</p> <p>【発生日時】 昭和42年8月28日～</p> <p>【被災地】 新潟市豊栄地区全域</p> <p>【災害の概要】 昭和42年8月28日早朝から県北一帯に集中豪雨が発生。加治川の堤防は、再び西名柄で決壊。2年連続で浸水、水稻は稲発芽に悩まされた。しかし、新井郷川左岸で必死の水防活動を展開防御した結果、町域の半分は水没を免れた。</p> <p>【教訓等】 前年発生した7・17水害と合わせて、2年連続全市の大半が浸水。大きな被害が出た水害。</p>	・文献資料	新潟県新潟市：豊栄市史通史編1998年 新潟県新潟市：豊栄市史資料編3 近現代編 1993年 新潟県新潟市：豊栄市地域防災計画 平成16年度修正
15201-6	新潟県	新潟市	<p>【災害名】 8・5集中豪雨</p> <p>【発生日時】 昭和36年（1961年）8月5日</p> <p>【被災地】 新潟県新潟市（当時白根市）</p> <p>【災害の概要】 旧白根市において、集中豪雨による水害、死者1人、負傷者40人、住家居半壊5戸、住居小壊75戸、床上浸水1,800世帯、床下浸水1,100世帯、被害総額4億8千万円</p> <p>【教訓等】 集中豪雨により中ノロ川の水位が上昇し、堤防から越水、堤防決壊の危機となる。自衛隊、消防団、地元住民ら2,500人が杭木の打ち込み、土のう、石詰め俵などにより必死で防御作業にあたるが、水はさらに上昇し、ついには堤防の一部が決壊、もはや土のうを積んでも間に合わない状況となる。窮余の一策として米俵（政府米）の投入が考えられ、県や食糧事務所などに懇願したがなかなか許可が出ず、ついには了解を得られないまま、当時の市長であった吉沢正五氏の英断により政府米439俵が投入され、水を吸ってふくらんだ米は大きな威力を発揮し、堤防の越水は一応くい止められた。貴重な政府米の投入であり、全国にも例がなく問題を投げかけたが、結果として多くの人命と財産を救うことになった。</p>	・文献資料・写真・その他	白根市史 本間芳男：「日本海に生きる人びと」北陸児童文学協会編 洪水を止めた米、四三九俵=白根市の人たち p.189-219市広報紙 白根市政だより 昭和36年9月1日発行 広報しろね「特集記事」平成9年8月15日発行 他、合併記念誌等各種記念誌
15206-1	新潟県	新発田市	<p>【災害名】 新発田大地震</p> <p>【発生日時】 寛文9年（1669年）5月5日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】 M不明、城の石垣が崩落、余震が30日も続いたといわれる。</p> <p>【教訓等】 翌年（寛文10年）の記録に、「石垣御普請のため武州（現東京都、埼玉、神奈川県の一部）から石工が呼び寄せられ、辰巳橋台の石垣から修復が始められた」とある。</p>	・文献資料	確認要す
15206-3	新潟県	新発田市	<p>【災害名】 三条地震</p> <p>【発生日時】 文政11年（1828年）11月12日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】 M6.9（推定）</p> <p>辰の刻（午前8時頃）大地震発生。新発田藩領内では、中之島組今町（現見附市）で特に被害が大きく、家屋の全壊・焼失、怪我人が多い。その他、大面組（後の三条市、栄町の一部）、赤渋組（後の白根市の一部）、加茂組（後の田上町、加茂市の一部）、鶴森組（後の白根市の一部）など、被害は大きく、他に長岡、与板など被害の範囲は、方拾里にも及び、倒壊家屋21000軒、死者1500人と言われている。</p> <p>領内の被害：全壊家屋1660軒、半壊家屋715軒、損壊家屋544軒、焼失家屋121軒、圧死215人、焼死27人、怪我人136人</p> <p>【教訓等】 ・とりあえず、お手充として米500俵が支給された。 ・翌年春、各組の被災者・死亡者に新規小屋掛代、農具入用代、見舞い等のお手充が支給された。</p>	・文献資料	確認要す



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
15206-4	新潟県	新発田市	<p>【災害名】松ヶ崎浜地震（庄内佐渡地震とも言う）</p> <p>【発生日時】天保4年（1833年）10月26日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】M7.5（推定）申の刻（午前4時頃）地震発生。高さ2丈余（約6メートル）の高波（津波）が、四度五度と打ち寄せ、信濃川、阿賀野川を逆流し漁船は破損や流失、その数50艘余という。</p> <p>領内の被害：全壊家屋21軒、半壊家屋29軒、破損家屋88軒、溺死人男5人</p> <p>【教訓等】後日、次の組々（当該村々）にお手充が支給された。五十公野組、赤洪組、蒲原横越組、浜通組</p>	・文献	確認要す
15216-1	新潟県	糸魚川市	<p>【災害名】7. 1 1水害</p> <p>【発生日時】平成7年（1995年）7月11日</p> <p>【被災地】新潟県糸魚川市</p> <p>【災害の概要】平成7年7月11日、梅雨前線の停滞による雨は午後から降り始め夕方までに豪雨となり、各所で河川が氾濫し、家屋が浸水した。特に姫川流域は大木は被害を受け、国道148号とJR大糸線は寸断され、根知～白馬間で不通となり、根知～平岩では橋梁、トンネル、軌道、建物などが流出した。</p> <p>【教訓等】交通手段を完全に絶たれ、姫川氾濫の危機にさらされた平岩地区の住民はヘリコプターで救出されて安全な市街地に避難した。県警・消防防災・自衛隊などのヘリコプターが連日出動し、救出輸送された人数は530人におよんだ。平成13年3月には姫川洪水ハザードマップを作成し、流域地域への配布と説明を実施している。</p>	・文献・写真・その他	7. 1 1水害の記録（糸魚川市・平成8年3月） 姫川大氾濫！爪跡深く（糸魚川市・平成7年10月）特別報道写真集7. 1 1水害（新潟日報事業者・平成7年11月28日） 姫川洪水ハザードマップ（糸魚川市、青海町・平成13年3月）
15216-2	新潟県	糸魚川市	<p>【災害名】蒲原沢土石流災害</p> <p>【発生日時】平成8年（1996年）12月6日</p> <p>【被災地】新潟県糸魚川市大字平岩</p> <p>【災害の概要】新潟県と長野県との県境に位置する蒲原沢は、姫川支流で急勾配、上流は山崩れが起こって不安定な地形である。この災害は、崩落した土砂で堰き止められた川の水が、鉄砲水となって土石流を起こしたと見られている。えん堤工事や、前年の7. 11水害災害復旧工事に従事していた150人以上の作業員を襲った。死者14人、負傷者8人を出したほか、50人近い作業員が一時的に孤立した。</p> <p>【教訓等】本災害は、平成7年7月11日の集中豪雨災害復旧工事等に携わり地域の生活、経済の発展維持にご尽力いただいた方々14名の尊い生命を一瞬のうちに奪い去ってしまった。被災された14名の方々の慰霊及び災害の教訓を後世に伝えるための慰霊碑が建立されている。また、平成7年に創設された緊急消防援助隊の全国初出動になったことも特筆される。</p>	・文献・碑文（糸魚川市大字大所字ガマ原地先）・慰霊碑写真	12.6鎌原沢土石流災害消防救助活動の記録（糸魚川地域広域行政組合消防本部・平成9年10月）
15216-3	新潟県	糸魚川市	<p>【災害名】焼山噴火災害</p> <p>【発生日時】昭和49年（1974年）7月28日</p> <p>【被災地】新潟県糸魚川市（早川地域）</p> <p>【災害の概要】昭和49年7月28日未明、山頂から北北東及び西北西方向の割れ目に沿ってできた小さな火口群で水蒸気爆発が発生。登山者3名が火山弾の直撃を受け死亡。爆発で噴出された火山灰は風に運ばれて遠く離れた上越市や小出町などに達し、農作物や交通機関に大きな影響を与えた。また、泥流、鉄砲水は早川流域の農地、農業用施設をはじめ、水道、温泉施設、発電設備を破壊した。</p> <p>【教訓等】新潟県内唯一の活火山である焼山は、約3,000年前に誕生した火山であり、過去から噴火を繰り返している。いつ起こかわからない噴火に対して、地震計や土石流センサーなどのハード面の整備を進めるとともに、焼山火山防災マップやハンドブックなどを作成し地域住民へ噴火に対する備えをとれるよう説明会などを実施している。</p>	・文献	集中豪雨と焼山爆発の記録（糸魚川市・昭和50年3月） 新潟焼山火山防災マップ、新潟焼山火山防災ハンドブック（糸魚川市・平成16年5月） 新潟焼山火山防災の心得（糸魚川市・平成13年3月）
15216-4	新潟県	糸魚川市	<p>【災害名】柵口雪崩災害</p> <p>【発生日時】昭和61年（1986年）1月26日</p> <p>【被災地】新潟県糸魚川市大字柵口（当時：西頸郡能生町）</p> <p>【災害の概要】1月26日午後11時ころ柵口権現岳（標高1,108m）の中腹800mから900m付近で、幅200m、長さ1,800mの国内最大規模の面発生乾雪表層雪崩が発生し、柵口集落を襲った。死者13名、負傷者9名、全壊家屋8棟、半壊2棟、一部損壊1棟、非家屋全壊8棟の被害が発生した。</p> <p>【教訓等】「面発生乾雪表層雪崩」の直撃を受けた建物で特徴的なものとして、雪面上に出ている2階部分が強い衝撃で窓が壊れ、雪崩が入り込み屋根が持ち上がるとともに、二階の壁が一階の部分からちぎれて吹き飛ばされるものや、大量の雪が入り込んで家が膨らみ、一階部分も傾いて壊れたものがあった。また、雪崩の走行区域内の杉は雪崩風によって傾斜したり、枝がちぎれたものが多くみられた。</p> <p>本災害を契機に、新潟県は昭和61年度に「雪崩発生危険箇所」の見直しを実施した。また町では昭和61年度から単独事業として「雪崩監視員」を設置した。</p>	・文献	能生町柵口雪崩災害記録「いわぼが走った」（能生町役場・平成元年6月）

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
15216-5	新潟県	糸魚川市	<p>【災害名】玉の木地区土砂崩れ災害                      【発生日時】昭和60年(1985年)2月15日                      【被災地】新潟県糸魚川市大字市振(当時:西頸城郡青海町)                      【災害の概要】2月15日午後6時25分に斜面長110m、斜面勾配約40度、移動土塊約4万立方メートルの規模で地すべりが発生。土砂が玉の木地内を襲い、民家やお宮を押しつぶし、国道8号に押し寄せた。死者10名、負傷者4名、全壊家屋5棟、半壊2棟、非家屋全壊7棟の被害が発生した。                      【教訓等】本災害における特徴として富山県境に位置する青海町(当時)玉の木地内での災害ということもあり、富山県の近隣自治体や医療機関が協力要請に応じて、よく協力してくれた点が挙げられる。この県境を越えた広域的関係プレーは国や地方自治体の防災関係者にも注目された。また、本災害を契機として土砂災害危険箇所再点検(特別見直し)が実施された。</p>	・文献	慟哭 玉の木地区地すべり災害の記録(青海町役場総務課・昭和62年3月) 玉の木地区地すべり災害の記録((社)新潟県土木協会・昭和63年11月)
15310-1	新潟県	胎内市	<p>【災害名】羽越大水害                      【発生日時】昭和42年(1967年)8月28日                      【被災地】胎内市(旧中条町・旧黒川村)                      【災害の概要】昭和42年8月28日新潟県北部に前線が停滞し、前日からの雨は午後になっても強烈に降り続き荒川、胎内川、加治川水系の中・小河川が氾濫し始め、ついに道路・橋は各所で流出・決壊した。午後の11時には県に対して災害救助を要請した。28日午前9時00分から24時間雨量は648ミリ(1時間最高86ミリ)を記録した。豪雨により崩れた山は、土石流となって巨石、巨木を流出し、田畑を埋め家屋を倒し多くの人々は、一瞬にしてこれに巻き込まれ、死者が46人となる大災害となった。                      【教訓等】大水害により大きな打撃を受けながらもその復旧には、原形復旧のみにとどまらず、改良復旧を図るため町・村民が行政と一体になり「災いが転じて福に」しようと日夜を問わず復旧作業に全力を注ぎ、短期間で目覚ましい復興を成し遂げたことが今も語り継がれている。</p>	・写真	
15343-1	新潟県	分水町	<p>【災害名】地藏堂大火                      【発生日時】昭和32年(1957年)4月2日                      【被災地】分水町大字地藏堂中心部                      【災害の概要】午前0時50分ごろ、九蔵小路から出火、折からの西南12mの突風にあおられ火は燃え広がり、本町、栄町旭町、大武の大部分が焦土と化した。被害状況は住宅全焼256戸・半焼16戸であった。                      【教訓等】住宅が密集し、水利の不便さ、消火機械の不足、気象条件の悪化と悪条件が重なった大火災であった。災害救助法の適用を受け、自衛隊の応援要請をし、復旧活動を行った。6月3日、大火復興土地区画整理事業が認可され、市街地の道路整備が行われた。</p>	・文献	・分子町編集発行:分水町史資料編Ⅲ近現代、平成17年
15343-2	新潟県	分水町	<p>【災害名】昭和座大火                      【発生日時】昭和11年8月15日                      【被災地】地藏堂町昭和通り                      【災害の概要】昭和通りの映画常設館「昭和座」から出火、(写し済みのフィルムに引火)町中心部を焦土と化した。被害状況は、住宅全焼162戸、半焼8戸、土蔵13棟、納屋10棟を焼失したものの。                      【教訓等】1ヶ月も猛暑が続き一滴の雨も降らない状況下での火災であった。当町は一年の大半を西風が吹き明け方に東風に変わるのを常としているが、この日も西風が強くと猛烈と広がった。明け方に強い東風が吹き再び燃え返し大火災となった。</p>	・文献	・分子町編集発行:分水町史資料編Ⅲ近現代、平成17年
15343-3	新潟県	分水町	<p>【災害名】38豪雪                      【発生日時】昭和38年1月                      【被災地】分水町域                      【災害の概要】前年12月31日から降り始めた雪は、1月中旬に2.85mの大雪となった。家屋の倒壊が相次ぎ、越後線が不通となった。                      【教訓等】災害救助法が適用され、自衛隊の出動を要請し救援活動を行った。火災予防のため消防団員による管内の巡視が行われた。(1月25日から2月10日まで)また、住宅密集地で火災が発生し、ソリ付き手挽ポンプで消火にあたった。越後線の列車が砂小塚地内で立往生したため、乗客を消防団員が救出し100余名を小学校に収容。婦人会が炊き出しを行った。</p>	・文献	・分子町編集発行:分水町史資料編Ⅲ近現代、平成17年
15343-4	新潟県	分水町	<p>【災害名】新潟地震                      【発生日時】昭和39年6月16日                      【被災地】分水町域                      【災害の概要】粟島付近を震源とするマグニチュード7.5の大規模地震で、分水町域の被害状況は、家屋の全壊1戸半壊7戸一部損壊475戸であった。島上地区を中心に農地の被害が甚大で災害救助法が適用された。                      【教訓等】近年にない大地震で、液状化を伴う地盤災害が発生した。横田地内では、「横田切れ」後の回収の木杭が吹き出し田は吹き出した水で池同然の状態となり所々に砂山や陥没した穴ができた。</p>	・文献	・分子町編集発行:分水町史資料編Ⅰ自然、平成16年 分水町史資料編Ⅲ近現代、平成17年

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
15583-1	新潟県	神林村	<p>【災害名】羽越水害</p> <p>【発生日時】昭和42年8月28日</p> <p>【被災地】新潟・山形両県18市21町11村（災害救助法適応）</p> <p>【災害の概要】死者・行方不明者140名、家屋の損壊5,300余棟、浸水家屋61,000余棟、被害総額1,265億円。一級河川荒川流域においては、流域平均雨量424mm、死者行方不明者90名、被害総額521億円</p> <p>【教訓等】</p>	・文献	・神林村：水害記録集S44.3「水と泥と人間と ～8.28水害の記録～」
160008-1	富山県		<p>【災害名】飛越地震による大鷲山、小鷲山の崩壊</p> <p>【発生日時】安政5(1858)年2月26日</p> <p>【被災地】富山藩領28ヶ村及び富山城下（現在の富山市中心部）</p> <p>【災害の概要】跡津川断層の活動による大地震が発生し、マグニチュード7.1を記録した。この地震で立山カルデラの火口壁が崩れ落ち、常願寺川上流部の真川、湯川をせき止め、大小の湖を作った。その後の3月10日、4月26日に常願寺川奥山（立山カルデラ）から大量の土石流が発生し、大災害を引き起こした。これ以後、常願寺川は屈指の暴れ川となる。</p> <p>【教訓等】大正4（1915）年頃、泥谷の階段式堰堤最上部に使用された巨石に当時の知事によって刻まれた「涯天護」は、人里はるか隔たった立山カルデラにおいて砂防事業を行い、土砂流出による被害から下流の富山平野を護る気概を記しており、80年以上を経過してなお当時の砂防に携わった人々の心意気が伝わってくる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・石碑（泥谷の階段式堰堤最上部に使用された巨石）</li> <li>・絵画（県内博物館等各種施設に貯蔵）</li> <li>・写真（碑をとらえた写真等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ふるさと富山歴史館（富山新聞社2001）等</li> <li>・涯天護一とやまの砂防一（県土木部砂防課1999）</li> <li>・滑川市立博物館等</li> </ul>
16201-1	富山県	富山市	<p>【災害名】平成16年台風23号</p> <p>【発生日時】2004年10月20日～21日</p> <p>【被災地】富山県富山市桜谷、五福、神名地区 ほか</p> <p>【災害の概要】台風23号に伴う岐阜県飛騨地方での豪雨により、一級河川神通川及び井田川の水位が急激に増加し、両河川に注いでいる県管理河川及び市管理雨水幹線の流域で浸水被害が発生した。</p> <p>【教訓等】この浸水被害の原因及び問題点として、 ①台風の予測不足、②河川情報の理解と伝達不備、③排水樋管閉鎖に伴う内水排除の遅れ、④避難勧告、避難誘導の不備などが挙げられる。</p> <p>本市では、この浸水被害を教訓に、①防災計画・マニュアルの見直し、②河川情報の迅速な収集、③水門管理体制の強化、④内水排除体制の強化、⑤情報連絡体制の強化など、防災体制の強化を図ることとした。</p>	・写真（浸水被害状況をとらえた写真）	・富山県消防防災ヘリによる空撮写真
16201-2	富山県	富山市	<p>【災害名】昭和60年豪雪</p> <p>【発生日時】1985年（昭和60年）12月～1986年（昭和61年）3月</p> <p>【被災地】富山県富山市</p> <p>【災害の概要】昭和59年に引き続き2年連続の豪雪</p> <p>【教訓等】昭和59年の年末寒波により12月26日には富山市で55cmとなり、12月としては昭和51年以来の大雪となった。また、翌年1月4日から再び第1級の寒波に見舞われ、1月30日には積雪深さが139cmとなり、昭和14年の統計以来、歴代5位の記録となった。</p>	・その他（被害概要）	・建設省北陸地方建設局道路部監修『北陸の雪』
16201-3	富山県	富山市	<p>【災害名】昭和59年豪雪</p> <p>【発生日時】1984年（昭和59年）12月～1985年（昭和60年）3月</p> <p>【被災地】富山県富山市</p> <p>【災害の概要】56豪雪以来3年ぶりの大雪</p> <p>【教訓等】最大積雪深は、富山122cm、猪谷262cm、八尾203cm、であり、富山市の累計降雪深は692cmとなり38豪雪を超えた。</p> <p>また、低温により道路が圧雪状態となり積雪継続期間として109日間と富山気象台創設以来最長となり、県民・市民の生活に大きな影響を与えた。</p>	・その他（被害概要）	・建設省北陸地方建設局道路部監修『北陸の雪』
162019-1	富山県	富山市	<p>【災害名】平成18年豪雪</p> <p>【発生日時】2006年（平成17年）12月～2007年（平成18年）3月</p> <p>【被災地】富山県富山市</p> <p>【災害の概要】平成17年12月から平成18年3月にかけて全国的に記録的な豪雨となり、本市の被害は死者2人、負傷者18人、住家の一部損壊が1戸、床下浸水が1戸であった。</p> <p>【教訓等】積雪による都市機能の阻害、雪崩による集落の孤立などの被害を防止、軽減するための除雪体制の整備や雪害防止施設の整備など、雪害に強いまちづくりを推進する必要がある。</p>	なし	

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
162019-2	富山県	富山市	<p>【災害名】平成16年台風23号</p> <p>【発生日時】2004年10月20～21日</p> <p>【被災地】富山県富山市桜谷、五福、神明地区 ほか</p> <p>【災害の概要】台風23号に伴う岐阜県飛騨地方での豪雨により、一級河川神通川及び井田川の水位が急激に増加し、両河川に注いでいる県管理河川及び市管理雨水幹線の流域で浸水被害が発生した。</p> <p>【教訓等】この台風では、本市では20日から21日の総雨量が109ミリと比較的降雨が少なかったものの、神通川上流部の小鳥峠（飛騨市）では20日の総雨量が293ミリ（観測史最大）に達した。さらに、飛騨市においても、総雨量は216ミリとなり宮川沿線では、国道360号やJR高山線に甚大な被害が発生した。このため、下流部の本市で水位が急激に増加し、浸水被害が発生した。</p> <p>このことから、降雨や河川水位等の情報は、河川上流部も含めた状況把握や迅速な情報連絡等の重要性が浮き彫りとなった。</p>	なし	
162019-3	富山県	富山市	<p>【災害名】昭和59年豪雪</p> <p>【発生日時】1984年（昭和59年）12月～1985年（昭和60年）3月</p> <p>【被災地】富山県富山市</p> <p>【災害の概要】56豪雪以来3年ぶりの大雪</p> <p>【教訓等】最大積雪深は、富山122cm、猪谷262cm、八尾203cm、であり、富山市の累計降雪深は692cmとなり38豪雪を超えた。また、低温により道路が圧雪状態となり積雪継続期間として109日間と富山気象台創設以来最長となり、県民・市民の生活に大きな影響を与えた。</p> <p>北陸地方は、全国でも有数の豪雪地帯であるため、雪対策や降雪、積雪に対する対応は比較的高い状況にあるが、それを上回る豪雪により生活に大きな影響が出たことから、発生年号をとって、「59豪雪（ごうきゅうごうせつ）」と称し、語り継がれている。</p>	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・被害総額 5,188,755千円</li> <li>・人的被害 死者21名、負傷者87名</li> <li>・建物被害 「住家」全壊3棟、半壊1棟、床上浸水16棟、床下浸水216棟</li> <li>「非住家」全壊22棟、その他ほか116棟</li> </ul>	「北陸の雪」建設省北陸地方建設局 道路部 監修
162019-4	富山県	富山市	<p>【災害名】昭和60年豪雪</p> <p>【発生日時】1985年（昭和60年）12月～1986年（昭和61年）3月</p> <p>【被災地】富山県富山市</p> <p>【災害の概要】昭和59年に引き続き2年連続の豪雪</p> <p>【教訓等】昭和59年の年末寒波により12月26日には富山市で55cmとなり、12月としては昭和51以来の大雪となった。また、翌年1月4日から再び第1級の寒波に見舞われ、1月30日には積雪深さが139cmとなり、昭和14年の統計以来、歴代5位の記録となった。</p> <p>北陸地方は、全国でも有数の豪雪地帯であるものの、それまで「2年連続の豪雪はない」と言われてきた。その定説を覆す豪雪となった。</p>	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・被害総額 不明</li> <li>・人的被害 死者5名、負傷者38名</li> <li>・建物被害 「住家」一部損壊4棟、床上浸水3棟、床下浸水154棟</li> </ul>	「北陸の雪」建設省北陸地方建設局 道路部 監修
162019-5	富山県	富山市	<p>【災害名】昭和44年水害</p> <p>【発生日時】1969年（昭和44年）7月～8月</p> <p>【被災地】富山県富山市</p> <p>【災害の概要】7月1日から2日朝にかけて梅雨前線の影響で豪雨があり、神通川では二日早朝警戒水位に達し、増水のため富山大橋の橋脚が20センチ沈下し、通行禁止となった。</p> <p>8月11日には、県東部で集中豪雨があり、常願寺川では警戒水位を上回る水位に達し、西番地内外3カ所で堤防が決壊した。被害は、富山市で床上浸水628戸であるが、そのほとんどが水橋地区であった。さらに、床下浸水が2,572戸、道路決壊が6カ所、流出した橋は水橋で3カ所にのぼった。</p> <p>【教訓等】神通川に架かる富山大橋の沈下により、県内の東西交通の要である国道8号が通行止めとなり交通渋滞が発生し、さらに、中小商店街の売上げが減少するなど、市民生活への影響が非常に大きいものとなった。</p> <p>8月11日に発生した豪雨水害では、東京方面との物流交通が完全にマヒし商業経済活動に影響が出た。富山市では、被災者に対して市民税納入の延期などの救済策を講じるとともに、水橋に被災者相談所を設置し対応にあたった。水橋地区住民にとって今も語り継がれる災害となっている。</p>	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・被害総額 不明</li> <li>・人的被害 不明</li> <li>・建物被害 床上浸水628戸、床下浸水2,572戸</li> </ul>	富山市史

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
16202-1	富山県	高岡市	<p>【災害名】56豪雪（ごうろくごうせつ）</p> <p>【発生日時】昭和56年1月～3月</p> <p>【被災地】富山県高岡市内全域</p> <p>【災害の概要】昭和55年12月～昭和56年3月にかけての大雪で、北陸・東北地方を中心に雪害が発生し、全国で死者・行方不明者152人、負傷者2,158人を出した。本市（富山県高岡市）では、降雪総量（伏木）で617cmを記録し、その被害状況は死者6名、負傷者24名、家屋一部損壊11戸、床下浸水37戸であった。なお、1月6日に災害対策本部を設置し対策にあたった。</p> <p>【教訓等】この地域を含む北陸地方は、全国でも有数の豪雪地帯として知られており、そのため、雪対策や降雪及び積雪に対する対応能力は他地方と比較しても高いといえる。</p> <p>ところが、それらを上回る豪雪により、多数の被害者を出したことから、わが地方において、その雪害発生年号である昭和56年をとって「56豪雪（ごうろくごうせつ）」と称し、当地方有数の豪雪の年として語り継がれているものである。</p>	・文献資料	・富山県総務部消防防災課『災害の記録（昭和45年～昭和62年）』昭和63年3月発行
16202-2	富山県	高岡市	<p>【災害名】59豪雪（ごうきゅうごうせつ）</p> <p>【発生日時】昭和59年1月～3月</p> <p>【被災地】富山県高岡市内全域</p> <p>【災害の概要】昭和58年12月末～昭和59年3月にかけて日本列島は記録的な豪雪となり、各地の被害は死者131人、負傷者1,366人、住家の全壊61棟、半壊128棟に及んだ。本市（富山県高岡市）では、降雪総量（伏木）で563cmを記録し、その被害状況は死者2名、負傷者9名、床下浸水3戸であった。</p> <p>【教訓等】この地域を含む北陸地方は、全国でも有数の豪雪地帯として知られており、そのため、雪対策や降雪及び積雪に対する対応能力は他地方と比較しても高いといえる。</p> <p>ところが、それらを上回る豪雪により、多数の被害者を出したことから、わが地方において、その雪害発生年号である昭和59年をとって「59豪雪（ごうきゅうごうせつ）」と称し、当地方有数の豪雪の年として語り継がれているものである。</p>	・文献資料	・富山県総務部消防防災課『災害の記録（昭和45年～昭和62年）』昭和63年3月発行
16203-1	富山県	射水市	<p>【災害名】東町・荒屋大火</p> <p>【発生日時】昭和5年9月5日</p> <p>【被災地】東町・荒屋（現在の射水市八幡町）</p> <p>【災害の概要】560戸焼失</p> <p>【教訓等】東町（八幡町）から忽然として起こった火は、北の強風に煽られ、東町本通りに出て荒屋に抜け、東西に燃え広がり、約5時間のうちに560戸焼失、新湊町の東部の一部一帯を焦土と化した。</p> <p>水利の便が極めて悪く、東町、荒屋東部一帯は手の下しようもなく、破壊消防によって十数戸を破壊して火先を食い止め、午後2時ようやく下火になり、午後4時に鎮火した。損害額100万円、被災世帯468世帯（2,393人）の新湊町空前の大火災であった。</p>	・文献資料	・新湊市史編さん委員『新湊市近現代』平成4年3月25日発行
16203-2	富山県	射水市	<p>【災害名】古新町・長徳寺の大火</p> <p>【発生日時】昭和16年4月16日</p> <p>【被災地】古新町、長徳寺（現在の射水市港町）</p> <p>【災害の概要】698戸を焼失する火災</p> <p>【教訓等】長徳寺の一角より出火した。当日はフェーン現象で暖かく、南西の疾風に煽られ4時間にわたって燃え続ける大火災となった。</p> <p>石置板ぶき屋根の建物が多く、道路幅も狭く、数十間離れた砂浜に陸揚げされていた数十艘の漁船も焼き尽くした。火は風を呼ぶと言われる如く風上の西方へも逆行して広がり、遂に破壊消防の強行手段をとってようやく鎮火した。</p>	・文献資料	・新湊市史編さん委員『新湊市近現代』平成4年3月25日発行
16203-3	富山県	射水市	<p>【災害名】高波</p> <p>【発生日時】昭和24年11月23日～24日</p> <p>【被災地】新湊町</p> <p>【災害の概要】アレン台風による高波で1500戸が床下浸水及び半壊</p> <p>【教訓等】富山湾は23日午前6時30分ごろからアレン台風の余波を受け、風浪が高まり、夕刻の満潮と併せて大荒れとなった。新湊町の1500戸が床下浸水、半壊の危険状態となり、停電も重なり大混乱となった。また、この高波のため、船舶流出22隻、護岸堤亀裂10か所、同陥没2か所の被害を受けた。</p>	・文献資料	・新湊市史編さん委員『新湊市近現代』平成4年3月25日発行
16203-4	富山県	射水市	<p>【災害名】高波</p> <p>【発生日時】昭和25年10月31日</p> <p>【被災地】新湊町</p> <p>【災害の概要】ルビー台風による高波で285戸が床下浸水</p> <p>【教訓等】ルビー台風の影響で、31日午前6時から富山湾一帯に高波が発生し、新湊町では床下浸水や船舶被害、停電のため一時暗黒街と化した。</p>	・文献資料	・新湊市史編さん委員『新湊市近現代』平成4年3月25日発行

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
16203-5	富山県	射水市	<p>【災害名】大出水</p> <p>【発生日時】明治29年8月2日</p> <p>【被災地】新湊町内川西南部</p> <p>【災害の概要】内川東南部、高波により堤防が決壊</p> <p>【教訓等】浸水家屋1,036戸、田地浸水144ha</p>	・文献資料	・新湊市史編さん委員『新湊市近現代』平成4年3月25日発行
16203-6	富山県	射水市	<p>【災害名】大出水</p> <p>【発生日時】明治32年9月8日</p> <p>【被災地】新湊町</p> <p>【災害の概要】各河川出水</p> <p>【教訓等】庄川右岸の浅井地内（大門地区）の堤防が決壊し、新湊町で人家1,719戸が浸水した。</p>	・文献資料	・新湊市史編さん委員『新湊市近現代』平成4年3月25日発行、大門町教育委員会『大門町史』昭和56年11月3日
16203-7	富山県	射水市	<p>【災害名】大出水</p> <p>【発生日時】昭和9年7月11日</p> <p>【被災地】新湊</p> <p>【災害の概要】大雨による出水</p> <p>【教訓等】7月9、10日の飛騨地方の豪雨により11日午前9時ごろから庄川の水量が増加し、10時過ぎに庄川右岸浅井地内（大門地区）の堤防が5か所（130m）にわたって決壊し、前後して中田町下麻生地内（高岡市）の堤防も決壊し下流地帯の新湊町では3,125戸が浸水した。</p>	・文献資料	・新湊市史編さん委員『新湊市近現代』平成4年3月25日発行、大門町教育委員会『大門町史』昭和56年11月3日
16203-8	富山県	射水市	<p>【災害名】大雪</p> <p>【発生日時】昭和55年12月27日～昭和56年1月20日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】大雪</p> <p>【教訓等】シベリヤ高気圧が発達し、強い冬型の気圧配置が続き、年末寒波、正月寒波、中旬寒波と3つの強い一連の降雪群によってどか雪的な豪雪となった。</p> <p>2月半ば過ぎまで最深積雪量が変わらず、その総量は38豪雪の時を大幅に上回った。国鉄の貨物輸送のまひ状態が正月明けから16日まで10日以上も続き、また1月13日、主要道路の消雪、家の周辺の融雪、水道管の破裂による漏水などにより1日当たりの水道利用料が平日の2倍を超え、史上最高を記録した。17日と19日、除雪でホースが破れるなどの原因でプロパンガス爆発事故が相次いで起きたため、災害対策本部は、自治会を通じて全戸にチラシを配り、事故防止の徹底を図るよう要請した。</p>	・文献資料	・新湊市史編さん委員『新湊市近現代』平成4年3月25日発行
16204-1	富山県	魚津市	<p>【災害名】水害</p> <p>【発生日時】昭和27年6月30日～7月1日</p> <p>【被災地】富山県魚津市（片貝地区の貝田新から島尻は被害甚大）</p> <p>【災害の概要】6月30日夜半から7月1日にかけて市内を襲った大豪雨は、じつに40年ぶりのものといわれ、当市を貫流する早月川・角川・片貝川及び布施川と、これにつながる幾多の支流に氾濫を招き、市内の各所において堤防が決壊した。道路橋梁の流失・田畑山林の流失・埋没・冠水に加えて、家屋の全壊・流失・半壊及び床上・床下浸水などで、罹災者総数7,150人、被害総額12億円を上回る大災害となった。</p> <p>【教訓等】市制が発足して間もない折に、豪雨により百年ぶりともいわれる河川の大洪水が起き多くの被害が出た。これを機に、抜本的な防災対策の見地から、河川改修を押し進めるとともに、山間地帯の砂防工事を施して山災に備えることとした。また、緊急時の資材・器具を備えた水防倉庫の建設や河川沿岸の住民で、魚津市水防団を結成して、有事に対処することとなった。</p>	・文献 ・写真 ・フィルム	<p>・魚津市広報（昭和27.8.1発行）、魚津市、1952</p> <p>・魚津市史 下 現代のあゆみ、魚津市、1972、p.136-138・p488-491</p> <p>・魚津40年の思い出 社会教育叢書4、魚津市教育委員会、1992、p.69-71</p> <p>・水害写真集 濁流の記録Ⅱ、建設省北陸地方建設局ほか、1981、p.108-117</p> <p>・片貝郷土史、片貝郷土史編纂委員会、1997、p.341-343</p> <p>・水害写真、魚津市、1952、8冊</p> <p>・ビデオ「その日の風景 魚津市50年のあゆみ」、魚津市・北日本放送、2002</p>
16204-2	富山県	魚津市	<p>【災害名】魚津大火</p> <p>【発生日時】昭和31年9月10日</p> <p>【被災地】富山県魚津市</p> <p>【災害の概要】魚津市真成寺町から出した火が、台風通過後の南南西の風にあおられるなどの気象的な悪条件により、火はたちまち燃え広がり、市街地の約40%が焼け野原になった。</p> <p>罹災世帯1,583世帯、罹災者7,219人、焼失面積15万坪、被害総額約75億円、死傷者は、死者5人・重傷者5人・軽傷者165人であった。</p> <p>【教訓等】昭和27年に魚津市が発足して以来、最も被害の大きい災害のひとつである。</p> <p>被災地は、魚津市の市街地を形成しており、当時県下有数の過密地帯であり、町並みも雑然としていて、一朝有事の場合は大災害をもたらす危険があると指摘されていた地区であった。市は、このような大火災に再び見舞われないように、不燃都市の造成を目標に都市区画整理事業、幹線街路建設等を行い近代都市に変貌していくこととなった。</p>	・文献 ・記録フィルム	<p>・魚津市広報特報（昭和31.9.25発行）、魚津市、1956</p> <p>・魚津市史 下 現代のあゆみ、魚津市、1972、p.142-153・p.513-518</p> <p>・魚津40年の思い出 社会教育叢書4、魚津市教育委員会、1992、p.49-53・p.58-62</p> <p>・ビデオ「その日の風景 魚津市50年のあゆみ」、魚津市・北日本放送、2002</p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
162078-1	富山県	黒部市	<p>【災害名】黒部川水系出水災害</p> <p>【発生日時】平成7年7月11日～13日</p> <p>【被災地】富山県黒部市(当時宇奈月町)</p> <p>【災害の概要】北陸地方に停滞した梅雨前線が豪雨をもたらし、猫又雨量観測所では11日17時から18時の1時間に64mmの降雨を観測し、13日未明までの連続雨量は508mmに達した。</p> <p>黒部、高岡市などでは99,000世帯が停電し、黒部峡谷鉄道が土砂により寸断されるなど、道路とあわせて交通網も大きな被害を受けた。</p> <p>【教訓等】もっとも大きな被害を受けた黒部峡谷の猫又谷では、土砂と水の流出により峡谷鉄道が分断され不通となったほか、増水で関電工事用合宿所が浸水するなど、黒部川上流全体の工事関係者92名が孤立した。孤立した作業員の救出も視界不良などで難航し、不安も時間を追うごとに拡大するなど、豪雨災害の恐怖を改めて思い知らされることとなった。</p>	文献	国交省黒部河川事務所発行、「黒部川水系出水災害の記録」
162078-2	富山県	黒部市	<p>【災害名】黒部川洪水</p> <p>【発生日時】昭和44年(1969年)8月10日～11日</p> <p>【被災地】主な被災地(小地名まで) 富山県黒部市(当時宇奈月町)、入善町</p> <p>【災害の概要】北陸地方に停滞した梅雨前線が豪雨をもたらし、愛本地点での警戒流量を超え、計画高水流量4,200立米/秒を上回る5,661立米/秒の大出水を記録した。これにより、黒部川右岸側の堤防が破堤し、氾濫面積1,050ha、家屋流失・全壊7戸、半壊・床上浸水436戸、床下浸水410戸、愛本堰堤本体のゲート及び取水施設が破壊され、愛本橋も流失した。</p> <p>【教訓等】この洪水により、過去の洪水記録、雨量が再検討され、昭和50年(1975)に基本高水流量を4,200立米/秒から7,200立米/秒とし、このうち1,000立米/秒を上流のダム群によって調整することで計画高水流量が6,200立米/秒に改訂された。</p>	文献	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒部市史編纂委員会編纂、黒部市史(歴史民俗編)、平成4年発行</li> <li>・国交省黒部河川事務所発行、「激流に挑む～黒部川直轄改修60周年の歩み」、平成10年発行</li> </ul>
16322-1	富山県	上市町	<p>【災害名】三八豪雪</p> <p>【発生日時】昭和38年1月15日～下旬</p> <p>【被災地】上市町全域</p> <p>【災害の概要】豪雪：上市町最大深雪200cm、交通機関・通信網大混乱</p> <p>【教訓等】町において県と協力のうえ雪崩危険地帯の現地調査を行い、危険箇所には赤旗を立てて通行する付近の付近の住民に注意を呼びかけた。</p>	・文献	・上市町『新上市町誌』平成17年発行
16322-2	富山県	上市町	<p>【災害名】五六豪雪</p> <p>【発生日時】昭和55年12月下旬～昭和56年1月上旬</p> <p>【被災地】上市町全域</p> <p>【災害の概要】豪雪：上市町最大深雪260cm(役場前で165cm)</p> <p>【教訓等】町において全世帯に対して屋根の雪下ろしをよびかけるとともに、除排雪協力費やトラクター・ダンプなどの購入費の助成を行った。また上市業業青年部や消防団員、PTAが独居老人宅や学校の雪下ろしをおこなうなど、町民総ぐるみで除雪作業をおこなった。</p>	・文献	・上市町『新上市町誌』平成17年発行
16322-3	富山県	上市町	<p>【災害名】昭和44年8月豪雨</p> <p>【発生日時】昭和44年8月</p> <p>【被災地】上市川、大岩川等河川流域</p> <p>【災害の概要】集中豪雨、洪水、洪水発生後の濁水</p> <p>【教訓等】災害復旧及び濁水対策としての上水道設置が緊急の課題となり、昭和45～48年にかけて緊急工事が行われた。</p>	・文献	・上市町『新上市町誌』平成17年発行
170003-1	石川県		<p>【災害名】ジェーン台風</p> <p>【発生日時】昭和25(1950)年9月3日</p> <p>【被災地】石川県下全域</p> <p>【災害の概要】若狭湾をぬけて、金石沖20kmの地点で通過し、羽咋沖から能登半島を横断して富山港に抜け北進した。金沢地方気象台開設以来の最大風速44m/sを記録し被害が甚大であった。死者不明者24人、重軽傷者298人であった。</p> <p>【教訓等】県は災害対策本部を設置被害の調査ならびに救護班を編成した。知事は県下の全壊家屋のり災者を対象として、災害救助法を適用してり災者の救助を行うとともに、見舞金を支給した。また、この災害に対し、天皇、皇后両陛下より御見舞金が下賜された。これくらいの風速になると普通の民家では危険であり、安全なところへ避難することの大切さを学んだ。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「石川県災異史」1971年(石川県、金沢地方気象台)</li> <li>・「実録石川県史」1991年(能登印刷)</li> <li>・「日本大百科全書」1986年(小学館)</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
17000 3-2	石川県		<p>【災害名】昭和38年1月豪雪</p> <p>【発生日時】昭和38（1963）年1月10日～1月27日</p> <p>【被災地】石川県金沢市、小松市、山中町など2市1町5村</p> <p>【災害の概要】猛風雪が20日間程休むことなく県下全域を荒れくるい、風速は連日15mを突破し降雪量も金沢市で181cm、山沿い地方では400～700cmをみるに至った。死者・不明者25名、重軽傷者151名</p> <p>【教訓等】降雪には慣れている地方ではあるが余りにも集中的、継続的、長期にわたる降雪であったので、人的、物的、精神的被害が甚大であった。市民の多くは2階かた出入りしたりして終日長期にわたり除雪作業に追われた。雪捨て場の確保にも困難を極め、除雪作業が長期間続いた。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「石川県災異史」1971年（石川県、金沢地方気象台）</li> <li>・「実録石川県史」1991年（能登印刷）</li> </ul>
17000 3-3	石川県		<p>【災害名】昭和9年手取川大水害</p> <p>【発生日時】昭和9（1934）年7月11、12日</p> <p>【被災地】川北村朝日をはじめとする手取川流域</p> <p>【災害の概要】活発な梅雨前線による記録的な豪雨と多量な残雪融雪水による大水害。水位が8m上昇の場所も。堤防の決壊212箇所。死者91人、行方不明18人、流出家屋240戸、床上浸水5,003戸。</p> <p>【教訓等】白峰～一ノ瀬中ほどの手取川には当時濁流とともに流されてきた巨岩が「百万貫の岩」と呼ばれ、現在でも横たわっている。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「石川県災異史」1971年（石川県、金沢地方気象台）</li> <li>・「石川県大百科事典」1993年（北國新聞社）</li> <li>・「昭和九年石川県水害誌」1935年（石川県）</li> </ul>
18000 9-1	福井県		<p>【災害名】福井地震</p> <p>【発生日時】昭和23年（1948年）6月28日</p> <p>【被災地】福井県福井市、丸岡町、春江町等</p> <p>【災害の概要】マグニチュード7.1、福井平野全域で家屋全壊率が60%をこえ、坂井郡丸岡町・磯部村・春江町などの町村では全壊率100%、死者・行方不明者3858人、被害総戸数4万6115戸（『福井震災誌』）、この地震を契機として気象庁震度階に新たに震度7（激震）が設けられた。</p> <p>【教訓等】震災直後に、福井市をはじめ丸岡・金津・春江・松岡・森田町で火災が発生。九頭竜川・足羽川の橋が落ちて交通網が寸断、被災状況把握とその後の救援物資や復旧資材の輸送に深刻な影響を与えた。また、九頭竜川をはじめ各河川の堤防は1～5メートルも沈下、各所で亀裂や崩壊がおこり、これが1か月後の大水害を引き起こす原因となった。</p>	・写真	福井県文書館所蔵写真
18000 9-1	福井県		<p>【災害名】18年福井豪雪</p> <p>【発生日時】平成17年12月～平成18年2月</p> <p>【被災地】福井県嶺北地方一円</p> <p>【災害の概要】平成17年12月上旬と例年に比べ早い時期から降り始めた雪は、水分も多く重い雪質であったため、その重量による家屋等の損壊をもたらしたほか、屋根雪下ろし作業の際の転落など、多くの人的被害が生じた。死者14名、負傷者162名、全壊65棟、半壊49棟、一部破損363棟、床上浸水22棟</p> <p>【教訓等】近年は積雪量が少ないため、雪下ろしの技術が低下したのか、雪下ろしの際の死傷者が多かった。このため、県による雪かき研修を実施し、雪下ろし等の技術の向上を図った。また、除雪の際の健康管理や、居住者が不在の建物の保守について、留意する必要があることを再確認した。</p>	・文献資料	
18000 9-2	福井県		<p>【災害名】芦原大火</p> <p>【発生日時】昭和31年4月23日</p> <p>【被災地】福井県坂井郡芦原町</p> <p>【災害の概要】午前6時40分頃、芦原駅前から出火、南南東の烈風にあおられ芦原温泉の旅館街、商店街の大半が焼失して正午頃鎮火した。当時芦原町は人口13515人、市街地人口3629人のうち建物326戸、348世帯、1653人が被災し、市街地の罹災率は54%にのぼった。</p> <p>【教訓等】発達した低気圧が沿海州に進むにつれ南よりの風が強まりフェーン現象が起こり、福井県地方には前日から異常乾燥注意報が出されていた。出火当時は風速14.2m/秒、気温17.2℃、湿度54%と非常に火災が起こりやすい状況であった。飛び火により池上地区で山林も火災発生した。午前9時に災害救助法発動、罹災者救助のため陸上自衛隊金沢隊に出動要請。</p>	・文献資料	00058 総務部秘書広報課「芦原町大火」（福井県文書館所蔵）



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
180009-3	福井県		<p>【災害名】40・9風水害</p> <p>【発生日時】昭和40年9月10日～18日</p> <p>【被災地】福井県下一円</p> <p>【災害の概要】9月11日から18日までのわずか9日間に台風23号・24号と集中豪雨があいついで襲来し、福井県下であわせて死者33名、重軽傷者192名、家屋全半壊5719戸、罹災者203763人という甚大な被害をもたらした。</p> <p>【教訓等】台風23号は、最大瞬間風速42.5mを記録する「風台風」として猛威をふるい、大野市の富田小学校や鯖江市長泉寺町の西福寺など突風による家屋の倒壊が続出。収穫を目前にした中・晩稲の約70%が倒伏するなど農業関係の被害が大きかった。また、14日夜から15日にかけて、奥越地方を襲った局地的な集中豪雨では、大野郡西谷村中島・上笹又をはじめ西谷村全域に壊滅的被害をもたらした。さらに17日夕方から福井県に接近した台風24号は、嶺南地方を中心に北川、南川、佐分利川などの本流、支流が氾濫決壊し小浜市、大飯郡大飯町、高浜町、三方郡三方町などで浸水・家屋倒壊があいついだ。また、今立郡今立町大滝では10人が生理めとなる山崩れがおこるなど人的被害も著しかった。このようにたてつけにおこった災害により、県下14市町村が災害救助法の適用をうけ、186か所の避難所に6万1608人が収容されるという事態にいたった。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・52 総務部地方課「西谷村豪雨災害」</li> <li>・13228～13231、13233、13234 同課「西谷村災害対策」</li> <li>・542 総務部財政課「昭和40年3大風水害対策」</li> <li>・6062 秘書課「40年9月風水害被災状況写真」（福井県文書館所蔵）</li> <li>・福井県開発局『三大風水害の記録』1966年3月</li> </ul>
182010-1	福井県	福井市	<p>【災害名】福井地震</p> <p>【発生日時】昭和23年6月28日</p> <p>【被災地】坂井郡、福井市、今立郡</p> <p>【災害の概要】マグニチュード7.1、死者930人、家屋全壊12,270戸、家屋半壊3,158戸、家屋焼失2,069戸等の被害であった。</p> <p>【教訓等】規模の割合に被害が大きく、福井平野では全壊率100%に達する集落も多かった。振動が激しかったのは、30～40秒くらいで、家屋は5～15秒くらいで倒壊し、その下敷きになり圧死する人が続出した。特に、戦災を受けた焼けビルの大和百貨店（鉄筋コンクリート）が倒壊したのは、有名である。この福井地震をふまえ、「福井市地域防災計画」内で被害想定を実施し、その後の具体的な対策に活かされた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文（福井市中央公園内「震災記念碑」）</li> <li>・写真（当時の被害をとらえた写真）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福井烈震誌、1978年</li> <li>・「福井烈震誌」内に掲載</li> <li>・「福井烈震誌」に収められた写真 60点</li> </ul>
182010-2	福井県	福井市	<p>【災害名】福井豪雨</p> <p>【発生日時】昭和17年7月18日</p> <p>【被災地】福井市（美山町、池田町も被災あり）</p> <p>【災害の概要】災害当日の時間最大雨量75ミリメートルを記録した大雨により上流からの増水に加え、支川からも足羽川に大量に流入したため、足羽川左岸が決壊。そのため、木田・みのり・一乗地区等で34,705世帯、96,000人に対し避難勧告・避難指示を発令し、各公民館、小・中学校等の33個所の避難所に最大3,719人が避難した。住宅被災状況は全壊11棟・半壊39棟・一部損壊82棟・床上浸水2,514棟・床下浸水8,673棟に及ぶ。</p> <p>【教訓等】地球温暖化に伴う異常気象により、局地的な大雨を発生させ、時間最大雨量75ミリメートル、4時間の降雨量が174ミリメートルという未曾有の集中豪雨となった。市内各地で河川が越水する中、足羽川の堤防が決壊した。自助・共助という地域コミュニティの力により、被害は最小限にとどまったが、「福井豪雨」をうけ、福井市危機管理対策（福井豪雨）検討会議を発足させ、避難伝達体制、情報伝達・避難の在り方等、水害に対する危機管理や防災体制の問題点を検証し、今後の体制に反映させている。</p>	・文献資料	福井市災害記録誌 福井豪雨、2004年
182028-1	福井県	敦賀市	<p>【災害名】28・9年の水害</p> <p>【発生日時】明治28年7月29日</p> <p>【被災地】敦賀市全域</p> <p>【災害の概要】災害・被害の詳細については出典情報資料（敦賀郡役所『敦賀郡誌』昭和47年6月23日発行 株式会社名著出版 P618～634）を参照</p> <p>【教訓等】敦賀市は比較的他地域より災害（自然災害に限る）が少ない所であるが、その地理的条件により注目すべきは水害と雪害であると考えられる。水害については昭和初期に笹の川を掘削し、現在の流路を開き、4・5メートルの連続堤防を建てるという対策をとっている。</p>	・文献資料	敦賀郡役所『敦賀郡誌』昭和47年6月23日発行 株式会社名著出版 P618～634
182028-2	福井県	敦賀市	<p>【災害名】56豪雪</p> <p>【発生日時】昭和56年1月15日</p> <p>【被災地】敦賀市全域</p> <p>【災害の概要】災害・被害の詳細については出典情報資料参照</p> <p>【教訓等】敦賀市は比較的他地域より災害（自然災害に限る）が少ない所であるが、その位置的条件により注目すべきは水害と雪害、火災である。雪害について、今でも市民の記憶に新しいのは56豪雪である。屋根まで積もった雪を、町内で連携してかき分け苦労して歩いて職場まで行ったことなど、鮮明に覚え語る人が多い。それは56豪雪からまだ月日がそんなに経っていないことと、近年目に見えて少なくなった雪と、一昔前の大雪とを対照的に捉えている市民が多いからであると考えられる。</p>	・文献資料	敦賀市編さん委員会『敦賀市史下巻』昭和63年3月31日発行 敦賀市役所 P645～649

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
182028-3	福井県	敦賀市	<p>【災害名】火災</p> <p>【発生日時】</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】災害・被害の詳細については出典情報資料参照。</p> <p>【教訓等】敦賀市は比較的他地域より災害（自然災害に限る）が少ない所であるが、その地理的条件により注目すべきは水害と雪害、火災である。海辺の町ではよくあることだが、年間を通じて強風が吹き、火事になると延焼しやすい。よって江戸時代から現在まで様々な火事の記録が残っている。</p>	・文献資料	<p>・敦賀市編さん委員会 昭和63年3月31日発行『敦賀市史 通史編下巻』（敦賀市役所）P 649</p> <p>・敦賀市教育史編さん委員会 平成14年6月25日『敦賀市教育史 通史編上巻』（敦賀市教育委員会）P 261～263</p> <p>・敦賀市教育委員会『敦賀市通史』昭和31年8月P 256～262</p>
182028-4	福井県	敦賀市	<p>【災害名】刀根の水害</p> <p>【発生日時】明治20年7月29日</p> <p>【被災地】敦賀市刀根</p> <p>【災害の概要】災害・被害の詳細については添付資料1-1を参照</p> <p>【教訓等】敦賀市刀根地区は四方を山に囲まれ、水害が発生しやすい場所にある。明治20年におこった水害は多くの被害をこの地区にもたらした。この悲劇を伝える為、小学生向けに作成された副読本に本災害を収録したのであろう。</p>	・文献資料	敦賀市東愛発小学校『わたしたちのふるさと刀根 杉箸』昭和58年3月15日 敦賀市民運動推進協議会 P 51～52
182028-5	福井県	敦賀市	<p>【災害名】刀根の大火</p> <p>【発生日時】昭和21年10月2日</p> <p>【被災地】敦賀市刀根</p> <p>【災害の概要】災害・被害の詳細については添付資料1-2を参照</p> <p>【教訓等】昭和に入ってから災害のため刀根地区ではこの火事を覚えていてという人もいる。終戦直後ということもあり復興は困難を極めたと考えられるが、記述にあるように村人の努力で克服した。この悲劇を忘れない為に小学生向けの副読本に記載し、火災予防の訓練などを現在も行っているという。くわえタバコをしないなどの決まりは今でも村内で口答で申し送られているらしい。</p>	・文献資料	敦賀市東愛発小学校『わたしたちのふるさと刀根 杉箸』昭和58年3月15日 敦賀市民運動推進協議会 P 59～63
182028-6	福井県	敦賀市	<p>【災害名】杉箸の大火</p> <p>【発生日時】明治18年8月2日</p> <p>【被災地】敦賀市杉箸</p> <p>【災害の概要】災害・被害の詳細については添付資料1-3を参照</p> <p>【教訓等】敦賀市杉箸は山間の地区である。火事になった当時は消火設備が整っていなかったため惨事になったという。この惨事を後世に伝える為、小学生向けの副読本に記載されている。</p>	・文献資料	敦賀市東愛発小学校『わたしたちのふるさと刀根 杉箸』昭和58年3月15日 敦賀市民運動推進協議会 P 49～51
182044-1	福井県	小浜市	<p>【災害名】台風13号災害</p> <p>【発生日時】昭和28年（1953年）9月25日</p> <p>【被災地】小浜市内全域</p> <p>【災害の概要】9月17日カロリン諸島東部で発生した熱帯低気圧は、翌18日グアム島南東350kmの海上で台風13号となり25日午後3時頃紀伊半島東部潮岬付近で上陸、伊勢湾を経由して本州を縦断、翌26日朝には三陸沖へ抜けた。</p> <p>【教訓等】当地一体を襲いし台風13号は、未曾有の風速と雨量を伴い、若狭地方一帯で猛威をふるった。小浜市では、一夜にして橋を流し、家々を倒し、道路を削り、田畑を荒らすなどし、当時の市長ら41名の尊い命を奪った。</p>		
182044-2	福井県	小浜市	<p>【災害名】平成16年台風23号災害</p> <p>【発生日時】2004（平成17年）10月20日</p> <p>【被災地】小浜市</p> <p>【災害の概要】10月20日13時頃高知県土佐清水市付近に上陸した台風23号は、大型で強い勢力を保ったまま18時前に大阪府泉佐野市付近に再上陸して各地で猛威を振るった。小浜市では19時15分市内全域に避難勧告を発令、同20時45分自主避難へ切り替えた。被害は、床上浸水15棟、床下浸水88棟、家屋半壊13棟、家屋一部破損55棟、工場火災1事業所、道路36箇所、河川45箇所、橋梁破損38箇所、堤防破損631箇所、停電8,100戸、小中学校、公民館、農林水産、商工の被害等、被害総額は約16億円となった。</p> <p>【教訓等】</p>		
182052-01	福井県	大野市	<p>【災害名】大野町の大火</p> <p>【発生日時】明治21年4月8日</p> <p>【被災地】大野町</p> <p>【災害の概要】明治21年4月8日、横町から出火し、全焼1,113戸、半焼14戸、土蔵322棟のほか有終小学校、裁判所、寺院、大野病院、会社など7棟を焼き尽くし、死者3名、けが人79名にのぼる大災害となりました。</p> <p>【教訓等】明治32年6月18日にも火災が生じ、その後、街路を広げ、家の新築には安い金利で資金を貸し、板葺きを瓦葺きに改めました。</p>	・文献資料	大野のあゆみ改訂版 平成16年7月発行 編集者：「大野のあゆみ」改訂版編集委員会、大野市教育委員会

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
18205 2-02	福井県	大野市	<p>【災害名】大野町の大火</p> <p>【発生日時】明治32年6月18日</p> <p>【被災地】大野町</p> <p>【災害の概要】明治32年6月18日、横町から出火した火災は大野町をたちまち火の海にし、被害は、全焼741戸、半焼7戸、土蔵76棟、警察署、税務署、郵便局を焼き尽くし、猛火は下庄の中野にまでおよびました。</p> <p>【教訓等】2度の災害後、街路を広げ、家の新築には安い金利で資金を貸し、板葺きを瓦葺きに改めました。</p>	・文献資料	大野のあゆみ改訂版 平成16年7月発行 編集者：「大野のあゆみ」改訂版編集委員会、大野市教育委員会
18205 2-03	福井県	大野市	<p>【災害名】38豪雪（さんばちごうせつ）</p> <p>【発生日時】昭和38年1月</p> <p>【被災地】大野市</p> <p>【災害の概要】昭和38年正月から降り続いた雪は止むことなく降り積もり、最深積雪深306cmを記録しました。この間交通機関も不通となり、約1ヶ月間陸の孤島となり、野菜・石油が不足しました。</p> <p>【教訓等】市では、自衛隊の応援を頼み、道路の除雪をしてもらいました。越美北線は、自衛隊250人、市の職員と民間人約千人、ロータリー車とラッセル車で3mを超える雪を除き、2月23日に福井-大野間がようやく開通しました。大野から勝原まで開通したのは3月4日でした。京福電鉄越前本線の開通も2月23日でした。また、山間部の孤立した村々には、ヘリコプターで物資を輸送しました。</p>	・文献資料	大野のあゆみ改訂版 平成16年7月発行 編集者：「大野のあゆみ」改訂版編集委員会、大野市教育委員会
18205 2-04	福井県	大野市	<p>【災害名】40.9風水害（台風23号、集中豪雨、台風24号）</p> <p>【発生日時】1965年（昭和40年）9月10日～15日</p> <p>【被災地】福井県大野市、西谷村</p> <p>【災害の概要】昭和40年9月10日の台風23号、秋雨前線、台風24号により大野市では死傷者21名をはじめ壊滅的な被害がおよび災害救助法が大野市、西谷村に適用された。</p> <p>【教訓等】1965年9月10日に襲った台風23号は、瞬間風速42.5mを記録しました。この台風で富田小学校の木造校舎は倒壊しました。続いて海上にあった秋雨前線が北上し、本州に停滞してほとんど動かず、14日、15日に奥越地方に集中豪雨をもたらしました。西谷村では、14日午後7時ごろには滝のような豪雨に襲われ、両日の雨量が千ミリを突破しました。</p>	・文献資料	大野のあゆみ改訂版 平成16年7月発行 編集者：「大野のあゆみ」改訂版編集委員会、大野市教育委員会
18205 2-05	福井県	大野市	<p>【災害名】56豪雪</p> <p>【発生日時】昭和55年12月26日～</p> <p>【被災地】大野市</p> <p>【災害の概要】昭和55年12月26日から強い寒気団が南下し、年末から年始にかけて雪が降り続き、最深積雪深264cmを記録しました。被害は、家屋などの倒壊16棟、死者2名、重傷者12名（和泉村含）にのぼり、ガス漏れ事故、床上・床下浸水、倒木などの被害が相次ぎました。</p> <p>【教訓等】市は、豪雪対策本部を設置し、自衛隊の派遣を要請しました。市民、自衛隊が一体となって除雪しましたが多くの被害に見舞われました。越美北線は12月28日から1月31日まで不通となり、市内の小学校も、冬休みが明けても三学期の始業式が出来ず休校となり、16日ようやく始業式をすることが出来ました。</p>	・文献資料	大野のあゆみ改訂版 平成16年7月発行 編集者：「大野のあゆみ」改訂版編集委員会、大野市教育委員会
18206 1-1	福井県	勝山市	<p>【災害名】勝山町大火</p> <p>【発生日時】明治29年4月13日</p> <p>【被災地】市街地一円</p> <p>【災害の概要】市街地一円に延焼した大火で、罹災戸数1,117戸、半焼3戸、土蔵292棟、焼死者5名、負傷者32名であった。</p> <p>【教訓等】この大火を教訓とし、毎年4月13日に、勝山市をあげて、全消防職・団員が参加し、春季消防訓練として、活動訓練、分列行進、一斉放水を実施し、消防団員の士気高揚と体力錬成を兼ね、まといりレーを行っている。全市に鳴りひびく消防車のサイレン等により、市民の防火意識の高揚をうながす。</p>	・文献資料	勝山消防沿革史 関源右衛門編 昭和10年8月
18207 9-1	福井県	鯖江市	<p>【災害名】宝暦の鯖江大火</p> <p>【発生日時】宝暦5年3月17日 早朝</p> <p>【被災地】旧鯖江城下</p> <p>【災害の概要】宝暦5年（1755）3月17日、東鯖江出村より出火し、折からの南風により、武家屋敷83、足軽組長屋4棟、町家132棟、神社2を焼失した。鯖江城下の大半に被害が及んだ。</p> <p>【教訓等】鯖江藩の記録「鯖江藩日記」（鯖江市資料館蔵）の宝暦5年（1755）3月17日・23日条などによる。</p>	・文献資料	『鯖江市史』（通史編上巻）平成5年 間部家文書刊行会『間部家文書』（第3巻）昭和59年 古文書「鯖江藩日記」

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
18207 9-2	福井県	鯖江市	<p>【災害名】平成16年7月福井豪雨</p> <p>【発生日時】平成16年7月18日</p> <p>【被災地】福井県鯖江市</p> <p>【災害の概要】平成16年7月13日から新潟・福島豪雨をもたらした梅雨前線は、北陸地方をゆっくり南下し、7月18日未明から昼前にかけて福井県嶺北地方を中心に局地的な豪雨をもたらした。このため、市内を流れる鞍谷川、河和田川および天神川が氾濫し、片上地区、北中山地区および河和田地区を中心とする本市東部地域に死者1人、負傷者13人、住家全壊4棟、半壊44棟、一部破損80棟、床上浸水352棟、床下浸水629棟、被害総額が112億円を超える未曾有の災害となった。</p> <p>【教訓等】豪雨災害を受け、地域防災計画の見直し、デジタル同報防災行政無線の整備、日野川洪水ハザードマップの作成を行い、防災力の強化を図っている。</p>	・文献資料	平成16年7月福井豪雨 災害の記録
18207 9-3	福井県	鯖江市	<p>【災害名】本山誠照寺火災</p> <p>【発生日時】文久2年11月</p> <p>【被災地】今立郡鯖江町（現鯖江市本町）</p> <p>【災害の概要】鯖江本山誠照寺火災により、御影堂、阿弥陀堂を焼失したものの。</p> <p>【教訓等】御影堂より出火したとされる。四足門の「駆け出しの龍」（伝左甚五郎作）が出火の際に、龍が水を吐いて四足門を守ったという伝承がある。</p>	・文献資料	『誠照寺史』昭和43年5月
18208 7-1	福井県	あわら市	<p>【災害名】あわら大火</p> <p>【発生日時】昭和31年（1956年）4月23日</p> <p>【被災地】あわら市芦原温泉</p> <p>【教訓等】この大火を機会として、毎年4月23日午前6時43分を「ノー・モア 芦原大火」の日と強く心に刻み付けた。火災を始め、あらゆる災害に対処できる強い心構えと怠りない準備を整えるため、4月23日を「あわら市防災の日」と定め、毎年市民をあげて総合防災訓練を行い万に備えている。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「語り継ぐ 災害の記録」平成13年9月発行 福井県消防長会</li> <li>・開湯芦原100年史 P266～274</li> <li>・芦原町史 P650～652</li> <li>・災害調査資料綴</li> </ul>
18209 5-2	福井県	越前市	<p>【災害名】丁卯の大火</p> <p>【発生日時】1927年（昭和2年）4月21日</p> <p>【被災地】福井県越前市栗田部町（当時 今立郡今立町栗田部）一帯</p> <p>【災害の概要】午前0時40分頃、製材所より出火、南東の風強く人家163戸を含む、合計218棟を焼失した。</p> <p>【教訓等】大火に際し、蒸気ポンプでは放水までに時間を要した為、町の有志より寄付金を仰ぎ、ガソリンポンプの購入に至った。</p>	・文献資料	飯田榮介 栗田部警防史 P24～P26、P61～P64 昭和16年9月10日発行
18209 5-3	福井県	越前市	<p>【災害名】嘉永の大火</p> <p>【発生日時】1852年（嘉永5年）3月23日</p> <p>【被災地】福井県越前市（旧武生市内部）</p> <p>【災害の概要】寺院49を含む計1,825戸が焼失した。</p> <p>【教訓等】武生の町家の約8割が焼失する大火災の中で大宝寺の本堂南脇の地藏堂が不思議にも焼け残った。これは地藏尊が水を噴出して消したからだと言われ、以来「水吹き地藏」と人々に慕われ、信仰されてきました。同寺ではこの嘉永の大火の日を記念とし、水吹き地藏尊の徳をたたえる法要を毎年行い町民の防火意識の高揚に努めている。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・語り継ぐ災害の記録 P12</li> <li>・武生市史編纂委員会 武生市史概説篇 昭和51年12月30日</li> </ul>
18302 4-1	福井県	福井市 （旧美山町）	<p>【災害名】昭和38年豪雪</p> <p>【発生日時】昭和38年1月26日</p> <p>【被災地】福井県美山町籠谷、大谷地係</p> <p>【災害の概要】1月25日に積雪2.0mを記録し、翌日雪崩が発生。（高さ300m、幅50mの表層雪崩） 小学校から集団下校中の児童に雪崩が直撃し、児童9名と教頭が生き埋めとなる。翌朝、児童3名と教頭が遺体で見発見された。</p> <p>【教訓等】昭和38年の豪雪時は、積雪により道路が通行止めとなり、山間の集落で1日間連絡が途絶えたが、昭和56年の豪雪時には、除排雪作業が効果的に行われ、通行が一部確保できたため、孤立集落が少なく被害の拡大を防げた。</p>	現場近くに慰霊碑を設立（美山町史参照）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・町史…昭和59年9月20日発行</li> <li>・碑文…昭和38年9月建立</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
183024-2	福井県	福井市 (旧美山町)	<p>【災害名】平成16年7月福井豪雨</p> <p>【発生日時】平成16年7月17～18日</p> <p>【被災地】福井県美山町全域</p> <p>【災害の概要】18日明け方から降り始めた大雨は、午前6時に最大時間雨量96ミリを観測し、総雨量は286ミリであり、時間雨量は福井地方気象台で観測史上初であった。この梅雨前線による大雨で美山町内では土石流や洪水、破線の氾濫が各地で発生し、特に足羽川流域では大きな被害を受け近年では稀に見る災害となった。</p> <p>【教訓等】足羽川の氾濫は流域に点在する集落の相互の連結を破壊し、各集落が孤立する事態となった。町内全域で電気、水道、通信が途絶え、現代の災害における弱点を曝け出した。この災害では、町の防災無線の活用、住民の避難のために地元の建設業者が重機を使って協力してくれたこと、避難所が被災したこと、が特徴である。また、復旧の際、ボランティアが日本全国から駆けつけ、16000人余りの協力を得て、早期復旧を実現できた。学生ボランティアの活躍が目立った。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福井豪雨モニュメントを建立</li> <li>・災害写真のデジタルデータ有</li> </ul>	福井豪雨モニュメント (2005) 住所：美山町瀬ヶ原 上新橋付近
183229-1	福井県	永平寺町	<p>【災害名】水害</p> <p>【発生日時】1740年7月3日</p> <p>【被災地】永平寺町光明寺（当時光明寺村）等</p> <p>【災害の概要】九頭竜川沿いの田畑133石余 村高の内3割3分が流出</p> <p>【教訓等】ダム・堤防等、現在のように進歩していないため、九頭竜川が貫流している当町においては度々水害が発生し、上記のように甚大な損害を被る場合もあった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	永平寺町：永平寺町史 昭和59年 627、628ページ
183229-2	福井県	永平寺町	<p>【災害名】火災</p> <p>【発生日時】1862年3月18日</p> <p>【被災地】永平寺町東古市（当時東古市村）</p> <p>【災害の概要】ほぼ全村焼失と推定（家48軒、寺1軒）</p> <p>【教訓等】フェーン現象下で、出火するとまたたく間に1村を炎に包んでしまったと推測される。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	永平寺町：永平寺町史 昭和59年 632～637ページ
183229-3	福井県	永平寺町	<p>【災害名】5 6 豪雪</p> <p>【発生日時】昭和55年12月下旬～昭和56年1月中旬</p> <p>【被災地】町内全域</p> <p>【災害の概要】住家 一部破損6棟、床下浸水60棟 非住家 全壊7棟、一部破損26棟、半壊2棟、床下浸水15棟</p> <p>【教訓等】年末から1月中頃までの短期間に記録的な大雪が3回にわたり降り、積雪が200cmを越えた所があった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	永平寺町 ファイル（5 6 豪雪災害綴）
183610-1	福井県	坂井市 (旧三国町)	<p>【災害名】三国湊の大火</p> <p>【発生日時】江戸時代（添付資料1－1のリスト）</p> <p>【被災地】三国湊</p> <p>【災害の概要】概要は『修訂 三国町史』コピーのとおり</p> <p>【教訓等】対策として、火事の起こりやすい職業（鍛冶屋など）の規制、藁葺きを止め道幅を広げることを三国湊内の各町で決めたことなどが挙げられるが、実施状況は不詳。また、信仰面では、三国祭りで木場町が桜山車を出さないと火事が起こるといふ言い伝えがあり、現在も受け継がれている。度重なる江戸の大火に対し、防火への願いから生まれた伝承といえる。（『三国の昔話』）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三国町史編纂委員会編『修訂三国町史』昭和58年発行</li> <li>・三国町文化財保護委員会編『三国の昔話』昭和62年発行</li> </ul>
183644-1	福井県	坂井市 (旧丸岡町)	<p>【災害名】福井大地震</p> <p>【発生日時】昭和23年6月28日 午後5時14分（当時はサマータイムで、現在の午後4時14分）</p> <p>【被災地】福井県坂井郡丸岡町全域</p> <p>【災害の概要】丸岡周辺を震源にマグニチュード7.1の大地震発生当時、日本では中央気象台制定の震度階六階級が用いられていたため、福井地震の震度は最大「6」とされた。しかし、被害の激しさから翌24年には震度7が追加制定、2年後には建築基準法が制定された。このように福井地震は、その後の地震学、地震工学などに大きな影響をあたえたが、震央地の説が数説（丸岡町2説）あり確定していないなど、その詳細については未だに明らかでない事が多い。丸岡の被害 死者637人 負傷3079人 全壊3286戸 半壊393戸 焼失1181戸</p> <p>【教訓等】地震当日は、連日吹く南よりの風と、時々降る弱いにか雨によって半数以上の人が、いやな天候だとささやきあっていた。上下動を伴った強烈な揺れは、ほとんどの家屋を瞬時に破壊した。丸岡のシンボルともいえる国宝・丸岡城の天守閣も崩壊し、町民の心の拠り所を失った。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	丸岡町史 p612-626

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
18365 2-1	福井県	坂井市 (旧春江町)	【災害名】福井地震 【発生日時】昭和23年(1948年)6月28日 【被災地】春江町一円 【災害の概要】福井地震(M7.1、震度6) 人的被害 死者500人余 行方不明1人 負傷者1,000人余 建物被害 全壊3,200余戸(ほぼ100%倒壊) 【教訓等】この地震による被害は規模の割に大きく、関東・濃尾両地震に次ぐ大震災となった。福井平野では全壊率が100%に達する集落が多く、このあと気象庁震度階級には新たに震度7が追加されることとなった。戦後の混乱の中での大災害で、先人達が不断の努力と大いなる郷土愛を持って復興に尽くされ、その回復の早さには、目を見張るものがあった。	・文献資料	福井震災 語り継ぐわが町の記録 平成11年6月28日発行 春江町震災記念誌編集委員会編集発行
18365 2-2	福井県	坂井市 (旧春江町)	【災害名】38豪雪 【発生日時】昭和37年(1962年)12月末~2月上旬 【被災地】春江町一円 【災害の概要】福井地方気象台が役場敷地内に設置した、福井空港臨時観測所の観測した積雪記録によると、1月1日から2月15日の1ヶ月半に降った雪の量は合計4m33cmとなり、多くの雪害が続出した。 【教訓等】昭和38年1月22日から降り始めた雪は、連日連夜降り続き最大積雪量は194cmに達した。1月24日には積雪1mを超えたため国鉄をはじめ全交通機関がストップ、以後倒壊建物9棟(非住家)をはじめ多くの雪害が続出した。また、県対策本部の要請より出動した自衛隊が国鉄の除雪のため伊丹駐屯第36連隊第4中隊が1月30日から9日間除雪を行った。	・文献資料	広報はるえ第37号 昭和38年3月5日発行 春江町役場編集発行
18382 2-1	福井県	池田町	【災害名】寺谷の大火(仮名) 【発生日時】1882年(明治15年)3月16日 【被災地】福井県今立郡池田町寺谷 【災害の概要】池田町寺谷の16戸を焼失した。 【教訓等】再び惨事を繰り返してはならないと毎年4月16日に朝日神社において鎮火祭を行い、区民の防火意識の高揚に努めている。	・文献資料	池田町史 昭和52年3月発行
18382 2-2	福井県	池田町	【災害名】谷口の大火(仮名) 【発生日時】1922年(大正11年)4月17日 【被災地】福井県今立郡池田町谷口 【災害の概要】谷口区75戸を焼失し、隣接する野尻区にも延焼して22戸を焼失する火災が発生した。 【教訓等】大火災が発生したことから毎年4月17日に谷口区では愛宕様を祀る神事を行い、区民の防火意識の高揚に努めている。	・文献資料	池田町史 昭和52年3月発行
18404 7-1	福井県	南越前町	【災害名】小倉谷の大火 【発生日時】1965年(昭和40年)5月20日 15時45分頃 【被災地】福井県南越前町小倉谷(当時 南条郡今庄町小倉谷地区) 一帯 【災害の概要】小倉谷地区の住宅から出火、木造瓦葺平屋建19棟全焼、半焼12棟、木造茅葺平屋建26棟全焼、土蔵瓦葺2階建19棟全焼、延べ5133平方メートル消失、当時約6千万円の損害があった。 【教訓等】建物は特に茅葺等可燃物質の屋根が多く延焼しやすく延焼速度が極めて速かった。当日気象状況は数日前から日照り続きで乾燥が激しく、加えてフェーン現象により20℃以上強風が吹いており、集落は谷間のため、風向きが激しく変わった。集落道路は狭隘で消防車両が進入できない場所もあり、有効水利も乏しかった。以上が大火となった理由として語り継がれる。	・その他(今庄地区小倉谷大火の活動記録及び火災防ぎょ検討会記録(今庄町受付、甲第1515号昭和40年6月1日付))	今庄消防の歩み (P114~P149) 昭和60年3月25日発行
18404 7-2	福井県	南越前町	【災害名】北陸トンネル列車火災 【発生日時】1972年(昭和47年)11月6日 1時13分頃 【被災地】福井県南越前町上新道地係 JR北陸トンネル内(当時 南条郡今庄町上新道 国鉄北陸トンネル) 【災害の概要】北陸トンネル(全長13.8km)内で大阪発青森行き急行列車「きたぐに」(15両編成)の後方5両目の食堂車から出火、列車はトンネル内に立ち往生した。このため乗員乗客761名のうち300名以上が一酸化炭素中毒をおこし、30余名が死亡した。 【教訓等】以前はトンネル内で列車火災が発生したら停車することとなっていたが、この災害を機にトンネル内から脱出することとなった。	・その他(南越前消防組合北陸トンネル列車火災活動記録(今庄町受付、甲第1515号昭和40年6月1日付))	今庄消防の歩み (P114~P149) 昭和60年3月25日発行
18404 7-3	福井県	南越前町	【災害名】特務艦関東の座礁 【発生日時】1924年(大正13年)12月12日 【被災地】福井県南条郡南越町糠 糠海岸(当時 南条郡河野村糠糠海岸) 【災害の概要】吹雪のために進路を誤り、糠沿岸に到達し座礁した。 【教訓等】当時、糠は杜氏の多い所で多くの男子は出稼中で救助の主力は留守を守る老人や主婦だけであった。犠牲となった者は、統計97名と多数に上がったが、何人かの者は、仮死状態を婦人の肌で暖められて蘇生したという。	・文献資料 ・碑文	福井県 南条郡 南越前町 糠：河野村誌P1142~1146

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
18404 7-4	福井県	南越前町	<p>【災害名】不明（明治28年～30年にかけての豪雨災害）</p> <p>【発生日時】明治28年、29年、30年に連続して豪雨災害が発生</p> <p>【被災地】南越前町古木地係（田倉川支流の赤谷川）</p> <p>【災害の概要】連続した豪雨災害が発生したためその後古木住民が総出で赤谷川に9箇所（堰堤）を築造した。</p> <p>【教訓等】9箇所の築造堰堤が現在でも自然と調和して機能していることがH9年にわかった。</p>	・文献資料	砂防工事沿革大要 明治36年1月調 今庄町史
19000 4-1	山梨県		<p>【災害名】南部大火</p> <p>【発生日時】慶應元年（1865年）12月27日夜</p> <p>【被災地】山梨県南巨摩郡南部町南部（当時の南部宿）</p> <p>【災害の概要】南部宿上町より出火、烈風にあおられ東側に燃え広がる。飛び火もあり、町中目抜き場所が焼失。宿方100軒のうち約60軒が焼ける。</p> <p>【教訓等】当時の南部宿は水に乏しく、消防のための組織もなく、消火道具も竜吐水が1、2軒にある程度であったことが被害を大きくした。火災後、本陣の近藤家では被害者に白米5升ずつを施行、居宅の座敷を解体し、その材木を供出した。また妙淨寺住職の日題は翌朝に鎮火するまで門前で防火の説教を続けたと伝えられている。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南部町：『改訂南部町誌』上巻 1999年（朝夷一郎家文書を活字にて掲載）p. 826～828</li> <li>・山梨県教育委員会県史編さん室：『山梨県史だより』第18号 1999年 p. 2～3</li> <li>・南部町：『南部町誌』1964年（大正10年成立の「落穂拾遺」を全文掲載）p. 981～982</li> </ul>
19000 4-2	山梨県		<p>【災害名】谷村町の大火</p> <p>【発生日時】昭和24年（1949）5月13日</p> <p>【被災地】山梨県都留市（当時の谷村町）</p> <p>【災害の概要】火事は4時間に渡り、火元の下町から横町、高尾町、谷村町の大方を焼き尽くした。全焼318世帯、半焼20世帯、罹災人口1571人、面積約2万7000余坪。火元は燃糸業者使用電動機の過熱。</p> <p>【教訓等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・谷村町では、災害援助委員会を設け、救助対策。国・県から人員・物資援助。谷村町議会は、復興資金1780万円の予算案提出（5/17）（内住宅建築資金として1500万円）。</li> <li>・乾燥気味の天気、当夜の烈風、建物が比較的小さい、道路が狭いなどの状況があり、火が広がった。戦前から画定されていた都市計画を実現するチャンスとした。</li> </ul>	・文献資料	都留市史編纂委員会・都留市編：『都留市史 通史編』、1996年
19000 4-3	山梨県		<p>【災害名】明治四十年山梨県大水害</p> <p>【発生日時】明治40年（1907年）8月23日～24日</p> <p>【被災地】山梨県全域</p> <p>【災害の概要】台風によって21日から降り出した雨は勢いを強め、24日には洪水となった。大小の河川が氾濫し、山腹は崩壊、田畑・人畜・家屋の被害が甚だしかった。特に日川・重川・金川・笛吹川筋が大被害を受けた。（災害・被害の詳細は、添付資料1-1『山梨県史資料編14』p. 675、676を参照）</p> <p>【教訓等】産業形態の変化からの濫伐による山林の荒廃と、県の治水対策（河川の護岸工事体制）が未熟であったことが大水害を招いた。明治四十四年にも大水害があり、疲弊した県および民力では復興が困難だったため、富士・釜無・笛吹の三大河川の工事について国庫負担金を求めたという。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真（水害）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・丸山太一ほか／編『明治四十年大水害記』2002年</li> <li>・山梨県『山梨県史』資料編14 1996年 p. 644～647</li> <li>・参考：早川文太郎、須田宇十／共著『山梨県水害史』1911年 p. 154～329</li> <li>・「明治四十年八月山梨県下水害地巡視日記」</li> <li>・著者不明『水害写真集』1907年</li> </ul>
19000 4-4	山梨県		<p>【災害名】天文十一年水害</p> <p>【発生日時】天文11年（1542）8月</p> <p>【被災地】山梨県甲府盆地（釜無川流域）</p> <p>【災害の概要】富士川上流、釜無川が大洪水となり、甲府盆地一円が泥砂の海と化した。人畜の被害は甚大であったという。</p> <p>【教訓等】これを機に武田信玄は、釜無川・御勅使川・塩川の合流地点である竜王村の低地に住民を住まわせて堤防の保護に当たらせ、堤防周辺に樹木を植えて水害防備林を作った。竜王の信玄堤を築ききっかけとなり、完成には弘治3年（1557）または永禄3年（1560）までかかったと伝えられている（ただし、「信玄堤を造るきっかけとなった」ということについて確固とした証拠となる史料は残っていない）。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「内務省訓令第三号取調書」</li> <li>・龍王村『龍王村史』1955年 p. 189、190</li> <li>・参考：早川文太郎、須田宇十／共著『山梨県水害史』1911年 p. 80</li> <li>・飯田文弥（ほか）／著『山梨県の歴史』1999年 p. 133～136</li> <li>・山梨県『山梨県政六十年誌』1952年 p. 122</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
19000 4-5	山梨県		<p>【災害名】天正十一年水害                      【発生日時】天正11年(1583)7月                      【被災地】山梨県笛吹川流域(山梨市正徳寺、笛吹市春日居町桑戸・加茂・国府～甲府市)                      【災害の概要】笛吹川・釜無川が氾濫、これにより三大難場の一つである差出(山梨市)の堤防が決壊した。平等村正徳寺から春日居村桑戸を本瀬とし、加茂、国府などを砂原として甲府城付近に及び、一万石余りの田地を荒廃させたという。                      【教訓等】差出に堤防を築き、多くの田畑を潰して竹や木を植えた。これが今の万力林である。この天災に驚いた人々は氏神で祭礼を行い、水除けの呪文を唱えるなどした。しかし、この時代以降堤防や水防工事によって洪水を避けようとした傾向が見られる。                      「韮崎市舟山尻にあった高家新田の住民は、塩崎村金剛寺、滝沢、駒沢などへ移住した」(『韮崎市誌』)                      金川沿いも被害が甚だしく、天正11年の印書に、移住先から狩野原宿(笛吹市御坂町)へ戻ってきた者には諸役を免除する旨書かれている。</p>	・文献資料	・佐藤八郎/校訂『甲斐国志』第3巻(巻之五十六 神社部第二、巻之六十五 神社部第十一部分)1998年 p.13、86 ・参考:菊島信清『釜無川の水害』1981年 p.2~3 ・山梨県『山梨県政六十年誌』1952年 p.122 ・早川文太郎、須田宇十/共著『山梨県水害史』1911年 p.80、91、92 ・山梨県立教育研修所〔ほか〕編『山梨県郷土資料集 上』1959年 p.156、157 ・韮崎市誌編纂専門委員会/編『韮崎市誌』上 1978年 p.615
19000 4-6	山梨県		<p>【災害名】伊勢湾台風(台風15号)                      【発生日時】昭和34年(1959年)9月24日~26日【被災地】山梨県南部、西部(早川・富士川上流域)                      【災害の概要】台風15号が紀伊半島上陸。県南部・西部に集中的な豪雨をもたらした。風災害は甲府盆地中心部から県南部山岳地帯で大きかった。暴風圏が広く、長時間に及んだ。台風の中核は山梨県から離れて通ったが、甲府で平均風速29、8m、瞬間最大風速は37.2mを観測した。死者15人、負傷者105人。家屋全壊1494戸、半壊5565戸、床上浸水502戸、河川・道路・耕地・農作物に被害甚大であった。被害救助法適用49市町村。被害総額89億2、800万円。                      【教訓等】(台風による被害の前兆)                      ・バケツをひっくり返したほどの雨・触れると痛いほどの雨。                      ・石のぶつかり合う音がした。                      ・どしゃぶりの中、スズメがひどく鳴いていた。                      ・泥のおいがした。                      ・川の水位が引いた。                      ・山の麓が雲のように暗くなった。                      ・土砂流が出来る前には、水の濁りと泥の匂いがした。(『あの夏の記憶語り継ぐ「昭和34年・57年災害」』より引用)                      その他・早めに高台へ避難。                      ・すぐに逃げられるように待機。                      内陸の山国であり、強大な暴風雨の経験に乏しかった住民にとって大きな教訓となった。</p>	・文献資料	・建設省関東地方建設局・富士川砂防工事事務所『あの夏の記憶語り継ぐ「昭和34年・57年災害」』、2000 ・甲府地方気象台百年誌編集委員会:『山梨県の気象百年』、1994発行
19000 4-7	山梨県		<p>【災害名】台風26号                      【発生日時】昭和41年(1966年)9月21日~25日                      【被災地】富士河口湖町根場(当時足和田村根場)・西八代郡三珠町・上九一色村・東八代郡芦川村など。                      【災害の概要】本県を縦断。瞬間最大風速は富士河口湖町船津で40.1メートル、甲府で32.7メートル。雨量は県南部で350ミリ以上を記録。豪雨により、山地で山崩れや山津波が多数発生した。死者143人、負傷者252人。全壊(含流失)322棟、床上浸水2、674棟。罹災世帯3、283世帯。河川1、572ヶ所、道路930ヶ所等の被害。被害総額275億円。                      【教訓等】                      ・発生以来2日目という超スピードで来襲したため、避難対策が十分とれなかった。                      ・来襲が夜間であったことなどの悪条件が重なり、人命・人家に大きな被害をあたえた。                      ・砂防施設のなかった小渓流の土石による被害が起きなかった。(『昭和四十一年災害誌』より引用)</p>	・文献資料	・山梨県消防防災課編『昭和五十七年五十八年災害誌』1986発行 ・山梨県民室編『昭和四十一年災害誌』1966発行 ・甲府地方気象台百年誌編集委員会編『山梨県の気象百年』1994発行
19000 4-8	山梨県		<p>【災害名】台風10号                      【発生日時】昭和57年(1982年)8月1日~3日                      【被災地】山梨県西部・東部。南巨摩郡早川町・南アルプス市(当時中巨摩郡芦安村)・西八代郡六郷町。                      【災害の概要】台風(第10号)。原因は台風と梅雨前線の低気圧の影響による、大雨・強風。死者7人、負傷者31人。家屋罹災総数56町村にわたり、住宅被害は1、919棟、うち全壊30棟、床上浸水527棟。道路1、125ヶ所、河川1、340ヶ所、その他、農業関係、土木関係でも大きな被害がでた。被害総額868億8218万円。小菅村、秋山村、大月市七保町、上野原町で山崩れや土砂崩れがあり死者がでた。                      【教訓等】                      ・昭和34年の災害後、砂防工事などが行われ、防災対策が進んでいたため、雨量が多かったわりに災害は少なかった。                      ・被害は昭和41年の台風災害以降最大となった。                      ・国の視察があった。</p>	・文献資料	・建設省関東地方建設局・富士川砂防工事事務所:『あの夏の記憶語り継ぐ「昭和34年・57年災害」』、(2000発行) ・甲府地方気象台百年誌編集委員会:『山梨県の気象百年』、(1994発行) ・山梨県消防防災課:『昭和五十七年五十八年災害誌』、(1986発行)



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
19000 4-9	山梨県		<p>【災害名】宝永の富士山大噴火</p> <p>【発生日時】宝永4年(1707年)11月23日～12月9日(旧暦)</p> <p>【被災地】小山町・御殿場市・沼津市(静岡県)。小田原(神奈川県)。忍野村(山梨県)など。</p> <p>【災害の概要】宝永4年11月23日に富士山が雷のように鳴り、以来、約半月間、南東中腹で噴火活動が続いた。降礫による火災、地震、鳴動が起こり、田畑も砂や灰に覆い尽くされた。噴火口に一番近い須走村(小山町)をはじめ、山麓にあった50以上の集落が影響を受けた。直接噴火に伴う溶岩流・火砕流の発生はなく、大量の火山礫や火山灰が広範囲に降り災害をもたらした点が特徴である。(災害・被害の詳細については、添付資料1-2『富士を知る』p.20～24を参照)</p> <p>【教訓等】噴火が始まる前に、宝永東海地震(M8.4)があった。前兆としてはほかにも、「底なし穴」ができたり、動物たちが群れをなして富士山から逃げ出すことがあったといわれている。幕府は被災地対策として、被災した村58ヶ村に対し36年間にわたる年貢減免。「御救い夫食石代金」「砂退け御救い金」種麦代・馬扶持・家の建設資金を支給した。救済金として全国の大名家などから石高百石につき二両を徴収している。</p>	・文献資料	<p>・株式会社創美社：『富士を知る』、2002年発行</p> <p>・つじよしのぶ：『富士山の噴火』、1992発行</p> <p>・富士吉田市史編さん委員会編集：『富士吉田市史』通史編第二巻、2001発行</p>
19000 4-10	山梨県		<p>【災害名】関東大震災</p> <p>【発生日時】大正12年(1923)9月1日</p> <p>【被災地】山梨県笛吹川・釜無川・富士川沿岸地方・山中湖畔。</p> <p>【災害の概要】M7.9。甲府・東京・横浜・横須賀・熊谷などで震度6。山梨県内は、火災はなかった。甲府市は電気・水道も止まり、交通・電信も途絶えた。県内の死者は20人、負傷者116人。家屋全壊1,761棟、全壊棟率が高かったのは、山中湖村91,6%など。稲作・養蚕・農作物被害も合わせ、損害見積額千数百万円。</p> <p>【教訓等】県は罹災救助基金14,871円を各郡市に配布し、炊き出し救助・食料救助をおこなった。在郷軍人会や青年団による罹災者の救援が行われた。被害は市街地以外の村落に多かったこと、火災がなかったこと、水害・山崩れがあったこと、土木や産業上のものが大であり、この状況に応じた救済がなされた。囚人脱獄・朝鮮人來襲のうわさが広がり、自警団を組織するとともに、流言に対して警告を発した。</p>	・文献資料	<p>・甲府地方気象台百年誌編集委員会編：『山梨県の気象百年』、1994発行</p> <p>・甲府市市史編さん委員会編：『甲府市史』通史編第三巻、1990発行</p> <p>・内務省社会局：『大正震災志』上、1926発行</p>
19000 4-11	山梨県		<p>【災害名】山梨県東部地震</p> <p>【発生日時】昭和58年(1983)8月8日</p> <p>【被災地】山梨県大月市付近</p> <p>【災害の概要】M6.0。震央は山梨県東部。県東部を中心に19市町村が被害を受けた。県内の被害状況は、負傷者5人、住家半壊1棟、一部破損278棟、他147か所、道路21か所、農業施設37か所、停電15万6,000世帯(全世帯の66%)など。被害総額は3億5,149万円。甲府で震度4、河口湖で震度3を観測した。</p> <p>【教訓等】最近100年で山梨県内で被害が発生した地震は29回、その中で県内に震央をもつ地震は18回。またそのうち15回は県東部で発生している。県内に震央をもつ地震は規模が比較的小さく災害は狭域で程度は小さい。</p>	・文献資料	<p>・甲府地方気象台百年誌編集委員会編『山梨県の気象百年』1994年</p> <p>・甲府地方気象台「防災情報の手引き」2002年</p>
19000 4-12	山梨県		<p>【災害名】天保5年の雪代</p> <p>【発生日時】天保5年(1834)4月8日</p> <p>【被災地】山梨県富士吉田市小見村・大明見・下吉田ほか(当時の小見村・大明見村・下吉田村)</p> <p>【災害の概要】雪代とは雪どけ水が一気に土石流となって押し寄せ、ことを言う。天保の雪代は近世で最大規模のものであった。当日は、「大風雨」であった。富士山が雪崩か雷のように鳴って宮川・堀・桂川から雪代が押し出して来た。三か村で土砂に埋まった家屋は130余軒。田畑は500石余が石砂で埋まり、収穫間近な麦の60～70%が被害を受けた。</p> <p>【教訓等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・雪代発生の原因は、大風雨であった。</li> <li>・谷村役所の対応：「谷村御囲碁」が「飢人共への御救」として、上記三か村に給付された。また、夫食代として拝借米を低利率で貸し出した。</li> <li>・雪代は1月から4月にあり、極寒の時期にも発生している。</li> </ul>	・文献資料(下吉田村村役人からの代官所宛「嘆願」の内容部分)	<p>編集：富士吉田市史編さん委員会 発行所：富士吉田市 『富士吉田市史』通史編第二巻近世 2001発行(下吉田村村役人からの柴田善之丞谷村代官所宛「嘆願」所収)</p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
19000 4-13	山梨県		<p>【災害名】大雪                      【発生日時】平成10年(1998)1月15日                      【被災地】山梨県北杜市大泉町(当時の大泉村)、南都留郡山中湖村、西八代郡上九一色村                      【災害の概要】低気圧が本州南岸を東北東進。低気圧の移動が遅く長時間にわたる降水があり、また寒気により降水のほとんどが雪となった。死者3人。農業施設・学校施設などに大きな被害が生じた。最深積雪 山中120cm 大泉86cm 上九一色村78cm                      【教訓等】・太平洋側に降る雪は日本海側に降る雪に比べ、水分を多く含んでいる。・湿った重い雪が大量に降ったため大きな被害が出た。</p>	・文献資料	甲府地方気象台 「防災情報の手引き」2002年
19000 4-14	山梨県		<p>【災害名】万治の大火(九蔵火事)                      【発生日時】万治3年(1660年)正月18日                      【被災地】山梨県甲府市(当時伊勢町、柳町、八日町、三日町、工町、連雀町、魚町、穴山町)【災害の概要】午後4時頃、伊勢町の酒屋・江戸屋から出火し、焼失間数は1950間(下府中全体の30%)に及び、午後12時過ぎに鎮火した。江戸屋の小者・九蔵が数日前の放火に乗じて火をかけ、強風にあおられて大火となった。                      【教訓等】防火に関する触(火元が見えないのに火事呼ばわりする者は捕らえよ、盆中の鼠花火は禁止、奉公人の部屋への灯火等の持込の禁止、道祖神祭りには水桶を用意する、火鉢のそばに屏風を置いてはいけない、など)がしばしば発せられるようになった。また、火の用心のため、家ごとに雨水をためる天水桶を備えさせた。さらに火消し人足制度が発足した。</p>	・文献資料	・甲府市史編さん委員会/編『甲府市史通史編第二巻近世』1992年(p.360~367, 631~641) ・萩原三雄監修『図説甲府の歴史』2000年(p.154~155)
19000 4-15	山梨県		<p>【災害名】勝沼町深沢林野火災                      【発生日時】平成9年(1997年)3月11日                      【被災地】山梨県東山梨郡勝沼町深沢字長久保                      【災害の概要】原因は煙草の投げ捨て。午後3時40分出火、強風にあおられて広がり、鎮火までに後5日間を要した。当日は強風乾燥注意報が出ていた。焼失面積は町の総面積の10分の1に当たる374.9ヘクタール、損害額4億7793万円。県下で戦後最大規模の山林火災。                      【教訓等】戦後最大の林野火災であると共に、消防本部と消防団の連携、応援協定に基づく他市町村の応援、広域航空応援による空中消火など、近年の消防体制の持つ力が発揮された。また、国宝柏尾山大善寺を守るため消防団が配備された。火災後、防火センサー、放水銃、防火水槽、防火を呼びかける看板などを建設・設置し、大善寺裏山には防火樹を植林した。</p>	・文献資料 ・写真(火災の様子を写した写真)	・山梨県自治体消防50周年記念実行委員会編『山梨消防のあゆみ』1999年(p.273~279) ・勝沼町『勝沼町山林火災・雪害の記録』2000年(p.21~40) ・須藤発明著『写真貼り込み帖 勝沼山林火災 一平成9年3月11日一』1999
19202 3-3	山梨県	富士吉田市	<p>【災害名】山梨県東部地震                      【発生日時】平成8年3月6日                      【被災地】富士吉田市全域                      【災害の概要】山梨県東部を震源とするM5.8の地震が発生。河口湖測候所では、52年振り(1944年東南海地震)に震度5を記録した。                      【教訓等】住家等への目立った被害は発生しなかったが、市水道施設に被害が発生し3千戸以上の世帯で水道水に濁りが生じた。地震の発生が、午後11時過ぎと遅い時間であったためその事実(水道水の濁り)に気づくのが遅れたことと消火栓からの排水により濁りが取れるとの思い込みから、給水体制などの対応が後手後手となり大きな批判を浴びた。これを踏まえ、翌年地域防災計画の見直しや給水車の導入などが図られた。</p>	・その他	当時の防災担当者が作成した顛末書
19206 6-1	山梨県	大月市	<p>【災害名】明治四十年山梨県大水害                      【発生日時】明治40年(1907年)8月23日~24日                      【被災地】山梨県全域                      【災害の概要】台風に伴う大雨により、笹子川が氾濫し大月地域に空前の被害をもたらした。                      【教訓等】北都留郡全体では、死者87人を出したが、そのうち最も被害が大きかったのが、笹子、初狩、広里(大月)の三村であった。その初狩村では、被害戸数133戸、人数809人、死者44人、田畑宅地等98町3反が荒地となった。容易に回復の目途がつかないため、県は3回にわたって、121戸、564人の被災者たちを北海道虻田郡に移住させることにした。</p>	・文献資料 ・写真(被災状況を捉えた写真)	・北都留郡史 ・大月市史 ・写真画像2点(大月市政50周年記念誌)

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
19208 2-1	山梨県	南アルプス市	<p>【災害名】野之瀬村大火</p> <p>【発生日時】昭和24年4月8日</p> <p>【被災地】野之瀬村中野（南アルプス市）</p> <p>【災害の概要】日蓮宗妙了寺より出火、総門を残したのみで全焼、折からの強風にあおられ中野、上野部落に飛び火、更には落合村湯沢、増穂町の一部にも燃え広がった。消火にあたった消防団員十数名が負傷、損害は87,364,600円で、全焼94戸、被災者558名、山林5町歩焼損となっている。</p> <p>【教訓等】日蓮宗妙了寺より祭典の花火が原因で出火、折からの北西の烈風により南側の落合村、増穂町にまで被害が拡大した。特に当時はかや葺きの屋根が多かったため、被害が増大したと言い伝えられている。その後は、この大火を教訓に各戸の防火に対する意識の高揚や防火施設の整備により大火らしいものは発生していない。</p>	・文献資料（楡形町誌）	楡形町誌
19209 1-1	山梨県	北杜市	<p>【災害名】台風（7号）</p> <p>【発生日時】昭和34年8月14日</p> <p>【被災地】山梨県北杜市武川町（下三吹、牧原、柳沢）</p> <p>【災害の概要】台風7号 中心気圧995ミリバール 最大風速45メートル</p> <p>【教訓等】交通が遮断され、伝達が一部の電話及び伝令をもって伝えられたが、深夜のためと、例年の台風にも流矢寸前で家屋等の流失はまぬがれて来たため、安堵感も手伝って避難は決して敏速に行われなかった。結果から見て避難命令は必ずしも徹底されなかった。流木と岩石、土砂の交った山津波を各橋梁の橋桁が邪魔をした。横手橋は柳沢、大武川橋は新開地、小武川橋は宮脇に被害をあたえた。早期の避難勧告、被害状況の重要性、通信連絡手段の重要性を感じ、その後の災害に大きく活かされた。</p>	・文献資料	旧武川村村史 第3節 戦後における水害の惨状
20000 0-1	長野県		<p>【災害名】善光寺大地震</p> <p>【発生日時】弘化4年(1847年)5月8日</p> <p>【被災地】善光寺平一帯</p> <p>【災害の概要】長野盆地で発生した地震災害（マグニチュード7.4）及び山崩れによる水害など。死者 8 0 0 0～1 2 0 0 0 人 家屋被害 2 9 0 0 0～3 4 0 0 0 戸</p> <p>【教訓等】松代藩による被災者の救済と、富裕層や被災しなかった村からの相互扶助による救済が行なわれた。山崩れによる堰き止め湖の決壊を予測し、松代藩の下知により石俵、土嚢を積んで土手を築き、山に小屋をかけ食糧を運んで女子供をあらかじめ避難させた。松代藩は最寄りの山々に大焚き火をたいて、人々の逃げ場を照らした。</p>	・文献資料 ・碑文 ・絵画	・信濃毎日新聞社編・発行：「善光寺大地震」、1977 p.163-165 ・松代藩文化施設管理事務所：「善光寺地震」、1998（全頁）
20000 0-2	長野県		<p>【災害名】千曲川大洪水</p> <p>【発生日時】寛保2年(1742年)8月27日～30日</p> <p>【被災地】善光寺平、小諸市周辺</p> <p>【災害の概要】千曲川流域の豪雨による洪水災害 死者 2 8 6 2 人 建物 6 3 2 3 戸</p> <p>【教訓等】長野市長沼地区に伝わる水害に備えての知恵 ①建物の土地を高くしたり、2階を造っておく。②滑車や筏の材料を用意しておく。③米の粉を用意し、水害時には飲み水の分配を優先する。④避難できそうな他家の見当をつけ、あらかじめ頼んでおく。 など</p>	・文献資料	・「長沼村史」（不明） ・信濃毎日新聞社編：「戊の満水」を歩く、2002 p.142-147
20000 0-3	長野県		<p>【災害名】長野市地附山地すべり災害</p> <p>【発生日時】昭和60（1985）年7月26日</p> <p>【被災地】長野市地附山</p> <p>【災害の概要】長野市地附山南東斜面の大地すべりによる崩壊 死者26名、物69棟</p> <p>【教訓等】1. 予知・予測の重要性：地すべりの予測は困難だが、自動観測システムの導入や前兆現象の注意深い観測が重要である。 2. 防災基本図の作成とそれを基にした防災アセスメントを実施 3. 防災情報の提供（平常時、警戒期、発災期、避難・救援のそれぞれに応じた迅速・正確な情報の伝達）が重要である。 4. 都市型災害（車社会、ライフラインの問題）への対策が必要である。</p>	・文献資料	・「真夏の大崩壊」1993年長野市地附山地すべり災害史編纂委員会
20000 0-4	長野県		<p>【災害名】長野県西部地震</p> <p>【発生日時】昭和59（1984）年9月14日</p> <p>【被災地】長野県木曾郡大滝村</p> <p>【災害の概要】大滝村御嶽山南麓を震源としたM6.7の地震 死者29名、家屋全壊14棟</p> <p>【教訓等】1. 地震等災害の予知は難しい。しかし、完全でなくともある程度の情報があれば、将来的に起こり得る自然災害を想定し、人間の生活や生産の場を守る対策を講ずることで、被害を減じることが出来る。従って防災意識の高揚が大切である。 2. 教訓としては、①地震位置の一刻も早い入手②防災行政無線の重要性③情報収集・伝達の重要性④災害広報についての地元自治体との連携の必要性⑤予知対策の整備・充実</p>	・文献資料	・木曾郡大滝村「まさか大滝に一長野県西部地震の記録」1986年 ・長野県「長野県西部地震の記録」1985

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
20429 3-1	長野県	王滝村	<p>【災害名】木曾御嶽山噴火                      【発生日時】1979年10月28日                      【被災地】王滝村、三岳村、開田村                      【災害の概要】降灰により山小屋・登山道が被災し、二の池、王滝川、牧尾ダムが大量の火山灰の流入により汚染される。                      【教訓等】※風向により、王滝に降灰した灰は少なく、大きな災害はありませんでした。</p>		
21000 5-1	岐阜県		<p>【災害名】濃尾大震災                      【発生日時】明治24年(1891年)10月28日6時37分                      【被災地】岐阜県美濃地方・愛知県尾張地方一帯                      【災害の概要】震源は、本巣郡根尾村(現本巣市)水鳥でM8.0。岐阜県内の住宅の全半壊は8万戸以上、死者約5000人に及ぶ大災害となった。                      【教訓等】家屋の倒壊後、火災が発生して被害が拡大したことで、「地震があつたら火を消す」という大原則が再認識されることとなった(この時も炉の火を消したという個人の日記がある)。昭和21年(1946年)12月21日の南海道地震の時に、西濃地方取材した岐阜タイムスの記者は、高田署管内(現養老町)の被災地の様子を報じ、「火災の跡が見られなかったのは、過去の経験(濃尾大震災のことか)から、地震と同時に火を消して避難したからだ」と記している。</p>	・文献資料	<p>・岐阜タイムス(昭和21年12月22日付2頁)「県下の被災地に行く」より                      ・『特集と年表でつづる「ひだみの」の災害 岐阜県災害史』岐阜新聞社、平成10年3月刊行、p.104</p>
21000 5-1	岐阜県		<p>【災害名】岐阜市東部・各務原市林野火災                      【発生日時】平成14年(2002年)4月5日                      【被災地】岐阜県岐阜市、各務原市、関市                      【災害の概要】岐阜市東部にある権現山一帯で大規模な林野火災が発生、当日は観測史上もっとも低い湿度6%(岐阜地方気象台発表)で、出火前後は風速5~6mの強い風が北西から吹いていた。この林野火災の被害面積は約410haで、その被害は3市に及んでおり、県内過去最大規模の林野火災となった。なお、幸いなことに住家被害はなく、人的被害は消火活動中のけが人2名であった。                      消防機関、防災ヘリ、自衛隊、地元の消防団、自主防災隊など多くの方の協力により、翌日6日には鎮火された。                      【教訓等】消火にあたっては、岐阜県防災ヘリだけでなく、愛知県、石川県、福井県、滋賀県、名古屋市等からの応援を受けたことから、林野火災防御訓練実施等関係機関との連携を深めることとなった。                      また、山火事跡地では、「緑の再生プロジェクト」として、県民、県、市が協働して、森林再生のための植樹活動等が進められている。</p>	写真	<p>県HP(岐阜県総合防災ポータル)に掲示している写真 6点</p>
21000 5-2	岐阜県		<p>【災害名】濃尾大震災                      【発生日時】明治24年(1891年)10月28日6時37分                      【被災地】岐阜県美濃地方・愛知県尾張地方一帯                      【災害の概要】震源は、本巣郡根尾村(現本巣市)水鳥でM8.0。岐阜県内の住宅の全半壊は8万戸以上、死者約5000人に及ぶ大災害となった。                      【教訓等】11月28日の岐阜日日新聞に建築技師佐藤勇造の「倒れ家に就いて」が掲載され、この震災によって人々が家屋の建築法に強い関心を示すようになったと述べている。佐藤は翌年4月18日『地震家屋』を出版して耐震家屋の13の条件を示した。この中で、倒壊を免れた岐阜市正法寺大仏殿(カゴ大仏)を例にあげて、条件の一つである「其梁間ニ筋違ヲ入レテ緊縛シ」を実証している。</p>	・文献資料	<p>・『地震家屋』佐藤勇造著、明治25年4月刊行                      ・『濃尾大震災の教訓』岐阜県歴史資料館、平成8年3月刊行、p.88-90</p>
21000 5-2	岐阜県		<p>【災害名】9.12水害                      【発生日時】昭和51年(1976年)9月12日                      【被災地】安八町・墨俣町                      【災害の概要】台風17号の接近により、9月8日から降り始めた雨は記録的な集中豪雨となった。12日午前5時、長良川の水位は、墨俣町で7.14mを記録。同日午前10時28分に安八町大森の長良川右岸堤防が決壊し、安八・墨俣町が被害を受けた。                      【教訓等】決壊箇所は、「押堀」と呼ばれる昔の「切所」であることが判明(丸池、寛政年間に存在していたことが古文書で確認された)し、決壊原因のひとつと言われた。また、下流の輪之内町(旧福東輪中)では他では取り壊された輪中堤(十連坊堤)を残していたため、浸水を免れた。さらに、安八町内の牧地域(旧牧輪中)では、古老たちの指図で旧輪中堤を利用して土嚢積み等(畳を活用)の水防活動を住民が行い、やはり浸水を免れた。</p>	<p>・文献資料                      ・写真</p>	<p>1. 昭和51年9月13日撮影の災害航空写真・・・口絵(十連坊堤、旧牧輪中堤が確認できる)                      2. 丸池(航空写真)・・・p.39                      3. 決壊後、破堤地に出現した丸池・・・p.129                      4. 土嚢が積まれた切割(輪之内町十連坊)・・・p.45                      5. 牧輪中堤に積まれた土嚢と畳(2枚)・・・p.45                      ・『昭和五十一年 九・一二豪雨災害誌』岐阜県消防防災課、昭和52年3月刊行                      ・『安八町9.12豪雨災害誌』安八町、昭和61年9月刊行 口絵、p.39、44-46、129</p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
21000 5-3	岐阜 県		<p>【災害名】濃尾大震災                      【発生日時】明治24年(1891年)10月28日6時37分                      【被災地】岐阜県美濃地方・愛知県尾張地方一帯                      【災害の概要】震源は、本巣郡根尾村(現本巣市)水鳥でM8.0。岐阜県内の住宅の全半壊は8万戸以上、死者約5000人に及ぶ大災害となった。                      【教訓等】この震災によって、明治25年に震災予防調査会発足し、地震研究、震災対策が大きく進展する契機となった。なお、大正12年の関東大震災後、東京帝国大学に地震研究所が設置され、同調査会は解消した。</p>	・文献資料	・『濃尾大震災の教訓』岐阜県歴史資料館、平成8年3月刊行、p.88-90 ・『特集と年表でつづる「ひだみの」の災害 岐阜県災害史』岐阜新聞社、平成10年3月刊行、p.78-92
21000 5-4	岐阜 県		<p>【災害名】濃尾大震災                      【発生日時】明治24年(1891年)10月28日6時37分                      【被災地】岐阜県美濃地方・愛知県尾張地方一帯                      【災害の概要】震源は、本巣郡根尾村(現本巣市)水鳥でM8.0。岐阜県内の住宅の全半壊は8万戸以上、死者約5000人に及ぶ大災害となった。                      【教訓等】全国各地から救援物資が寄せられ、医療ボランティアが活動した。関東大震災の時には、その恩に報いるため、県庁内に臨時救援係を設けて経費支出を知事一任とし、震災救援会を組織して義捐金・義捐品の募集を行った。</p>	・文献資料	・『写真でみる濃尾震災-実態とその復興-』岐阜新聞・岐阜放送、1991年10月刊行、p.153-157
21203 2-1	岐阜 県	高山 市	<p>【災害名】高山大火事                      【発生日時】享保14年(1730年)3月8日                      【被災地】岐阜県高山市                      【災害の概要】高山町一之町より3月8日未明に出火した、民家975軒、寺院13寺、土蔵44棟、米2,380俵を焼失した。                      【教訓等】当時の代官、長谷川忠崇は、1739両1分を十年賦無利息で貸し出したほか、町の復旧に近在の留山の木材を伐ってあてがうと同時に美濃・越中から職人を招き、家屋の再建にあたらせるなどの努力をしたため、町は翌年にほとんど復興したと伝えられている。</p>	・文献資料	高山市史(昭和28年3月31日発行) 飛騨天領史(平成2年7月19日発行)
21203 2-2	岐阜 県	高山 市	<p>【災害名】天明大火                      【発生日時】天明4年(1786年)3月20日                      【被災地】岐阜県高山市                      【災害の概要】高山町一之町より3月8日未明に出火した、民家2,342軒、寺院11寺を焼失した。享保14年の高山大火事より56年目で大火であった。                      【教訓等】幕府は町民へ金1807両を貸下げて、復旧の資とした。</p>	・文献資料	高山市史(昭和28年3月31日発行) 飛騨編年史要(大正10年11月5日発行)
21203 2-3	岐阜 県	高山 市	<p>【災害名】寛永大火                      【発生日時】寛永8年(1799年)                      【被災地】岐阜県高山市                      【災害の概要】高山町三之町より出火した、民家447軒を焼失した。天明の大火後に新築された民家が再度焼失した。天明の大火より13年目の大火となった。                      【教訓等】郡代は天明大火の時の復旧拝借金1807両のうち722両が未返済であったが、拝借金546両をあつせんして救済と復旧にあたった。</p>	・文献資料	高山市史(昭和28年3月31日発行) 飛騨天領史(平成2年7月19日発行)
21203 2-5	岐阜 県	高山 市	<p>【災害名】台風23号豪雨災害                      【発生日時】平成16年(2004年)10月20日                      【被災地】岐阜県高山市                      【災害の概要】10月13日に発生した台風23号と秋雨前線の影響により、降り始めからの総雨量が276ミリ、最大時間雨量が57ミリとなり、死者2名、行方不明者1名、全壊家屋1棟、半壊家屋5棟、床上浸水269棟、床下浸水317棟などの被害が発生し、避難所救助のための災害救助法が適用される未曾有の災害となりました。                      【教訓等】過去に例のない大きな水害であり、山崩れで家屋が埋まり死者が発生し、濁流に流され1名が行方不明になり、浸水家屋も586棟となり、避難者数も最大で1,837人と、行政も住民もその対応に非常に苦慮した。床上浸水の被害者宅では泥除けなどの作業が続き、県内外を問わず、多くのボランティアの方々の協力により、早期復旧を行うことができました。この災害により、行政も住民も、日頃からの災害対策の重要性を認識し、更には、ボランティアの重要性が認識され、ボランティア活動が再認識されました。</p>	・集計資料 ・写真資料	・広報紙「広報たかやま」ほか

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
21203 2-6	岐阜県	高山市	<p>【災害名】 8. 2 2 豪雨災害</p> <p>【発生日時】 昭和54年（1979年）8月22日</p> <p>【被災地】 岐阜県高山市奥飛騨温泉郷栃尾</p> <p>【災害の概要】 21日未明からの局地的豪雨（時間雨量54ミリ）による「洞谷」の土石流災害で、栃尾地区が7万㎡の土砂で埋まった。</p> <p>【教訓等】 「山のほうで雷のような音がしたら、とにかく逃げ出せ」昔から“恐れ谷”と呼ばれてきた洞谷を指して、古老たちは言い伝えてきた。計り知れない自然に痛めつけられて生まれた教訓は、一目散に逃げる住民たちの引き金になっており、洞谷災害の際にも住民の避難行動に活かされた。</p>	<p>・写真（石碑全景をとらえた写真）</p>	<p>デジカメによる写真画像2点</p>
21217 2-1	岐阜県	飛騨市	<p>【災害名】 古川大火</p> <p>【発生日時】 明治37年（1904年）8月25日</p> <p>【被災地】 古川町（市街地）全域</p> <p>【災害の概要】 正午ころ式之町下より出火、人々は死にものぐるいで火を消そうとしたが、長い間続いていた炎天のため何もかもが乾燥しきっていた。そのうえ風も加わったため、どうにもできなかった。火の勢いはすさまじく、あちこちに飛び火して二時間あまりで一带に広がり、街の約九割を灰にしてしまった。</p> <p>【教訓等】 この大火事の後に、二度とこのようなことの無いように、消防組が町につくられ火災に備えるようになった。また、毎年8月には大火記念行事として消防署や消防団、住民全体で訓練を行い、この惨事を忘れることなく、またもしものときは被災を最小限に抑えられるよう訓練や防火パレード等の記念行事を続けている。</p>	<p>・文献資料</p> <p>・写真</p>	<p>・郷土古川（昭和52年4月1日発行、古川町教育委員会）</p> <p>・古川のむかしの話（昭和62年3月20日発行）</p>
21217 2-3	岐阜県	飛騨市	<p>【災害名】 船津大火</p> <p>【発生日時】 昭和4年5月20日</p> <p>【被災地】 飛騨市神岡町船津</p> <p>【災害の概要】 約4時間で町の中心部のほとんどを焼野原にした。全焼家屋594戸、死者3名、負傷者72名、り災者2,584名 役場、警察署、郵便局、営林署、銀行、裁判所、3つの寺院が全焼した</p> <p>【教訓等】 神岡町船津は、すり鉢状になった地形に開けた町であり、家のほとんどは板ぶきであった。また坂が多いことから水の便が悪く、道幅も狭いため消火に不便であった。元々が川に沿って強風が吹いている土地に、鉱山の町として急激に家屋が増加してきたため、火災になりやすい土地でもある。しかし、くじけることなく3日後には新しい町づくりの相談が始まり、町民全体の努力で前よりもすばらしい町が再生した。家事の教訓として側溝の整備や通路の拡幅、家屋の屋根はトタンや瓦で建築するようになった。</p>	<p>・焼けあとの写真</p>	<p>『飛騨の神岡』 神岡町教育委員会 昭和45年発行</p>
21341 1-2	岐阜県	養老町	<p>【災害名】 濃尾地震</p> <p>【発生日時】 明治24年10月28日</p> <p>【被災地】 町内全域</p> <p>【災害の概要】 明治24年10月28日午前6時40分ごろ大きな地震が発生し、多くの建物が倒壊し、多数の死傷者が出た。（死者109名、負傷者360名）当時の役場庁舎も倒壊し、救助体制が整うのに時間を要した。余震も12月上旬まで続いたとされる。桑名郡より米、多度山麓諸村から薪を購入し船で避難所へ送ったとの記録がある。</p> <p>【教訓等】 詳細資料確認できず</p>	<p>・文献資料</p>	<p>発行所：岐阜県地方改良協会養老郡支会 タイトル：養老郡志 発行年：大正14年5月25日</p>
21381 1-1	岐阜県	神戸町	<p>【災害名】 洪水</p> <p>【発生日時】 明治21年（1888）7月29日</p> <p>【被災地】 神戸町</p> <p>【災害の概要】 暴風雨が原因の堤防破堤による流失、床上・床下浸水などの洪水被害 家屋被害 流失5、崩壊2、半壊4、破損427、軒上浸水3 床上浸水424、床下浸水320</p> <p>【教訓等】 治水政策がされるまでは江戸時代の「遊水池策」により水害に悩まされていたが、この災害における堤防破堤が原因で現在も残る池ができた。</p>	<p>・文献資料</p>	<p>美濃神戸百年史、神戸町、平成17年</p>
21504 0-1	岐阜県	七宗町	<p>【災害名】 明治43年大水害</p> <p>【発生日時】 明治43年9月3日</p> <p>【被災地】 七宗町神淵寺洞・大塚地区</p> <p>【災害の概要】 午後5時半頃から約3時間間に、200mmを超える雨量を記録し、河川の氾濫により大きな被害が出た。溺死者36名・埋没者4人・負傷者12人・家屋の流出41戸全壊19戸・半壊24戸・破損16戸の被害があった。</p> <p>【教訓等】 神淵川沿いに形成された扇状地が水害の常襲地域であった事を語り継いでおり、教訓を生かし神淵川の護岸の改修を行っている。</p>	<p>・文献資料</p>	<p>七宗町史（P985）</p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
21504 0-2	岐阜県	七宗町	<p>【災害名】 8. 17集中豪雨（飛騨川バス転落事故）</p> <p>【発生日時】 昭和43年8月17日～18日</p> <p>【被災地】 七宗町全域</p> <p>【災害の概要】 17日午後10時頃から18日未明にかけて、神湊地区で312mm/日、上麻生地区で382mm/日（最高時間雨量90mm）の激しい集中豪雨があった。崩壊土石流により隣町で観光バス2台が飛騨川に流れ、100名余りの人が死亡した。国道41号線、国鉄高山線も土石流により寸断され、住家被害242戸・道路被害110箇所・橋梁流出2箇所等々その他にも農林業等大きな被害を受けた。被害総額は3億5千200万円となり、当時の町一般会計の約2倍となった。</p> <p>【教訓等】 本町に例のない集中豪雨となり、最もひどい災害となった本災害により、降雨時には谷に近寄らないが鉄則となっている。また、この地域の谷には小さい谷にも砂防堰堤等の工事が施工されている。</p> <p>連続雨量が60mmになると通行注意、80mmに達すると通行禁止（現在は、この基準が80mmで通行注意、120mmで通行禁止に改変）になり、パーが降りて通行できなくなる装置が取り付けられた。また、道路情報板の設置で、危険の種類や場所がすぐ示されるようになった。</p>	・文献資料	七宗町史（P990） 岐阜県災害史
21541 4-1	岐阜県	多治見市	<p>【災害名】 大風洪水（当時は台風とは言わなかったため）</p> <p>【発生日時】 天保8年（1837年）</p> <p>【被災地】 岐阜県笠原町</p> <p>【災害の概要】 台風による被害</p> <p>【教訓等】 旧暦の8月5日にきた台風により川に設けられていた井堰がみんな崩れたところに、8月14日に大きな台風が来た。午前8時から午後3時頃まで風が強く、神明神社（現神明宮）の大杉や大モミは根こそぎ倒され、又洪水による農作物の被害も甚大であった。全半壊住宅は総戸数の実に27%相当（118戸）であった。当時の文書にも「老人聞き伝えにもこれなき、前代未聞の大風の由」と書かれていることから打撃の大きさが伺える。</p>	・文献資料	かさはらの歴史
22000 1-01	静岡県		<p>【災害名】 安政東海地震</p> <p>【発生日時】 嘉永7年(安政元年、1854年)11月4日</p> <p>【被災地】 静岡県沼津市から袋井市にかけての沿岸一帯</p> <p>【災害の概要】 遠州灘の御前崎沖、南海トラフに沿うプレート境界を震源とするM8.4の地震。震害が最も大きかったのは沼津から天竜川河口にかけての静岡県沿岸一帯であった。また、甲府から松本、長野にかけても大きな震害を与えた。地震による津波は土佐湾から房総半島沿岸にまで及び、特に熊野灘沿岸、伊勢・志摩、遠州灘海岸と伊豆下田に大きな被害をあたえた。</p> <p>【教訓等】 遠江国浜名郡大倉戸村（現新居町大倉戸）の東新寺に嘉永期から安政期にかけて真宗という住職がいた。安政東海地震に遭遇した真宗は、地震や津波に遭遇した体験等を「安政大地震並大津波記録」という手記にまとめ、かな書きのうえ木版刷りにして村中に配布した。その中に「地震の時ハ火を消す事第一なり」とある。</p>	・文献資料	静岡県編『静岡県史』別編2 自然災害史、743～744頁、1996年
22000 1-02	静岡県		<p>【災害名】 伊豆半島沖地震</p> <p>【発生日時】 昭和49年（1974年）5月9日</p> <p>【被災地】 下田市</p> <p>【災害の概要】 M6.9</p> <p>負傷者34人、住家全壊23戸、半壊42戸、一部損壊1118戸、道路破壊9カ所、山崖崩れ25カ所の被害が生じた。</p> <p>【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-03	静岡県		<p>【災害名】 北伊豆地震</p> <p>【発生日時】 昭和5年（1930年）11月26日</p> <p>【被災地】 三島市</p> <p>【災害の概要】 M7.3</p> <p>三島町、死者7人、負傷者58人、住家全壊103戸、半壊605戸、北上村で負傷者2人、全壊16戸、半壊167戸、錦田村で死者7人、負傷者6人、全壊89戸、半壊298戸、半壊298戸、中郷村で死者11人、負傷者49人、全壊128戸、半壊255戸、死者25人、負傷者115人、全壊336戸、半壊1259戸、中郷村で火災により6戸全焼、錦田村では一家5人生き埋めの被害を生じた。</p> <p>【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-04	静岡県		<p>【災害名】 北伊豆地震</p> <p>【発生日時】 昭和5年（1930年）11月26日</p> <p>【被災地】 裾野市</p> <p>【災害の概要】 M7.3</p> <p>深良町で負傷者3人、住家全壊10戸、半壊5戸、泉村で負傷者3戸、小泉村で負傷者3人、半壊2戸、富岡村で負傷者1人、半壊18戸 合計負傷者10人、全壊10戸、半壊48戸の被害を生じた。</p> <p>【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
22000 1-05	静岡県		<p>【災害名】北伊豆地震                      【発生日時】昭和5年（1930年）11月26日                      【被災地】伊豆長岡町（現伊豆の国市）                      【災害の概要】M7.3                      川西村で死者16人、負傷者25人、住家全壊77戸、半壊124戸、江間村で死者3人、負傷者11人、全壊79戸、半壊38戸、合計死者29人、負傷者36人、全壊156戸、半壊162戸、古奈・長岡温泉はほぼ全壊の被害を生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-06	静岡県		<p>【災害名】北伊豆地震                      【発生日時】昭和5年（1930年）11月26日                      【被災地】修善寺町（現伊豆市）                      【災害の概要】M7.3                      修善寺町で死者22人、負傷者29人、住家全壊22戸、半壊31戸、下狩野村で死者1人、負傷者2人全壊27戸、半壊137戸、北狩野村で死者23人、負傷者122人、全壊209戸、半壊291戸、一人行方不明の被害を生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-07	静岡県		<p>【災害名】北伊豆地震                      【発生日時】昭和5年（1930年）11月26日                      【被災地】函南町                      【災害の概要】M7.3                      死者37人、負傷者195人、住家全壊394戸、半壊427戸、倒壊997戸、建物破損1102、全焼10戸の被害を生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-08	静岡県		<p>【災害名】北伊豆地震                      【発生日時】昭和5年（1930年）11月26日                      【被災地】菰山町（現伊豆の国市）                      【災害の概要】M7.3                      死者75人、負傷者105人、住家全壊517戸、半壊335戸、倒壊1084戸、建物破損518棟、全焼3戸の被害を生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-09	静岡県		<p>【災害名】北伊豆地震                      【発生日時】昭和5年（1930年）11月26日                      【被災地】大仁町（現伊豆の国市）                      【災害の概要】M7.3                      田中村で死者8人、負傷者123人、住家全壊209戸、半壊291戸の被害を生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-10	静岡県		<p>【災害名】北伊豆地震                      【発生日時】昭和5年（1930年）11月26日                      【被災地】天城湯ヶ島町（現伊豆市）                      【災害の概要】M7.3                      山津波により3戸、埋没死者15人、中狩野村で死者15人、負傷者4人、住家全壊72戸、半壊166戸、上狩野村で負傷者7人、半壊15戸の被害を生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-11	静岡県		<p>【災害名】北伊豆地震                      【発生日時】昭和5年（1930年）11月26日                      【被災地】中伊豆町（現伊豆市）                      【災害の概要】M7.3                      下大見村死者3人、負傷者13人、住家全壊117戸、半壊110、中大見村死者7人、負傷者12人、住家全壊33戸、半壊181戸、上大見村で死者1人、負傷者6人、住家全壊45戸、半壊129戸、大見村で火災により2戸全焼の被害を生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-12	静岡県		<p>【災害名】北伊豆地震                      【発生日時】昭和5年（1930年）11月26日                      【被災地】清水町、長泉町                      【災害の概要】M7.3                      死者6人負傷者18人、住家全壊27戸、半壊34戸、建物破損1358棟の被害を生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-13	静岡県		<p>【災害名】伊豆半島沖地震                      【発生日時】昭和49年（1974年）5月9日                      【被災地】東伊豆町                      【災害の概要】M6.9                      一部損壊17戸、山崖崩れ18カ所の被害生じた。                      山崖崩れが目立った。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史（地震対策資料NO56-1988）	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」（地震対策資料NO56-1988） 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
22000 1-14	静岡県		<p>【災害名】静岡地震                      【発生日時】昭和10年(1935年)7月11日                      【被災地】静岡市                      【災害の概要】M6.4                      崖崩れ、家屋全壊率10%以上、高松で31.8%、西大谷、24.3%、東大谷、12.4%、池田14.9%、死者6人負傷者18人、住家全壊27戸、半壊34戸、建物破損1358棟の被害を生じた。                      清水では辻、入江で家屋全壊率1.6%、江尻で1.4%の家屋全壊率であった。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史(地震対策資料N056-1988)	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」(地震対策資料N056-1988) 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-15	静岡県		<p>【災害名】昭和54年伊豆東部火山群発                      【発生日時】昭和54年(1979年)                      【被災地】伊豆半島東方沖                      【災害の概要】1978年(昭和53年)11月23日から1979年(昭和54年)にかけて地震総回数11,419回、規模はM5.4                      伊豆半島東部地域に密集する多数の海底火山からなる火山群である。マグニチュード5程度以上の地震を含む群発地震活動時には被害を生じた。                      【教訓等】</p>	文献 環境・災害・事故の事典	環境・災害・事故の事典(丸善株式会社 編集代表平野敏右) 平成13年3月30日発行
22000 1-16	静岡県		<p>【災害名】伊豆半島沖地震                      【発生日時】昭和49年(1974年)5月9日                      【被災地】河津町                      【災害の概要】M6.9                      一部損壊55戸、山崖崩れ7カ所の被害が生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史(地震対策資料N056-1988)	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」(地震対策資料N056-1988) 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-17	静岡県		<p>【災害名】伊豆半島沖地震                      【発生日時】昭和49年(1974年)5月9日                      【被災地】南伊豆町                      【災害の概要】M6.9                      被害は死者30人、行方不明8人、全壊111戸、半壊191戸、一部損壊442戸、山崖崩れ46カ所の被害が生じた。                      中木地区の成畑山東斜面で発生した山崩れ一部損壊55戸、山崖崩れ7カ所の被害が生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史(地震対策資料N056-1988)	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」(地震対策資料N056-1988) 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-18	静岡県		<p>【災害名】伊豆半島沖地震                      【発生日時】昭和49年(1974年)5月9日                      【被災地】松崎町                      【災害の概要】M6.9                      一部損壊227戸、山崖崩れ被害あり。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史(地震対策資料N056-1988)	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」(地震対策資料N056-1988) 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-19	静岡県		<p>【災害名】伊豆半島沖地震                      【発生日時】昭和49年(1974年)5月9日                      【被災地】西伊豆町                      【災害の概要】M6.9                      半壊1戸、一部損壊8戸、山崖崩れ4カ所被害が生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史(地震対策資料N056-1988)	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」(地震対策資料N056-1988) 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-20	静岡県		<p>【災害名】北伊豆地震                      【発生日時】昭和5年(1930年)11月26日                      【被災地】熱海市                      【災害の概要】M7.3                      丹那断層に生じた地震で伊豆半島北部を中心に被害が大きかった。当市では熱海町で死者3人、負傷3人、住家全壊18戸、半壊20戸、網代で負傷3人、半壊5戸、多賀村で死者1人、全壊2戸、半壊50戸の被害が生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史(地震対策資料N056-1988)	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」(地震対策資料N056-1988) 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
22000 1-21	静岡県		<p>【災害名】北伊豆地震                      【発生日時】昭和5年(1930年)11月26日                      【被災地】伊東市                      【災害の概要】M7.3                      当市での被害は死者1人、負傷者24人、住家半壊2戸、建物破損108カ所、火災による53戸全焼の被害が生じた。                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史(地震対策資料N056-1988)	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」(地震対策資料N056-1988) 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
22000 1-22	静岡県		<p>【災害名】北伊豆地震                      【発生日時】昭和5年(1930年)11月26日                      【被災地】沼津市                      【災害の概要】M7.3                      沼津市で死者1人、負傷者7人、住家全壊10戸、半壊29戸、原町で負傷者4人、半壊1戸、内浦村で半壊8戸、西浦村半壊16戸、大平村で死者1人、半壊45戸、浮島村で半壊4戸、静浦村で死者1人、負傷者10人、全壊8戸、半壊19戸、大岡村で半壊20戸、金岡村で全壊3戸、半壊15戸、鷹根村で全壊2戸、半壊5戸の被害を生じた                      【教訓等】</p>	文献 静岡県地震災害史(地震対策資料NO56-1988)	静岡県地震災害史「風水害等の災害も含む」(地震対策資料NO56-1988) 昭和63年2月発行 静岡県地震対策課
23000 6-7	愛知県		<p>【災害名】鳳来寺山裏山の大火                      【発生日時】大正13年(1924年)3月16日 午後2時頃                      【被災地】鳳来町豊岡字ドウデイ                      【災害の概要】                      ・鳳来寺村地内大津谷から出火。                      ・3月21日午後まで6日間燃え続けた。                      ・消失面積は3,000町歩・薪炭材の伐採人夫の不始末と言われている。                      ・公私設の消防団のほか、軍隊も出動した。                      【教訓等】本地方未曾有の大火であり、山林火災防除上多くの問題を投げかけたので、東京帝国大学林学教室をはじめ、多くの学者・林業者によって研究がされた。近くの小学校に防火用貯水池の設置を行った。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>『鳳来町誌 歴史編』平成6年発行(p.833~840)</li> <li>『長篠村誌』昭和33年</li> <li>『鳳来の教育』昭和49年</li> </ul>
23000 6-8	愛知県		<p>【災害名】安政(嘉永)東海地震                      【発生日時】嘉永7年(1854年)11月4日~5日                      【被災地】愛知県渥美町(沿岸部は津波被害)                      【災害の概要】遠州灘東部を震源地とするマグニチュード8.4の東海、近畿四国地方にわたる大地震・大津波                      【教訓等】この地域(渥美半島)においては、過去に何度も大地震・大津波を経験している。特にこの安政(嘉永)東海地震に関しては、被害その他が記された史料が多く残存し、また本地震による教訓(その後の災害対策)もあった。2、3の例をあげると、火災が多く発生したため「秋葉山」に厄難回避を祈願する代参を実施したり、夜廻り番をだして火災予防に務めたり、津波対策として地元で「かいがらぼた」と呼ばれる津波除けの堤を太平洋岸(堀切~日出まで)に築いたりした。なお、これらの教訓によりその後の地震(昭和19年、東南海地震等)では、比較的被害が少なかった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・絵画</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「前代未聞事」高瀬家所蔵文書</li> <li>・「助郷免除願書」堀切区有文書</li> <li>・「常光寺年代記」常光寺文書</li> <li>・清田治「渥美半島における嘉永東海地震の実状-現存する災害記録から-」、『研究紀要・第7号』渥美町郷土資料館 平成15年3月</li> <li>・「堀切村村絵図」等</li> </ul>
23000 6-9	愛知県		<p>【災害名】伊勢湾台風(台風15号)                      【発生日時】昭和34年(1959年)9月26日                      【被災地】愛知県東海市(当時上野町・横須賀町)始め東海地方                      【災害の概要】1959年9月26日に紀伊半島に上陸し、東海地方を中心に大きな被害を及ぼした。東海市では、高潮と堤防の決壊で死者141人、行方不明者2人、負傷者504人、住宅全壊510棟、半壊814棟、床上浸水465棟、床下浸水2,161棟を出す台風災害となった。                      【教訓等】東海市立名和小学校にある「友情の塔」は、伊勢湾台風で命を失った名和小学校25人、上野中学校4人の児童・生徒の慰霊塔で、全国からの寄付により建立された。毎年9月26日前後には、全校児童が参加して「友情の塔の会」を開き、校長先生や当時の様子を知る人の話を聞き、災害の恐ろしさを語り伝え、備えを固めるとともに命の尊さ、友情の大切さを確かめあい、犠牲者の冥福を祈っている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文(建立のいきさつ)</li> <li>・写真(塔全景及び友情の塔の会開催の様子をとらえた写真)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東海市史:通史編、p23、746、747、919、921</li> <li>・東海市史:資料編第6巻、p60~71</li> <li>・碑文(写真は教育委員会撮影、碑文の文面テキスト)</li> <li>・市及び教育委員会が保存している写真</li> </ul>
23202 5-1	愛知県	岡崎市	<p>【災害名】洪水                      【発生日時】文政11年7月1日                      【被災地】愛知県岡崎市                      【災害の概要】矢作川 堤防切れ・落橋 流出家屋75戸、溺死14人 (災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)                      【教訓等】死亡者の碑を矢作弥五郎神社前に建設</p>	・文献資料	「矢作川」愛知県豊田土木事務所編集・発行 平成3年 「特別企画展・矢作川一川と人の歴史」岡崎市美術館編集・発行 平成11年
23202 5-2	愛知県	岡崎市	<p>【災害名】洪水(合歓木切れ)                      【発生日時】寛政7年                      【被災地】愛知県岡崎市                      【災害の概要】矢作川 堤防切れ 流出家屋56戸、田250石洲入 (災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照)                      【教訓等】合歓木村正願寺西の矢作川堤防大小八箇所切れたことから、この付近を八ツ口と称す。</p>	・文献資料	「六ツ美村誌」六ツ美地区総代会連絡協議会 発行 昭和61年復刻

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
23202 5-3	愛知県	岡崎市	<p>【災害名】洪水（天白切れ）</p> <p>【発生日時】嘉永3年8月</p> <p>【被災地】愛知県岡崎市</p> <p>【災害の概要】矢作川 堤防切れ 田畑被害、住家浸水（災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照）</p> <p>【教訓等】人々は殺気立ち、自村の被害を軽減するために、西郷の村民が舟でやってきて、隙を見て、中島村の堤防を破壊した。これによって相互に打ち合いとなり、負傷者を出した。この後、破壊の復旧の相互負担やその後の水防工事に関する取り決めがされた。</p>	・文献資料	「六ツ美村誌」六ツ美地区総代会連絡協議会 発行 昭和61年復刻
23202 5-4	愛知県	岡崎市	<p>【災害名】洪水（三島切れ）</p> <p>【発生日時】明治15年9月下旬</p> <p>【被災地】愛知県岡崎市</p> <p>【災害の概要】菅生川 堤防切れ 溺死者43名、流出家屋30余り、浸水家屋2,000余り、田3,000余町歩（災害・被害の詳細については、添付資料1-4を参照）</p> <p>【教訓等】この洪水により、堤防の改修工事が行われ、明治18年に竣工し、その記念に治水碑が菅生川南堤防下に建てられた。また、溺死者の追悼碑も建てられた。追悼碑の文面は「明治15年10月1日依洪水近町村者四十三名溺死為追悼建之」とし、裏面に溺死者の名前を刻してある。</p>	・文献資料	「六ツ美村誌」六ツ美地区総代会連絡協議会発行 昭和61年復刻 「岡崎市史」第4巻 岡崎市役所編 昭和47年復刻 「矢作川」愛知県豊田土木事務所編集・発行 平成3年 「特別企画展・矢作川一川と人の歴史」岡崎市美術館編集・発行 平成11年
23202 5-5	愛知県	岡崎市	<p>【災害名】洪水</p> <p>【発生日時】昭和7年</p> <p>【被災地】愛知県岡崎市</p> <p>【災害の概要】巴川流域大雨 足助・額田地方に大きな被害（災害・被害の詳細については、添付資料1-5を参照）</p> <p>【教訓等】この洪水により、古村積神社に水害復旧記念碑が建てられた。</p>	・文献資料	「矢作川」愛知県豊田土木事務所 編集・発行 平成3年
23202 5-6	愛知県	岡崎市	<p>【災害名】伊勢湾台風</p> <p>【発生日時】昭和34年（1959年）9月26日</p> <p>【被災地】愛知県全域</p> <p>【災害の概要】中心気圧が929.5mmHg。矢作川で9月27日に午前0時に警戒水位3.6mを突破し、午前4時には5.1mに達し、八帖町で溢水が起きた。</p> <p>【教訓等】市内では郡界川が宮石町内で4箇所にわたって破堤したが、付近住宅の床下浸水のみでとどまった。したがって市の場合は水よりも強風による被害の方が大きかったのである。風によって1000戸近い家屋が全壊し、死者が出た。22人の死者のほとんどは倒れた家屋の下敷きになった人たちである。市では、27日朝災害救助対策本部を設置し、中央公会堂に罹災者を収容、死亡者・重症者・全壊家屋に対して見舞金の支給、仮設住宅250戸を建設した。</p>	・文献資料	新編岡崎市史編集委員会 新編岡崎市史4巻 近代 平成3年発行
23202 5-7	愛知県	岡崎市	<p>【災害名】東南海地震</p> <p>【発生日時】昭和19年（1944年）12月7日</p> <p>【被災地】東海地方</p> <p>【災害の概要】震源地は熊野灘沖で、規模はマグニチュード8.0。東海地方を中心に、地震と津波によって死者・行方不明者1,223人、家屋等の全壊34,946戸の被害。（災害・被害の詳細については、添付資料1-6を参照）</p> <p>【教訓等】市内ではかなり多くの建物が倒壊し、矢作川鉄橋付近で東海道線の地盤が陥没し不通になる。死者9人、負傷者29人、住家全壊89戸という統計もあるが、日清紡針崎工場で外壁が倒壊し女工16人が圧死したという目撃談もある。</p>	・文献資料	新編岡崎市史編集委員会 新編岡崎市史4巻 近代 平成3年発行
23202 5-8	愛知県	岡崎市	<p>【災害名】三河地震</p> <p>【発生日時】昭和20年（1945年）1月13日</p> <p>【被災地】西三河全域</p> <p>【災害の概要】渥美湾を震源地にマグニチュード7.1の地震発生。被害状況は県下で死者2,306人、負傷者3,866人、家屋・建物の全壊16,408戸。（災害・被害の詳細については、添付資料1-6を参照）</p> <p>【教訓等】死者29人、負傷者22人、住家全壊236戸、半壊544戸。なにしろ夜中のできごと故に私は寝巻のまま表に飛び出した。後でわかったことだが、震源地は三ヶ根山ではないかと言われていた。ラジオも新聞も報道管制のため、詳細は不明だった。とにかく余震が頻発したので、とても家の中で寝ることができない。そこで藁小屋を作って10日間も外で暮らすはめになった。</p>	・文献資料	新編岡崎市史編集委員会 新編岡崎市史4巻 近代 平成3年発行
23203 3-16	愛知県	一宮市	<p>【災害名】伊勢湾台風</p> <p>【発生日時】昭和34年（1959年）9月26日</p> <p>【被災地】一宮市</p> <p>【災害の概要】家屋倒壊など</p> <p>【教訓等】</p>		木曾川町史 昭和56年発行

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
23203 3-21	愛知県	一宮市	【災害名】濃尾大地震 【発生日時】明治24年（1891年）10月28日 【被災地】一宮市 【災害の概要】 【教訓等】		木曾川町史 昭和56年発行
23203 3-22	愛知県	一宮市	【災害名】東南海地震 【発生日時】昭和19年（1944年）12月7日 【被災地】一宮市 【災害の概要】 【教訓等】		木曾川町史 昭和56年発行
23203 3-23	愛知県	一宮市	【災害名】三河地震 【発生日時】昭和20年（1945年）1月13日 【被災地】一宮市 【災害の概要】 【教訓等】		木曾川町史 昭和56年発行
23203 3-24	愛知県	一宮市	【災害名】南海道地震 【発生日時】昭和21年（1946年）12月21日 【被災地】一宮市 【災害の概要】倒壊家屋など 【教訓等】		木曾川町史 昭和56年発行
23206 8-2	愛知県	春日井市	【災害名】東海豪雨（台風14号） 【発生日時】平成12年9月11日から12日 【被災地】 【災害の概要】台風14号の影響により秋雨前線が刺激され記録的な豪雨となり、家屋の浸水、道路・河川等に被害が発生した。春日井市 床上浸水363世帯 床下浸水727世帯 【教訓等】		
23209 2-1	愛知県	碧南市	【災害名】安政東海地震 【発生日時】嘉永7年（1854年）11月4日 【被災地】東海地方 【災害の概要】家屋倒壊、農業施設被害（当時、当地を支配していた、沼津藩大浜陣屋の「陣屋日記」に管内の被害状況が記録されている。 【教訓等】	古文書	
23209 2-2	愛知県	碧南市	【災害名】濃尾大地震 【発生日時】明治24年（1891年）10月28日 【被災地】岐阜・愛知両県 【災害の概要】北大浜村 住家全倒4棟、物置及び灰屋全倒40棟 死者なし 【教訓等】	碧海郡長宛の報告	「碧南市史、第2巻」昭和45年発行
23209 2-5	愛知県	碧南市	【災害名】東南海地震 【発生日時】昭和19年（1944年）12月7日 【被災地】東海地方 【災害の概要】震源地は熊野灘沖マグニチュード8.0、白屋下の震災であったため、人畜の損傷は比較的軽微、碧海郡の死者19人 【教訓等】	・文献	「碧南市史、第2巻」昭和45年発行
23209 2-6	愛知県	碧南市	【災害名】三河地震 【発生日時】昭和20年（1945年）1月13日 【被災地】西三河南部 【災害の概要】三河湾海底を震源とした、マグニチュード7.1の地震、碧海郡の死者613人で碧海郡の中でも、明治村の被害が大きかった。 【教訓等】	・文献 ・写真	「碧南市史、第2巻」昭和45年発行 「三河地震の被災調査」2003年12月 名古屋大学災害対策室
23212 2-2	愛知県	安城市	【災害名】伊勢湾台風 【発生日時】1959年9月26日 【被災地】 【災害の概要】 【教訓等】	・文献資料	・安城市史：安城市、1971年版 ・里千年史：安城市里町内会、1991年版 ・小川の歴史をさぐる：安城市小川町郷土史刊行会、1998年版
23212 2-3	愛知県	安城市	【災害名】東南海地震 【発生日時】1943年12月7日 【被災地】 【災害の概要】 【教訓等】	・文献資料	・安城市史：安城市、1971年版 ・小川の歴史をさぐる：安城市小川町郷土史刊行会、1998年版 ・篠目史：安城市篠目町内会、2002年版

現在までに語り継がれる『災害』について

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
23212 2-4	愛知県	安城市	【災害名】三河地震 【発生日時】1945年1月13日 【被災地】 【災害の概要】 【教訓等】	・文献資料	・安城市史：安城市、1971年版 ・小川の歴史をさぐる：安城市小川町郷土史刊行会、1998年版 ・明治村史 下巻：明治村史編集委員会、1966年版
23214 9-1	愛知県	蒲郡市	【災害名】安政東海地震 【発生日時】嘉永7年11月4日（1854）（嘉永七年は安政元年） 【被災地】東海地方を中心に広範囲に及んだ地震だが、当館にある記録は地元である三河地方のものが主である。 【災害の概要】嘉永7年11月4日に大規模な地震が発生した。三河地方（蒲郡市内）においては、人的な被害は少なかったようであるが、一部家屋や田畑に被害を及ぼした。 【教訓等】約150年前の災害であり、長い年月が経過しているため、語り継がれてきた伝承などは残っていない。しかし、江戸時代に形原（現在の蒲郡市形原町）に陣屋を置いていた旗本の巨勢（こせ）氏によって、地震のことが記録されており（「形原役所記録」）、三河地方におけるこの地震の様子をうかがい知ることができる。	・文献資料	
23216 5-1	愛知県	常滑市	【災害名】東南海地震 【発生日時】昭和19年12月7日 【被災地】全地域 【災害の概要】常滑市で全壊126戸、半壊849戸と被害大 【教訓等】	・文献資料	「常滑市誌」昭和51年3月1日発行 常滑市誌編さん委員会編集 常滑市役所発行
23216 5-3	愛知県	常滑市	【災害名】伊勢湾台風 【発生日時】昭和34年9月26日 【被災地】常滑市内全域 【災害の概要】・死者13名・重傷者21名・軽傷者327名・家屋流出48戸、全壊210戸、半壊737戸・床上浸水1,527戸、床下浸水2,410戸 【教訓等】伊勢湾台風の被害復旧後、浸水被害の最高水位を後世に残し、市民の防災意識を喚起し続けることを目的に、当時の市当局が沿岸部の道路脇など13箇所に浸水位標を設置した。老朽化に伴い、昭和54年と平成11年に付け替えを実施し、現在は市内9箇所に設置している。	・文献資料	・「常滑市誌」昭和51年3月1日発行 常滑市誌編さん委員会編集 常滑市役所発行 ・他 事務的資料
23216 5-7	愛知県	常滑市	【災害名】東海豪雨 【発生日時】平成12年9月11日～12日 【被災地】全地域 【災害の概要】・総雨量483.5mm・1時間最大雨量54.0mm・軽傷1名・一部損壊4戸、床上浸水84戸、床下浸水237戸・被害総額16,900万円 【教訓等】	・その他	市政概要より
23219 0-1	愛知県	小牧市	【災害名】安政東海、安政南海地震 【発生日時】嘉永七年十一月四日同五日 【被災地】大阪市中、天保山、伊勢山田、岡崎等 【災害の概要】11月4日辰之刻 大地震、津波、火災、大阪市中損所多し。天保山で津波被害で死者何百人。愛知県、静岡県との宿場被害状況の記述あり。 【教訓等】栗木氏（小牧市在住）保管の旧岩崎村庄屋 兼松七左衛門の書き残した大地震の災害状況の記録。嘉永の大地震は、この文書によれば2日目の津波の被害が大きかったことを記している。（解説者の「序」より。）	・文献資料（古文書の写しとその解説分として複製した図書）	服部正彦（小牧近世文書研究会） 嘉永東海大地震 平成15年自家出版（平成17年7月ブックショップマイタウンより200部販売）
23220 3-1	愛知県	稲沢市	【災害名】濃尾地震 【発生日時】明治24年（1891年）10月28日 【被災地】愛知県稲沢市（当時稲沢町等）全域 【災害の概要】美濃・尾張地方の地震災害（推定マグニチュード7.9） 愛知県の被害は尾張部がもっとも大きく、中島郡では、58か町村のうち、33か村は全潰状態、その他は半潰状態。郡内22,000戸のうち、全潰12,800戸、半潰6,200戸、大破損1,700戸。（いずれも概数） 【教訓等】稲沢付近では、地震が始まると地割れ目から水と砂の潤出が各地で噴出し、井戸なども土砂が吹上げ、飲み水に困ったという、液状化現象と思われる状況についての経験談が記録に散見される。	・碑文（刻印文字情報）	・『稲沢市史』昭和43年 ・『新修稲沢市史』本文編下平成3年 ・稲沢市史編纂室編 稲沢市史資料第10編『濃尾大地震』昭和43年 ・同編 稲沢市史資料第12編『稲沢随想』昭和43年 ・『祖父江町史』昭和54年 ・『平和町誌』昭和57年

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
23220 3-2	愛知県	稲沢市	<p>【災害名】伊勢湾台風                      【発生日時】昭和34年（1959年）9月26日                      【被災地】愛知県稲沢市（当時稲沢町等）全域                      【災害の概要】災害の状況は、稲沢市域罹災者総数3,407人、死者6人、重傷者13人、軽傷者24人、住家全壊157戸、住家半壊450戸、床下浸水81戸、非住家の被害1,302戸、冠水した田959ha、同畑15ha、橋梁流失3ヶ所。中島郡死者1人、軽傷者70人、住家全壊143戸、半壊240戸、床上浸水40戸、床下浸水150戸                      【教訓等】稲沢市は、被害を受けながらも、飛鳥村の集団避難者の収容を引き受け、友好の絆を結んだことが伝えられる。</p>	・文献資料	・『稲沢市史』昭和43年 ・『新修稲沢市史』本文編下平成3年 ・稲沢市史編纂室編 稲沢市史資料第10編『伊勢湾台風』昭和43年 ・同編 稲沢市史資料第12編『稲沢随想』昭和54年 ・『平和町誌』昭和57年
23222 0-1	愛知県	東海市	<p>【災害名】伊勢湾台風（台風15号）                      【発生日時】昭和34年（1959年）9月26日                      【被災地】愛知県東海市（当時上野町・横須賀町）始め東海地方                      【災害の概要】1959年9月26日に紀伊半島に上陸し、東海地方を中心に大きな被害を及ぼした。東海市では、高潮と堤防の決壊で死者141人、行方不明者2人、負傷者504人、住宅全壊510棟、半壊814棟、床上浸水465棟、床下浸水2,161棟を出す台風災害となった。                      【教訓等】東海市立名和小学校にある「友情の塔」は、伊勢湾台風で命を失った名和小学校25人、上野中学校4人の児童・生徒の慰霊塔で、全国からの寄付により建立された。毎年9月26日前後には、全校児童が参加して「友情の塔の会」を開き、校長先生や当時の様子を知らぬ人の話を聞き、災害の恐ろしさを語り伝え、備えを固めるとともに命の尊さ、友情の大切さを確かめ合い、犠牲者の冥福を祈っている。</p>	・文献 碑文（建立のいきさつ） ・写真（塔全景及び友情の塔の会開催の様子）	東海市史・碑文・市及び教育委員会が保存している写真
23223 8-1	愛知県	大府市	<p>【災害名】東海豪雨                      【発生日時】平成12年9月11日～12日                      【被災地】愛知県大府市（北崎町、大府町、月見町等）                      【災害の概要】東海地方（特に愛知県）を中心とした大雨                      【教訓等】9月11日夕方から12日の朝方にかけて総雨量609mmの大雨が降った。これは大府市の年間降水量の半分であり、愛知県内でも最も多い降水量であった。東海豪雨を教訓とし、これ以降において災害対策本部組織や事務分掌の大幅な見直し、また非常配備基準についても大府市を含む地域に大雨、洪水、暴風警報のいずれか一つでも発表されると同時に、大府市災害対策本部を設置するように修正した。</p>	・写真	東海豪雨記録写真
23228 9-1	愛知県	岩倉市	<p>【災害名】濃尾大震災                      【発生日時】明治24年（1891年）10月28日                      【被災地】岐阜県美濃地方・愛知県尾張地方を中心に東海・北陸・近畿東部                      【災害の概要】地震の規模：M8.4 発震の時刻：午前6時38分50秒 発震の方向：南々東、北々西（災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照）                      【教訓等】</p>	・文献資料	発行日：昭和60年12月1日 編集：岩倉市史編集委員会 発行：岩倉市 タイトル：岩倉市史（中巻） P102～117
23228 9-6	愛知県	岩倉市	<p>【災害名】伊勢湾台風                      【発生日時】昭和34年（1959年）9月20日                      【被災地】奈良県、三重県、紀伊半島南部や東海地方を通り本土を横断                      【災害の概要】当時、岩倉町の人口14,323人、罹災者総数5,688人、死者2人、重傷者4人、軽傷者11人 住家の被害：全壊77戸、半壊109戸、床下浸水1,150戸、非居住家屋の倒壊679戸（災害・被害の詳細については、添付資料1-6を参照）                      【教訓等】</p>	・文献資料	発行日：昭和60年12月1日 編集：岩倉市史編集委員会 発行：岩倉市 タイトル：岩倉市史（中巻） P911～914
23229 7-1	愛知県	豊明市	<p>【災害名】降雹による大被害                      【発生日時】昭和10年8月17日                      【被災地】豊明市沓掛町（当時豊明村沓掛）他                      【災害の概要】17日午後4時20分ごろから1時間にわたり豊明村沓掛を中心にして一帯に突如として落雷・雷雨、突風襲来し、10銭白銅大（約5cm）の降雹があり農作物に莫大な被害が発生。また、国道の松並木が突風のため倒れ、その内の1本が道をふさいだため交通が約30分間遮断されトラックや自動車が立往生した。さらに名鉄豊橋線も断線、停電になりさんたんたる状況になった。被害総額39万3千円（当時の年間予算7万円）（災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照）                      【教訓等】青年団員、処女会員、小学教員、村吏員は率先して自力更生にのり出し禁酒、禁煙、冗費の大節約と早起きを、家内副業の再興をもくろんで「更生5ヶ年計画」のため村役場にて協議を重ねた。</p>	・文献資料	大阪毎日新聞名古屋版 昭和10年8月23日

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
23229 7-2	愛知県	豊明市	<p>【災害名】東海豪雨                      【発生日時】平成12年9月11・12日                      【被災地】愛知県豊明市（大久伝地区・阿野地区・大脇地区）                      【災害の概要】東海地方を中心とした大雨（災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照）                      【教訓等】9月11日夕方から深夜にかけ激しい雨が降り続き、1時間最大74.5mm、総雨量463mmの降雨が観測された。短時間に記録的な雨に見舞われたため、排水能力を上回る雨が降り、境川に沿った大久伝・阿野・大脇のそれぞれの地区では床上や床下浸水に見舞われた。皆瀬川と正戸川は堤防が決壊し、大脇地区周辺に濁流が襲った。</p>	・文献 豊明市史（資料編補七 自然）	
23232 7-1	愛知県	愛西市	<p>【災害名】慶長の洪水                      【発生日時】慶長19年4月29日                      【被災地】濃州（岐阜県）から海東郡（愛知県）                      【災害の概要】堤が崩れて、はかり知れない多くの田畑が損亡した。                      【教訓等】円城寺村の下、笠町（美濃国）に甚右衛門という者の姪があって、これが蛇になって飛び込み、洪水の濁流のついで勝幡までやってきて、この池にすみついたという。笠町とは笠松村のことである。この池は天明8年の日光川の改修の際、瀬ちがえになり、池が埋まって、いまはあとかたもない、と伝えている。現在、勝幡には津島街道と、かつての清洲街道との間あたりに、姪ヶ池の地名がある。また、塩畑には、「おへびさま」あるいは「白竜さん」ともいう小祠が、弘法堂跡にある。更に近くには、蓮池の地名がある。また、大正8年に埋め立てられた、天王池と呼ばれた池があった。</p>	・文献資料 ・絵画	「佐織町史通史編」746ページ 慶長の洪水 蛇池の竜
23424 9-2	愛知県	大治町	<p>【災害名】濃尾大地震                      【発生日時】明治24年（1891年）10月28日                      【被災地】岐阜県西部から尾張北西部                      【災害の概要】午前6時38分ごろ岐阜県の揖斐川上流域を震源地とする、濃尾大地震が発生した。本町の属した海東郡は、「1万7千余戸のうち、1万2千余戸を破壊し、安全なる建物あることなし」といわれた。大治町として、死者13人・負傷者112人・全壊618戸・半壊1,014戸に及んだ。                      【教訓等】</p>	・文献資料	大治町史 1979年12月1日発行
23424 9-5	愛知県	大治町	<p>【災害名】伊勢湾台風                      【発生日時】昭和34年（1959年）9月26日                      【被災地】東海地方                      【災害の概要】紀伊半島に上陸し、鈴鹿山脈の上空を進み、富山湾東部から日本海へ抜けた伊勢湾台風は、記録的な豪雨と高潮をもたらし、海部地方南部は海岸堤防がいたるところで破れ、海水が浸入し、海と化した。大治町は幸いにして、海水の浸入を受けなかったが、その被害状況は重軽傷者15人、全壊35戸、半壊336戸、浸水家屋1,200世帯に及び、公共施設、農業の被害も含め、甚大なものであった。                      【教訓等】</p>	・文献資料	大治町史 1979年12月1日発行
23424 9-8	愛知県	大治町	<p>【災害名】東海豪雨                      【発生日時】平成12年（2000年）9月11日                      【被災地】東海地方                      【災害の概要】平成12年9月11日未明から12日にかけて東海地方を襲った集中豪雨は、愛知県全体に大きな被害をもたらし、県内では、大治町を含む21市町に災害救助法が適用された。この東海豪雨により大治町では、時間最大雨量79.5mm、総雨量355mmを観測し、床上浸水257棟、床下浸水751棟、道路冠水430箇所、河川の越水3箇所の被害があった。                      【教訓等】</p>		
23426 5-1	愛知県	十四山村	<p>【災害名】天正13年大地震                      【発生日時】天正13年11月29日                      【被災地】愛知県海部郡十四山村鳥ヶ地新田                      【災害の概要】大地震により鳥ヶ地亡所になる。                      【教訓等】本村鳥ヶ地新田佐野家の先祖は当該地区である鳥ヶ地新田より当地に分家したが、その折に模写した先祖由緒書に「大地震により鳥ヶ地が亡所となる」という記述あり。</p>	・文献資料	佐野家由緒書（古文書）
23426 5-10	愛知県	十四山村	<p>【災害名】宝暦7年洪水（宝暦の洪水）                      【発生日時】宝暦7年5月5日                      【被災地】愛知県海部郡十四山村子宝新田孫宝、神戸新田、榎場新田                      【災害の概要】大雨にて堤防が決壊し、孫宝、榎場新田は堤防が深く切れ込み海用になった。神戸新田にも入水している。                      【教訓等】孫宝 長左衛門、榎場 武左衛門裏2か所海用になる。神戸新田にも入水している。</p>	・文献資料	

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
23426 5-11	愛知県	十四山村	<p>【災害名】嘉永6年大風（台風）</p> <p>【発生日時】嘉永6年</p> <p>【被災地】愛知県海部郡十四山村神戸新田</p> <p>【災害の概要】台風のため堤防が決壊。堤防が切れ込み、烏ノ池（瀦・十四山村文化財）ができた。</p> <p>【教訓等】神戸家文書御用留の中には詳しい記述がないため、大きな被害はでなかったようだが、堤防決壊に伴い、潮の勢いにより地面が削られた結果、深い池ができた。本村ではそのようにできた池を「海用」、「瀦」（いずれも“みよ”と読む）と呼んだ。嘉永6年に神戸新田にできた瀦は「烏の池（うのいけ）」と呼ばれ、今も龍神伝説が伝わっており、不用意に池を埋め立てると祟りがあると恐れられている。本村でも現存する瀦はこの「烏の池」だけとなり、村の文化財に指定されている。</p>	・文献資料	・十四山村教育委員会文化財指定書 ・十四山村史民俗編・文書編・通史編
23426 5-12	愛知県	十四山村	<p>【災害名】明治3年大風（台風）</p> <p>【発生日時】①明治3年8月 ②明治3年9月18日</p> <p>【被災地】愛知県海部郡十四山村海屋新田・竹田新田・亀ヶ地・神戸新田</p> <p>【災害の概要】台風の高潮のため堤防が決壊。死者はでなかったが建物と農地に被害がでた。</p> <p>【教訓等】①明治3年8月の台風で高波が堤防を越え、10数箇所破損した。海屋新田の堤防が切れ、竹田新田、亀ヶ地の内堤防に波が強く当たり、溢れるなどした場所ができ、ムシロ、畳など様々なもので潮を防ぎ留め、水難をなんとか免れた。 ②その翌月9月18日の夜、台風のため神戸新田の堤防が決壊、入水した。死者はでなかったが、建物の半壊11棟、屋根破損1棟という被害をだした。</p>	・文献資料	昭和40年刊 十四山村史
23426 5-13	愛知県	十四山村	<p>【災害名】明治24年 濃尾地震</p> <p>【発生日時】明治24年</p> <p>【被災地】愛知県海部郡十四山村鳥ヶ地新田・馬ヶ地新田・坂中地新田・海屋新田</p> <p>【災害の概要】・岐阜県にて発生した地震及びその余震のため、村内の建物、堤防等に被害がでた。 ・ケガ人も軽傷ながら出た。 ・田から水が噴出し、液状化現象が見られた。</p> <p>【教訓等】・鳥ヶ地地区の寺院の本堂が倒壊した。 ・馬ヶ地地区の寺院の山門が余震により倒壊した。 ・坂中地地区の氏神社殿が倒壊した。 ・聞き書き調査によれば、「大変な揺れで、茅葺屋根の庇が地面に付く寸前までたわんだ」「家から出ることができず、柱や木につかまっているのが精一杯で、とても歩けなかった」という証言がある。 ・同調査によれば「海屋新田の堤防に亀裂が入り、父親ら大人たちが慌てて天秤などで土を運び、堤防を修復していた」のを古老が記憶している。また同古老は家の前の田から勢いよく水が噴出すのを目撃しており、地震後田には噴出した跡がいくつもあり、アリの巣のように盛り上がっていたのを記憶している。</p>	・文献資料	十四山村史編集委員会により「民俗聞き取り調査」平成8年～16年実施
23426 5-14	愛知県	十四山村	<p>【災害名】明治29年台風・高波</p> <p>【発生日時】明治29年8月30日・9月8日・9月11日</p> <p>【被災地】愛知県海部郡十四山村村内</p> <p>【災害の概要】度重なる台風などの被害により堤防が決壊、十数日間塩水に村内が浸った。被害的には濃尾地震より軽かったが、農業が村の主産業であったため、租税貢納免租の訴えを近隣の村々とともに申請している。</p> <p>【教訓等】以下にこの時に書かれた免租嘆願書の文面を書く。「明治29年8月30日夜に起こりたる暴風海嘯のため大いに被害、再び9月8日前後の強風の為、善太川の暴ちようと田畑の潜水と相合し、海面より善太川に逆流する潮水に衝突、古来未曾有の災害。9月11日暴雨の為、三度目の被害、十数日間水底に没了。8月30日夜の暴風以後、海面常に穏やかならず、潮水の平時より高さ事数尺、その逆流の甚だしきにあたり、強雨連句、名古屋測候所開創以來今だかつて経験せざる程の大雨量を下し、地盤潜水の甚だしき。木曾川の流域たる本郡の低地に氾濫し9月21日に至り…。</p>	・文献資料	本村保有公文書 明治29年
23426 5-15	愛知県	十四山村	<p>【災害名】明治30年 鵜多須切れ</p> <p>【発生日時】明治30年</p> <p>【被災地】愛知県海部郡十四山村善太川流域</p> <p>【災害の概要】木曾川支流の決壊により長期湛水したが、本村北部、善太川が決壊の危機にあい、隣村から十四山村側の堤防を壊し、水を流そうという事件が発生した。</p> <p>【教訓等】旧八開村鵜多須堤防が決壊したため、日光川以西に大きな被害を出したが、十四山村も善太川決壊の危機に瀕していた。そこで隣村の人々が十四山村側の堤防を切って、水を吐き出させようと企て、大勢で押しかけ、警察が出動する騒ぎになった。</p>	・文献資料	十四山村史通史編 平成17年度発行予定



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
23426 5-16	愛知県	十四山村	【災害名】明治32年降雹 【発生日時】明治32年6月30日 【被災地】愛知県海部郡十四山村(旧宝地村含む) 【災害の概要】明治32年6月30日降雹被害 【教訓等】15分ほど直径3cm、重さ25gほどの雹が降り、農作物に被害がでた。雹が降る前に雷が鳴っていたようである。	・文献資料	十四山村史
23426 5-17	愛知県	十四山村	【災害名】大正元年 台風 【発生日時】大正元年 【被災地】愛知県海部郡十四山村海屋新田 【災害の概要】台風による高潮の発生 【教訓等】台風の高潮により海屋新田の堤防が決壊、入水した。	・文献資料	十四山村史
23426 5-18	愛知県	十四山村	【災害名】大正10年 台風等大雨 【発生日時】大正10年9月25日～26日 【被災地】愛知県海部郡十四山村海屋新田 【災害の概要】海屋新田など4か所の堤防がきれた 【教訓等】この年は天候不順であったが、海屋新田堤防の4か所が決壊、人・建物・農地等に被害が出たが、この時の被害状況から伊勢湾台風時に海屋新田以外は被害にならないという思い込みがあり、海屋新田以外の地区に大きな被害をもたらした。	・文献資料	十四山村史通史編 平成17年度発行予定
23426 5-19	愛知県	十四山村	【災害名】昭和19年東南海地震 【発生日時】昭和19年12月7日 【被災地】愛知県海部郡十四山村海屋新田・竹田新田・亀ヶ地新田 【災害の概要】地震の揺れにより、建物倒壊、液状化現象、地面の隆起などが起こっている。 【教訓等】開戦記念日の前日だったので子ども達は各氏神社の清掃の最中だった。神社境内の石碑が倒れたのを目撃した人がいた。・亀ヶ地地区の建物の土台が10cmほどずれた。土地が10cm以上も上がったためだった。・地主の蔵の囲いが土煙をたてて倒れた。・強烈な揺れのため家を飛び出したら、あるべき所に道がなくなり、ケガをした。(道が陥没したり、うねったりしていた。)・田から勢いよく水が噴出、枯れた田が水浸しになり、まるで池のようになった。・ドンガ堤という堤防が地震の揺れの最中、サーっと消えるように川の中へ沈んだ。	・文献資料	十四山村史聞き取り調査 平成8年～16年
23426 5-2	愛知県	十四山村	【災害名】宝永4年地震 【発生日時】宝永4年10月4日 【被災地】愛知県海部郡十四山村神戸新田・鳥ヶ地新田 【災害の概要】大地震により大宝前新田(現、神戸新田)の堤防がほとんど決壊した。・大地震により堤防が切れ、堀田(田が沈んだ)になった(鳥ヶ地) 【教訓等】本村を干拓した神戸家に伝わる文書に、完成したばかりの大宝前新田(現、神戸新田)の堤防がほとんど決壊し、海に戻ったという記録がある。その後修復するも翌年の台風の高潮のため再び決壊、25町歩切捨て復旧した。・『徇行記』鳥ヶ地新田の記述に「…このあたりの田畝大地震にて入り込みの所あり、是は堀田になれり」とある。	・文献資料	十四山村教育委員会発行「神戸家文書御用留」
23426 5-20	愛知県	十四山村	【災害名】昭和34年伊勢湾台風 【発生日時】昭和34年9月26～27日 【被災地】愛知県海部郡十四山村全域 【災害の概要】伊勢湾台風により堤防が決壊、村内は約3か月に渡り泥海に浸った。 【教訓等】	・文献資料	
23426 5-3	愛知県	十四山村	【災害名】延宝九年大風(台風) 【発生日時】延宝9年7月 【被災地】愛知県海部郡十四山村桴場新田 【災害の概要】台風で堤防が決壊した。新田開発途中の話故、犠牲者・被害状況は不明。 【教訓等】鳥ヶ地前(後、桴場)新田由緒書によると、台風で堤防が決壊し、尾張藩によって海用留(堤防修復)のはずが、資金難及び人手不足を理由に捨て置かれた。そのため当地を干拓していた鈴木家が自己資金にて堤防を修復した話が伝わっている。	・文献資料	鳥ヶ地前新田由緒書(古文書)
23426 5-4	愛知県	十四山村	【災害名】宝永5年大風(台風) 【発生日時】宝永5年7月4日 【被災地】愛知県海部郡十四山村桴場新田・神戸新田 【災害の概要】桴場新田、台風で堤防が6か所決壊した。新田開発途中の話故、犠牲者・被害状況は不明。・神戸新田、台風による高潮で新堤防すべて破堤した。 【教訓等】鳥ヶ地前(後、桴場)新田由緒書によると、延宝9年の台風で被害を受けた堤防が6か所決壊し、鈴木家が自己資金にて堤防を再び修復した話が伝わっている。・神戸新田、台風の高潮により宝永4年の地震で沈んだ堤防を修復していたが、完成したばかりの新堤防が決壊してしまった。その後福田村(名古屋市)甚兵衛の手伝いを受け25町歩切り捨てて復旧したことが記されている。	・文献資料	・鳥ヶ地前新田由緒書(古文書) ・十四山村教育委員会発行「神戸家文書御用留」

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
23426 5-5	愛知県	十四山村	【災害名】正徳4年台風 【発生日時】正徳4年 【被災地】愛知県海部郡十四山村神戸新田 【災害の概要】台風による高潮により堤防決壊。それ以外の被害状況は不明。 【教訓等】台風による高潮で、堤防2,000間のうち1,500間程破壊。神戸新田を干拓した神戸分左衛門は江戸壺岸島湊町彦十郎より3,860両借入れ復旧した。	・文献資料	十四山村教育委員会発行「神戸家文書御用留」
23426 5-6	愛知県	十四山村	【災害名】享保7年大風（台風） 【発生日時】①享保7年8月、②8月28日 【被災地】愛知県海部郡十四山村神戸新田・竹田新田 【災害の概要】台風にて堤防2か所決壊。耕作不可能になった。 【教訓等】神戸家文書によると以下のとおり「大風にて堤二か所切れ申し候に付き、御普請御奉行所代官 井田現助殿へ海用留下さる様にと申し上げ候えば、御普請奉行両人様お回りご覧仰せられ候、この度 茶屋新田（名古屋市）竹田新田（十四山村）、大宝新田（飛島村）所々切れ申すにつき…海用日々掘れ、難儀に存じ…自分人足を以て同27日迄に2か所とも海用留め仕り候…、しかる所同月28日大風仕り一か所押し切れ、海用切れ口深さ5間にまなりなり、手に及ばずただ今、市江輪中（愛西市）竹田堤海用留にお取り掛かり候…」この時堤防を失ったため、干拓した土地、沖の手前50町歩切捨て3,600両をかけて神戸山堤防（現在は無い）を築いた。	・文献資料	十四山村教育委員会発行「神戸家文書御用留」
23426 5-7	愛知県	十四山村	【災害名】寛保元年木曾川決壊 【発生日時】寛保元年 【被災地】不明 【災害の概要】木曾川堤防が決壊、十四山村も被害を蒙った。 【教訓等】木曾川が鯛浦（弥富町）で堤防が決壊、弥富町を始め、十四山村も被害を蒙った。	・文献資料	
23426 5-8	愛知県	十四山村	【災害名】宝暦3年堤防決壊 【発生日時】宝暦3年8月16～18日 【被災地】愛知県海部郡十四山村上押萩・亀ヶ地新田 【災害の概要】中島郡須賀脇（現、稲沢市）にて木曾川決壊。十四山村善太川流域に入水。 【教訓等】中島郡須賀脇（塩川山新田村、現稲沢市）にて決壊し、鹿伏兔（現、津島市）、十四山地内の上押萩、亀ヶ地（いずれも善太川流域、善太川は木曾川の支流）に入水した。本村には記録がないため、被害の詳細は不明。	・文献資料	
23426 5-9	愛知県	十四山村	【災害名】宝暦5年堤防決壊 【発生日時】宝暦5年 【被災地】愛知県海部郡十四山村榎場新田 【災害の概要】台風のため鳥ヶ地前新田（現榎場新田）の堤防決壊。 【教訓等】鳥ヶ地前新田の東北の堤防が決壊した。	・文献資料	
23445 1-1	愛知県	南知多町	【災害名】安政東海地震、南海地震 【発生日時】安政元年霜月四日朝五ツ時（1854年12月23日午前8時ごろ） 安政元年霜月五日晩六ツ時（1854年12月24日午後6時ごろ） 【被災地】南知多町大字内海、山海、豊浜、片名 【災害の概要】安政東海地震、南海地震の地震災害・津波災害 【教訓等】南知多町においても、安政元年に連動して発生した東海地震と南海地震が史上稀な大災害であったことから、乙方村（現南知多町大字豊丘）の代々の庄屋が語り継ぐべき村の重要事項を記した「高付由来帳」に記録されたものと思われる。町内でも地盤の悪い地区では、ほとんどの家屋が倒壊し、豊浜では、大津波により家屋・道具が流されたとあり、防災意識を喚起するリアルな史実として町民に周知する必要がある。	・文献資料	南知多町「町誌」平成3年3月 P214・215
23481 8-1	愛知県	一色町	【災害名】明治22年の高潮災害 【発生日時】明治22年（1889）9月10日 【被災地】一色町のほぼ全域 【災害の概要】明治22年9月10日夜明けから暴風雨となり、翌11日午後6時頃、海岸堤防を越えて高潮が町内に入り、家屋は流失（流失を含む全壊家屋421戸以上）し、死者170人余を出した。〔災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照〕 【教訓等】一色町は、江戸時代に矢作川の三角州を干拓した土地であり、それ故海抜ゼロメートル地域が町域22.34平方キロの約8割に及んでいる。従って、当時の海岸堤防の脆弱性から大型台風が接近するたびに高潮が発生し、海岸堤防が決壊した。そうなると、必然的に町域が浸水し、被害を惹起した。町民の間では、「堤防が切れたら、高い所へ逃げろ」と言い伝えられていたものの、逃げ遅れた人々が少なくない。	・文献資料 ・碑文（町内の普元寺（大字味浜）と憶念寺（大字生田）に水害碑あり。） ・写真（石碑全景を撮った写真）	書名：一色町誌 著者：一色町誌編さん委員会（事務局＝一色町役場）発行年：昭和45年4月15日発行

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
23481 8-2	愛知県	一色町	<p>【災害名】 東南海地震                      【発生日時】 昭和19年（1944）12月7日                      【被災地】 一色町のほぼ全域                      【災害の概要】 震源地＝北緯33度7分東経136度2分 地震の規模＝M8.3 一色町の被害は、全壊家屋505戸、半壊1,524戸、死者13名、重傷者6名〔災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照〕                      【教訓等】</p>	・文献資料	書名：一色町誌 著者：一色町誌編さん委員会（事務局＝一色町役場） 発行年：昭和45年4月15日発行
23481 8-3	愛知県	一色町	<p>【災害名】 三河地震                      【発生日時】 昭和20年（1945）1月13日                      【被災地】 一色町のほぼ全域                      【災害の概要】 震源地＝北緯34度7分東経137度2分 地震の規模＝M6.9 一色町の被害は、全壊家屋592戸、半壊1,770戸、死者80名、重傷者34名、軽傷者102名〔災害・被害の詳細については、添付資料1-3を参照〕                      【教訓等】 余震的なものが何度かあったため、「余震が多い場合は気をつけろ」と言われるようになった。</p>	・文献資料	書名：一色町誌 著者：一色町誌編さん委員会（事務局＝一色町役場） 発行年：昭和45年4月15日発行
23481 8-4	愛知県	一色町	<p>【災害名】 13号台風                      【発生日時】 昭和28年（1953）9月25日                      【被災地】 一色町のほぼ全域                      【災害の概要】 一色町の被害は、死者16名、重・軽傷者777名、罹災者総数21,739名、全壊家屋317戸、半壊1,903戸、家屋の流失124戸、床上浸水1,516戸、床下浸水223戸、田の埋没416ha、冠水414ha、畑の埋没332ha、冠水138ha、道路の決壊254箇所、橋の流失350箇所、鉄道の不通2箇所〔災害・被害の詳細については、添付資料1-4を参照〕                      【教訓等】 一色町は、江戸時代に矢作川の三角州を干拓した土地であり、それ故海拔ゼロメートル地域が町域22.34平方キロの約8割に及んでいる。従って、当時の海岸堤防の脆弱性から大型台風が接近するたびに高潮が発生し、海岸堤防が決壊した。そうなると、必然的に町域が浸水し、水害を惹起した。町民の間では、「堤防が切れたら、高い所へ逃げろ」と言い伝えられていたものの、逃げ遅れた人々が少なくない。一色町誌によると、先の東南海地震や三河地震で、海岸堤防の基礎が破壊され、これが高潮で洗われ決壊したのでは？とも伝えている。</p>	・文献資料 ・碑文（石碑全景を撮った写真） ・写真（一色町60年のあゆみ、その他）	書名：一色町誌 著者：一色町誌編さん委員会（事務局＝一色町役場） 発行年：昭和45年4月15日発行
23481 8-5	愛知県	一色町	<p>【災害名】 伊勢湾台風                      【発生日時】 昭和34年（1959年）9月26日                      【被災地】 一色町のほぼ全域                      【災害の概要】 一色町の被害は、死者3名、重・軽傷者859名、全壊家屋427戸、半壊2,027戸、家屋の流失13戸、床上浸水182戸、床下浸水2,036戸、田・畑の埋没・冠水1,310ha〔災害・被害の詳細については、添付資料1-5を参照〕                      【教訓等】 先の13号台風で町のほぼ全域が水没した教訓から、国や県の支援の下、町の海岸線は全てコンクリート堤防が築かれた。しかし、矢作古川の河川堤防が伊勢湾台風の高潮で洗われ、河川堤防の決壊から、またもや町のほぼ全域が水没した。町民の間では、「堤防が切れたら、高い所へ逃げろ」と言い伝えられていたものの、逃げ遅れた人々が少なくない。</p>	・文献資料 ・写真（一色町60年のあゆみ、その他）	書名：一色町誌 著者：一色町誌編さん委員会（事務局＝一色町役場） 発行年：昭和45年4月15日発行
23501 6-1	愛知県	幸田町	<p>【災害名】 三河地震                      【発生日時】 昭和20年1月13日                      【被災地】 愛知県額田郡幸田町大字深溝及び逆川                      【災害の概要】 三河地震（マグニチュード7.1）、震源の深さ10km以下、内陸直下型地震で、西三河を中心に大きな被害をもたらした。                      【教訓等】 地震によりできた地震断層は、最大落差1.5m、最大左ずれ水平変位は約1mあり、深溝断層と名付けられ、三河地震による地震断層として昭和50年12月26日に愛知県指定天然記念物に指定された。断層周辺は見学できるよう整備され、地震の怖さを見ることのできる学習の場として活用されている。</p>	・文献資料 ・写真（町ホームページに掲載してある写真）	・愛知県幸田町：幸田町史 1964 p53～57 概略ホームページに掲載 ・ホームページ：幸田の見どころ（説明書き、写真3枚）
23604 7-1	愛知県	御津町	<p>【災害名】 三河地震                      【発生日時】 1945年1月13日                      【被災地】 御津町全域                      【災害の概要】                      【教訓等】 竹やぶに避難し、海苔たこ（海苔を天日乾燥するための木枠）を合わせた中で避難生活した。</p>		
23604 7-3	愛知県	御津町	<p>【災害名】 伊勢湾台風                      【発生日時】 1959年9月26日                      【被災地】 御津町沿岸部                      【災害の概要】                      【教訓等】</p>		編集：御津町教育委員会 発行：御津町 タイトル：御津町制50年写真集 発行：昭和58年3月31日

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
24000 1-1	三重 県		<p>【災害名】明応地震                      【発生日時】1498年9月20日                      【被災地】安濃津（現在の津市）等                      【災害の概要】M8.2～8.4。津波は紀伊から房総の海岸を襲った。伊勢大湊では家屋流出1,000、溺死5,000。塩屋村180軒のうち100軒余浪にとられ、助かるもの4～5人。志摩荒嶋250余人死。「内宮子良館記」によると伊勢志摩で溺死1万という(①、②)。(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)                      【教訓等】「安濃津十八町沈没すると申伝う」との記述があり(③)、当時港湾都市であった伊勢国安濃津を壊滅させた地震とされている。また、伊勢大湊では長屋郷（現在の海岸から3.5km奥）まで津波入ったとの記載がある(②)。</p>	・文献資料	①「新編日本被害地震総覧」P40（宇佐美龍夫、1996） ②「日本被害津波総覧」P76（渡辺偉夫、1985） ③「亀山測候所編 三重県災害史」P122（三重県、1955）
24000 1-2	三重 県		<p>【災害名】慶長地震                      【発生日時】1605年2月3日                      【被災地】主に三重県内沿岸部等                      【災害の概要】M7.9。津波は犬吠崎から九州にいたる太平洋岸に押し寄せた。伊勢の浦々では、地震後数町沖まで潮が引き、約2時間後津波が襲来、魚貝をとっていた人達死す。大石も浦々に打ち上げ、船、網流失す。津波高（推定値）は、伊勢で4～5m(①)。(災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照)                      【教訓等】南海トラフ沿いで発生した歴代のうち、「津波地震」であった可能性が高い地震とされる(②)。「伊勢の海嘯は数丁干潟となり魚貝あまた其の跡に残りしを見て漁人等之をたらんと干潟に集まりしに又高波打上て漁人等皆沈没せり」との記述がある(③)。</p>	・文献資料	①「日本被害津波総覧」P77（渡辺偉夫、1985） ②「新編日本被害地震総覧」P45（宇佐美龍夫、1996） ③「亀山測候所編 三重県災害史」P123-124（三重県、1955）
24000 1-3	三重 県		<p>【災害名】宝永地震                      【発生日時】1707年10月28日                      【被災地】三重県内全域                      【災害の概要】M8.4。震害は東海道・伊勢湾・紀伊半島で最もひどく、四日市で半ば潰れた(①)。津波は、伊豆半島から九州までの太平洋沿岸、大阪湾・播磨・伊予・防長及び八丈島を襲い、尾鷲で死者1,000という。三重県沿岸での津波高（推定値）は、2～10m(②)。(災害・被害の詳細については、添付資料1-3を参照)                      【教訓等】わが国最大級の地震の1つとされており(①、②)、県内の揺れ及び津波による被害も甚大である。熊野灘沿岸部各地には、この地震による犠牲者をまつた津波碑等が残されている(③)。</p>	・文献資料	①「新編日本被害地震総覧」P65-71（宇佐美龍夫、1996） ②「日本被害津波総覧」P83-84（渡辺偉夫、1985） ③「三重県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査」P1191-1225（羽鳥徳太郎、1978、地震研究所彙報、Vol. 53）
24000 1-4	三重 県		<p>【災害名】伊賀上野地震                      【発生日時】1854年7月9日                      【被災地】伊賀地域等                      【災害の概要】M7.0～7.5。伊賀上野・四日市付近で被害が大きく、木曾川・町屋川・朝明川・鈴鹿川等の土堤には裂け目ができたり、沈下したりしたところが多かった。伊賀で死者625、傷者994、家の全潰2,270、蔵の全潰306(①)。(災害・被害の詳細については、添付資料1-4を参照)                      【教訓等】伊賀上野及びその付近において震害が甚だしく、建物倒壊による人的被害が多い(②)。また、この地震により、紀伊半島沿岸では震度4～5と推定され、住民は津波の心配をしたという(①)。1707年の宝永地震と比較して、1854年12月の安政東海地震津波による熊野灘沿岸地域の犠牲者数は、尾鷲をのぞいて一様に激減しており、この伊賀上野地震で志摩・熊野地域は強震に見舞われ、沿岸住民が山へ避難するなど、津波を警戒していたことが、（安政東海地震の際には）幸いしたようである(③)。</p>	・文献資料	①「新編日本被害地震総覧」P120-122（宇佐美龍夫、1996） ②「亀山測候所編 三重県災害史」P129-138（三重県、1955） ③「三重県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査」P1191-1225（羽鳥徳太郎、1978、地震研究所彙報、Vol. 53）

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
24000 1-5	三重 県		<p>【災害名】安政東海地震・安政南海地震                      【発生日時】1854年12月23～24日                      【被災地】三重県内全域                      【災害の概要】(安政東海地震) M8.4。震害は、津で局地的に被害が大きく、潰家157、半潰607、死者4、傷者5(①)。津波は、伊勢志摩・熊野灘沿岸で10mに達している。志摩半島の甲賀では流失家屋134、死者11、和具では400余軒のうち270流失、死者42、長島では戸数約800のうち80軒残り、死者23、尾鷲では戸数959のうち流失661、半流失68、死者198、二木島では200戸のうち28戸残り、死者13。新鹿・大泊では8割流失した(②)。(安政南海地震) M8.4。震害や津波の様子を32時間前(1854年12月23日)に発生した安政東海地震とはっきり2つに区別できないものが多い(①)。(災害・被害の詳細については、添付資料1-5を参照)                      【教訓等】宝永地震同様、県内の揺れ及び津波による被害も甚大である。しかし、宝永地震と比較して尾鷲をのぞいて津波による犠牲者数は一様に激減しており、半年前の伊賀上野地震で志摩・熊野地域は強震に見舞われ、沿岸住民が山へ避難するなど、津波を警戒していたことが幸いしたようである(③)。また、熊野灘沿岸部各地には、この地震による犠牲者をまつた津波碑等が残されている(③)。</p>	・文献資料	①「新編日本被害地震総覧」P123-140(宇佐美龍夫、1996) ②「日本被害津波総覧」P94-99(渡辺偉夫、1985) ③「三重県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査」P1191-1225(羽鳥徳太郎、1978、地震研究所彙報、Vol. 53)
24000 1-6	三重 県		<p>【災害名】東南海地震                      【発生日時】1944年12月7日                      【被災地】三重県内全域                      【災害の概要】M7.9。三重県内の被害は、死者389、負傷者608、住家全壊1,627、住家半壊4,210、流失家屋2,759、浸水家屋7,579(①)。津波被害は特に尾鷲、錦、吉津等の町村で大きかった。三重県沿岸の津波高は、0.5～9.0mで、最大は尾鷲市賀田の9.0mであった(②)。(災害・被害の詳細については、添付資料1-6を参照)                      【教訓等】地震発生当時は戦時中であり、その社会情勢上、地震の被害については極秘扱いとされた。この地震による県内の被害のうち、人的被害は津波によるものが大半である。県内沿岸各地の津波の来襲状況等(例えば、第1波から第5波まであり、そのうち第1波と第3波が最も大きかった等)については、詳細に残されており、教訓として現在に至っている(②)。</p>	・文献資料	①「新編日本被害地震総覧」P294-295(宇佐美龍夫、1996) ②「日本被害津波総覧」P130-132(渡辺偉夫、1985) ③「津波調査報告書～検証・東南海地震津波～」P16-29(三重県、1995)
24000 1-7	三重 県		<p>【災害名】1953年大雨(前線)                      【発生日時】1953年8月14日                      【被災地】上野市他                      【災害の概要】日本海から前線が南下し、県内北勢及び伊賀地方で豪雨となった。特に伊賀地方では、山崩れにより多数の人的被害が出た。県内の人的被害は、死者13名、行方不明者19名、負傷者73名、建物被害は、全壊71棟、半壊129棟、流失31棟、家屋浸水12,589棟である。(災害・被害の詳細については、添付資料1-7を参照)                      【教訓等】災害発生と同時に、津市・四日市市・宇治山田市・松阪市・上野市・鈴鹿市に対し、災害救助法が発動されるとともに、り災者の救助や生活必需品等の支給、医療の実施等の応急救助活動が実施された。</p>	・文献資料	「台風第13号による災害の概況と対策(その一)」33p(三重県・三重県災害復興対策本部、1953) ※災害・事故等の内容については、津地方気象台ホームページを参照。
24000 1-8	三重 県		<p>【災害名】1953年台風第13号                      【発生日時】1953年9月25日                      【被災地】三重県内全域                      【災害の概要】9月25日15時頃、潮岬付近に上陸した台風第13号により、県内全域にわたって暴風雨となった。また、本県通過時が満潮時と重なったため、高潮により海岸線がほとんど壊滅した。県内の人的被害は、死者44名、行方不明者6名、負傷者2,491名、建物被害は、全壊1,282棟、半壊4,953棟、流失436棟、家屋浸水69,626棟である。(災害・被害の詳細については、添付資料1-8を参照)                      【教訓等】台風の本県通過時が、満潮と重なったため、被害は高潮を伴い、り災者総数は約36万人に達し、全県民の四分の一に及んだ。</p>	・文献資料	「亀山測候所編 三重県災害史」P82-87(三重県、1955) ※災害・事故等の内容については、津地方気象台ホームページを参照。

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
24000 1-9	三重 県		<p>【災害名】伊勢湾台風 【発生日時】1959年9月26日 【被災地】県内全域 【災害の概要】非常に大きな暴風域を保ったまま潮岬付近に上陸した台風第15号は、台風経路の右側にあたる伊勢湾沿岸に26日夜に襲来し、高潮と烈風により壊滅的な被害となった。県内の人的被害は、死者1,233名、行方不明者48名、負傷者5,688名、建物被害は、全壊5,386棟、半壊17,786棟、流失1,399棟、家屋浸水62,655棟である。(災害・被害の詳細については、添付資料1-9を参照) 【教訓等】三重県全域が台風進路の東側に入り、台風通過直後が満潮時と重なったため、烈風・高波・満潮と二重三重の悪条件が重なり、臨海部、特に木曾三川の下流地帯は甚大な被害となった。なお、熊野灘、志摩半島及び伊勢湾沿岸では、10m前後の大波が打ち上げ、満潮位の平差は約2m余の高潮となった。(対応状況) 県では、26日に設置した災害対策本部を27日に「非常災害対策本部」に切り替えるとともに、桑名市に緊急救助のための前進基地を設置し、警察機動隊、陸海自衛隊その他各機関の協力を得て、応急対策活動を実施した。また、27日15:30までに県内全市町村に災害救助法が発動された。</p>	・文献資料	「伊勢湾台風による災害の概況と対策」P1-50（三重県、1959） ※災害・事故等の内容については、津地方気象台ホームページを参照。
24000 1-10	三重 県		<p>【災害名】1967年台風第34号 【発生日時】1967年10月27～28日 【被災地】熊野市飛鳥町等 【災害の概要】10月17日グアム等の東方海上で発生した台風第34号は志摩半島をかすめ、27日の夜半頃には、大王崎で瞬間最大風速42～43m、尾鷲で1時間雨量97mmを観測した。この短時間の集中的な豪雨によって、熊野市飛鳥町でがけ崩れのため、死者・行方不明者23人（その他県内で重軽傷者4名）を出した。(災害・被害の詳細については、添付資料1-10を参照) 【教訓等】10月末に三重県に影響する台風は珍しく、昭和24年以来18年ぶりであった。総雨量は三重県南部地方では400mm程度で、この地方としてはとびぬけた豪雨ではないが、短時間の集中豪雨によって多くの人的被害が生じた。</p>	・文献資料	「昭和42年災害の概況」P32-44（三重県総務部消防防災課、1968） ※災害・事故等の内容については、津地方気象台ホームページも参照。
24000 1-11	三重 県		<p>【災害名】1971年大雨（前線） 【発生日時】1971年9月9～10日 【被災地】尾鷲市、熊野市等 【災害の概要】南岸沿いの前線の北上や四国沖の低気圧の接近により、南部地方の海岸部で記録的な豪雨となった（9月11日3時頃までの尾鷲の積算雨量は1,095mm）。尾鷲市及び熊野市で、死者42名、重軽傷者39名、県内の建物被害は、全壊66棟、半壊33棟、床上浸水452棟、床下浸水1,310棟である。(災害・被害の詳細については、添付資料1-11を参照) 【教訓等】災害は南部地方の局地的な地域に集中し、被害が甚大であること、現地が遠隔地であり、通信連絡が途絶したため、被災地の的確な状況判断が困難であったことに加え、道路交通事情から救援活動にも支障があった。9月22日の応急対策活動完了までの12日間で、自衛隊をはじめとする防災関係機関の出動人員は延べ2万人に及んだ。 (対応状況) ○9/10 19:05 尾鷲市から自衛隊派遣要請 ○9/10 19:15 熊野市から自衛隊派遣要請 ○9/10 23:00 尾鷲市に災害救助法適用 ○9/11 02:00 熊野市に災害救助法適用</p>	・文献資料	「昭和46年災害の概況」P43-58（三重県総務部消防防災課、1972）
24000 1-12	三重 県		<p>【災害名】1982年梅雨前線、台風第10号及び低気圧による暴風雨と大雨 【発生日時】1982年7月11日～8月3日 【被災地】一志郡嬉野町小原地区等 【災害の概要】台風第10号が志摩半島をかすめ、渥美半島西部に上陸した。県内中部で大雨となり、名松線全線が土砂崩れのため不通となり、嬉野町内で民家4棟が土砂で押しつぶされた。その後南岸の前線と台風第9号から変わった大雨で、南勢地方で多くの浸水被害が生じた。県内の人的被害は、死者22名、行方不明者2名、負傷者31名、建物被害は、全壊69棟、半壊105棟、家屋浸水11,405棟である。(災害・被害の詳細については、添付資料1-12を参照) 【教訓等】各関係機関により行方不明者等の救助活動が行われる他、現地災害対策本部を設置し、給水・医療・防疫・物資援助等の対応が実施された。また、県災害対策本部は、9月6日まで設置したが、台風シーズンが本格化する中で、緊急に措置すべき避難対策等に関し、市町村長に対し、県知事より人命被害の再発防止を要請した。 (対応状況) ○8/2 04:00 松阪市、嬉野町、美杉村に災害救助法適用 ○8/2 06:20 県知事より自衛隊に派遣要請 ○8/3 04:30 南勢町に災害救助法適用 ○8/3 08:40 伊勢市に災害救助法適用 なお、この期間の一連の被害は、激甚災害として取り扱われた。</p>	・文献資料	「昭和57年災害の概況」P8-15、付録（三重県総務部消防防災課、1983） ※災害・事故等の内容については、津地方気象台ホームページを参照。

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
24203 9-1	三重県	伊勢市	<p>【災害名】安政東海地震                      【発生日時】安政元年（1854）11月4日（旧暦）                      【被災地】三重県伊勢市大湊町                      【災害の概要】天保8年（1837）に修復された波除堤（なみよけつつみ）が「去寅年十一月四日大地震後之大津波二面」破損。町家まで浪が入り、「流家損家等多分出来」流死の者もあった。堤の破損場所を示す絵図、修復の願書、復旧のための借用証文、「津波逃場」を作るため私有地を提供した等の古文書が残っている                      【教訓等】</p>	・文献資料	「大湊古文書」 「鳥羽八太郎氏所蔵文書」
24205 5-1	三重県	桑名市	<p>【災害名】伊勢湾台風                      【発生日時】昭和34年（1959年）9月26日                      【被災地】県内全域                      【災害の概要】死者582人、行方不明25人、負傷者1,553人、全壊499棟、流失381棟、半壊2,630棟、床上浸水5,009棟、床下浸水1,087棟、被害者数4,947人                      【教訓等】・住宅の基礎工事を強固にし、宅地高を伊勢湾海水面2m以上とすること。・宅地の土壌浸食防止、水屋跡などの高所の保存に留意し、避難用の高所を持つこと。・住宅は必ず二階建てとし雨戸をつけること。・海岸堤、河川堤は決壊しない強度なものであること。・輪中内部集落の道路は、宅地面までかさ上げすること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文（碑文の文面テキスト）</li> <li>・絵画</li> <li>・石碑全景を捉えた写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長島町 伊勢湾台風十周年 伊勢湾台風記念館前「伊勢湾台風高潮汐留記念碑」</li> <li>・絵画（佐藤昌胤 2点）</li> <li>・デジタルカメラによる写真画像</li> </ul>
24215 2-1	三重県	志摩市	<p>【災害名】安政東海地震・安政南海地震                      【発生日時】1854年12月23日～24日                      【被災地】志摩市志摩町越賀                      【災害の概要】浜辺の田地大荒23反8畝17歩、畑3反14歩、流出船41艇、溺死者3人                      【教訓等】物的被害は甚大であったが、沿岸住民が山へ避難したなど適切な行動をとったため、人的被害は少なかった。大地震が発生した場合、火の始末をし、食糧を持ち出して、高台へ避難するといった、津波防災の原則を後世に伝えるべく当石碑を築いたものと思われる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文（碑文の文面テキスト）</li> <li>・写真（石碑全景をとらえた写真）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・志摩町史編纂委員会：志摩町史（改訂版）H16.9.1</li> <li>・志摩市志摩町越賀大蔵寺「津波流倒記」</li> <li>・写真画像</li> </ul>
24215 2-2	三重県	志摩市	<p>【災害名】安政東海地震・安政南海地震                      【発生日時】1854年12月23日～24日                      【被災地】志摩市阿児町甲賀                      【災害の概要】流出戸数141戸、船舶51艇、溺死者11人                      【教訓等】物的被害は甚大であったが、沿岸住民が山へ避難したなど適切な行動をとったため、人的被害は少なかった。大地震が発生した場合、火の始末をし、高台へ避難するといった、津波防災の原則を後世に伝えるべく当石碑を築いたものと思われる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・碑文（写真）</li> <li>・写真（石碑全景をとらえた写真）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・志摩市阿児町甲賀「地震津浪遺戒」</li> <li>・写真画像 1点</li> </ul>
24303 5-1	三重県	木曾岬町	<p>【災害名】伊勢湾台風                      【発生日時】昭和34年9月26日                      【被災地】町内全域                      【災害の概要】堤防破堤による浸水（町内全域） 死者328人（人口の10%） 全壊、流失家屋266戸（半壊281戸）                      【教訓等】</p>	・文献資料	木曾岬町：町史（改訂版）
25202 6-1	滋賀県	彦根市	<p>【災害名】明治29年9月の豪雨                      【発生日時】明治29年9月3日から12日                      【被災地】滋賀県全域                      【災害の概要】停滞した前線が台風の影響で活発になり滋賀県を中心とする豪雨となった。この豪雨で琵琶湖の水位が通常より3m上昇し、琵琶湖沿岸の市町村は長期間にわたり浸水した。彦根市では、9月7日の日雨量が59.7mmに達し彦根市街の8割が浸水した。                      【教訓等】9月6日から降り始めた雨はやまず、7日は未明から雷鳴がとどろき雨降り続く。各町村は一斉に半鐘を乱打し学校やお寺に避難を呼掛けた。母なる琵琶湖は荒れ狂い、押し流された家屋・牛馬など死体が浮き沈みする不気味な状態であった。交通はズタズタ、何日も村がどっぷり水につかり、彦根市街の8割が浸水した。子どもたちは、たらいに乗って船のように漕いで遊んだ。田んぼは全滅（約9割が収穫皆無）。米が取れないので、ヒエやアワを食べてしのいだ。出稼ぎする者が多くなる。</p>	・文献資料	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 彦根市・彦根市史（下）昭和39年3月発刊</li> <li>2. 彦根市・彦根市史 第8巻平成15年3月発刊</li> <li>3. 滋賀県・滋賀県災害誌 昭和41年3月刊行</li> <li>4. 滋賀県・宇曾川沿革誌 昭和61年3月発行</li> <li>5. 彦根市内字誌（掲載各誌から抜粋）</li> </ol>
25206 9-1	滋賀県	草津市	<p>【災害名】室戸台風災害                      【発生日時】昭和9年9月21日                      【被災地】南山田町付近                      【災害の概要】室戸台風の影響で、旧山田小学校校舎が倒壊し、市内にあった老上小学校も一部倒壊するなどし、死者19名、重軽傷者139名という被害をもたらした。                      【教訓等】被災者慰霊石碑が建立され、現在も語り継がれている。</p>	・文献資料	「草津市史」

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
25482 7-1	滋賀県	虎姫町	<p>【災害名】 姉川地震</p> <p>【発生日時】 明治42年(1909)8月14日</p> <p>【被災地】 東浅井郡一帯(特に虎姫町の被害大)</p> <p>【災害の概要】 8月14日午後3時31分、マグニチュード6.8の激震。姉川流域を震源とする「江濃姉川大地震」。東浅井郡内では、死者34名(県内35名中)、重軽傷者602名(県内643名中)、全壊家屋892棟(県内972棟中)という甚大な被害が報告されている。この地震は、震源地よりも、地盤が低く軟弱な地域の被害が大きく、特に虎姫町(当時は虎姫村)一帯に極めて大きな被害をもたらしたことから、「虎姫地震」とも呼ばれている。</p> <p>【教訓等】 虎姫町内のある民家に、当時の記録『姉川震災記』が残されている。地震直後、神社の境内での炊き出し、陸軍省からのテント貸し出し、天皇皇后両陛下からの救援金、各地から写真師や活動写真家らが集まり、さながら首都東京にも似た賑わいを見せた様子など、震災直後の出来事が克明に記されている。地震の被害を被った地域では、「地震は100年周期でやってくる」との言い伝えがあり、それぞれの家庭において、何らかの防災対策を備えておられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・地震により全壊した民家等の写真(東浅井郡消防署所蔵)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『三十年後の虎姫』(田中豊文著 大正12年8月)</li> <li>・『近江国姉川地震報告』(滋賀県彦根測候所 明治44年)</li> <li>・『姉川震災記』(虎姫町大字大寺N氏所蔵)</li> </ul>
25482 7-2	滋賀県	虎姫町	<p>【災害名】 田川逆水による水害</p> <p>【発生日時】 江戸時代末期～昭和初期</p> <p>【被災地】 虎姫町大字唐国、月ヶ瀬、田、酢、大寺など</p> <p>【災害の概要】 かつて田川は姉川、高時川とともに合流していた。他の二川に比べ川床の低かった田川の河口はいつも水が停滞しており、ひとたび大雨に見舞われると二川の水が逆流、虎姫四か村(唐国・月ヶ瀬・田・酢)周辺は浸水や水没など大きな被害を受けた。田川治水の歴史は江戸時代後期より始まり、川の合流点を下げたり、逆水門を設けたり、あるいは田川を高時川の下へくぐらせ直接琵琶湖に流すなどの難工事が繰り返された。明治18年(1885)、人びとの努力によりレンガ・石積み造りの洋風カルバートが完成。その後幾度かの改修を経て、昭和41年(1966)に現在のカルバートが完成した。</p> <p>【教訓等】 田川治水の歴史は虎姫町にとって欠かすことのできない重大な出来事である。特に虎姫四か村(現在は四か字)の人びとは折に触れ、水害の恐ろしさを聞かされてきたという。各家庭では、水害に備えて避難用の木舟を常備したり(現存する家庭あり)、住居を建設する際、石垣を組んで地面より高くしたり、様々な工夫が重ねられてきた。現在は、田川カルバートによって人びとの生活は守られている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> <li>・写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『三十年後の虎姫』(田中豊文著 大正12年8月)</li> <li>・『田川沿革誌』(滋賀県長浜土木事務所 平成7年)</li> <li>・『東浅井郡志』(黒田惟信 昭和2年)</li> <li>・『四か字共有文書』(田川治水、田川カルバートに関する古文書類)</li> <li>・「田川治水功労者の碑」(明治時代、田川治水に尽力した四名の功労碑)</li> <li>・旧田川カルバートの写真など(虎姫町教育委員会所蔵)</li> </ul>
25483 5-1	滋賀県	湖北町	<p>【災害名】 姉川地震</p> <p>【発生日時】 明治42年(1909年)8月14日</p> <p>【被災地】 東浅井郡一帯</p> <p>【災害の概要】 明治42年(1909年)8月14日午後3時31分、マグニチュード6.8の激震。姉川流域を震源とする「江濃姉川大地震」。東浅井郡内では、死者34名(県内35名中)、重軽傷者602名(県内643名中)、全壊家屋892棟(県内972棟中)という甚大な被害が報告されている。この地震は、震源地よりも地盤が低く軟弱な地域の被害が大きく、特に隣接する虎姫町(当時は虎姫村)一帯に極めて大きな被害をもたらしたことから、「虎姫地震」とも呼ばれている。</p> <p>【教訓等】 湖北町内には、当時の様子を書き記し残されているものはないが、隣接する虎姫町の民家に、当時の記録『姉川震災記』が残されている。地震直後、神社の境内での炊き出し、陸軍省からのテント貸し出し、天皇皇后両陛下からの救援金、各地から写真師や活動写真家らが集まり、さながら首都東京にも似た賑わいを見せた様子など、震災直後の出来事が克明に記されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『東浅井郡史』(湖北町図書館で閲覧可)</li> <li>・『姉川震災記』(虎姫町大字大寺N氏所蔵)</li> <li>・『近江国姉川地震報告』(滋賀県彦根測候所発行)</li> <li>・地震により全壊した民家等の写真(東浅井郡消防署所蔵)</li> </ul>
26000 2-1	京都府		<p>【災害名】 丹後大震災</p> <p>【発生日時】 昭和2年(1927)年3月7日</p> <p>【被災地】 京丹後市、与謝郡加悦町、岩滝町、伊根町、野田川町、宮津市</p> <p>【災害の概要】 震源地は、当時竹野郡郷村小字樋口(現京丹後市)に当たり、マグニチュード7.4。宮津町、網野町に火災が発生、トンネル破壊、列車不通、宮津湾3箇所洪水、死者京府内で、約3000人。</p> <p>【教訓等】 奥丹後地震、北丹後地震ともいわれる、この丹後一帯を襲った大地震の教訓を伝えるため、当時の峰山町に丹後震災記念館が建設された。震災記念館の南側広場には震災記念塔があり、碑文が刻まれている。また、被災家庭では、住宅復旧のため低利資金の融資を受け、網野区だけでも約5万坪にのぼる宅地管理がおこなわれた。昭和5年に完了したこのような災害復旧による市街地区画整理は、全国でも初めてだといわれている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『昭和2年丹後大震災あれから50年』京都府消防防災課編(1977年) p. 1~2</li> <li>・『京都府統計史料集一百年の統計-1』京都府編(1969年) p. 42</li> <li>・『峰山郷土史 上』峰山町編(1963年) p. 606~620 震災記念塔及び震災記念館についての記述、写真(添付資料1-1-2)あり</li> <li>・『網野町誌 上巻』網野町誌編さん委員会編網野町役場発行(1992年) p. 712~714 網野小学校復興誌本についての記述、写真(添付資料1-1-1)</li> </ul>



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
26000 2-2	京都府		<p>【災害名】 南山城水害</p> <p>【発生日時】 昭和28年(1953年)8月14～15日</p> <p>【被災地】 京都府相楽郡綴喜郡(宇治田原町、井手町、和東町)等(事例1-2と同じ)</p> <p>【災害の概要】 8月14日から15日にかけての寒冷前線停滞に伴う集中豪雨と9月25日の台風13号の影響による二度の水害。8月の水害では山崩れにより支流や溜池が各所で氾濫した。9月の台風では宇治川の各所で堤防が決壊した。(災害・被害の詳細については、添付資料1-2-1参照)</p> <p>【教訓等】 二度の水害が重なったことによる、かつてない大水害であったため人々の記憶に深く残ることとなった。その後大きな水害には見舞われていないが、各自治体では節目ごとに水害記念誌を発行し、防災への思いを新たにしている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『〔南山城災害の概要〕』京都府編(14冊合綴)1953</li> <li>・『南山城災害・台風13号関係新聞記事』京都府編1953</li> <li>・『水とのたたかい』京都府立山城郷土資料館2003p7-8、p33-52 JR玉水駅構内「水難記念」碑文についての記述、写真(添付資料1-2-2)</li> <li>・『山城町史』本文編山城町役場1987p.965-966 元綱原神社遺跡「復興災害記念塔」碑文についての記述、写真(添付資料1-2-3)</li> <li>・『南山城災害写真帳』京都府1953など多数あり</li> </ul>
26000 2-3	京都府		<p>【災害名】 どんどん焼け</p> <p>【発生日時】 元治元年(1864年)7月19日</p> <p>【被災地】 京都市(現在の中区・下京区)</p> <p>【災害の概要】 蛤御門の変(禁門の変、元治甲子の変)による火災。長州藩邸等から出火し、多くの民家や社寺を焼き尽くす大災害となった。「どんどん焼け」のほか「鉄砲焼け」とも言われた。(災害・被害の詳細については、添付資料1-3-1参照)</p> <p>【教訓等】 どんどん焼けは他の火災とは異なり、戦いに伴う大規模な火災であった。また幕末の動乱期に起こったため、京都は被害から容易には復興できず、5年後の東京遷都により、いっそう衰退に拍車がかかる結果となった。かわら版には、出火原因を戦争によるものとは書かれておらず、あくまで通常の火災として書かれている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵画(かわら版)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「京都市大火の凶」元治元年7月19日(添付資料1-3-2)</li> </ul>
26000 2-4	京都府		<p>【災害名】 天明の大火</p> <p>【発生日時】 天明8年(1788年)1月30日</p> <p>【被災地】 京都(洛中洛外町統)</p> <p>【災害の概要】 江戸期京都最大の火災。類焼した町数は約1400町、家数3万7000軒、罹災世帯6万5000戸、市街地人口の五分の四が被災し、京都の経済や都市構造にも打撃をあたえた。</p> <p>【教訓等】 京都は江戸時代数度の大火災が発生しているが、その代表で最大の火災として伝えられる。当時の人々はこれを記録し、記憶に留め、日常生活で火の用心を心掛け、また近隣大名による消防体制を整備していった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「洛中堅横町名録并禁裏御所火災一件」</li> <li>・「京都と火災」(京都市『京都の歴史6 伝統の定着』京都市史編さん所、昭和48年)</li> </ul>
26201 3-1	京都府	福知山市	<p>【災害名】 1953年台風第13号</p> <p>【発生日時】 昭和28年9月25日</p> <p>【被災地】 福知山市</p> <p>【災害の概要】 総降雨量250mm以上、由良川最高水位(25日23時)8m1cm、由良川堤防決壊(25日21時)、死者4名、重傷者27人、軽傷者761名、流失家屋55棟、全壊家屋428棟、半壊家屋1,181棟、床上浸水3,641棟、床下浸水195棟、被害総額66億4,942万4千円、災害救助法適用。(添付資料1-1を参照)</p> <p>【教訓等】 昭和28年災害は、これまでの水害の規模を超えるもので、これ以後、改修計画も全面的に見直しが必要となった。現在でも、昭和28年災害が基準となって堤防建設など治水事業が行われている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・福知山市：洪水ハザードマップ(昭和28年水害をもとにした現在の氾濫予想図)</li> <li>・福知山市治水記念館にて当時の水害被害状況写真あり</li> </ul>
26366 4-1	京都府	精華町	<p>【災害名】 正徳2年木津川大洪水</p> <p>【発生日時】 正徳2(1712)年8月19日</p> <p>【被災地】 相楽郡祝園村ほか</p> <p>【災害の概要】 祝園村で8尺の浸水。村内300軒の内220軒が流失、倒壊し、53人が溺死した。</p> <p>【教訓等】 祝園村の内、特に低地で被害の大きかった南地区は、その後も享保元(1716)年・同13(1728)年と洪水が連続したため、宇古屋敷から字榎ヶ坪・字樋尻に集落を移転した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精華町史編纂委員会『精華町史本文篇』1996年、p.550-551</li> </ul>
26366 4-3	京都府	精華町	<p>【災害名】 享和2年木津川大洪水</p> <p>【発生日時】 享和2(1802)年6月29日</p> <p>【被災地】 相楽郡祝園村・菱田村・下粕村ほか</p> <p>【災害の概要】 大風雨のため、木津川が満水となり、山津波も発生した。木津川堤は、祝園村で5ヶ所340間、菱田村で4ヶ所250間決壊し、祝園村では60軒程流失、倒壊した。</p> <p>【教訓等】 祝園村居住の旗本領代官が、江戸の領主へ被害の詳細を報告した記録が今に伝わる。現地での代官や京都町奉行所等による水害救援活動の実態がよく分かる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精華町史編纂委員会『精華町史本文篇』1996年、p.551-553</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
26366 4-7	京都府	精華町	<p>【災害名】大正6年木津川洪水</p> <p>【発生日時】大正6(1917)年9月30日～10月1日</p> <p>【被災地】相楽郡狛田村・山田荘村</p> <p>【災害の概要】暴風雨のため、狛田村百久保堤防が決壊し、床上浸水の家屋が多数あった。</p> <p>【教訓等】百久保堤防は、翌大正7(1918)年9月24日にも決壊。このため狛田村では、隣接する三山木村・祝園村との水害防禦組合を結成した。</p>	・文献資料	精華町史編纂委員会『精華町史本文篇』1996年、p.694-695
26464 4-1	京都府	野田川町	<p>【災害名】三河内村奥山(茶臼谷)の山津波</p> <p>【発生日時】明治5年(旧八月)</p> <p>【被災地】京都府与謝郡野田川町字三河内小字下地・板橋・35地区(旧三河内村)</p> <p>【災害の概要】壬申の大洪水 明治5年旧八月に加悦谷一帯に降り続いた大雨(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)</p> <p>【教訓等】山奥で土石流が奥山川の村入口を塞ぎ一時人造湖ができ、村への奥山川の出水が少なく一時その流れが止まった。その後、流木・岩石等含む濁流が一気に流れ出して、村の一部を埋め尽くした。</p>	・文献資料	野田川町『野田川町誌』S44
26464 4-2	京都府	野田川町	<p>【災害名】幾地村の水害</p> <p>【発生日時】明治5年7月8日</p> <p>【被災地】京都府与謝郡野田川町字幾地小字東蔵(旧幾地村)</p> <p>【災害の概要】壬申の大洪水 明治5年旧八月に加悦谷一帯に降り続いた大雨(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)</p> <p>【教訓等】大雨の中、山で「ドンドン」と音がなり出したので、山裾付近の住民は丘の上へ逃げた。80ヶ所で山崩れが起り、川は土砂で埋まっていた。</p>	・文献資料	野田川町『野田川町誌』S44
26464 4-3	京都府	野田川町	<p>【災害名】下山田村の山津波</p> <p>【発生日時】明治5年(旧八月)</p> <p>【被災地】京都府与謝郡野田川町字下山田小字サコ谷(旧下山田村)</p> <p>【災害の概要】壬申の大洪水 明治5年旧八月に加悦谷一帯に降り続いた大雨(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)</p> <p>【教訓等】サコ谷で土石流があり、村の一部を押し流し、野田川の本流まで達して、一面荒廃地ができた。過去に同じ場所で山崩れがあったという伝承が村に残っており、その際愛染堂が押し流され、大願寺が跡形もなくなったという。近世に掘り出された石段、仏像などから過去の災害の証しとなっている。記録は残っていない。</p>	・文献資料	野田川町『野田川町誌』S44
26464 4-4	京都府	野田川町	<p>【災害名】石川村の山崩れ</p> <p>【発生日時】明治40年8月26日</p> <p>【被災地】京都府与謝郡野田川町字石川小字堂谷・下地(旧石川村)</p> <p>【災害の概要】大洪水 明治40年8月に降り続いた大雨で加悦谷一円が大湖水と化した。(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)</p> <p>【教訓等】野田川の氾濫。堂谷・下地で大山崩れが起り、特に下地の西禅寺下では家屋の倒壊で6名の死者・3名の重傷者がでた。</p>	・文献資料	野田川町『野田川町誌』S44
26464 4-5	京都府	野田川町	<p>【災害名】山田村の山崩れ</p> <p>【発生日時】明治40年8月26日</p> <p>【被災地】京都府与謝郡野田川町字下山田小字聖谷・谷川(旧山田村)</p> <p>【災害の概要】大洪水 明治40年8月に降り続いた大雨で加悦谷一円が大湖水と化した。(災害・被害の詳細については、添付資料1を参照)</p> <p>【教訓等】野田川の氾濫。聖谷で山崩れが起り、その下方の谷川では砂礫が飛ぶように流れ出し、15・6軒の家屋が土砂に埋まり、大木・大石が流れた。</p>	・文献資料	野田川町『野田川町誌』S44
26464 4-6	京都府	野田川町	<p>【災害名】三河内村の大火災</p> <p>【発生日時】大正6年5月19日</p> <p>【被災地】京都府与謝郡野田川町字三河内小字中坪・大道(旧三河内村)</p> <p>【災害の概要】大火災 大正6年5月19日午後3時頃に発生し、60戸余りが延焼した。(災害・被害の詳細については、添付資料1を参照)</p> <p>【教訓等】中坪から発生した火災は、強い北風にあおられて瞬時に60戸余りを焼き尽くした。峠を越えた場所の人達が、話を聞いてから見に行ってもまだ盛んに燃えていたというぐらい、長時間燃え続けた。</p>	・文献資料	野田川町『野田川町誌』S44

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
27000 8-1	大阪府		<p>【災害名】安政南海地震                      【発生日時】1854年12月24日                      【被災地】大阪                      【災害の概要】マグニチュード8.4、震度5～6 津波による死者多数、船舶被害1,800、落橋10（前日の安政東海地震に続いて発生）                      【教訓等】〈大阪市大正橋の石碑文（大地震両川口津波記）〉・人々は家の下敷きになるのを恐れて、船に乗って難を逃れようとした。数時間後、津波が襲ってきて、人が乗った船が流され橋は落ち、約350人が死んだ。今から148年前の宝永年間にも同じような地震があり、やはり船に避難して大勢の人が死んだことがあった。我々はこの先祖の言い伝えを生かせなかった。我らの子孫に申し伝える。将来も同じように大きな地震が来るであろうが、決して船で逃げようとするな。この石碑の文字がいつも読めるように毎年この石碑の文字に墨を入れ、伝えていってほしい。                      〈堺市大浜公園の石碑文（擁護壘）〉・地震の後に大きな津波が来た。橋が落ち、船も破損し、壊れた家もあったが、堺の住民は宝永地震の時に、船で避難しようとして、多くの人が死んだという言い伝えを知っていたので、みな神社の庭に集まって避難し、けがが一人出ることがなかった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・碑文</li> <li>・その他（電子データファイル）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・石碑の画像</li> </ul>
27000 8-2	大阪府		<p>【災害名】昭和27年7月水害（鳥取池決潰）                      【発生日時】昭和27年7月11日                      【被災地】東鳥取村、尾崎町                      【災害の概要】昭和27年7月1日から3日間降り続いた大雨と10日朝からの局地的豪雨（日降雨量402ミリ）で弱い土堰堤の鳥取池が決潰し、下流の大字桑畑、自然田、鳥取中を浸水させ、菟砥川の堤防が決壊するなど河口の尾崎町にも大きな被害を与えた。（死者及び行方不明者51名等）（災害・被害の詳細については、添付資料1を参照）                      【教訓等】今回の災害の教訓として、主に                      ・公共機関や地元民が献身的に活動することによって、救援と復旧において直に罹災者に適切な救援体制がとられること。                      ・充分なあらかじめの用意と無駄と思っても安全な場所に避難することや部落の主な人々への指導が必要である。                      ・罹災地の住民の心はいちじりしくすさむため一刻も早く適切な方法で先ず衣食住を安んじるべきである。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	大阪府阪南市：阪南町史 P863～868
27100 4-1	大阪府	大阪市	<p>【災害名】安政南海地震                      【発生日時】安政1年11月5日                      【被災地】畿内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道                      【災害の概要】マグニチュード8.4 大阪湾北部で推定波高約2.5m、大阪で津波が木津川・安治川を逆流し、停泊中の船多数（8千とも）破損し、橋々を壊し、死者700余（約400、2千、3千、7千などの説もあり）。                      【教訓等】</p>		
27100 4-2	大阪府	大阪市	<p>【災害名】阪神・淡路大震災                      【発生日時】1995年1月17日                      【被災地】兵庫県南部                      【災害の概要】マグニチュード7.2【大阪市の被害】死者18名、重傷4名、軽傷353名、全壊194棟（248世帯）、半壊2,148棟（3,120世帯）、一部破損17,089棟（21,654世帯）、火災16件（20棟、51世帯、負傷8名）                      【教訓等】当該地震の甚大な被害にかんがみ、地域防災計画の抜本的な修正等の災害に強いまちづくりを推進している。（主な取り組み）・本市の災害想定を震度7クラスの地震に見直した。・当該地震がこれまでの耐震設計では考慮していないような規模であったことに鑑み、都市の耐震化をはかるため、上町断層系地震を想定した「土木・建築物の耐震性向上指針」を策定し、既存の施設の補強を進めている。・密集市街地において、防災性向上を図るため、耐震改修支援制度を整えた。・地域防災活動の中核となる地域防災リーダーの組織・育成し、その活動をサポートする体制を整えた。・当該地震の被害状況を教訓に、避難収容人口を30万人と想定し、備蓄体制等を整備した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その他（刊行物）</li> </ul>	大阪府地域防災計画（震災対策編）

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
27100 4-3	大阪府	大阪市	<p>【災害名】 昭和南海地震                      【発生日時】 1946年12月21日                      【被災地】 中部以西西日本                      【災害の概要】 マグニチュード8.0死者1,330。全壊23,487。被害は中部以西の日本各地にわたる。津波が静岡県より九州に至る海岸に襲来し、高知・三重・徳島沿岸で4～6mに達した。室戸・紀伊半島では南上がりの傾動を示し、室戸で1.27m、潮岬0.7m上昇、須崎・甲浦で約1m沈下。高知付近で田園15km<sup>2</sup>が海面に没した。                      【教訓等】 海溝型地震による大津波により大きな被害をもたらしたことに鑑み、本市の津波による浸水被害や想定津波高さは、昭和南海地震を地震の相似則により、安政南海地震規模のマグニチュード8.4に拡大したモデルを用いて実施しており、当該結果を東南海・南海地震防災対策推進計画や地域防災計画の災害想定としている。</p>	・その他（刊行物）	・大阪市地域防災計画(震災対策編) ・東南海・南海地震防災対策推進計画
27100 4-4	大阪府	大阪市	<p>【災害名】 室戸台風                      【発生日時】 昭和9年9月21日                      【被災地】 大阪                      【災害の概要】 室戸台風は、最低気圧954.3hpa、平均最大風速S.40m/s瞬間最大風速S.60m/s、最高潮位（推定）O.P.+4.50m、最大偏差（推定）2.92m、降水量22.3mmの超大型のもので、人的被害17,898人、建物被害196,762戸、船舶被害2,739隻を数える大災害となった。                      【教訓等】 室戸台風は、風速、高潮位ともに超大型のもので、西大阪一帯は浸水し、死者、行方不明者1,888人を数える悲惨な災害となった。その高潮被害を教訓に地域の防災意識は一段と高まり、防災体制の組織作りが成された。また、この災害を契機に問題となってきた地盤沈下防止についても検討されてきた。</p>	・その他（パンフレット）	・高潮とのたたかい（大阪市港湾局）1988（p.11-15）
27100 4-5	大阪府	大阪市	<p>【災害名】 ジェーン台風                      【発生日時】 昭和25年9月3日                      【被災地】 大阪                      【災害の概要】 ジェーン台風は、最低気圧970.3hpa、平均最大風速S.28.1m/s、瞬間最大風速S.44.7m/s、最高潮位O.P.+3.85m、最大偏差2.37m、降水量62.2mmの超大型のもので、人的被害18,794人、建物被害123,209戸、船舶被害899隻を数える大災害となった。                      【教訓等】 ジェーン台風は吹風時間も長く、家屋の倒壊や港内船舶の被害も大きかった。更に、高潮及び越波によって大阪市の30%に相当する56km<sup>2</sup>に及ぶ地域が浸水した。その高潮被害を教訓に地盤かさ上げ高、及び防潮堤高、防御方式などの一部修正、台風時に大型船を港外に退避させる方針などを定め、高潮対策事業の推進に努めてきた。</p>	・その他（パンフレット）	・高潮とのたたかい（大阪市港湾局）1988（p.11-15）
27100 4-6	大阪府	大阪市	<p>【災害名】 第2室戸台風                      【発生日時】 昭和36年9月16日                      【被災地】 大阪                      【災害の概要】 第2室戸台風は、最低気圧937.3hpa、平均最大風速SSE.33.3m/s瞬間最大風速SSE.50.6m/s、最高潮位O.P.+4.12m、最大偏差2.45m、降水量44.2mmの超大型のもので、人的被害1,518人、建物被害136,504戸、船舶被害464隻を数える大災害となった。                      【教訓等】 第2室戸台風による高潮は、地盤沈下により機能低下した防潮堤を越波しあるいは溢流し背後市外を浸水させ、大阪市の浸水域は、31km<sup>2</sup>に達し、人、家屋、港湾施設に大被害をもたらした。三大台風（室戸台風、ジェーン台風、第2室戸台風）の教訓を基に、防潮堤の嵩上げ補強及び水門設置などの高潮恒久計画を立案し、高潮対策事業を進めてきた。</p>	・その他（パンフレット）	・高潮とのたたかい（大阪市港湾局）1988（p.11-15）
27100 4-7	大阪府	大阪市	<p>【災害名】 天六ガス爆発                      【発生日時】 1970年4月8日                      【被災地】 大阪市淀川区国分寺町5番                      【災害の概要】 焼損面積31棟1707m<sup>2</sup>、損害額1億1747万円、死者79人、負傷者406人                      【教訓等】 地下鉄工事現場の坑道内で都市ガス中圧配管から大量のガスが噴出し、ガス漏れで出場してきたガス会社のパトロールカーの下部付近で着火炎上した。初期消火の失敗により、次第に大火炎を上げて燃焼するようになり、周囲の建物に延焼するようになった。大火炎による上昇気流の吸い出し作用により、坑道内のガス濃度が、爆発範囲内になって大爆発を起こした。この大爆発で、覆工板（380kg）約1500枚が空中に吹き飛ばされ、現場に集結していた群集に直撃し、多数の死傷者を発生させた。この事故を教訓として、危険区域に関係者以外の一般人が集結するのは、何としても防ぐべきで、強固な警戒区域を設定維持することが必要である。</p>	・文献資料	大阪市特異火災事例集 p.129～133 昭和63年3月発行

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
27100 4-8	大阪府	大阪市	<p>【災害名】千日デパート火災</p> <p>【発生日時】1972年5月13日</p> <p>【被災地】大阪市南区難波新地5番丁59番地</p> <p>【災害の概要】焼損面積1棟8763㎡、損害額16億4969万円、死者118人、負傷者81人</p> <p>【教訓等】千日デパート3階から出火する。大量の易燃性物品に延焼し、急激に火力を強めた。拡大した濃煙が、エレベーターシャフト、階段、空調ダクト等を煙道とし7階で営業中であったプレイトウンに噴出した。防火管理の不備、不適切な避難誘導、7階の非常階段の扉の施錠、屋上への階段扉の閉鎖、消防への通報の遅延などが重なり、被害拡大の大きな要因となる。消防用設備等の適及適用以前の火災とはいえ、あまりに貧弱な設備、防火管理体制は、消防、防災関係者に重大なショックを与え、法体系の整備が急がれた。</p>	・文献資料	大阪消防誌に見る災害史 p.89～101 平成12年3月発行
27201 9-1	大阪府	堺市	<p>【災害名】安政大地震と津波</p> <p>【発生日時】安政元年(1854)6月13・14・15日・11月4・5日</p> <p>【被災地】堺市海岸部</p> <p>【災害の概要】6月13日に昼夜2回の小震があり、14日昼に地震10回、深夜2時頃大震、15日朝8時頃大震、同日は地震14回あり、堺の市街地は大混乱し、住民はいずれも小屋掛をつくって屋外に住み、18日頃になり、ようやく家に帰った。11月4日には午前11時に大震、5日朝8時に大震があり、市民はこの時に小屋掛して昼夜を過ごした。5日午後6時頃には津波が来襲し、急に川筋に入ってきたかと思うと、急に引き去り、橋梁8つを破壊したが人的な被害は少なかった。</p> <p>【教訓等】地震が強ければ、必ず津波が来るので、川筋に船に乗って逃げてはいけない。他所でそのようにして逃げて命を落とした人がたくさんいる。</p>	・文献資料 ・碑文	『堺市史』第三巻本編第三(昭和5年・堺市役所) 『堺市風水害誌』(昭和11年・堺市役所) ※この文献に安政大地震以外の江戸時代の災害が列記されています 「擁護霊」(大浜公園内)
27201 9-1	大阪府	堺市	<p>【災害名】嘉永7年の地震</p> <p>【発生日時】嘉永7年11月4、5日</p> <p>【被災地】紀伊半島～四国にかけての太平洋沿岸部</p> <p>【災害の概要】伊勢より九州までを襲った大地震、とりわけ大津波は、大きな被害をもたらした(いわゆる南海道大地震)。大阪では、この津波で破損した廻船1121艘、川舟727艘、溺死者273人、橋の落下10ヶ所、家の倒壊3軒、大破損家76軒などの当時の記録があるが、実際には被害はもっと大きく、死者は1万人近かった。</p> <p>【教訓等】地震や津波で家はつぶれ、大阪では津波により甚大な被害が出たが、堺の住民は神社の境内に集まって避難した為、けが人も出なかったという。他所の海岸や川筋では、地震をさけるために小船に乗り、安心していたところ、津波が襲ってきたために、大きな被害が出た。</p> <p>強い地震のときは、決して川船に避難してはいけない。地震が強いときは津波があると知っておく必要がある。</p>	碑文	擁護霊(添付資料1-1、1-2、1-3)
27201 9-2	大阪府	堺市	<p>【災害名】室戸台風と高潮</p> <p>【発生日時】昭和9年(1934)9月21日午前8時頃</p> <p>【被災地】堺市旧市内海岸部(三宝・湊地域)</p> <p>【災害の概要】超大型の台風が午前8時大阪に上陸、瞬間最大風速60メートルの烈風で建物が倒壊、続いて高潮が発生した。浸水開始から浸水最高時(三宝地区で3～3.6メートル)までの時間はわずか10～20分で、ほとんど逃げる間もなく多くの人々が水にのまれた。特に台風の上陸が登校時間と重なったため、小学校児童に犠牲者が多かった。堺市の被害は死者424名、行方不明者13名、重傷者503名、軽傷者165名の計1105名、罹災者は全体で45800名、浸水面積は158万坪、被害家屋は72677世帯にのぼった。</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料 ・碑文 ・写真	『堺市史続編』第二巻(昭和46年・堺市役所) 『堺市風水害誌』(昭和11年・堺市役所) ・室戸台風遭難教員・児童慰霊碑(九間町・十輪院) ・関西大風水害殉難者慰霊碑(三宝町) ・室戸台風慰霊碑(宿屋町・宝珠院) ・堺市行政課所蔵写真資料(被害地域のようす)
27214 1-1	大阪府	富田林市	<p>【災害名】第二室戸台風</p> <p>【発生日時】昭和36年9月16日</p> <p>【被災地】富田林市大伴地区、川西地区、東条地区など</p> <p>【災害の概要】罹災者総数3961人、負傷者8人、家屋全壊107戸、家屋半壊327戸、家屋床下浸水200戸、非住家被害120戸、田流没埋没1ha、田冠水705ha、畑流出埋没130ha、農作物被害150,000千円、林産物被害20,000千円、その他の被害50,000千円、道路破損1ヶ所、橋破損1ヶ所</p> <p>【教訓等】【広報紙掲載の記録があり】本市において、初めて災害救助法が発令されたため、大規模な災害として、記録されている。金剛団地地域の大規模開発が完了する前の災害であり、山間部や古くからの集落に被害が集中している。また、農業被害の金額が特に大きくなっている。また、この被害により、仮設住宅が準備されたことから、被害が大きかったことが伺われる。</p>	・その他(広報紙縮刷版)	広報総集版第1巻 昭和50年12月発行 編集:広報公聴課 発行:富田林市

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
27218 3-1	大阪府	大東市	<p>【災害名】昭和47年7月豪雨（大東水害）</p> <p>【発生日時】昭和47年7月12日</p> <p>【被災地】大東市（住道、谷川、深野等）</p> <p>【災害の概要】総雨量（7月9日～13日）328.5mm 24時間最大雨量（7月12日～13日）145.5mm 1時間最大雨量（7月11日午前6～7時）25.5mm 7,194戸（床上2,194戸、床下5,000戸） 避難者 延べ6,217人</p> <p>【教訓等】原因）寝屋川・恩智川が合流する低湿地帯で、急激な都市化による田畑の減少により保水能力の不足 河川改修途中による堤防の崩壊（鍋田川左岸 市役所北側） 井戸による地下水の汲み上げによる地盤沈下対策） ①寝屋川流域協議会の設立による防災対策の推進 ②井戸の使用禁止（大東市環境保全条例第44条～第53条）③公共下水道事業の推進（H18.4.1 現在 88.8%） ④水防体制の強化などの対策を実施した。</p>	写真	大東水害訴訟～18年の記録～ 発行日：平成4年3月発行 発行元：大東市
27321 0-1	大阪府	豊能町	<p>【災害名】猪名川洪水</p> <p>【発生日時】明治29年8月30日</p> <p>【被災地】東能勢村</p> <p>【災害の概要】山崩れ、建物流出、崩潰、26棟、同破損・浸水40棟、耕地流亡約320ヶ所、崩れヶ所田畑宅地約1500ヶ所・山林22ヶ所・道路毀損約570間、橋梁流出・毀損38ヶ所、堰流失50ヶ所。</p> <p>【教訓等】1898年（明治31）9月、旧能勢郡7か村長及び細河・止々呂美村長は、水害の惨禍を思い、復興を記念して、細川村の兵庫県境に近い猪名川辺りに「水害記念碑」を建設。同碑文は、この水害の経過にふれ、「近年、諸山の濫伐大に行い、人其の禍を蒙るを恐れ」ていたことを述べている。</p>	その他 豊能町史 本文編	著者：豊能町 タイトル：豊能町史 本文編 発行年：昭和62年11月30日
27321 0-2	大阪府	豊能町	<p>【災害名】阪神大水害</p> <p>【発生日時】昭和13年7月3日</p> <p>【被災地】東能勢村</p> <p>【災害の概要】死者9人、家屋の流出・倒壊46ヶ所、家屋浸水67ヶ所、山崩れ300ヶ所、町村道崩壊39ヶ所、河川等崩壊487ヶ所。</p> <p>【教訓等】東能勢村では、午前7時から11時にかけて豪雨もともと激しく、村内の各河川は氾濫し、道路の崩壊、堤防・溜池の決壊が相次ぐ。野間口地域では、山地が崩壊して、山津波が押し寄せ、岩石・土砂・立木が流出し、道路・家屋を押し流した。「高さ五六米、幅三百米あろう。泥流が山の山から真黒になって逆巻ながら落下してくる」様子は「泥流などという生優しいものではなく、真黒な山がいくつもいくつも重なり合って転がり落ちてくるやうだ」といわれた。</p>	その他 豊能町史 本文編	著者：豊能町 タイトル：豊能町史 本文編 発行年：昭和62年11月30日
27382 1-1	大阪府	河南町	<p>【災害名】昭和57年災害</p> <p>【発生日時】昭和57年8月1日</p> <p>【被災地】河南町大字平石他</p> <p>【災害の概要】人的被害 死者4人、負傷者1人 住家被害 全壊3棟・3世帯・5人 半壊6棟・6世帯・30人 他</p> <p>【教訓等】町では大型台風10号の前後にわたる連日の大雨で大被害を受けることとなった。役場の雨量計によると、7月31日16時から8月3日15時までの3日間の降雨量は実に431mmを示す豪雨であった。山地の崩壊、道路の決壊、河川水路の溢水・氾濫などで各地に被害が続出、殊に東部山間地の被害は甚大であった。町の被害総額は、公共土木施設、農林業施設等を中心に20億円近くに及んだ。</p>	文献 続 河南町誌	河南町誌 平成16年9月30日発行
28000 3-1	兵庫県		<p>【災害名】阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）</p> <p>【発生日時】平成7年（1995年）1月17日</p> <p>【被災地】神戸市、尼崎市、明石市、西宮市、洲本市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、三木市、川西市、津名町、淡路町、北淡町、津名郡一宮町、五色町、東浦町、緑町、西淡町、三原町、南淡町</p> <p>【災害の概要】大都市直下型地震 震源地 淡路島北部 マグニチュード 7.3 （災害・被害の詳細については、「阪神淡路大震災～兵庫県の1ヶ月の記録」「阪神淡路大震災～兵庫県の1年の記録」を参照）</p> <p>【教訓等】人口350万人余が密集し、わが国の経済活動の中核を担う淡路北部から神戸市及び阪神間の直下で発生した内陸・都市直下型地震であった。また、ボランティア活動が史上空前ともいえる高まりを見せ、献身的な活動の輪が広がり、阪神淡路大震災は「ボランティア元年」とも言われている。</p>	・文献資料	「阪神淡路大震災～兵庫県の1ヶ月の記録」発行：阪神淡路大震災兵庫県災害対策本部、平成7年7月 「阪神淡路大震災～兵庫県の1年の記録」発行：兵庫県、平成8年6月

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
28000 3-2	兵庫県		<p>【災害名】昭和51年台風第17号</p> <p>【発生日時】昭和51年9月13日</p> <p>【被災地】宍粟郡一宮町福知</p> <p>【災害の概要】台風の降雨による地すべり死者3名、埋没・流出住家40戸、公共建物17棟 流出土砂：100万m<sup>3</sup></p> <p>【教訓等】連続雨量620ミリの記録的な大雨により、通称「抜山」が山崩れを起こし、住家、公共建物を埋没・流出させたが、第一次崩壊による3名の死亡者以外は、奇跡的に全員避難した。300年前に、山が抜け、「抜山」と地名がついた、またその時に3名生き埋めになったという伝説があり、今回の地すべりについて、後世に災害記録を残そうと記録誌を作成している。</p>	・文献資料	「記録 山津波」発行：一宮の災害を記録する会 発行：昭和52年3月31日 「9月13日の証言」発行：一宮の災害を記録する会 発行：昭和55年9月1日
28000 3-3	兵庫県		<p>【災害名】阪神・淡路大震災(兵庫県南部地震)</p> <p>【発生日時】平成7年1月17日</p> <p>【被災地】神戸市、尼崎市、明石市、西宮市、洲本市、芦屋市、伊丹市、塚塚市、三木市、川西市、津名町、淡路町、北淡町、津名郡一宮町、五色町、東浦町、緑町、西淡町、三原町、南淡町</p> <p>【災害の概要】震源：兵庫県淡路島北部 マグニチュード7.3 被災の状況：死者6,433人、負傷者43,792人 家屋倒壊：249,180棟</p> <p>【教訓等】社会的・経済的な機能が高度に集積し、高齢化が進む大都市を直撃した地震として、今後懸念される東海・東南海・南海地震などに対し、大地震の経験と教訓を活かした安全・安心な地域づくりに活かしていくことが期待されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> <li>・絵画</li> <li>・記録フィルム</li> <li>・写真</li> <li>・その他</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料（公文書、私文書、書簡、文献等）</li> <li>・その他（個人の思い出の品、災害の大きさを表す品など）</li> </ul>
28000 3-4	兵庫県		<p>【災害名】平成16年台風23号</p> <p>【発生日時】平成16年10月20日</p> <p>【被災地】西脇市、小野市、黒田庄町、豊岡市、養父市、城崎町、日高町、出石町、但東町、和田山町、氷上町、洲本市、津名町、津名一宮町、五色町、西淡町、三原町、南淡町</p> <p>【災害の概要】添付資料1-1のとおり</p> <p>【教訓等】兵庫県では、阪神・淡路大震災以降初めての災害対策本部を設置し、市町とも連携して災害応急対策を講じたが、そのなかで情報伝達や住民避難、災害時要援護者対応など、様々な分野にわたり反省点や課題が明らかとなった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被害の写真（添付資料1-2）</li> <li>・その他（被害数値（添付資料1-1））</li> </ul>	
28000 3-5	兵庫県		<p>【災害名】南海地震</p> <p>【発生日時】昭和21年12月21日</p> <p>【被災地】県南部</p> <p>【災害の概要】本地震の震央は相当大きく、淡路島にはかなりの震動があり、上津波も襲来して（福良方面では湾形のために特に大きかった）著しい被害が出た。これにより、死者50名、負傷者69名等の被害が淡路地域を中心に発生した。（災害・被害の詳細については、添付資料1-3を参照）</p> <p>【教訓等】</p>		
28000 3-7	兵庫県		<p>【災害名】北但馬地震</p> <p>【発生日時】大正14年5月23日</p> <p>【被災地】但馬地域</p> <p>【災害の概要】円山川河口を震央とする地震が大正14年5月23日に発生し、主として但馬地方において、死者425人等の被害が発生した。</p> <p>【教訓等】</p>		
28100 0-2	兵庫県	神戸市	<p>【災害名】阪神・淡路大震災</p> <p>【発生日時】平成7（1995）年1月17日</p> <p>【被災地】市内全域</p> <p>【災害の概要】（災害・被害の詳細については、添付資料1-3を参照）</p> <p>【教訓等】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・モニュメント（添付資料1-4を参照）</li> </ul>	
28100 0-3	兵庫県	神戸市	<p>【災害名】阪神・淡路大震災</p> <p>【発生日時】平成7年1月17日</p> <p>【被災地】神戸市全域</p> <p>【災害の概要】（災害・被害の詳細については、添付資料1-5を参照）</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料	発行日：平成17年8月27日 タイトル：市民のかけ橋 神戸から全国へ（学んだこと。伝えたいこと。） 発行・編集：「震災10年 神戸からの発信」推進委員会

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
28201 4-1	兵庫県	姫路市	<p>【災害名】寛延2年大洪水                      【発生日時】寛延2年（1749）7月1日～3日                      【被災地】兵庫県姫路市の中心部（本町・材木町・小利木町他）や保城等                      【災害の概要】寛延2年7月1日から3日間降り続いた大雨により、元和7年（1621）改修整備された船場川の市川取水口にある大樋（現姫路市保城地区）が決壊し濁流が姫路城下に注いだ結果、家屋流失161戸・全壊99戸・半壊215戸、溺死者402人にのぼり、土砂流入による被害田畑583町5反8畝21歩に達した。被害地区の特色は17世紀初頭に計画建設された姫路城下町地域で、なかでも船場川改修のときに計画建設された船場地区の材木町や小利木町の被害が甚大だった。                      【教訓等】初動対策として避難場所として城内緊急開放、城内備蓄米の放出（被災者1人に一斗、計2000石なので2万人分）支給と粥施行の小屋建立。次いで溺死者の法要、床上浸水被害に貸米、家屋修復に無利息10年賦の貸し付け、被害発生の翌月、幕府から災害復旧費1万5千両の貸し付けがあった。復旧施策の一つに「堰方役」の新設で取水口の修理・護岸の恒常的対策により水害防止を果した。甚大被害地区の船場町民は迅速な対策をとった家老川合定恒に感謝し後年川合家火災の際に食糧見舞い、定恒百回忌には川合家墓所に石燈籠を寄進している。</p>	<p>○文献『姫路城史』中巻512-8頁、『姫路の文化財』第2巻81, 207, 218頁、『文化財見学シリーズ』（姫路市教委、市HPにも公開）『文化財見学シリーズ』20, 24, 31, 39号                      ○碑文『姫路の文化財 石造遺品銘文集』151-2, 308頁                      ○絵画『寛延二年姫路城下浸水被害図』                      ○写真 撮影 (b) 写真4点</p>	<p>『姫路城史』（昭和27初版・平成6復刻版＝臨川書店）                      『姫路の文化財第2巻』（平成14年姫路市教委）                      『文化財見学シリーズ』（姫路市教委、市HPにも公開）                      『姫路の文化財 石造遺品銘文集』（平成7年姫路市教委）                      『寛延二年姫路城下浸水被害図』（平成15年姫路市文化財保護協会）</p>
28204 9-1	兵庫県	西宮市	<p>【災害名】ジェーン台風                      【発生日時】昭和25（1950）年5月3日                      【被災地】西宮市甲子園1番町 小曾根町 里中町（当時鳴尾村）                      【災害の概要】第2次大戦の戦禍に追い討ちをかけるものであった。浸水面積：村面積の6割 堤防の決壊は数百m 死者1名重症20人 軽症50人 全壊66戸 流出6戸 半壊414戸                      【教訓等】水路・下水道を逆流した潮で被害が拡大した。以前にもそのようなことがあったので、居宅の基礎を上げたが、やはり同じ被害にあった。雨がふると、そのことが心配である。</p>	<p>・文献資料</p>	<p>『鳴尾村誌』1889→1951 鳴尾村誌編纂委員会 2005</p>
28205 7-2	兵庫県	洲本市	<p>【災害名】安政東海地震                      【発生日時】安政元年（1854）11月4日                      【被災地】                      【災害の概要】安政東海地震の地震・津波被害                      【教訓等】</p>	<p>・文献資料</p>	<p>『洲本市史』洲本市1974 P945-946</p>
28205 7-3	兵庫県	洲本市	<p>【災害名】室戸台風                      【発生日時】昭和9年（1934）9月21日                      【被災地】                      【災害の概要】室戸台風の強風・高潮被害                      【教訓等】</p>	<p>・文献資料</p>	<p>『洲本市史』洲本市1974 P947</p>
28205 7-4	兵庫県	洲本市	<p>【災害名】南海大地震                      【発生日時】昭和21年（1946）12月21日                      【被災地】                      【災害の概要】南海大地震の被害                      【教訓等】</p>	<p>・文献資料</p>	<p>『洲本市史』洲本市1974 P947-948</p>
28207 3-1	兵庫県	伊丹市	<p>【災害名】伊丹郷町元禄の大火                      【発生日時】①元禄元年12月24日 ②元禄12年11月4日 ③元禄15年3月3日                      【被災地】①井筒町から ②伊丹天王町から札の辻まで、下市場村 ③中少路村から伊丹北之口町まで                      【災害の概要】①160軒焼失 ②寺院6カ寺、酒家16軒、その他無数焼失 ③439軒焼失                      【教訓等】江戸積み酒造業で栄えた伊丹郷町では、③の元禄15年大火後、伊丹定火消方が設置され、寛政4年には会所に龍吐水2挺が備えられるなど消火体制が整えられた。</p>	<p>・文献資料（有岡庄年代秘記）</p>	<p>『伊丹市史』第4巻 1968年 673～85ページ</p>
28207 3-2	兵庫県	伊丹市	<p>【災害名】元文5年猪名川大洪水                      【発生日時】元文5年6月9日                      【被災地】外崎村・下市場村                      【災害の概要】大洪水により堤が大破し、外崎村・下市場村が流失、42人が溺死した。                      【教訓等】寛保元年11月、外崎村屋敷を台地上の池之坂へ移転させることになった。切所の普請には人足32,652人が従事した。同2年には洪水手当てとして船1艘が造られた。寛延6年には人足3,300余人により島ヶ崎の荒れ所を埋め込み開発された。</p>	<p>・文献資料（有岡庄年代秘記、有岡古統語）</p>	<p>『伊丹市史』第4巻 1968年 679～81ページ                      『伊丹の伝説 付。有岡古統語』1977年 75ページ</p>



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
28207 3-3	兵庫県	伊丹市	【災害名】明治29年猪名川洪水 【発生日時】明治29年8月30日 【被災地】北河原村・天津村など 【災害の概要】激しい暴風雨により猪名川堤防が各所で決壊し、「百数十年来未聞ノ大被害」となった。とくに北河原村・天津村の被害は大きく、翌明治30年には天津村の廃止、北河原村区への吸収合併が伊丹町議会に提案されたほどであった。 【教訓等】その後も連年のように洪水被害があり、明治32年度には伊丹町歳出決算総額のうち35%が災害復旧にあてられた。	・文献資料	『伊丹市史』第3巻 1972年 179～81ページ
28207 3-4	兵庫県	伊丹市	【災害名】昭和28年水害 【発生日時】昭和28年9月25日 【被災地】神津地区 【災害の概要】台風13号により軍行橋・桑津橋が流失、神津地区200戸が床上1メートルの浸水という被害を受けた。 【教訓等】口酒井センター前の電柱には出水時の水位が表示され、洪水の恐ろしさを今に伝えている。	・文献資料	『伊丹市史』第3巻 1972年 646～47ページ
28207 3-5	兵庫県	伊丹市	【災害名】阪神・淡路大震災 【発生日時】平成7年1月17日 【被災地】伊丹市全域 【災害の概要】直下型地震により市内では死者23人、負傷者2,716人、全半壊16,805世帯（全世帯の24%）、阪急伊丹駅舎倒壊など大きな被害を受けた（数字は平成12年4月現在）。 【教訓等】伊丹市の『災害と対応の記録』、市内各地区の震災復興誌や記念モニュメント、また博物館の行った聞き取り調査などにより、震災の実体験収集と次代への継承が図られている。	・文献資料	・災害と対応の記録 1995年 ・震災記録 地域研究いたみ 第26～34号 1997～2005年（続 刊中）
28208 1-1	兵庫県	相生市	【災害名】光明山を中心とする集中豪雨 【発生日時】昭和8年（1933年）8月13日 【被災地】相生市 陸 光明山 【災害の概要】芋谷川氾濫。警察官1名殉職、浸水家屋359戸、山崩れ14カ所、有年～那波駅間列車不通。 【教訓等】災害の教訓を忘れないため、相生警察署を中心に毎年慰霊祭を実施していたが、故人の母親が満100歳の年に慰霊祭を辞退したいとの申し入れがあったため、平成13年11月13日を最後に実施していない。	・文献資料 ・碑文	・「郷土のあゆみ」相生（昭和 47年10月相生市教育委員会発行） ・相生市史第3巻（昭和63年2月 相生市発行） ・相生市史第6巻（昭和61年12 月相生市発行） ・三輪政太郎氏の殉職碑
28209 0-1	兵庫県	豊岡市	【災害名】昭和34年伊勢湾台風 【発生日時】昭和34年9月26日 【被災地】豊岡市 【災害の概要】9月26日12時過ぎからの台風による降雨が253mmに達し、円山川本流の決壊はなかったものの、支流の奈佐川、出石川で決壊。旧豊岡市では、負傷者7名、家屋の全壊4世帯、半壊24世帯、床上浸水3,332世帯、床下浸水3,322世帯 【教訓等】この台風による被害状況が、平成16年の台風23号までは水害に対する基準となっていた。		
28209 0-2	兵庫県	豊岡市	【災害名】平成16年台風23号 【発生日時】平成16年10月20日 【被災地】豊岡市 【災害の概要】台風による豪雨により、1級河川の円山川の水位が計画高水位を上回り、円山川、支流の出石川で決壊。死者7名、負傷者51名、家屋の全壊530世帯、大規模半壊1,104世帯、半壊2,943世帯、床上浸水587世帯、床下浸水3,543世帯の被害を記録した。注）この内容は平成17年4月1日に誕生した豊岡市についてのものである。（豊岡市、城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町が合併し、豊岡市となった。 【教訓等】・これまでの水害では、昭和34年の伊勢湾台風が大きく、過去の経験としての基準となっていたが、今回はそれを上回る規模であり、経験が役立たなかった。 ・情報伝達として、全戸に配布していた防災行政無線又は有線設備を使用した、住民への放送内容、放送方法に課題が残った。また、避難についても、対象世帯の1割程度しか避難せず、避難勧告のタイミング、避難所の選定にも課題があった。	・文献資料 ・写真	台風23号記録
28209 0-3	兵庫県	豊岡市	【災害名】北但大震災 【発生日時】大正14年（1925）5月23日 【被災地】兵庫県但馬北部 【災害の概要】円山川河口部でM6.8 死者428名、家屋全壊1,295戸、全焼2,180戸 【教訓等】この地震を教訓として、5月23日には防災訓練を実施	・文献資料	・旧豊岡市史 ・兵庫県地震災害史（寺脇弘光 著、1999年発行）

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
28212 0-1	兵庫県	赤穂市	<p>【災害名】明治25年水害                      【発生日時】明治25年(1892年)7月23日                      【被災地】兵庫県赤穂市全域                      【災害の概要】7月22日の台風(気圧977mb、最大風速31m/秒—徳島測候所記録—)がもたらした水害。                      【教訓等】寛政4年(1792年)の大洪水以後100年間、大規模な洪水がなく、大被害となった。臨時救助所を各地に設置し、焚出米や義捐金によって救われた者が多く、また有志による救助を受ける者もいた。寺に避難したものの食糧の蓄えがなく、2日間は絶食した村もあった。この災害から生まれた言葉には「はったい粉(いり粉)さえあれば二、三日は食いつなぐ。」というものがある。これ以後、大麦が獲れるとはったい粉を作るようになった。</p>	<p>・文献資料                      ・写真(災害風景をとらえた写真)</p>	<p>・兵庫県赤穂市：災害の記録、1981、p.48-56                      ・兵庫県赤穂市教育委員会：赤穂の民俗その八—千種川流域編—、1989、p.303</p>
28213 8-1	兵庫県	西脇市	<p>【災害名】昭和38年水害(梅雨前線・台風2号の影響)                      【発生日時】昭和38年(1963)6月4日                      【被災地】兵庫県西脇市等                      【災害の概要】家屋—全壊3戸、半壊3戸、床上浸水588戸、床下浸水691戸 その他—堤防・ため池・橋梁流失11件 堤防ため池決壊27件                      【教訓等】加古川本流の鉄製コンクリート橋を除き、支流の杉原川・野間川等の木製の橋はすべて流失。</p>	<p>・写真37枚(郷土資料館保管)</p>	<p>写真撮影者 西脇弘氏</p>
28220 1-3	兵庫県	加西市	<p>【災害名】不明                      【発生日時】嘉永7年(1854)6月14日～11月6日                      【被災地】兵庫県・大阪府・奈良県                      【災害の概要】地震                      【教訓等】6月14日大地震。その後余震。11月6日大地震。</p>	<p>・文献資料</p>	<p>兵庫県加西市教育委員会：加西吉野文書 111P</p>
28227 8-1	兵庫県	宍粟市	<p>【災害名】一宮山津波                      【発生日時】昭和51年9月13日                      【被災地】兵庫県宍粟市一宮町福知・生栖地区(当時一宮町)                      【災害の概要】台風17号に伴う異常降雨(9/8～9/13累積雨量582mm)による地すべり災害(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)                      【教訓等】連続雨量620mmの記録的な大雨により、通称「抜山」が山崩れを起こし、住家、公共建物を埋没・流出させたが、第一次崩壊による3名の死亡者以外は、奇跡的に全員避難した。300年前に、山が抜け、「抜山」と地名がついた。またその時に3名生き埋めになったという伝説があり、今回の地すべりについて、後世に災害記録を残そうと記録誌を作成している。</p>	<p>・文献資料</p>	<p>①「記録山津波」一宮町の災害を記録する会 昭和52年5月31日                      ②「9月13日の証言」一宮町の災害を記録する会 昭和55年9月1日                      ③「一宮山津波から20年」兵庫県・一宮町 平成8年9月13日(一宮山津波から20年の集い)</p>
28685 1-1	兵庫県	洲本市 (旧五色町)	<p>【災害名】阪神淡路大震災                      【発生日時】平成7年1月17日午前5時46分                      【被災地】洲本市五色町地域                      【災害の概要】死者こそなかったものの、重傷者2人軽傷者15人で住宅被害は、全壊家屋178棟、半壊家屋270棟、一部破損2,558棟にも及び、町内ほとんどの家庭で、何らかの被害がでた。また道路の地割れや、水道管の破裂などによる断水なども起こり、町内の被害総額は、約100億円にも及ぶ町始まって以来のおおきな被害であった。五色町ではこの震災より厚生省より災害救助法の適用を受けた。                      【教訓等】まだ地震が起こって10年しかたっていないので、皆記憶として残っている。</p>	<p>・文献資料                      ・写真</p>	<p>・五色町史続編(平成18年1月10日発行予定)五色町                      ・「阪神・淡路」震災誌(平成8年8月発行)五色町老人クラブ連合会</p>
29000 9-1	奈良県		<p>【災害名】伊賀上野地震                      【発生日時】嘉永7年(1854年)7月9日                      【被災地】大和東北部                      【災害の概要】奈良の被害は全潰家屋七八百戸で死者二八四人、郡山で百十余人の死者を出した。                      【教訓等】</p>	<p>文献                      奈良県気象災害史</p>	<p>著者：青木 滋一                      タイトル：奈良県気象災害史                      発行年：昭和31年</p>
29000 9-2	奈良県		<p>【災害名】安政東海地震・南海地震                      【発生日時】嘉永7年(1854年)12月23～24日                      【被災地】                      【災害の概要】南都春日石燈籠多く損ず、東大寺境内同多く損ず、併し死亡におよぶ人無之候よし 奈良春日社町屋大崩、鳥居金燈籠崩落候                      【教訓等】なお丹波市町史には本地震と雲の色との関係を示したおもしろい記事がある。                      十一月四日朝五つ時に又大地震が来た。末申の風吹であった。五日後日の入前に末申の方に恐ろしい夕七つ時半ごろまたも大地震ひて音が雲中でした。この末申の雲は墨色で緑赤色であった。</p>	<p>文献                      奈良県気象災害史</p>	<p>著者：青木 滋一                      タイトル：奈良県気象災害史                      発行年：昭和31年</p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
290009-3	奈良県		<p>【災害名】十津川水害                      【発生日時】明治22年（1889年）8月18日                      【被災地】                      【災害の概要】連日降り続いた豪雨のために、十津川村ではつぎつぎと山崩れが生じ、十津川の流れを各所でせきとめた。そのため四十有余の湖水が出現して、田畑は流れ、人家全壊四百、半壊二百廿戸、死者二百人という惨状を呈した。                      【教訓等】受災者は六百戸、二千五百人に及び、郷里の荒廃の甚だしさに挙げて北海道石狩国の徳富に移住した。（現在の北海道・新十津川町）</p>	<p>文献                      奈良県気象災害史                      絵画                      奈良県立図書館情報館所蔵「實測奈良縣大和地図」                      (http://opacsvr01.library.pref.nara.jp/mylimedio/dlimage/image?bookid=677618&amp;tocid=0&amp;pageseq=1&amp;style=inline)</p>	<p>著者：青木 滋一                      タイトル：奈良県気象災害史                      発行年：昭和31年</p>
290009-4	奈良県		<p>【災害名】室戸台風                      【発生日時】昭和9年（1934年）9月11日                      【被災地】                      【災害の概要】死者11名                      負傷者79名                      住家全潰128戸                      住家半潰329戸                      【教訓等】産業界は当時でもよく警報を利用して被害を最小限度に食い止めていた。                      案外台風警報を軽視して犠牲者を出したのは教育方面であった。奈良県内でも小学校の倒潰したもの四校、学童中逃げ遅れて校舎の下敷きとなり悲惨な圧死をとげた可憐の児童八名、他に重軽傷者数十名を出すに至った。これらはいずれも教育にたずさわる為政者、直接学童を指導する教育者の気象常識不十分に由来したのである。</p>	<p>文献                      奈良県気象災害史</p>	<p>著者：青木 滋一                      タイトル：奈良県気象災害史                      発行年：昭和31年</p>
290009-5	奈良県		<p>【災害名】吉野地震                      【発生日時】昭和27年（1952年）7月18日                      【被災地】                      【災害の概要】死者三名、重軽傷者若干名を出すに至り、又地割れや土塀の倒壊、井戸水のごった所もあった。                      【教訓等】著者が春日大社の石燈籠倒潰について調査したところ春日大社の石燈籠は過去数次の地震によって倒潰応急修理を重ねたため極めて不安定な状態にあることが分かった。                      春日大社に近づくに従って石燈籠間の間隔は非常に狭くなっているため、所謂将棋倒式の倒潰をした所が多かった。                      今後震源地は遠くてもっと規模の大きい地震が起これば、春日大社の石燈籠は今回以上の被害を受けることだろう。</p>	<p>文献                      奈良県気象災害史</p>	<p>著者：青木 滋一                      タイトル：奈良県気象災害史                      発行年：昭和31年</p>
292036-1	奈良県	大和郡山市	<p>【災害名】伊賀上野地震                      【発生日時】安政元年6月15日                      【被災地】不明                      【災害の概要】倒壊150軒、半壊400軒、死者120人                      【教訓等】</p>	<p>・文献資料</p>	<p>ふるさと大和郡山歴史事典・大和郡山市文化財審議会 昭和62年5月31日発行</p>
292095-1	奈良県	生駒市	<p>【災害名】室戸台風                      【発生日時】昭和9年（1934年）9月21日午前8時40分ごろ                      【被災地】生駒市北田原・南田原（当時北倭村）                      【災害の概要】北倭第四尋常小学校校舎が倒壊。先生、児童約45人が下敷きとなる。児童6人死亡、約14人重軽傷。【参考】昭和9年(1934)9月20日から21日にかけて日本列島(特に西日本)を超強烈な台風『室戸台風』が襲い、空前の被害をもたらした。特にこの時室戸岬では瞬間最大風速84.5m/sを記録した所で風速計が壊れてしまい、計測不能に。この数字は現在でも日本気象観測史上最高記録のままである。(1993年の台風13号でも最大瞬間風速は種子島で記録した59.1m/s)この強い風で高圧線の電柱がみな折れ曲がり、船が陸に押し上げられ、家がまるごと吹き飛ばされたという。死者2702名、行方不明者334名、負傷者14994名、全壊家屋3万8771戸、半壊家屋4万9275戸、流失家屋4300戸、浸水家屋40万1157戸、被害船舶2万7594隻、昭和時代では伊勢湾台風に次ぐ2番目の被害の大きさであった。ちなみに奈良県内の測候所の記録は次のとおり。午前8時40分 八木測候所 風速22.3<small>メートル</small> 午前9時 郡山測候所 風速30<small>メートル</small> (極限に達す)                      【教訓等】昭和58年9月に50回忌の追悼式と殉難碑の除幕式典が挙行され、室戸台風殉難学童50回忌記念誌「たわら」が発刊された。</p>	<p>・殉難の碑                      ・その他</p>	<p>○生駒市の「生駒市誌V」の401頁                      ○室戸台風殉難学童50回忌記念誌「たわら」（生駒市図書館所蔵 昭和58年9月）</p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
29444 6-1	奈良県	黒滝村	【災害名】 ジェーン台風 【発生日時】 昭和25年9月3日 【被災地】 黒滝村 【災害の概要】 台風による家屋全壊一戸、半壊並びに損傷は莫大なる数。消防団ポンプ格納庫4箇所が倒壊及び器具ポンプ共に流失。 (災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照) 【教訓等】	・文献資料	黒滝村史編纂委員会・「黒滝村史」・1977年
29444 6-2	奈良県	黒滝村	【災害名】 伊勢湾台風 【発生日時】 昭和34年9月26日 【被災地】 黒滝村 【災害の概要】 台風及び前線による降雨により大字榎尾地区で高さ約100m幅30mの山津波により人家2戸流失5名死亡。また同地区内別箇所山崩れ・出水により1名死亡、1名行方不明。家屋全壊6戸、流失5戸、半壊23戸。416人が避難所に避難。9月28日災害救助法適用。(災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照) 【教訓等】	・文献資料	黒滝村史編纂委員会・「黒滝村史」・1977年
29450 1-1	奈良県	下北山村	【災害名】 嘉永の水害 【発生日時】 1852年(嘉永5年) 【被災地】 【災害の概要】 この年は、5月と6月に2～3度夕立があっただけで、どこも日照り続きであった。ところが7月20日から近畿一円に雨が降り始めた。20日・21日と雨がだんだん大降りになり、21日昼過ぎから北山川が増水しはじめ、夜中の2時か3時ごろ、にわかの大水になった。西川もそのころ増水、水面が一丈五尺もあがったという。そのため田畑は大荒れ、家屋・家財道具の流失があるし、人も死ぬ、材木は流れるし、筏道も不通になる、その被害は甚大であった。 【教訓等】 7月20日の朝10時ころから、たくさん的小鳥が川口・小井・大小井・池原のあたりへやってきて、増水した川の上を流れ下っては、飛立って上の方へ行き、また川水に浮いて流れてきては上へ飛んでいく、そんなことを数十度繰り返して、日暮れになってどこかへ飛び去った。これは、川辺の人に逃げようという知らせだったと思われる。小鳥は鳩より小さく、浪のたつとき海辺からくる「かりがね」よりは少し大きめの鳥だったという。	・文献資料	下北山村史
29450 1-2	奈良県	下北山村	【災害名】 伊勢湾台風 【発生日時】 1959年9月26日 【被災地】 【災害の概要】 伊勢湾台風(台風15号)のもたらした降雨はすさまじく、本村でも日本一の多雨地帯として有名な大台ヶ原山系に水源をもっただけに北山川本流はかつてない増水にみまわれた。9月26日午後1時から午後8時まで風を伴う雨は460ミリ(大台測候所)に達したといわれます。この短時間の降雨が北山川筋の低地帯を一瞬にして泥沼と変え、本村有史以来の大被害を呈した。 【教訓等】	・文献資料	下北山村報
30000 4-1	和歌山県		【災害名】 安政の津波 【発生日時】 安政元年(1854年)11月5日 【被災地】 和歌山県広川町(広川町沿岸部) 【災害の概要】 南海地震の津波災害(マグニチュード8.4、沿岸部に5mの津波) 【教訓等】 安政の津波の際に広村(広川町大字広)住民を高台に避難させたことが、戦前の国定教科書に「稲むらの火」として掲載され、全国に普及した。津波被害の後に濱口梧陵等が私財を投じて築いた堤防は、国指定の史蹟となっており、これらの事を伝承する為、広川町主催で毎年11月3日に「津波まつり」を実施し、小学生・中学生が参列し津波の恐ろしさと堤防の大切さを伝えている。「津波まつり」は平成16年で102回目を迎えた。	・文献資料 ・碑文 ・絵画 ・フィルム ・写真 ・紙芝居、アニメ、ビデオ	・広川町：広川町誌 昭和49年3月発行 ・濱口梧陵小伝 昭和9年4月発行 ・杉村廣太郎：濱口梧陵伝翻訳集 昭和12年12月発行 ・濱口梧陵碑・感恩碑 ・安政聞録中の南海地震津波の実況図 ・濱口梧陵の肖像画・広村堤防・津波まつり
30201 5-1	和歌山県	和歌山市	【災害名】 宝永4年地震・津波 【発生日時】 1707年10月28日 【被災地】 【災害の概要】 宝永4年10月紀伊半島沖を震源とする大地震が発生し、東海地方から九州にまで震災、津波の被害が及んだ。地震により和歌山市域では、多くの家屋が倒壊し、多くの住民が死亡した。堤防には亀裂が生じ、水や砂が噴出した。 また、この地震により引き起こされた津波は、湊口から大型漁船を川に押し込み、紀の川にかかる橋を墜落させた。 【教訓等】 大地震の後も10日間ほどは、かなり大きな地震が昼夜を問わず起こり、人々は家に居ることができず庭などに仮屋を建てて生活したと伝えられている。	文献 和歌山市史 第1巻	著者 和歌山市  タイトル 「和歌山市史 第1巻」P32  発行年 平成3年11月30日

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
302015-2	和歌山県	和歌山市	<p>【災害名】享保17年の洪水</p> <p>【発生日時】1732年（享保17年）閏5月</p> <p>【被災地】和歌山市</p> <p>【災害の概要】 享保17年閏5月に豪雨があり、近畿地方全域において大洪水が発生した。和歌山市域でも民家や橋梁が破壊・流出し、堤防や道路、井堰や用水路なども破損した。</p> <p>【教訓等】 この災害に伴い享保17年の冬から18年の夏にかけて米価が高騰した。そのため、大勢の人々が餓死したり、疫病も大流行した。</p>	文献 和歌山市史 第1巻	<p>著者 和歌山市</p> <p>タイトル 「和歌山市史 第1巻」P88から89</p> <p>発行年 平成3年11月30日</p>
302015-3	和歌山県	和歌山市	<p>【災害名】宝暦6年の暴風雨</p> <p>【発生日時】1756年（宝暦6年）9月</p> <p>【被災地】和歌山市</p> <p>【災害の概要】 1756年（宝暦6年）9月に暴風雨が発生し、紀の川左岸において堤防が約200mにわたって決壊した。その結果和歌山市船戸付近から三葛に至る一帯が大洪水となった。紀の川の水位は約6.6mに達し、約2,000人の人々が水死した。</p> <p>【教訓等】 この洪水で被害を受けた武士には、禄相応の金が貸し付けられ、町屋では一人当たり5升の米が配給されたと伝えられている。</p>	文献 和歌山市史 第1巻	<p>著者 和歌山市</p> <p>タイトル 「和歌山市史 第1巻」P89から90</p> <p>発行年 平成3年11月30日</p>
302015-4	和歌山県	和歌山市	<p>【災害名】紀ノ川洪水</p> <p>【発生日時】明治22年（1889年）8月18日</p> <p>【被災地】和歌山市、海部郡、名草郡</p> <p>【災害の概要】 8月18日から19日にかけて和歌山県は全域にわたって激しい暴風雨に見舞われた。8月19日午後11時ごろ和歌山市のおよそ4キロメートル上流、名草郡に属する岩橋出島の堤防が破れ、またその12キロメートルほど上流の那賀郡新在家の堤防が決壊したため、紀ノ川の濁流が和歌山市の4分の3を浸した。深いところでは3メートルに及んでいる。</p> <p>○被害状況 避難者 5800人、全倒壊家屋 42戸、浸水家屋 9649戸、死者6人、負傷者7人、流出橋梁7箇所、破損堤防7箇所</p> <p>【教訓等】 基本的な原因は暴風にあるとしながらも、春以来の雨が多量に紀ノ川の堤防に浸潤していたためであるとしている。また、その一因として紀ノ川堤防に植えていた松並木を維新後切り倒した、その事後処理のまずさを指摘する意見もあった。</p>	文献 和歌山市史 第3巻	<p>著者 和歌山市</p> <p>タイトル 「和歌山市史 第3巻」P138</p> <p>発行年 平成2年11月30日</p>
302015-5	和歌山県	和歌山市	<p>【災害名】南海道大地震</p> <p>【発生日時】昭和21年（1946年）12月21日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】 紀伊半島の南端潮ノ岬の南々西の沖合いを震源と推定されるマグニチュード8.1の地震が発生した。</p> <p>【教訓等】 地中から水が噴き出しそこら中をしめらせていたが、夜が明けてから見ると、建物は大きく湾曲し、地面から1メートルほどの窓かまちが地表すれすれにめり込むという呈していた。いわゆる液状化現象がおきていたのである。</p>	文献 和歌山市史 第3巻	<p>著者 和歌山市</p> <p>タイトル 「和歌山市史 第3巻」P748</p> <p>発行年 平成2年11月30日</p>
302015-6	和歌山県	和歌山市	<p>【災害名】ジェーン台風</p> <p>【発生日時】昭和25年（1950年）9月3日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】 死者4、行方不明4、住家全壊493、同半壊1676、同流出58、同床上浸水805</p> <p>【教訓等】 農作物の被害が特に大きく、和歌山市では塩害による水稻の被害17.3町歩、甘藷19.2町、その他風水害による被害は一般田畑合せて138.3町歩と云う惨状であり、この内塩害を被った処は収穫皆無と云われている。また、災害を受けた市民には、市民税・固定資産税の減免を実施した。</p>	文献 和歌山市史 第3巻	<p>著者 和歌山市</p> <p>タイトル 「和歌山市史 第3巻」P752</p> <p>発行年 平成2年11月30日</p>
302015-7	和歌山県	和歌山市	<p>【災害名】7.10水害</p> <p>【発生日時】昭和27年（1952年）7月10日</p> <p>【被災地】和歌山市</p> <p>【災害の概要】 朝から降り出した雨は夜に入って豪雨となり、深夜から翌朝にかけてものすごく、ついに市内の降雨量は393ミリという和歌山観測所開設以来の記録となった。</p> <p>○被害状況 死者4、負傷者219、浸水20240戸</p> <p>【教訓等】 当時の市長が「ふたたびこの種の惨害を繰り返さずことなきよう腐心検討し、全力を尽くして被害予防策に万全を期している。罹災しなかった市民も罹災者と憂いを分かち、水魔を克服することを望んで已まない」と市報により訴えた。</p>	文献 和歌山市史 第3巻	<p>著者 和歌山市</p> <p>タイトル 「和歌山市史 第3巻」P754</p> <p>発行年 平成2年11月30日</p>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
302015-8	和歌山県	和歌山市	<p>【災害名】第二室戸台風</p> <p>【発生日時】昭和36年（1961年）9月16日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】和歌山市において、最低気圧は939ミリバールを示し、戦後最大の強風を生じた。降水量は151ミリにすぎなかったが、建物の損壊が大きく、満潮と重なったため、高潮と破堤による浸水被害が続発した。</p> <p>○被害状況 家屋倒壊 597戸、家屋半壊1741戸、最高潮位3.54メートル、高潮による床上浸水3979戸、床下浸水6157戸、死者3、重軽傷者45人</p> <p>【教訓等】台風が満潮と重なったために高潮による被害が非常に多かったことが伝わっている。</p>	文献 和歌山市史 第1巻	著者 和歌山市  タイトル 「和歌山市史 第1巻」 P98  発行年 平成3年11月30日
302058-1	和歌山県	御坊市	<p>【災害名】7・18水害</p> <p>【発生日時】昭和28年（1953年）7月18日</p> <p>【被災地】御坊市（当時、御坊町、湯川村、藤田村、野口村）</p> <p>【災害の概要】昭和28年に発生した洪水災害（この水害による市民の被害は、死者26名、行方不明100名、重軽傷者約3、000名、推定床上浸水4、000戸、内流失365戸）</p> <p>【教訓等】昭和28年7月17日から18日朝にかけて梅雨前線による豪雨が和歌山県北部地方を襲い、和歌山県の山間部では24時間500mm以上の雨量を記録した。これにより、日高川が増水し、天田橋、野口橋等の主要橋梁が流失、広範囲で堤防が決壊し、濁流が御坊町を中心に近接村一帯を襲い、人的物的に甚大な被害を受けた。</p>	文献（御坊市史）  碑文（御坊市役所前）	御坊市史（P320～P329）  碑文（市役所前で撮影）
302082-1	和歌山県	紀の川市	<p>【災害名】7・18水害</p> <p>【発生日時】昭和28年7月18日</p> <p>【被災地】貴志川流域（有田川流域、日高川流域、熊野川流域）</p> <p>【災害の概要】和歌山県全域【人の被害】死者615人、行方不明431人、負傷者7、663人、【住家被害】全壊4、230戸、流失4、441戸、床上浸水12、883戸、床下浸水22、250戸（和歌山県災害史 和歌山県&lt;1963&gt;から）</p> <p>【教訓等】あの日朝来の雨は篠をつき、地上のすべてを流せとばかり降りしきった。豪雨は貴志平野を氾濫し、堤防を破り奔流となって荒れ狂う。 橋が流れる!家が!家財道具が!植え終わった稲が!人が!流れる!流れる! 各地の被害情報が急速に増加する。通信運輸機能は絶たれ、貴志川流域町村は陸の孤島に陥ってしまった。 （貴志川流域災害誌 那賀地方事務所&lt;1953&gt;から） 災害を経験した人々は、本水害を「二十八水（にじゅうはっすい）」という言葉で表し、語り継がれている。</p>	文献（書簡） 〔写真も収録〕 B5版、50ページ	著者：那賀地方事務所（現在の那賀振興局）、タイトル：貴志川流域災害誌、発行年：1953年（昭和29年） 【旧貴志川町において、平成15年8月に、本水害から50年が経過したことで、本記録を後世に残すため復刻版を作成
303615-1	和歌山県	湯浅町	<p>【災害名】南海大地震</p> <p>【発生日時】1854年11月4日</p> <p>【被災地】和歌山県湯浅町</p> <p>【災害の概要】南海地震の津波災害（マグニチュード8.4、沿岸部に5mの津波）</p> <p>【教訓等】嘉永7年（安政元年 1854年）11月4日、突如として起こった南海大地震は、その翌日になってさらに強烈な地震を繰り返し、ついには大津波を伴って、当地方に未曾有の損害を与えた。宝永4（1707）年の地震の時にも津波の被害を受けたが、150年前の話を知る人も少なく教訓がいかされなかったため、この大地震津波の概要を石碑に記して、後人を戒めた。</p>	回答なし	回答なし
303836-1	和歌山県	由良町	<p>【災害名】南海道地震津波</p> <p>【発生日時】昭和21年（1946年）12月21日</p> <p>【被災地】由良町網代区、横浜区、阿戸区、江ノ駒区、南区、里区、吹井区、糸谷区</p> <p>【災害の概要】南海地震の地震津波災害（マグニチュード8.1、震度5、町内沿岸部の最大波高が3.9mに達した。）</p> <p>【教訓等】安政地震では、小さい地震等の前兆が見られたが、昭和の時は前兆がなかった。 安政地震で多少の津波に対する知識は持っていたが、地震の揺れ方が大船に乗ったように、ゆさゆさとゆったり4、5分続いても家屋の倒壊が少ないので安心して、津波が来るということが頭にピンとこず、油断していた。</p>	文献  その他（写真のコピー）	由良町・由良町史 通史編 上巻・平成7年12月20日  由良町中央公民館に保存

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
30421 2-1	和歌山県	那智勝浦町	<p>【災害名】 東南海地震                      【発生日時】 昭和19年12月7日                      【被災地】 旧那智町、勝浦町                      【災害の概要】                      那智勝浦町地域防災計画                      被害状況写真                      【教訓等】 過去の地震では、津波により幾度となく大きな被害を被っている。                      この地震でも、地震による直接の死者は出ていないが、津波による死者・不明者が37名に上った。                      このため、当時の津波の状況が人々の印象に強く残っており、今に語り継がれている。</p>	碑文	撮影者は不明 町に提供頂き、保管している
31000 0-1	鳥取県		<p>【災害名】 平成12年(2000年)鳥取県西部地震                      【発生日時】 平成12(2000)年10月6日午後1時30分                      【被災地】 鳥取県西部(日野郡・西伯郡・米子市・境港市)                      【災害の概要】 マグニチュード7.3。日野町・境港市で震度6強を記録。死者0、重傷者39(うち鳥取県内31)人、軽傷者143(うち鳥取県内110)人、全壊家屋435(うち鳥取県内394)戸、半壊3,101(うち鳥取県内2,494)戸、一部破損18,544(うち鳥取県内14,134)戸、斜面崩落・落石等による道路・鉄道の不通箇所多数。ライフラインの被害約15,000件。                      【教訓等】 最高で震度6強を記録した大地震で、人的被害こそ少なかったものの、大きな被害があった。地震直後から、行政・企業・ボランティア等さまざまな機関で、被害状況の把握、被災者の救助・支援、被害の復旧等が行われた。被災地は過疎地が多く、被災者の住宅復興に補助金を交付する等、鳥取県独自の対策が行われた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鳥取県防災危機管理課：「平成12年鳥取県西部地震記録集」(CD-ROM)2003</li> <li>インターネット鳥取県防災局HPでも公開</li> </ul>
31000 0-2	鳥取県		<p>【災害名】 鳥取大火                      【発生日時】 昭和27年(1952年)4月17日                      【被災地】 鳥取県鳥取市                      【災害の概要】 鳥取旧市街地の約3分の2を焦土と化した大火災                      【教訓等】 大正から昭和初期にかけて数度にわたる大水害、昭和18年の鳥取大震災と鳥取県は相次ぐ災害に見舞われたが、復興事業はいずれも財政的事情などにより応急的な復旧に終始した感が強かった。このことが災害につぐ災害を呼ぶ大きな原因となっていた。そのことに鑑みて、大火の復興には近代的不燃都市建設をめざし、本格的な都市計画事業が実施され、今日に至っている。(一方では、鳥取市街が城下町としての面影をほとんど残していないことを惜しむ声もある。)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	鳥取県：鳥取県史(近代 第2巻 政治編)昭和44年発行
31000 0-3	鳥取県		<p>【災害名】 鳥取地震                      【発生日時】 昭和18年(1943)9月10日午後5時30分                      【被災地】 鳥取県東部地域(鳥取市、気高郡等)                      【災害の概要】 鳥取市街地や気高郡鹿野町などで震度6の烈震を記録し、鳥取市を中心に県東部に大きな被害を与える。死者は1,210人、全半壊建物は約14,000戸にも及んだ。特に鳥取市では建物の9割が倒壊した。                      【教訓等】 震災が起こると直ちに鳥取県震災対策本部が、倒壊した県庁舎前庭に設けられた。県下の各警察署・警防団は招集され、中部第47部隊も出動し、さらに翼壮青年団や隣組なども動員され、戦時体制下の全組織をあげて人命救助、消火活動、応急救護などが行われた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・米子工業高等専門学校地域防災研究班、鳥取建築士会、日本建築学会中国支部鳥取支所編：鳥取地震災害資料(昭和58年4月発行)</li> </ul>
31000 0-4	鳥取県		<p>【災害名】 水害                      【発生日時】 -                      【被災地】 -                      【災害の概要】 -                      【教訓等】 米子市街地を流れる加茂川には、多くの橋が架けられており、ほとんどの橋のたもとには地藏尊が祀られている。昔、洪水が頻発、水害に遭った人の供養と子どもの安全を守る願いが込められており、信仰の起源は安永(1772-80)のころに遡ると伝えられる。毎年8月23日には地藏祭りが開かれ、名物の一つとなっている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・米子市：『新修 米子市史 第六巻 自然編』</li> <li>・米子錦ライオンズクラブ：『米子のふるさと散歩』</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
31000-5	鳥取県		<p>【災害名】昭和9年の岩井大火</p> <p>【発生日時】昭和9年(1934)6月6日</p> <p>【被災地】鳥取県岩美郡岩美町大字岩井(当時岩井町)</p> <p>【災害の概要】午後4時40分頃、醤油醸造店醸造所から出火し、折から強風にあおられ、岩井温泉街の全戸数216戸のうち149戸が全焼した火災。この火災で温泉旅館、警察署、郵便局、銀行等の大半を焼き尽くした。</p> <p>【教訓等】岩井温泉の大火は過去にも4回記録されているが、昭和9年の大火を含め、200年余りの間に5回の大火があり、約40年に1回の割合で大災が起こっている。昭和9年当時、岩井温泉は旅館13軒が建ち並び、岩井軌道の敷設と相まって大いに賑わっていたが、この大火後に平和な歓楽街が焼き尽くさってしまった。大火後に4軒の旅館が再開して現在に至っている。</p>	・文献資料・絵画	岩美町：岩美町誌(p.670)、昭和43年9月・絵画(岩井老人福祉センターに展示)
31328-9-10	鳥取県	智頭町	<p>【災害名】第二室戸台風</p> <p>【発生日時】昭和36年9月16日</p> <p>【被災地】智頭町全域</p> <p>【災害の概要】芦津では7世帯、智頭では1世帯の住宅一瞬に流失する。橋梁12、国道は決壊。5億円の損失。石破県知事来町し現場を視察、災害救助法が適用された。</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料	鳥取県智頭町「智頭町報」
31328-9-7	鳥取県	智頭町	<p>【災害名】ジェーン台風</p> <p>【発生日時】昭和25年9月5日</p> <p>【被災地】智頭町下流域</p> <p>【災害の概要】水の被害が甚大で下流域、ことに町内河原町は土師川の氾濫で浸水する。このため土師川筋をかけかえ新見川に合流させようとする案が上提され実施されることになった。</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料	鳥取県智頭町「智頭町報」
31401-3-1	鳥取県	日南町	<p>【災害名】生山大火</p> <p>【発生日時】昭和28年(1953年)12月17日</p> <p>【被災地】鳥取県日野郡日南町(当時日野上村)生山地区</p> <p>【災害の概要】失火により午前4時30分発生、午前9時鎮火。出火20分後に発見されたものの、風速7<sup>1</sup>/<sub>2</sub>の風で延焼した。焼失面積8,500坪 生山地区総戸数194戸中全焼106戸 罹災者458人、半焼4戸 罹災者11人 罹災事業所23カ所</p> <p>【教訓等】終戦後ようやく民心も安定し、地域の農林業にもやっと復興の兆しが見え始めた矢先の大火災であり、被災住民はもとより、村並びに近隣町村に与えた衝撃は大きかった。これほどの大火となった原因は、発見の遅れによる初期消火の遅れに併せ、当時町中に狭い道路一本が有るだけであり、この道路が風の通り道にもなったこともあり、消火活動ができなかった。このことを教訓に思い切った近代化、防火対策に配慮した復興対策が実施された。</p>	・文献資料	「著者」安達三二 「タイトル」日南町史 近代政治経済二 「発行年」昭和59年3月30日
33000-1-4	岡山県		<p>【災害名】室戸台風</p> <p>【発生日時】昭和9年9月20日～21日</p> <p>【被災地】真庭郡勝山町・久世町・落合町など</p> <p>【災害の概要】室戸台風に伴い、県下の各河川氾濫、死者145人、重傷者348人、住家全壊1935戸、非住家全壊1283戸</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岡山県政史(前出) p.604～607(岡山市立中央図書館に関連の書籍や写真帳あり)</li> <li>・岡山市立中央図書館蔵郷土資料解題目録(昭和42年発行)</li> </ul>
33000-1-5	岡山県		<p>【災害名】南海地震</p> <p>【発生日時】昭和21年(1946年)12月21日</p> <p>【被災地】現岡山市(旧上道郡沖田・光政・操陽・三幡の各村など)</p> <p>【災害の概要】震源地和歌山市沖南西100kmの熊野灘、岡山県下では震度5、死者52人、負傷者162人、家屋全壊(住家)1201戸</p> <p>【教訓等】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・その他(新聞記事)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岡山市立中央図書館所蔵の旧役場文書に関係公文書あり</li> <li>・新聞記事(添付資料1-5)</li> </ul>
33000-1-6	岡山県		<p>【災害名】広戸風</p> <p>【発生日時】昭和9年(1934年)9月21日、昭和34年(1959年)9月26日等</p> <p>【被災地】岡山県津山市(当時：勝田郡勝北町)、奈義町他</p> <p>【災害の概要】岡山県北那岐山(1240m)南側の日本原一帯に見られる局地的な強風。季節的には8月～10月の頃が多く、時には甚大な被害をもたらす。</p> <p>【教訓等】強風に付随した現象として山鳴りや風枕がみられることが多い。勝田郡勝北町や奈義町では木背木といい、民家の周りに竹、ケヤキ、カシなどを植え、風を防いでいる。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岡山県史第一巻自然風土1983、</li> <li>・岡山県大百科事典1979山陽新聞社、</li> <li>・岡山の災害(岡山文庫142)1989日本文教出版</li> </ul>
33000-1-7	岡山県		<p>【災害名】南海大地震</p> <p>【発生日時】昭和21年(1946年)12月21日</p> <p>【被災地】岡山県南部海岸地帯</p> <p>【災害の概要】和歌山県沖を震源とする地震(岡山で震度5)で県南西部海岸地帯で地盤沈下が生じ、堤防・家屋に甚大な被害をもたらした。</p> <p>【教訓等】地盤沈下により排水不良地が広汎に出現した為、以後県により土地改良事業が行われることとなり、客土、埋立、排水路等を中心とした事業が行われることとなった。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岡山県史第13巻現代I 1984、</li> <li>・岡山の災害(岡山文庫) 142 1989日本文教出版</li> </ul>



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
33000 1-8	岡山県		<p>【災害名】室戸台風</p> <p>【発生日時】昭和9年(1934年)9月21日</p> <p>【被災地】岡山県全域</p> <p>【災害の概要】台風による暴風雨・津波・集中豪雨により、岡山県下では近世以降においても水害が発生し、甚大な被害をもたらしている。昭和9年の室戸台風もそのひとつである。</p> <p>【教訓等】近世以降の水害においては、数多くの文献による記録のほか、その被害を伝える慰霊塔や浸水線等が残されており、後楽園正門裏の堀には、当時の洪水による「浸水線」と表示された銅版の標識が今に残されている。県内には、このほか10箇所に同様の標識がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> <li>・写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山陽新聞2001年6月30日、</li> <li>・岡山県大百科事典1979山陽新聞社、</li> <li>・岡山の災害(岡山文庫142)1989日本文教出版</li> </ul>
33000 1-9	岡山県		<p>【災害名】明治17年8月の大海嘯(大津波)</p> <p>【発生日時】明治17年(1884年)8月25日～26日</p> <p>【被災地】県南沿岸部</p> <p>【災害の概要】死者・行方不明655人、家屋流壊1227戸。8月25日夜半から翌26日未明にかけて襲来した台風が、折からの満潮と重なり、高潮により堤防が決壊し海水が広範囲にわたり流入し、未曾有の第惨事となった。</p> <p>【教訓等】被害がもっとも大きかった倉敷市福田には、のちに遭難者を祀る千人塚が建てられ、今にその情景を伝えている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	岡山県史第10巻 1985
33214 3-1	岡山県	真庭市	<p>【災害名】室戸台風</p> <p>【発生日時】昭和9年9月20日～21日</p> <p>【被災地】田羽根、湯原温泉(旧湯本)、社、久見、釘貫小川、見明戸、本庄</p> <p>【災害の概要】豊栄、禾津、仲間で、旧二川村の種、栗谷、藤森、黒杭については資料がない為、不明。家屋及罹災者・全壊12戸→罹災者50人・半壊34戸→罹災者140人・全流出84戸→罹災者343人・床上浸水91戸→罹災者371人・重傷者6名・橋梁の流失67ヶ所・損害総額約150万円 ※総雨量503.4mm 24時間雨量330.9mm(9/20AM10:00～9/21AM10:00)</p> <p>【教訓等】</p>		
33214 3-2	岡山県	真庭市	<p>【災害名】室戸台風</p> <p>【発生日時】昭和9年9月20日～21日</p> <p>【被災地】真庭市久世、惣、富尾地内全域</p> <p>【災害の概要】・久世にかかっていた中川橋が決壊。・久世中学校の下地区まで床上浸水。・久世の野白地区の堤防が決壊し、久世の市街地が床上浸水した。・惣地内の川べりの竹やぶが根こそぎ流失。・惣地内の山の上の松の木が全て根こそぎ倒れた。上記の内容は全て、郷土史を調べている人が、以前古老から聞いた話であり、現在は、話を聞いた古老の方は全て亡くなられています。</p> <p>【教訓等】</p>		
33623 8-1	岡山県	奈義町	<p>【災害名】台風23号による広戸風</p> <p>【発生日時】平成16年10月20日</p> <p>【被災地】奈義町全域</p> <p>【災害の概要】台風23号による広戸風が発生。瞬間最大風速51.8m/sを記録。台風の接近通過により、昼前から夜半まで30m/s以上の広戸風が12時間以上続く。</p> <p>【教訓等】屋根の損壊、瓦等が飛散するなど、家屋被害は全戸に及ぶ。山林(人口林)約500haに倒伏被害。神社等の樹齢200～300年の杉、檜が根こそぎ倒れる。電話一部不通、上町川・滝本地区で上水道断水、停電が4日間に及ぶ。倒木により、町内の道路が殆ど不通となる。昭和9年の発生被害から70年ぶりの大被害。</p>		
34000 6-1	広島県		<p>【災害名】広島県北西部豪雨災害</p> <p>【発生日時】昭和63年(1988年)7月20日</p> <p>【被災地】広島県安芸太田町(旧加計町)江河内谷</p> <p>【災害の概要】広島県の北西部における集中豪雨による土砂災害(最大時間雨量57mm、最大24時間雨量264mm)</p> <p>【教訓等】当該地区では、約200年前の寛政8年(1796年)にも、土砂災害により死者14人という大災害があった。江河内という地名は川の氾濫地という意味で、災害を経験した先人たちが子孫の身を案じて土地の気象やくせを地名や言い伝えによって後世に伝えたといわれている。これらの言い伝えは63年の災害では活かされなかったが、改めて土砂災害に対する防災意識がより高まった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> <li>・写真</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中国新聞社編・集中豪雨を追うー昭和63年7月加計、浜田災害ー平成元年</li> <li>・広島県・広島県砂防災害史(P94-P109)平成9年</li> <li>・碑文(山県郡安芸太田町殿賀「災害碑」の文面テキスト)</li> <li>デジタルカメラによる写真画像1点(石碑全景をとらえた写真)</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
34100 2-1	広島県	広島市	<p>【災害名】広島豪雨                      【発生日時】平成11年6月29日                      【被災地】広島県広島市                      【災害の概要】梅雨前線の活動により、広島西北部にもたらされた集中豪雨によって発生した、大規模な土砂災害。（災害・被害の詳細については、添付資料1-1、1-2を参照）                      【教訓等】広島市佐伯区で、時間81mmという記録的な雨量をはじめ、市西北部へ激しい雨数時間に集中的に降った雨により、死傷者あわせて65名という、近年にない大規模な土砂災害が発生した。土石流が、山すそに開発された住宅地へ流れ込み、著しい被害をもたらしたことから、土石流に対するソフト対策（警戒避難措置、立地抑制策）の必要性が認識され、「土砂災害警戒区域等における土砂災害防止策の推進に関する法律」が制定された。</p>	・写真（土砂崩れ等の全景写真）	広島市で保管している写真
34100 2-1	広島県	広島市	<p>【災害名】平成17年（2005年）台風14号                      【発生日時】平成17年（2005年）9月6日、7日                      【被災地】広島市佐伯区湯来町、広島市安佐北区可部町及び安佐町                      【災害の概要】台風14号の接近により広島県西部に記録的な豪雨が降り、広島市安佐北区及び佐伯区を中心に市内各所で土砂災害や洪水が発生した。                      この集中豪雨による河川の増水のため、太田川上流域では、300棟以上の家屋が洪水により甚大な被害を受けた。                      【教訓等】太田川流域にある各雨量観測所では、降り始めからの総降雨量が平均で300mmを超えており、過去に大水害を起した昭和18年の台風、昭和47年の集中豪雨に匹敵するものであった。                      この災害では、太田川上流に設置されている温井ダムの放流と洪水の関係が問題となり、本市において独自の検証を実施したが、直接的な因果関係は確認できなかった。                      また、避難勧告や避難指示などの住民への情報伝達手段として、ダム管理者の設置する放流警報設備の活用について、協定を締結した。</p>	写真 被害状況の写真	
34100 2-2	広島県	広島市	<p>【災害名】平成13年（2001年）芸予地震                      【発生日時】平成13年3月24日                      【被災地】広島県広島市                      【災害の概要】安芸灘を震源とするマグニチュード6.7、市内の最大震度5強の地震が発生し、28名の負傷者、6,970件の民間建物被害等、全市域の広い範囲で各種の被害が生じた。（災害・被害の詳細については、添付資料1-3、1-4を参照）                      【教訓等】平成7年の兵庫県南部地震、平成12年の鳥取県西部地震に続いて起きた大きな地震であったが、広島市域の広い範囲で被害の発生した地震では、明治38年の芸予地震以来であり、兵庫県南部地震等の地震の教訓を、被災体験を通して痛感する地震であった。</p>	・写真（液状化現象、被災建物の写真）	広島市で保管している写真
34202 5-1	広島県	呉市	<p>【災害名】平成13年芸予地震                      【発生日時】2001（平成13）年3月24日                      【被災地】広島県呉市（中央・天応・昭和地区等）                      【災害の概要】平成13年芸予地震 「呉市の被害と復興への記録」参照                      【教訓等】当該災害についての伝承情報は特には無いが、災害発生以降、更に市民の防災に対する意識の高揚が図られ、「自分の身は自分で守る」という自助の必要性を痛感した。これにより、各地区で自主防災組織が結成された。</p>	・その他（冊子）	平成13年芸予地震 呉市の被害と復興への記録：平成14年7月 呉市
34202 5-2	広島県	呉市	<p>【災害名】昭和42年7月豪雨                      【発生日時】昭和42年7月7日～9日                      【被災地】広島県呉市警固屋2丁目、8丁目                      【災害の概要】本市では8日6時から12時までに49.6mmの雨が降り、その後も停滞した梅雨前線のため8日午後から夜にかけて継続的な雨が降った。9日になると16時から17時にかけて急激に強い雨が降り、時間雨量は74.7mmにも達し、山崩れ、がけ崩れ、河川の決壊、氾濫が全市にわたり、生理め171名、死者88名の大災害をもたらした。                      【教訓等】この大災害以降、あらゆる風水害を想定した総合防災訓練の実施や各地区の急傾斜地崩壊危険箇所の整備工事等が急激に進んだ。</p>		

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
34202 5-3	広島県	呉市	<p>【災害名】平成11年6月豪雨</p> <p>【発生日時】平成11年6月28日～30日</p> <p>【被災地】広島県呉市吉浦東町</p> <p>【災害の概要】28日から29日の連続雨量は、本市で184mmの大雨となった。特に29日には、73mmと記録的な短時間降雨となり、被害箇所は、山・がけ崩れ災害で399箇所にもおよび、死者8名、家屋全壊18戸等、近年にない大規模な土砂災害となった。また、被害は都市近郊の新興住宅地に集中し、都市型の土砂災害と位置付けられる。</p> <p>【教訓等】平成13年4月1日に施工された「土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律」制定の動機付けとなった。</p>	・写真	
34203 3-2	広島県	竹原市	<p>【災害名】昭和42年7月8日～9日集中豪雨</p> <p>【発生日時】昭和42年7月8日</p> <p>【被災地】竹原市吉名町、東野町、仁賀町、竹原町</p> <p>【災害の概要】7月7日からの集中豪雨により土砂災害が続出、自衛隊の出動を要請する。①人的被害 死者9名 負傷者21名 ②住家の被害 全壊56棟 半壊及び一部破損104棟 床上浸水424棟 床下浸水2713棟 ③公共の被害 河川105箇所 道路100箇所 橋梁18箇所 推定損害額658,646,000円 ④降水量 総降水量275.5mm(7日50.5mm、8日73.5mm、9日151.5mm) 時間最大雨量 9日14時～15時 36.0mm</p> <p>【教訓等】この災害を契機に急傾斜崩壊危険箇所の整備工事等が急激に進んだ。</p>		
34203 3-4	広島県	竹原市	<p>【災害名】昭和47年7月豪雨災害</p> <p>【発生日時】昭和47年7月9日～14日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】①人的被害なし ②住家の被害 床下浸水140棟 ③公共の被害 河川39箇所 道路30箇所(県11、市19) 橋梁2箇所(市2) ④停電状況 7/11 940戸 ⑤断水状況 下野町、東野町、福田町、忠海町 ⑥災害対策本部設置状況 7/10 17:20設置、7/12 18:00解散</p> <p>【教訓等】河川や道路の改修に取組み、災害の軽減に活かされている。</p>	・文献資料	昭和47年7月豪雨災害誌(広島県)
34203 3-5	広島県	竹原市	<p>【災害名】林野火災</p> <p>【発生日時】昭和53年8月31日</p> <p>【被災地】竹原市竹原町</p> <p>【災害の概要】焼損面積215ha 損害額146,446千円 自衛隊派遣有 原因：焚き火</p> <p>【教訓等】林野火災に関する知識の普及や予防対策に取り組んだ。</p>		
34203 3-6	広島県	竹原市	<p>【災害名】林野火災</p> <p>【発生日時】平成6年8月11日</p> <p>【被災地】竹原市福田町西山789(第1次) 竹原市高崎町竜王(第2次)</p> <p>【災害の概要】火災は第1次火災と第2次火災の2次にわたって発生した。第1次火災は8月11日15時33分竹原市福田町西山789から出火し、25時間47分後の8月12日17時20分に鎮圧された。しかし第1次出火の31時間34分後(鎮圧後5時間47分経過)の8月12日23時07分、強風による再燃と推定される第2次火災が竹原市高崎町竜王から出火した。第2次火災は出火後65時間53分経過した8月15日17時00分に鎮圧(第1次火災出火後97時間27分後)し、さらに117時間後の8月20日に鎮火した。第1次火災は出火から鎮圧まで25時間47分、第2次火災は出火から鎮火まで182時間53分を要しており、第1次火災の出火から第2次火災の鎮火までの時間は実に214時間27分であった。 焼失面積 (第1次火災)竹原市86ha、三原市21ha 計107ha (第2次火災)竹原市271ha 合計竹原市357ha、三原市21ha</p> <p>【教訓等】この林野火災は、水の渇水期に発生したことや強風により一旦鎮圧後、2次的に発生し、長期間に及んだ。</p>	・文献資料	竹原市山林火災と緊急砂防事業(広島県作成)
34207 6-1	広島県	福山市	<p>【災害名】福山水害</p> <p>【発生日時】大正8年7月5日</p> <p>【被災地】福山市の市街地一帯(古野上・地吹・霞・道三・野上ほか)</p> <p>【災害の概要】芦田川の堤防が決壊し、市街地が大きな被害が発生し、死者17名、流失家屋101棟、全壊家屋24棟、半壊家屋98棟、床上浸水3423棟、床下浸水1261棟が被害を受けた。</p> <p>【教訓等】芦田川堤防の決壊により発生した水害であり、この水害の抜本的な解決のため、市民と行政が団結して堤防の改修を国に対して陳情したことが語り継がれている。その後、改修が行われ災害の軽減に活かされています。</p>	・文献資料	福山水害誌 昭和9年6月5日発行 濱本鶴寛

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
34209 2-1	広島県	三次市	<p>【災害名】昭和7年豪雨災害</p> <p>【発生日時】昭和7年7月</p> <p>【被災地】作木川、香淀川沿岸（作木町上作木、下作木、香淀）</p> <p>【災害の概要】作木村発足以来初の大災害となった。作木川の災害前の川幅は現在の3分の1程度であったが、大雨により河川や道路は決壊した。（災害・被害の資料については、添付資料1-1を参照）</p> <p>【教訓等】大雨の度毎に決壊した河川や道路の復旧が村財政の最大の負担であったといわれ、この災害を機に川幅を拡張し、曲折部分の直線化など徹底的な改修と整備が行われた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・碑文（刻印文字情報）</li> <li>・写真</li> </ul>	作木村誌（平成元年10月発行）
34211 4-1	広島県	大竹市	<p>【災害名】ルース台風</p> <p>【発生日時】昭和26年10月14日～15日</p> <p>【被災地】当時大竹町、小方村、玖波町、栗谷町（現大竹市全域）</p> <p>【災害の概要】【概要】この台風は10月14日夕刻鹿児島県西部に上陸し、九州を縦断して山口県西部を経て、翌15日早朝山陰に抜けたもので、広島県下では最大風速49m、県西部（佐伯・山県郡）の降雨量も平均250ミリから300ミリで地域によっては400ミリにも達した。大竹市木野川も警戒水位（3.5m）を1.7m超えて氾濫し市域の被害も甚大なものとなった。【被害程度】死者・行方不明者20名、重軽傷者33名、全壊73戸、半壊388戸、流失90戸、床上浸水1,915戸、床下浸水1,677戸、田畑流失冠水224町、道路決壊38箇所、橋梁流失14箇所、堤防決壊18箇所【教訓等】戦後の風水害で市域に特に被害をもたらしたのは枕崎台風とルース台風である。枕崎台風は昭和20年9月16日夜半から翌17日未明にかけて西日本各地に大きな山崩れや洪水を起こし、市域の被害も大きく決定的な打撃をうけた。この災害に対処して各町村は役場内に災害対策本部を設けて、その応急措置を講じたが、その本格的復旧は丁度この頃が戦後の最も混乱した時期であったため容易に進まず、ほぼ全域の復旧を完了したのは昭和23年であるという状態であった。この教訓をもとにルース台風では、市域の町村が協力しあい、直ちに応急対策に乗り出し、罹災者への炊出しや衣料品・見舞金の支給をするなど積極的な救済活動を展開した。また、この台風の被害に対しては災害救助法が適用されたため、被害者の救済活動はこれまでにない効果をあげ、災害復旧事業もまた順調に進み、昭和32年頃にはそのほとんどを終えた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文献</li> <li>写真</li> </ul>	<p>著者：大竹市役所（大竹市史編修委員）</p> <p>タイトル：大竹市史</p> <p>発行年：昭和45年3月31日</p> <p>写真：文献に掲載してある写真</p>
34368 4-1	広島県	安芸太田町	<p>【災害名】寛政8年大水害</p> <p>【発生日時】寛政8年（1796年）7月9日（旧暦6月5日）</p> <p>【被災地】広島県安芸太田町（当時上殿河内村、加計村ほか）</p> <p>【災害の概要】6月の終わりから降り続いた大雨により、広島県北西部（安芸太田町）を中心に各所で土石流、大水被害が発生。現安芸太田町内で63人の死者。</p> <p>【教訓等】当地に残る複数の旧家の古文書に記録が残る。「このたびのツエ、みな谷々より杉の木流れ出し、押し申し候。杉は立根これなきゆえ転びやすく候」と、杉の特性を分析し、「この後、杉を植える時は、谷筋の家、田畑のこれなき方角へ植え申すべき事」と植林の方法を示唆。家を建てる時は「雪押し、水押しの場所をよく見立てるべき事」と、子孫への教訓を書き残している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	中国新聞社編「集中豪雨を追う」－昭和63年7月加計、浜田災害－ 1989年
34369 2-1	広島県	北広島町	<p>【災害名】三八豪雪</p> <p>【発生日時】昭和38年1月5日から13日</p> <p>【被災地】山県郡内一帯</p> <p>【災害の概要】大雪に見舞われ、バス路線がズタズタになり、平屋建の家屋が雪で押しつぶされ、老人が下敷きとなった。等他多数の被害あり。</p> <p>【教訓等】雪害防止対策として、「屋根の雪どけなど被害を未然に防止するための方策を立てた」、「一度に多数の人が作業することは重量等の関係から危険なため最小限の人数で除雪する」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料（町史）</li> <li>・記録フィルム</li> </ul>	町史文
34369 2-2	広島県	北広島町	<p>【災害名】四七豪雨</p> <p>【発生日時】昭和47年7月9日から13日</p> <p>【被災地】山県郡内一帯</p> <p>【災害の概要】5日間で500mm以上の降雨量となり、小河川の氾濫、主要河川の堤防決壊、建物の全半壊、流失、浸水等被害。被害総額約1億5,755万円</p> <p>【教訓等】堤防の整備、農林道、県道等の整備の重要性。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料（町史）</li> <li>・記録フィルム</li> </ul>	町史文

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
34430 3-2	広島県	瀬戸田町	<p>【災害名】安政地震                      【発生日時】安政元（1854）年11月4・5日                      【被災地】豊田郡瀬戸田町                      【災害の概要】東南海地震の記録。震源地からは遠く離れているが記録が残されている。5日の地震が大きく瀬戸田町では古い家の瓦がずり落ちたが怪我人はなかった。被害が大きかったのは塩浜で、釜家・塩蔵・炭納屋などの屋根がずり落ち、土手の石垣などに幅5、6寸から1尺もの割れ目が見えた。一部の浜では地割れが出来て泥水が噴出したといい、液状化現象が見られた。                      【教訓等】家の覚えとして、避難場所や火の用心、貴重品の取りまとめのほか座布団をかぶって飛び出す事などが書き残されている。</p>	・文献資料（古志家永記録）	瀬戸田町史資料編1997（資料番号134 p432）（生口島大地震の様子につき覚書）
35000 1-1	山口県		<p>【災害名】昭和17年台風第16号                      【発生日時】昭和17年（1942年）8月27日                      【被災地】瀬戸内海側 特に小野田市                      【災害の概要】死者行方不明者794人、負傷者559人、家屋全壊2990棟、半壊9060棟、流失1996棟、浸水42、165棟、橋流失・決壊222、道路破損67、船舶流失沈没2257隻、土砂崩れ200カ所、牛馬死231頭                      【教訓等】中国地方の周防灘及び広島湾に面した地方では満潮時と南寄の烈風が合致させるため極めて被害甚大であった。殊に小野田市を中心とする地方では被害最も甚だしく田畑、家屋、道路、船舶の破壊流出は著しく鉄道線路の埋没のため山陽線は約10日間に亘って不通となった。</p>	・文献資料	・下関測候所「山口県災異誌」昭和28年3月10日
35000 1-1	山口県	山口県	<p>【災害名】昭和28年水害                      【発生日時】昭和28年6月25日～29日                      【被災地】主に県南西部                      【災害の概要】死者25人、負傷者196人、家屋全壊129棟、半壊515棟、流失41棟、一部破損308棟、床上浸水8、302棟、床下浸水20、699棟、道路損壊727、橋流失175、堤防決壊430、がけ崩れ989、鉄軌道14、通信施設2                      【教訓等】南下中の梅雨前線は25日になって活発化しながら北上し25日の夜は九州北部から四国南岸に沿って停滞し、26日の朝までに140mmから160mmを記録した。27日には別の低気圧が現れ四国南岸にあった前線を強めながら北上させ28日夜までは強い雨が降り続いた。25日から29日までの総雨量は下関で528.9mmを記録し河川の氾濫や交通、通信機関の途絶、関門トンネルも浸水して不通になった。県内10市町村が災害救助法の適用を受けた。</p>	・文献資料	山口県「山口県災異誌（続編）」昭和39年11月20日
35000 1-2	山口県		<p>【災害名】昭和20年 枕崎台風                      【発生日時】昭和20年（1945年）9月17日                      【被災地】県内全域 特に東部地方                      【災害の概要】死者行方不明者701人、負傷者283人、家屋全壊1330棟、半壊2760棟、流失501棟、床上浸水12、679棟、床下浸水18、442棟、橋流失・決壊337、道路破損1108、船舶流失沈没745隻、堤防欠損860カ所                      【教訓等】鹿児島島の枕崎付近に上陸した台風は九州東岸にでて大分付近で二つに分裂し一つは山口県平生の西方に上陸し一つは今治市北方に進んだ。この台風による被害は莫大なものであった。山口県もこの台風が通ったためまれにみる風水害を被った。殊に顕著な被害は水害によるもので大津郡や岩国市方面が最も多く（降雨量200～300mm以上の地帯がこの方面にあたっている。河川は氾濫し特に島田川の氾濫はものすごかった。</p>	・文献資料	・下関測候所「山口県災異誌」昭和28年3月10日
35000 1-2	山口県	山口県	<p>【災害名】昭和29年水害                      【発生日時】昭和29年7月4日～5日                      【被災地】県下全域                      【災害の概要】死者26人、行方不明7人、負傷者55人、建物全壊41棟、半壊100棟、流失2棟、一部損壊29棟、床上浸水3、125棟、床下浸水12、229棟、道路損壊663、橋流失140、堤防決壊435、がけ崩れ603、鉄軌道29、通信施設13、船舶流失8                      【教訓等】2日から3日の朝にかけて梅雨前線の北上で40mm～50mmの雨が降った。4日には黄海の低気圧が東進し南下していた前線は福岡県北東部までふたたび北上し停滞した。山陰沖に発生した低気圧により前線が活発化し、豪雨となった。防府では1時間に58.7mmを記録した。各地で日雨量が200mmを越す大雨となり4日の20時頃から水害が発生しはじめた。死傷者は山崩れによる下敷きや、美祢市の炭坑での坑内浸水による生き埋めなどによるものであった。5市町村が災害救助法の適用を受ける。</p>	・文献資料	山口県「山口県災異誌（続編）」昭和39年11月20日

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
35000 1-3	山口 県		<p>【災害名】昭和26年 ルース台風</p> <p>【発生日時】昭和26年（1951年）10月14日</p> <p>【被災地】</p> <p>【災害の概要】死者行方不明者405人、負傷者1,869人、家屋全壊3,707棟、半壊9,765棟、流失1,256棟、床上浸水7,827棟、床下浸水28,163棟</p> <p>【教訓等】山口県の中部を横切り15日の早朝山陰を経て北陸沖に去った。県下では最大風速35m/sに達し、県東部では13日14日の総雨量480mmにおよび1時間雨量100mmに達する豪雨があった。各河川は氾濫し人畜家屋の被った被害は勿論、堤防の決壊、土砂の崩壊等県下全般に亘り悲惨なる大災害を発生した。この中で最も甚だしかったのは錦川流域で、山崩れや未曾有の出水により筆舌につくし得ない被害があった。</p>		・下関測候所「山口県災異誌」昭和28年3月10日
35000 1-3	山口 県	山口 県	<p>【災害名】昭和29年台風第12号</p> <p>【発生日時】昭和29年9月13日～14日</p> <p>【被災地】県下全域</p> <p>【災害の概要】死者1人、負傷者4人、建物全壊64棟、半壊199棟、流失21棟、一部損壊286棟、床上浸水7,135棟、床上浸水13,210棟、道路損壊181、橋流失15、堤防決壊165、がけ崩れ39、鉄軌道6、通信施設16、船舶沈没23、船舶流失4、船舶破損104</p> <p>【教訓等】台風は九州を縦断し、14日0時頃下関のすぐ西を通り、1時頃日本海に抜けまっすぐ北上し大陸へ向かった。13日21時頃から14日2時頃まで瀬戸内海沿岸では満潮時と重なり高潮が押し寄せかなりの被害が続出した。関係機関が事前に防災対策に取り組んだため相当な被害があったわりに人の被害が少なかった。7市町村が災害救助法の適用を受けた。</p>	・文献資料	山口県「山口県災異誌（続編）」昭和39年11月20日
35000 1-4	山口 県	山口 県	<p>【災害名】昭和30年台風第22号</p> <p>【発生日時】昭和30年9月29日～30日</p> <p>【被災地】県南部及び東部</p> <p>【災害の概要】死者66人、負傷者51人、行方不明5人、建物全壊319棟、半壊855棟、流失74棟、一部損壊7,258棟、床上浸水4,990棟、床下浸水10,736棟、道路損壊252、橋流失30、堤防決壊229、がけ崩れ31、鉄軌道12、通信施設279、船舶沈没202、船舶流失41、船舶破損452</p> <p>【教訓等】台風は29日22時過ぎ、薩摩半島に上陸し九州を縦断のうえ、下関の西方海上を通り山陰沖を加速しながら北東へ進んだ。下関西方を通った頃は中心の気圧が975mbで風速20m/s以上の強風半径は台風を中心から250kmに達したので、県の西部では家が倒れ、死傷者が出るなど、また、瀬戸内側では東ないし南東の強風で高潮や大波が打ち寄せ、多くの被害が発生した。雨は28日から降り始め、29日の日雨量は山間地で150mm～200mmの大雨となり、河川が増水するなどの被害が発生した。12市町村が災害救助法の適用を受けた。</p>	・文献資料	山口県「山口県災異誌（続編）」昭和39年11月20日
35000 1-5	山口 県	山口 県	<p>【災害名】昭和38年雪害</p> <p>【発生日時】昭和38年1月1日～2月13日</p> <p>【被災地】県央部を中心とした山間部</p> <p>【災害の概要】死者10人、負傷者11人、住家全壊66棟、半壊938棟、河川道路破損348、鉄軌道1206、なだれ発生7箇所</p> <p>【教訓等】1月1日、低気圧が日本海で発達し西高東低の気圧配置となるとともに北西の季節風が強まり寒気が南下して雪が降った。2日には中国の北東部から南下した次の低気圧が日本海に入り、さらに寒気を南下させたため雪が降り続いた。3、4日は一時小康状態になったが、5日にはまた、大陸から南下した低気圧が日本海に入って発達し、季節風が強まった。このころから2月13日にかけて本邦付近は深い気圧の谷となり、低気圧が継続的に日本海に入って発達した。これらの低気圧に吹き込む強い北西風を追って次々に新しい寒気が南下して連日雪を降らせ、記録的な豪雪となった。</p>	・文献資料	山口県「山口県災異誌（第3巻）」昭和47年4月1日
35000 1-6	山口 県	山口 県	<p>【災害名】昭和47年水害</p> <p>【発生日時】昭和47年7月9日～13日</p> <p>【被災地】県内全域</p> <p>【災害の概要】死者17人、重傷21人、軽傷31人、住家全壊84棟、半壊141棟、一部損壊9,144、床上浸水3,098、床下浸水22,104棟、河川被害3,833、土砂崩れ255、道路被害6,106、橋梁94</p> <p>【教訓等】9日には梅雨前線は朝鮮半島中部からゆっくり南下し県北部で強い雨を降らせ、10日には九州北岸に停滞し前線を小さな低気圧が次々に通過し県東部と西部で大雨が降った。11日から12日にかけては前線が対馬海峡南部にかけて停滞し、県内各地で大雨を降らせた。11日の降水量の最多地域は県北西部で、総降水量は約500mm前後、県中部でも400mmに達した。このため山・がけ崩れなどの災害が多発した。</p>	・文献資料	山口県「山口県災異誌（第4巻）」昭和58年4月1日

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
35000 1-7	山口県	山口県	<p>【災害名】平成3年台風第19号</p> <p>【発生日時】平成3年9月27日～28日</p> <p>【被災地】県内全域</p> <p>【災害の概要】死者6人、重傷30人、軽傷209人、住家全壊35棟、半壊650棟、一部損壊36,018棟、床上浸水520棟、2,835棟、農林被害238億円、水産被害69億円、土木被害102億円、衛生施設被害6億円、商工被害75億円、文教施設被害19億円、その他4億円、停電被害654,000戸（県内の84%）</p> <p>【教訓等】中心気圧940hPa、中心付近の最大風速50m/s、暴風域の半径300kmの「大型で非常に強い」勢力を保ったまま27日18時30分頃県北西部を通過した。暴風域・強風域が広いまま通過したため、長時間にわたって強い風が吹き続けた。最大瞬間風速は山口で53.1m/s。吹き返しの風も強く萩の最大瞬間風速は45.6m/sを記録した。雨は26日夜から28日明け方まで降り続き各地で時間20mm以上を記録し、27日は特に西部、北部で激しく降り、萩では18時～19時に58mmを記録した。台風の高潮による瞬間最高潮位は27日21時47分に448cmに達した。瀬戸内海沿岸部では台風通過時に南よりの風が非常に強く、高潮、高波による被害が発生した。</p>	・文献資料	山口県「山口県災異誌（第5巻）」平成6年3月
35000 1-8	山口県	山口県	<p>【災害名】平成11年台風第18号</p> <p>【発生日時】平成11年9月24日</p> <p>【被災地】県下全域</p> <p>【災害の概要】死者3人、重傷25人、軽傷154人、住家全壊80棟、半壊1,284棟、一部損壊10,741棟、床上浸水2,468棟、床下浸水7,372棟、農林被害100億円、水産被害40億円、土木被害211億円、文教施設被害18億円、その他40億円</p> <p>【教訓等】台風第18号は九州北部を横断し、一旦周防灘へ抜けた後、24日8時過ぎに宇部市に再上陸し、山口県を縦断したため、各地に暴風雨による被害を与えたうえ、上陸が大潮の満潮時と重なったため、瀬戸内海沿岸では記録的な高潮をもたらした。最大瞬間風速は下関で46.4m/s、最大1時間降水量は篠生で73mmを記録した。</p>	・文献資料	「平成11・12年の災害」山口県総務部消防防災課
35000 1-9	山口県	山口県	<p>【災害名】平成16年台風第18号</p> <p>【発生日時】平成16年9月7日</p> <p>【被災地】県下全域</p> <p>【災害の概要】死者23人・行方不明3人（インドネシア船籍貨物船海難事故による死者19人、行方不明者3人を含む）、重傷10人、軽傷167人、住家全壊40棟、半壊526棟、一部損壊17,567棟、床上浸水82棟、床下浸水580棟、農林水産被害97億円、商工被害15億円、公共土木施設被害42億円、文教施設被害7億円、その他28億円、停電被害56万戸</p> <p>【教訓等】「大型で強い」台風18号は、佐賀県・福岡県を通過後、12時頃響灘に抜け、山口県の北西部をかすめて日本海へ進んだ。7日昼前から夕方まで暴風域内に入り最大瞬間風速は山口で50.5m/sを記録した。また、徳佐などで日雨量100mmを超え、1時間雨量も50mmを超える大雨となり、山口で72mmを記録した。潮位偏差は7日未明から大きくなり始め7日13時前に最大120cmとなった。1週間ほど前に台風第16号が防府に上陸し被害が発生したばかりであり、大きな被害となった。</p>		
35201 2-1	山口県	下関市	<p>【災害名】長府大火</p> <p>【発生日時】昭和22年10月17日</p> <p>【被災地】長府地区（土居の内町、中之町、惣社町、壇具川周辺等）</p> <p>【災害の概要】午後3時50分ころ、油の引火が原因で長府土居の内町の民家から出火。広範囲な大火となり、687棟を焼失。被災者2406人、負傷者21人という大惨事となった。</p> <p>【教訓等】当時長府に駐留していたニュージーランド兵も消火作業にあたったが、密集地と消火機材の不備からこのような大火となった。</p>	・文献資料	タイトル：下関市史 終戦～現在著者：下関市 発行年：昭和62年 P905

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
35202 1-1	山口県	宇部市	<p>【災害名】昭和17年台風16号(周防灘台風)</p> <p>【発生日時】昭和17年(1942年)8月27日</p> <p>【被災地】厚南、藤山(居能、平原、岩鼻)、岬(八王子)、亀浦、草江</p> <p>【災害の概要】8月27日夜に来襲した台風は、山口県西方を北上する最悪のコースを通過し、最接近時が満潮時と重なったことも相まって、高潮により厚東川の堤防が決壊し、甚大な被害をもたらした。死者297人、負傷者118人、全壊543棟、半壊643棟、床上浸水5,082棟、床下浸水10,201棟</p> <p>【教訓等】大水害から50回忌の節目には、先人の受けた悲惨な被害とその後の苦難について、次世代に語り継ぐため、追悼記念碑の設置及び有志により「厚南大風水害の思い出 五十回忌追悼記念誌」が編集された。また、妻崎神社内には、当時の高潮の潮位を示した記念碑が、設置されている。周防灘台風は、宇部市における大災害として語り継がれ、被災地区の自主防災組織結成の契機になるなど、現在もその教訓が活かされている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> <li>・追悼碑全景及び被災状況の写真</li> </ul>	<p>①「厚南大風水害の思い出 五十回忌追悼記念誌」厚南風水害受難追悼記念事業実行委員会 平成4年発行</p> <p>②昭和17年8月27日台風高潮調査報告 中央気象台編 昭和19年10月 中央気象台発行</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・妻崎神社境内「追悼碑建立趣意」</li> <li>・追悼碑全景は宇部市で撮影、被災状況は市立図書館附設資料館蔵の記録ファイルをデータ化したもの</li> </ul>
35202 1-2	山口県	宇部市	<p>【災害名】平成11年台風18号(パート台風)</p> <p>【発生日時】平成11年(1999年)9月24日</p> <p>【被災地】東岐波、西岐波、恩田、新川</p> <p>【災害の概要】九州北部を横断した台風は、周防灘を抜けた後、宇部市付近に上陸した。上陸時が大潮満潮時と重なったため、沿岸部を中心に高潮・高波による浸水・家屋被害が頻発し、高潮の影響による河川氾濫も市内各所で発生、甚大な被害をもたらした。山口宇部空港では、防波堤が壊れターミナルビルが海水に浸かったため、空港の全機能が停止した。</p> <p>【教訓等】この台風による教訓から、高潮情報の収集システムを導入し、防災対策に活用している。また、防災情報の伝達・交換・収集手段の一つとして、平成12年から「宇部市防災メーリングリスト」を開設。平成17年1月からは名称を「宇部市防災メール」に変更し、市民向けに防災情報を配信している。この台風の経験を機に、自主防災活動の機運も高まり、実際に組織が結成されるなど、地域の防災力は確実に向上した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・被災状況の写真</li> </ul>	<p>①「周防高潮」山口県土木建築部河川課発行</p> <p>②気象庁技術報告 第122号 平成11年(1999年)台風18号高潮災害調査報告 平成12年12月 気象庁発行</p> <p>宇部市保存の写真記録</p>
35204 7-10	山口県	萩市	<p>【災害名】台風第19号</p> <p>【発生日時】平成3年9月27日</p> <p>【被災地】福栄地域全域</p> <p>【災害の概要】萩の観測所では最大瞬間風速50m/sを超えていたという。雨量も18時から19時の1時間に63mmを記録している。家屋全壊2棟、半壊2棟、一部損壊4棟、他に屋根瓦等一部損壊多数。農作物被害、水稲倒伏30ha、メロン3600万円、白菜32ha5850万円、ナス・果樹2000万円、ハウス施設6500万円、林業関係110ha2億9000万円、村道崩壊15箇所3600万円。</p> <p>【教訓等】近年にない強力な台風で、村内全域で甚大な被害を受ける。災害対策本部を設置し被害状況等の情報収集や応急対策を実施する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>「続福栄村史」 P512～P514</p> <p>発行日：平成17年3月5日発行</p> <p>編者：続福栄村史編纂委員会</p> <p>発行者：福栄村</p>
35204 7-11	山口県	萩市	<p>【災害名】台風9号</p> <p>【発生日時】平成9年7月26日～28日</p> <p>【被災地】福栄地域全域</p> <p>【災害の概要】総雨量は478.5mmとなり、福井上地区では電話不通等の被害も発生した。この災害での被害状況は、道路、河川、農地、家屋、農作物等に県関係で約7億円、村関係が約23億円となり総額30億円に及ぶ被害となった。特に本年の災害で旧大井川発電所跡地を整備して設置した村の施設「滝の里キャンプ場」のバンガロー3棟、炊事棟1棟、テントサイト5基分、更に発電所跡を記念して中国電力(株)より寄贈された発電機1基などが完全に流失した。残念ながらこれらの施設は復旧困難となり、キャンプ場を閉鎖することとなった。</p> <p>【教訓等】7月26日から降り始めた雨は、各所に被害が多発した。村は災害対策本部を設置し、住民の避難勧告を59世帯142人に出す等異常事態となったが、幸い人的被害はなかった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>「続福栄村史」 P515～P516</p> <p>発行日：平成17年3月5日発行</p> <p>編者：続福栄村史編纂委員会</p> <p>発行者：福栄村</p>
35204 7-4	山口県	萩市	<p>【災害名】大井水害(台風第9号)</p> <p>【発生日時】平成9年7月26日～28日</p> <p>【被災地】萩地域(大井市場、庄屋、門前、本郷、坂本)</p> <p>【災害の概要】台風第9号による降水量は、萩市では218mmを記録し、阿武町福賀では、年間降水量のはぼ2分の1に相当する931mmもの豪雨を記録し、下流にあたる大井地区に大井川の増水、堤防の決壊等により田畑等の冠水、家屋等への浸水等多大な被害をもたらした。具体的には、大井川市橋付近の護岸が決壊し、流入支流への逆流と破堤により両岸広範囲に浸水。床上浸水13世帯39人、床下浸水11世帯39人、避難勧告7世帯23人、田畑等(冠水面積100.7ha)への浸水被害</p> <p>【教訓等】浸水被害等のおそれのある住民に避難勧告を実施。昭和56年以来となる萩市災害対策本部を設置し、また、大井出張所に現地災害対策本部を設置し、情報収集や応急対策の実施、避難者への食料、飲料水、毛布等の供給を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料(台風第9号災害記録誌)</li> </ul>	<p>「山口県災害記録誌」発行日：平成9年10月 発行者：山口県土木建築部</p>



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
35204 7-7	山口県	萩市	<p>【災害名】山陰集中豪雨</p> <p>【発生日時】昭和58年7月23日</p> <p>【被災地】田万川、須佐地域全域</p> <p>【災害の概要】田万川地区では23日の0時から9時までの降水量326.5mmを記録し、特に6時から7時までの1時間に83mmを記録した。須佐地区では20日からの連続雨量が408mmに達し、最大時間雨量52mmを記録した。</p> <p>【教訓等】田万川地域では死者2名、須佐地域で死者4名、その他重軽傷者、家屋の全半壊、床上床下浸水、田畑の流出埋没、水路・河川・道路被害、断水、停電等の被害が発生。旧田万川町では7月23日を田万川町民の防災の日と制定した。旧須佐町でも当時のことは住民の記憶として鮮明に残っており、災害発生時に適切な対応、体制がとれるよう、須佐地域総合防災訓練を毎年実施している。</p>	・文献資料	災害報告書（山口県総務部消防防災課）
35206 3-1	山口県	防府市	<p>【災害名】大正7年の佐波川大水害</p> <p>【発生日時】大正7年7月11日</p> <p>【被災地】防府市</p> <p>【災害の概要】台風による豪雨で佐波川が増水、氾濫し、1町7村（当時。現防府市域）で死者3名、行方不明4名。全半壊72戸、浸水約2300戸の被害となった。</p> <p>【教訓等】この災害を契機に、山口県は大正8年、「河川ニ関スル水防準備規定」を發布し、早急に水防準備を要する町村を指定した。また佐波川流域の町村はそれぞれ水防組を設置した。大正10年、国の第二次治水計画で佐波川は国の直轄河川に選ばれ、河川の改修工事が行われることが定められた。</p>	・文献資料（指定する頁の範囲）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防府市『防府市史』資料Ⅰ 1994 p194</li> <li>・防府市『防府市史』通史Ⅲ 1998 p379-380</li> <li>・小野郷土史研究会『ふるさと小野』 1989 p31-32</li> </ul>
35206 3-2	山口県	防府市	<p>【災害名】昭和17年台風16号</p> <p>【発生日時】昭和17年8月27日</p> <p>【被災地】山口県防府市</p> <p>【災害の概要】昭和17年8月27日、風速36.7mの台風が直撃。折からの満潮時と重なり、各所で海岸堤防が高潮で決壊し、江戸時代以降に干拓等で築かれた市南部の土地が浸水した。</p> <p>【教訓等】この台風は、太平洋戦争で気象情報が軍事機密とされたため、多くの住民が台風接近を知らされたのは直前で、十分な対策がとれないうちに災害に巻き込まれた。また、高潮による沿岸部の浸水で当時防府市の基幹産業であった塩業の関連施設が甚大な被害を受け、人員・物資の不足もあって復旧には終戦後までかかった。</p>	・文献資料（指定する頁の範囲）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防府市『防府市史』資料Ⅰ 1994 p200</li> <li>・防府市『防府市史』通史Ⅲ 1998 p380-382</li> </ul>
35206 3-3	山口県	防府市	<p>【災害名】佐波川洪水</p> <p>【発生日時】昭和26年7月10日</p> <p>【被災地】防府市大字下右田、上右田、小野地区（当時佐波郡小野村）</p> <p>【災害の概要】昭和26年7月10日、梅雨前線の停滞による集中豪雨で佐波川が氾濫、佐波郡小野村（当時）、防府市域（当時）右田地区の堤防が相次いで決壊した。</p> <p>【教訓等】この災害の被害は旧小野村域、右田地区に集中した。防府市域でも右田地区の対岸は既に堤防改修がなされており、被害を免れた。この洪水がきっかけとなって、佐波川の改修や堤防の改良、佐波川ダムの整備が進められた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料（指定する頁の範囲）</li> <li>・写真（石碑全景をとらえた写真）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防府市『防府市史』資料Ⅰ 1994 p200</li> <li>・防府市『防府市史』通史Ⅲ 1998 p735</li> <li>・小野郷土史研究会『ふるさと小野』第2号 1989 p32-40</li> <li>・石碑『昭和二十六年佐波川大洪水最高水位』デジカメによる写真画像1点</li> </ul>
35206 3-5	山口県	防府市	<p>【災害名】平成3年台風19号</p> <p>【発生日時】平成3年9月27日</p> <p>【被災地】防府市域全体</p> <p>【災害の概要】平成3年9月27日、中心気圧935hPaの台風19号が山口県西部を通過した。最大風速は、航空自衛隊防府北基地気象隊の風速計で58.1mを記録した。</p> <p>【教訓等】市内では、高圧送電鉄塔が三本倒壊し、約300本の電柱が倒れ、各所で配電線や電話回線が切断された。市内の広い範囲で停電・断水が発生し、市民生活に多大な影響を与えた。停電が一週間に及ぶ地域も出た。多くの人々にとっては未曾有の災害体験となった。</p>	・文献資料（指定する頁の範囲）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防府市『防府市史』資料Ⅰ 1994 p212</li> <li>・防府市『防府市史』通史Ⅲ 1998 p736-737</li> </ul>
35206 3-6	山口県	防府市	<p>【災害名】平成5年の集中豪雨</p> <p>【発生日時】平成5年8月2日</p> <p>【被災地】防府市</p> <p>【災害の概要】7月末から断続的に激しい雨が続けていたが、8月2日、1日の降水量が200ミリを超え、各所で山崩れや浸水が発生した。</p> <p>【教訓等】この災害では、山沿いの社寺で土砂崩れなどによる建物や文化財への被害が相次いだ。阿弥陀寺では土石流による経蔵の倒壊で大般若経が被災し、凍結保存・真空凍結乾燥による修復事業が行われた。</p>	・文献資料（指定する頁の範囲）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防府市『防府市史』通史Ⅲ 1998 p737</li> <li>・東大寺別院阿弥陀寺「『版本大般若経』保存修理事業報告書」 2001</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
36000 7-1	徳島県		【災害名】南海地震津波 【発生日時】天武13年(684年)の津波から 昭和21年(1946年)の南海地震津波 【被災地】海南町浅川 【災害の概要】 【教訓等】被害の風化を防ぐため、小学校用の副読本として、南海地震津波を題材にした絵本「シロのないた海」を作成した。	・文献資料	海南町：「シロのないた海」
36000 7-2	徳島県		【災害名】宝永4年地震・津波 【発生日時】宝永4年10月4日(1707年) 【被災地】徳島県(宍喰町)(海南町浅川)(牟岐町)等 【災害の概要】紀伊半島沖を震源とする巨大地震(マグニチュード8.4)牟岐では津波により700戸余りが流失、百余名の溺死者があった(南海道地震津波の記録「海が吠えた日」の文章より)。 【教訓等】特になし	・文献資料	徳島県牟岐町：津波災害史(タイトル)南海道地震津波の記録 海が吠えた日(発行年)平成8年12月21日 牟岐町教育委員会
36000 7-3	徳島県		【災害名】安政東海地震 【発生日時】嘉永7年(1854年)12月24日 【被災地】徳島県 牟岐町 宍喰町 【災害の概要】遠州灘を震源とする(マグニチュード8.4)の地震。その32時間後、前日と同じ地震の規模をもつ巨大地震が紀伊半島沖で発生した。後の地震は「安政南海地震」と呼ばれている。 【教訓等】特になし	・文献資料	徳島県牟岐町：津波災害史(タイトル)南海道地震津波の記録 海が吠えた日(発行年)平成8年12月21日 牟岐町教育委員会
36000 7-4	徳島県		【災害名】南海道大地震 【発生日時】昭和21年12月21日 【被災地】徳島県(牟岐町、由岐町、宍喰町、海南町) 【災害の概要】紀伊半島沖で地震発生(マグニチュード8.0)。津波の高さは平均海面上4.5mに達した。 【教訓等】大地震のあった時は、火の始末をし、津波がくるので一分でも早く避難場所へ逃げる。 (常に避難場所を考え、防災グッズを準備すること。)	・文献資料	徳島県牟岐町：津波災害史(タイトル)南海道地震津波の記録 海が吠えた日(発行年)平成8年12月21日 牟岐町教育委員会
36203 4-1	徳島県	小松島市	【災害名】安政地震津波 【発生日時】安政元年(1854年)11月4日朝～5日夕 【被災地】徳島県小松島市(碑文 小松島市赤石町赤石97) 【災害の概要】安政地震災害 【教訓等】史実からの教訓 ①消火活動時に津波の噂があり、現場を放棄して避難、多くの家屋を消失した。教訓：災害時(正確な情報の不足する時期)には、噂(流言)がつきものである。 ②安政地震(M8.4)の津波において、白楽天王(現豊浦神社)を津波避難場所として活用した。教訓：東南海・南海地震(想定規模M8.4程度)でも避難場所として活用ができる。(神社・仏閣のある場所は、比較的高台にある) ③12時間後の余震の揺れが大きかった。	・文献資料 ・碑文(刻印文字情報 提供元 日本石仏協会) ・石碑全景をとらえた写真 ・その他	・徳島県小松島市：小松島市新風土記 p.62-63添付 ・石碑 ・石碑の補足説明資料
36341 3-1	徳島県	石井町	【災害名】吉野川の洪水 【発生日時】明治21年(1888)7月31日 【被災地】徳島県西郡石井町藍畑字西覚円(当時西覚円村) 【災害の概要】西覚円吉野川堤防破堤 破堤の延長約660m 【教訓等】明治19年から堤防工事が行われていた。この工事の弱い箇所の破堤が直接の原因でこの破堤の箇所は現在の高瀬橋の上手にある。破堤の直接の原因は堤防工事の防御不足であった。この破害に対し宮内庁は金500円、政府は7万円の国費を支出している。また義捐金は3,000円余りが集められた。	・文献資料	石井町史(下巻)第6章 公・安 1991.2.21発行 P335～P341
36385 5-1	徳島県	海部町	【災害名】1605年慶長の津波、1707年宝永地震津波 【発生日時】慶長9年12月16日、宝永4年10月4日 【被災地】鞆浦 【災害の概要】津波 【教訓等】地震津波による被害を後世に伝えるため、石碑が建立された。	・碑文	津波碑
36385 5-2	徳島県	海部町	【災害名】1854年安政南海地震津波 【発生日時】 【被災地】鞆浦 【災害の概要】津波 【教訓等】地震津波による被害を後世に伝えるため、石碑が建立された。	・碑文	鞆浦海嘯記
36386 3-1	徳島県	宍喰町	【災害名】昭和南海地震津波 【発生日時】昭和21年12月21日 【被災地】徳島県宍喰町 【災害の概要】南海地震マグニチュード7.8、最大波高4m、死者9名 【教訓等】	・文献資料	田井晴代さん宅にある過去の宍喰町における地震の記録

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
36402 9-1	徳島県	北島町	<p>【災害名】大正元年の大水</p> <p>【発生日時】大正元年（1912年）9月21日～22日</p> <p>【被災地】徳島県</p> <p>【災害の概要】22日夜半前に徳島県南岸をかすめて阪神地区に上陸したAクラスの台風で全国的な被害を発生させた。（災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照）</p> <p>【教訓等】北島町では昭和3年に吉野川の堤防改修工事が完了するまでは、吉野川の洪水に度々悩まされてきた。その中でも大正元年の大水の冠水量はかなり深かったと伝えられている。災害発生からかなりの時間が経過しているが、標柱を設置して「災害は忘れた頃にやってくる」という教訓を忘れないよう当時の冠水位痕跡の現実を後世にまで伝承している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・碑文</li> <li>・写真</li> </ul>	北島町史（編集：北島町史編纂委員 発行：昭和50年3月31日）
36403 7-1	徳島県	藍住町	<p>【災害名】台風17号</p> <p>【発生日時】昭和51年</p> <p>【被災地】奥野、勝瑞地区</p> <p>【災害の概要】昭和51年9月に台風17号が県内を襲い、藍住町でも床上浸水30戸、床下浸水534戸の被害が出た。</p> <p>【教訓等】藍住町を流れる正法寺川が氾濫し、付近の団地が床上浸水したため、避難勧告を発令した。これ以降、正法寺川の改修工事が行われ、避難時の毛布等の備蓄にも取り組むようになった。なお、避難勧告は後にも先にもこの時しか出されていない。</p>		
38201 9-1	愛媛県	松山市	<p>【災害名】1968年日向灘地震</p> <p>【発生日時】昭和43年（1968年）4月1日</p> <p>【被災地】高知県、愛媛県、他近県</p> <p>【災害の概要】震央：日向灘 マグニチュード：7.5 松山の震度：4 松山市で負傷者2名、停電約42,000戸（松山2、三崎1）、御荘町で養殖真珠施設500台、西海町では港湾施設20ヶ所などの被害。高知・愛媛で被害多く、負傷者15名、住家全壊1棟、住家半壊2棟、道路損壊18箇所など。小津波があった。</p> <p>【教訓等】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	愛媛県松山市：松山市地域防災計画 2001 p20～22
38201 9-2	愛媛県	松山市	<p>【災害名】平成13年（2001年）芸予地震</p> <p>【発生日時】平成13年（2001年）3月24日</p> <p>【被災地】広島県、愛媛県、山口県、他近県</p> <p>【災害の概要】震央：安芸灘 マグニチュード：6.7 松山の震度：5強 明治38年以来の芸予地震。広島県の河内、大崎、熊野で震度6弱。県内では松山、今治などで震度5強。松山市では負傷者50名、住家半壊19棟。一部破損2000棟以上。</p> <p>【教訓等】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	愛媛県松山市：松山市地域防災計画 2001 p20～22
38506 9-1	愛媛県	愛南町	<p>【災害名】安政大地震</p> <p>【発生日時】1855年11月</p> <p>【被災地】愛南町（旧城辺町垣内、岩水、一本松町満倉）</p> <p>【災害の概要】安政二年の大地震</p> <p>【教訓等】1854年（安政元）に地震があり、翌年11月に大地震となった。地震は、天地をゆさぶる如く鳴動し小刻みに震え続けて七日七夜に及び、住民は竹やぶに逃れて日夜を明かしたという。この地震は津波をも誘発し、満倉に至っては満倉橋から500m以上の上流まで海水が逆上し、山間に多くの漁船が打ち上げられたが、死者のなかったことは不幸中の幸いである。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	城辺町詩、1966年発行
38506 9-2	愛媛県	愛南町	<p>【災害名】大洪水</p> <p>【発生日時】1920年7月20日（旧）</p> <p>【被災地】愛南町（旧城辺町大浜）</p> <p>【災害の概要】大正9年の大洪水</p> <p>【教訓等】1920年（大正9年）7月2日（旧）、にわかにかきくもって降り出した大粒の雨は、まるで天空から水をうつすように音をたてて、2～3時間降り続き、蓮乗寺川はあふれ、僧都川は至る所堤防が決壊し、僧都橋、平城の観栄橋が相次いで落橋した。この集中豪雨のため、大浜地区では、山の八合目からおし流れふきだした山津波により、三名の死者をだし、当時60戸あった戸数もこの災害により多くの人たちが部落を離れた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真（山津波による被害状況が町詩に掲載）</li> </ul>	城辺町詩、1966年発行
38506 9-3	愛媛県	愛南町	<p>【災害名】大洪水</p> <p>【発生日時】1943年7月21日～26日</p> <p>【被災地】愛南町（旧城辺町内、久良）</p> <p>【災害の概要】昭和18年の大洪水</p> <p>【教訓等】7月21日から26日まで降り続いた大雨は、僧都川の水位はみるみる高まり警戒水位を越え、堤防が2ヶ所崩壊し、城辺市街の民家はすべて床上浸水した。7月22日の夕方には、久良の真浦地区で山が突如崩れ、7人の尊い人命が失われた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真（山津波による被害状況が町詩に掲載）</li> </ul>	城辺町詩、1966年発行

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
39000 3-01	高知県		<p>【災害名】南海地震                      【発生日時】1946年(昭和21年)午前4時19分                      【被災地】中部以西                      【災害の概要】南海道沖において、マグニチュード8.0で発生し、その津波は静岡県より九州にいたる海岸に襲撃して、高知・徳島・三重沿岸で4～6mに達し、被害は中部以西の日本各地にわたる惨事となった。                      【教訓等】即刻山へ逃げた人は助かったが、家財を取りに帰った人や船に乗って逃げようとした人々は津波で命を失ったこと。また、流れてきた衣服などを拾って着用した人は、後で疫病に罹って死んだことが刻されている。(土佐市宇佐町萩谷地区石碑)</p>	・文献資料	「南海地震の碑を訪ねて」石碑・古文書に残る津波の恐怖 毎日新聞高知支局 平成14年11月18日発行
39000 3-02	高知県		<p>【災害名】南海地震                      【発生日時】昭和21年(1946年)12月21日                      【被災地】県下全域                      【災害の概要】突如として襲ってきた大地震は大規模なものであって、その被害は県下全域に亘り一瞬にして六百八十の尊い人命と二万五千の家屋四千町歩の耕地が失われ、九万五千の罹災者を出した外、津波は凶暴をたくましくして沿岸地方の至る所、道路、橋梁の流失、堤防の決壊、港湾の破壊数知れず、八十万県民はただ茫然として為すところを知らぬ状態に陥った。                      【教訓等】(1) 最初の一瞬間に非常の地震かどうか判断してその時々々の状態に応じて適切な案をたてること(2) 数秒間のうちに広場へ出られる見込みがあるならば、すばやく飛び出すのがよい。但し火の用心は忘れないこと(3) 二階建て、三階建ての木造家屋では階上の方が危険が少ない(4) 屋内の一時避難の場所としては、丈夫な家具のそばがよい。学校の教室では机の下が最も安全である。木造家屋内では桁や梁の下をさけること(5) 屋外では、屋根瓦、壁が落ちる恐れのある区域や石垣、煉瓦塀、煙突等の恐れのある場所から遠ざかること。特に石灯籠のそばへ寄ってはいけない(6) 海岸においては津波がやってくる場所を警戒すること。山間では崖崩れや山津波に注意を怠らないこと。</p>	・文献資料	南海大震災誌 発行：高知県 昭和24年12月21日発行
39000 3-03	高知県		<p>【災害名】南海地震                      【発生日時】昭和21年(1946年)12月21日                      【被災地】県下全域                      【災害の概要】マグニチュード8.1の激震は、県下に死者六百七十人、負傷者千八百三十六人、行方不明九人、全壊家屋五千四百十八戸、半壊家屋九千九百六十六戸、流失五百六十六戸、浸水七千十三戸、焼失百九十六戸、罹災者九万三千二百五十九人の甚大な被害を残した。この地震で被害が最も大きかったのは中村市で死傷者千三百十一人、次が高知市の五百六十五人、さらに須崎市百四十六人、宇佐町五十七人となっている。                      【教訓等】大地震心得八カ条 1. まず丈夫な家具に身を寄せ。2. すばやく火の始末。3. 狭い路地・塀のわき・岸や川べりに近寄るな。4. 一分過ぎたらまず安心。5. 人命救助には消火が第一。6. 海岸では津波、山地では山津波に注意。7. 余震に恐れずデマに迷うな。8. 秩序を守り衛生に注意。</p>	・文献資料	南海大地震の記録「裂けた大地」 編者・発行人：市原麟一郎 発行所：土佐民話の会 昭和56年12月21日発行
39000 3-04	高知県		<p>【災害名】宝永の地震・津波                      【発生日時】宝永4年(1707年)10月4日                      【被災地】高知市種崎外                      【災害の概要】広範囲の地震、津波 水死者は、種崎700余人 宇佐400余人 須崎300余人 久礼200余人等(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)                      【教訓等】地震時の天候は、「其暑気絶難き事極暑の如し」と、10月にも関わらず非常に気温が高く、揺れは「暫くゆらりゆらりと静かに地震す。夫より、次第にゆり出て天地と一ツに成様家も蔵も崩れあやも見合わせ難し。其ゆる事身も裂けるが如し」と非常に激しい揺れであったことや、「高知辺は久万・薊野・一宮・秦泉寺山の根迄一面の海と成。又引又打入第三番目の浪夥く正面に浪打入ならハ、高知の地形より二丈も高き程也」と高い津波が繰り返し襲って来たことが記載されている。</p>	・文献資料	高知県史 近世編 昭和43年 11月発行 編集・発行 高知県
39000 3-05	高知県		<p>【災害名】享保の大火                      【発生日時】享保12年(1727年)2月1日                      【被災地】高知市越前町外                      【災害の概要】高知城火災、城下1300余戸焼失する(災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照)                      【教訓等】藩は翌2日の晩から15日にかけて町内二ヶ所で炊き出しをし、延べ十万余人に米約百石を与え、あるいは武士にも米を支給して救済に努力したが、この後、高知城をはじめとする復旧事業は、たださえ困窮した藩を苦しめることとなった。</p>	・文献資料	高知県史 近世編 昭和43年 11月発行 編集・発行 高知県

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
39000 3-06	高知県		<p>【災害名】安政地震                      【発生日時】安政元年(1854年)11月5日                      【被災地】高知市外                      【災害の概要】約30分の激しい震動、夕方には津波が計11回襲来、その後も余震が続く。城下町に火災も発生(災害・被害の詳細については、添付資料1-3を参照)                      【教訓等】激しい揺れに歩くことが出来ず竹藪へ避難したが、目前で蔵の土壁大いに振動した。川水は両岸に溢れて水面も堤の表面も同じになり、津波は11回来襲した。</p>	・文献資料	高知県史 近世編 昭和43年11月発行 編集・発行 高知県
39000 3-07	高知県		<p>【災害名】南海大震災                      【発生日時】昭和21年(1946年)12月21日早暁                      【被災地】高知市外                      【災害の概要】震源地は、高知の東南方250キロの地点、最大震幅50ミリ以上、震度は強震。罹災者数71,162人(災害・被害の詳細については、添付資料1-4を参照)                      【教訓等】震災当時進駐軍高知民事部長だったアクセルソン中佐は「南海大震災史」に被災後の復興に関し、高知県民が南海大震災の恐るべき惨禍に打ち勝つのに示した努力と精神は賞賛に値するとし、このことは先見の明ある指導者と明るく楽天的な気質を持つ県民の協力の賜物に外ならないと述べている。</p>	・文献資料	高知県史 近代編 昭和45年3月発行 編集・発行 高知県
39000 3-08	高知県		<p>【災害名】慶長南海大地震                      【発生日時】1604年(慶長9年)                      【被災地】土佐湾沿岸一帯                      【災害の概要】M7.9 東海南海西海諸道 広範囲の地震 土佐では佐喜浜50余人、室戸岬行当岬方面で400余人、甲浦350余人徳島穴喰で3860余人の死者が出ている。津波地震であったため、強震動がなく、地盤沈下が起きなかったため、湾口に被害を受けたが、高知平野は無事であったと思われる。                      【教訓等】徳島県鞆浦慶長地震の碑には「大海三度鳴る」と記され、宇佐旧家の古文書には「慶長九年十二月十六日、この夜地震して夜半に大潮入と云」と記されている。須崎では円教寺に伝わる「長谷川文書」にその断片と思われる記載がある。当時は山内氏が土佐藩主に封ぜられた直後のためか記録が少ない。津波地震は強震動なく、何の前触れもなくいきなり津波が押し寄せる。襲来が予測される場所は素素の対策が肝要。</p>	・文献資料	土佐史談224号 須崎における地震と津波 香崎和平 平成15年12月20日発行 土佐史談224号 歴史地震から 岡野健助 平成15年12月20日発行
39000 3-09	高知県		<p>【災害名】宝永南海大地震                      【発生日時】1707年(宝永4年)10月4日                      【被災地】土佐全域                      【災害の概要】M8.4 日本有史以来最大規模とされる。土佐における倒壊家屋5608戸、死者1844人、流家111617戸、高知以東の隆起1ヶ所、高知以西陥没21ヶ所、隆起は1.5m~2.5m、沈下最大2m。津波は東は伊豆より西は九州南部に及ぶ。土佐種崎の波高は20m余り、波は土佐一宮にまで達したほどであった。この時の須崎村での死者は土佐全体の20.6%に及び、土佐湾沿岸一帯で死者、家屋流失、浸水を生じ、甚大な被害が発生している。                      【教訓等】大地震と同時に地鳴り、雷のような大きな凄惨な音響を伴っていた。上下、前後、左右と動揺し、南に下るに従い上下震動が激しく、震動は余震を伴い30分以上も断続したと伝えられ、山崩れの発生、住宅の破損、多数の死傷者、壊家が生じた。10月4日、5日は50~80回の余震があり、余震は減少しながらも8年後の正徳5年まで続き、翌享保元年に収束した模様。海岸ではまず潮が引き、大津波が襲来している。須崎12回、高知6~7回、宇佐3回と記録され、最大の波はいずれも第3波であった。津波の速度は「寄せ来る潮より引き潮甚だ荒く滝の流れの如く」と伝えられるように引き潮の破壊力が大きく、漂流物などがあれば破壊力は倍増する。津波と津波の間に金銭等を取りに戻り流死した人が多数いたと伝えられる。</p>	・文献資料	土佐史談224号 「土佐の災害特集」宝永大地震・大津波 間城龍男 平成15年12月20日発行 土佐史談224号 須崎における地震と津波 香崎和平 平成15年12月20日発行

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
39000 3-10	高知県		<p>【災害名】安政大地震                      【発生日時】1854年(安政元年)11月4日～5日                      【被災地】土佐沿岸一帯                      【災害の概要】M8.4 東海・南海・西海にかけて大地震発生、大津波来る。東海地震発生1日後に南海地震発生。山や川は鳴り渡り、人家は崩壊、土佐では死者372人、全壊2939戸、流失3812戸、焼失2460戸、非住家全壊1887戸、流失588戸、焼失805戸、宇佐福島では山のような津波が入り一面海となる。津波は8～9回押し寄せ、2番目、3番目の波で浦中流された。余震はしばらく続き、不震日数が平常年の域を復したの安政六年に入ってからようだ。                      【教訓等】真覚寺日記(安政大地震の当日より書き始められた)吾川郡秋山村(現春野町)郷土島村右馬丞日記「春秋自記帖」に安政南海地震に関する発生時の様子、人々の対応などの記載がみられる。「春秋自記帖」には外出先で地震にあい、竹藪に入って揺れが収まるのを待ったこと、母や妻が地震の揺れが少ない山地に逃げていたこと、揺れが一段落すると高い場所へ避難したこと、地震後11回津波が押し寄せたこと、余震(安政2年になっても大地が裂けるほどの激しい余震が続いている)、火災のことなど教訓とすべき地震に伴う様々な情報が記載されている。</p>	・文献資料	土佐史談224号「土佐の災害特集」H15.12.20発行 安政大地震(南海地震)における余震の発生状況について 岡林正十郎 島村馬丞日記「春秋自記帖」に見る安政南海地震 渡辺哲哉
39000 3-11	高知県		<p>【災害名】昭和南海大地震                      【発生日時】1946年(昭和21年)12月21日午前4時19分過ぎ                      【被災地】西日本一帯                      【災害の概要】M8.0 地震動・津波による甚大な被害発生。全国的にみると死者1330、傷者3841、行方不明者113、本県での傷者670、死者1836、行方不明9、本県での被害は特に甚大で、高知市・幡多郡と被害が集中した。地震発生が未明であったため比較的火災の発生は少なく、出火したものについては流失した石油への引火、コタツの残火などが原因とされる。津波については新宇佐町、須崎町、多ノ郷村、伊豆田村、甲浦町の被害が大きかった。                      【教訓等】平素より自主防災をこころがけ、地域の自助、共助を育む。地震津波が治まった後は、速く情報を把握する。平素より土木・衛生方面の機構の充実を図り、速やかに処置・対策に応ずる。救援物資・医療薬品等の分散保管管理が必要。</p>	・文献資料	土佐史談224号「土佐の災害特集」H15.12.20発行 昭和南海大地震～「南海大地震災誌」の語るもの～宮崎利博
39000 3-12	高知県		<p>【災害名】室戸台風の災害                      【発生日時】1934年(昭和9年)9月21日                      【被災地】高知県東部、中国地方他                      【災害の概要】中心気圧911.6hpa(気象観測史最低)の猛烈な台風が室戸岬付近に上陸、淡路島を通過して大阪へ進んだ。風速は記録不能となるほど強く、県下での被害は高潮によるものが大であった。被害は全国にわたり、死・不明者3036人、負傷者14994人、家屋の倒壊92740戸、浸水401157戸、船舶の破損27594隻                      【教訓等】土佐史談224号「記憶の中の室戸台風」の著者島村泰吉氏(室戸岬町生まれ当時7才)は、台風前夜祖父に背負われて荒磯の自宅から山側にあった本家に避難した。本家の離れの床下のサツマイモ貯蔵庫で台風が過ぎるのを待った。祖父達の経験から、台風の風より、波を恐れて避難したものだろうと推定していること、台風の後の様子などが記されている。高潮の襲来地点を結ぶと、ほぼ旧国道に沿った線であったとも記されている。平素より地形や過去の災害の様子などを熟知し、早めの避難を心がける。</p>	・文献資料 ・写真	土佐史談224号「土佐の災害特集」H15.12.20発行 記憶の中の室戸台風 島村泰吉 史上最大「室戸颱風」惨状記録 小松勝記
39000 3-13	高知県		<p>【災害名】第二室戸台風災害                      【発生日時】1961年(昭和36年)9月15日～17日                      【被災地】                      【災害の概要】中心気圧900hpa、16日9時すぎに室戸岬西方に上陸、能登半島東部に達し、日本海沿岸を進み、北海道西岸をかすめてオホーツク海へ進む。室戸岬で最大風速66.7m/s、最大瞬間風速84.5m/s、各地で暴風や高潮の被害が続出した。死者194名、行方不明者8名、負傷者4972名、住家全壊15238棟、半壊46663棟、床上浸水123103棟、床下浸水261017棟など。                      【教訓等】台風は強風・高波・高潮・大雨などの複合災害をもたらす。連鎖的に拡大する被害を予測して注意を払う。</p>	・文献資料	土佐史談224号「土佐の災害特集」H15.12.20発行 台風・豪雨と土佐 澤本弘志
39000 3-14	高知県		<p>【災害名】四万十川の洪水                      【発生日時】昭和10年(1935年)8月、昭和38年(1963年)8月等                      【被災地】四万十川流域                      【災害の概要】床上浸水 2,145戸 床下浸水 1,100戸(昭和38年)等                      【教訓等】四万十川・後川・中筋川等の渡川流域は台風常襲地であり、古くから度々洪水に見舞われ、その都度多大な被害を被ってきた。降雨のほとんどが台風起因し、集中的な豪雨となるため、大規模な洪水がしばしば発生する。洪水時の増水は極めて早い。</p>	・文献資料	土佐史談224号「土佐の災害特集」P87 四万十川の洪水と治水 宮内英樹 H15.12.20発行

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
39000 3-15	高知県		<p>【災害名】台風10号による高潮被害</p> <p>【発生日時】1970年(昭和45年)8月21日</p> <p>【被災地】高知県中部・西部</p> <p>【災害の概要】中心気圧960hpa、佐賀町付近に上陸、北北西に県西部を通過した。土佐湾で高波発生、平常の潮位との差2m以上となり、浦戸湾、浦ノ内湾で高潮発生。台風が佐賀町に上陸した頃、高知市での最大風速は29.2m/s、最大瞬間風速54.3m/sであった。桂浜での最高潮位は4.22m c 波浪8m。市内数ヶ所で堤防決壊、下知・浦戸湾周辺で被害大。死傷者162人、全半壊13816世帯、床上床下浸水10127世帯。</p> <p>【教訓等】この台風は典型的な風台風で、降水量は比較的小さかった。しかし、長時間にわたる南からの強風と気圧の低下による潮位の上昇で高波が発生、そのうえ大潮の満潮時間が重なった。教訓として、台風の東側は強風になることに注意する。高知市は台風の東側にあたり、風向きは浦戸湾口と一致していた。台風を中心から離れた場所でも災害が発生する。台風の中心にこだわってはならない。</p>	・文献資料	土佐史談224号「土佐の災害特集」 H15.12.20発行 台風・豪雨と土佐 澤本弘志 高知市防災対策室ホームページ ふれあい情報広場「水害関係」
39000 3-16	高知県		<p>【災害名】台風5号による水害</p> <p>【発生日時】1975年(昭和50年)8月17日～20日</p> <p>【被災地】高知県中部・西部</p> <p>【災害の概要】台風5号は中心気圧960hpa、最大風速40m/s、足摺岬で最大瞬間風速52.1m/sを記録。時速15kmで四国南岸に接近。宿毛市付近に上陸した。土佐清水市、中村市、宿毛市方面で強風による家屋の倒壊。県下全域で200mmを越す大雨が降り、中山間部では600mmを越える豪雨となった。台風が遅く、南風が長時間吹き、仁淀川水系地域を中心に集中豪雨となり、多くの家屋が浸水した。日高村役場庁舎も水没した。被害、死傷者1人、全半壊12世帯、床上床下浸水21,623世帯。</p> <p>【教訓等】この台風の東側から中心に向かう流れと台風を北西に進める太平洋高気圧の縁辺の流れが合流して土佐湾から県中部に南からくい込む形の強い雨雲の帯を形成していた。この向きが仁淀川水系の谷筋の走向と一致していたこと、台風の移動が遅かったことが重なり、時間雨量100mm前後の強い雨が数時間続き記録的な集中豪雨となった。台風を中心の位置にかかわらず、進行方向や速度、周辺の状況によって予想もせぬ場所に様々な現象が起きることがある。</p>	・文献資料 ・写真	・土佐史談224号「土佐の災害特集」 台風・豪雨と土佐 澤本弘志 H15.12.20発行 ・写真(高知県警察ホームページ) 高知市防災対策室ホームページ ふれあい情報広場「水害関係」
39000 3-17	高知県		<p>【災害名】台風17号の災害</p> <p>【発生日時】1976年(昭和51年)9月8日～17日</p> <p>【被災地】高知県中部東部</p> <p>【災害の概要】最盛気910hpa、九州南西海上に達した後、36時間ほとんど停滞した大型で強い勢力の台風であった。その頃より強い降雨が始まり、6日間連日西日本各地に記録的な大雨をもたらせた。雨量は県中・東部の山間で1800ミリを超え、高知市でも時間雨量97ミリの降雨となった。折からの満潮と重なり河川の氾らんを招き床上、床下浸水の家屋続出、各地で死者不明者169人を出した。</p> <p>【教訓等】河川は満潮が加われば逆流するなど雨量だけではなく、様々な要因で変化する。台風の災害はそれぞれの現象が重なり、連鎖的に拡大する。小規模の台風でも最大の警戒を要する。17号台風では高知市長が「自分の身の安全は自分で…」と非常事態宣言した。</p>	・文献資料	土佐史談224号「土佐の災害特集」 H15.12.20発行 台風・豪雨と土佐 澤本弘志
39000 3-18	高知県		<p>【災害名】土佐山田繁藤災害</p> <p>【発生日時】1972年(昭和47年)7月5日</p> <p>【被災地】香美郡土佐山田町繁藤</p> <p>【災害の概要】土佐山田町は一夜で742ミリの局地的豪雨に見舞われた。同町繁藤では降り始めより約500ミリの雨で第一回の小崩壊が、780ミリ位で第二回の大崩壊が起こった。最初の崩壊は午前6時45分、高さ20m幅10m、土砂を除去していた消防団員一名が行方不明となった。救出作業中の午前10時50分、第二回の大崩壊(高さ80m、幅150m)が起き、民家12棟、繁藤駅に停車中の列車を押し流し、60人が犠牲となった。</p> <p>【教訓等】豪雨は「湿舌」と呼ばれる舌状に流れ込む暖かい空気が四国山脈にぶつかり、局地豪雨となったもの。二回目の崩壊は土砂を除去中に行方不明となった消防団員を救出中の消防署、町職員120人、救出を見守る地元民、停車中の列車の乗客らを襲った。一回目の崩壊後、崩れた山肌から滝のように流れ落ちていた濁流が止まった。その時パワーショベルの砂防工事のベテラン作業員が「こんな所におったら、命がいくつあっても足りん」と足早に現場を去った。その数分後、山が裂けた。土砂は民家をのみ込み、国道を横断、停車中の列車を押し流し、20m下の穴内川を埋めた。救助中の消防団員や地元民、列車の乗客ら60人の尊い命が犠牲となった。「作業員のことばに真剣に耳を傾けていれば…」と悔やまれた。災害後、消防団員の研修に「現場の状況から危険を察知し避難する判断力の重視」の項目が加わった。</p>	・文献資料	高知地域情報とニュース(読売新聞) 読売新聞が見つめた高知50年「土佐山田の繁藤災害」

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
39000 3-19	高知県		<p>【災害名】高知豪雨                      【発生日時】1998年(平成10年)9月24日～25日                      【被災地】高知市ほか                      【災害の概要】9月24日～25日に秋雨前線に太平洋高気圧の暖かく湿った空気が流れ込み、高知県に長時間強雨を降らせた。1時間に50ミリ以上降り続き、所によっては100mm以上の猛烈な豪雨となり、総降水量は800ミリ～1000ミリに達する記録的な雨量となった。高知市付近では国分川、舟入川などの河川が決壊、溢水し、都市部を中心に大規模な浸水被害が発生した。浸水被害は南国市、春野町でも発生。死者8人、負傷者14人、住宅の全半壊55棟、一部損壊86、浸水家屋17000棟、土讃線や土佐電鉄は各地で線路流出、長期間不通となった。高知市南部では土石流により住宅全半壊多数、道路・線路は不通となり、復旧までにかかりの日数を要し、本県の柱の施設園芸など農業被害は25億円を超えた。                      【教訓等】余りの豪雨に排水が間にあわず、大規模な浸水被害となった。8人の犠牲者のうち4人は高齢者であった。また冠水したマンホールに落ちて2人が死亡したことから災害発生時の避難の危険性が認識され、災害弱者対策が問われた。</p>	・その他 (HP)	<a href="http://www.kochinews.co.jp/re/nsai99/suigai27.htm">http://www.kochinews.co.jp/re/nsai99/suigai27.htm</a> 速報県都水没1998(平成10)年9月27日 気象庁 平成10年高知豪雨
39201 4-1	高知県	高知市	<p>【災害名】宝永南海地震                      【発生日時】宝永4年                      【被災地】高知県高知市                      【災害の概要】                      【教訓等】種崎千松公園共同墓地にある種崎久保家墓碑には「宝永四丁亥年(1707)之震災に罹う。種崎全村忽ち激浪の為掃う所、是故旧記墓碑流失し、亦一物も存せず、固而元禄年間之家主久保弥五兵衛を以て初代と為す也」と記載されており、宝永地震での津波により、種崎地区が亡所となったことを語っている。</p>		
39202 2-1	高知県	室戸市	<p>【災害名】慶長南海地震                      【発生日時】                      【被災地】室戸市全域                      【災害の概要】                      【教訓等】頃に地震す。其の夜半ばかり、四海浪す。大潮入れて、国々の浦浦は破損滅亡す。崎の浜(佐喜浜町)にも男女50人余、波に流死す。隣在所を聞くに、西寺・東寺の麓の浦分にも、男女400人余死す。伝へ聞くに、東を受け、南向きの国は皆潮入る。西を受け、北を受けたる国には心動地震ばかりにて、潮入らず。</p>	・文献資料	「暁印の置文」(権大僧都・阿闍利) {「谷陵記」(奥宮正明)「南路志」(武藤致知)「三災録」(宮崎竹助)}に収録 室戸市史(平成元年3月発行)より
39202 2-2	高知県	室戸市	<p>【災害名】宝永南海大地震                      【発生日時】                      【被災地】室戸市全域                      【災害の概要】                      【教訓等】羽根では「羽根浦八幡宮板書」によると、「未刻俄に磯より沖へ三千丁余も潮干、其より大潮入る。財宝尽く流失、達者でない者や逃げ遅れたる者は残らず大潮に引かれ死」とあり。また、佐喜浜においては、「暁印の置文」(慶長地震)にのちの人が書きそえたものとして、「此处板葺家ゆれ乱れ、屋根より石落ち、けが人多し。大地十間、二十間大割れ申し、地より水湧き出で、雪隠ござえり、山は崩え、人民は驚き或いは氣を失い泣きわめく事只蚊の鳴くが如し、或いは寺山観音へ逃げ走り皆道具まで運び十日程住い仕り、大汐は上へのぼり、上は甲浦より上へ入り、佐喜浜浦は波止下へ汐打入った。」と記されている。</p>	・文献資料	室戸市史(平成元年3月発行)より
39202 2-3	高知県	室戸市	<p>【災害名】安政南海大地震                      【発生日時】                      【被災地】室戸市全域                      【災害の概要】                      【教訓等】浮津八王子宮の「当家記」によると、「稀なる大地震、津波入、大変に及び誠に恐警至極。一統我先に立退き事のみ大騒により候。誰ともなく只右往左往にて山へ山へと逃退いた…」と記されている。また手記からは室戸岬では地震後大潮が入り、人々は山の高地へと逃れた。地盤隆起のため津呂港浅くなり、船の出入困難になった。佐喜浜においては、波が川俵いに押し寄せて小山の土手波切不動の辺まで至った。津波の引いたあとには中里の「木の宮」大杉の上に太刀魚がひっかかっていたと記されている。</p>	・文献資料	室戸市史(平成元年3月発行)より
39202 2-4	高知県	室戸市	<p>【災害名】昭和南海大地震                      【発生日時】                      【被災地】室戸市全域                      【災害の概要】                      【教訓等】人畜家屋等の直接被害は他市町村より少なかったものの、室戸半島の隆起は、震災後、港湾を中心に大きな被害となって現れた。各漁港はその水深を大幅に減じ、船の出入りに支障を来たすこととなり、船溜まりは早急な復旧事業が必至となり、多くの港が、港口を締め切って掘り下げられた。この隆起で、今までみられなかった礁海面に現れ、海岸線は沖に延びて、以前の水面下の岩面が海面上に出て白くなり、海岸の景観は一変した。</p>	・文献資料	室戸市史(平成元年3月発行)より



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
39202 2-5	高知県	室戸市	<p>【災害名】室戸台風</p> <p>【発生日時】昭和9年9月21日</p> <p>【被災地】室戸市全域</p> <p>【災害の概要】</p> <p>【教訓等】「昭和九年颱風海嘯記念」より 人々警戒中其ノ日午前四時頃狂風果シテ至リ気圧六八四耗、風速実ニ、六十米海水天ヲ蹴ツテ怒号吼鳴シ風力猛烈ニ触ルルモノ皆摧ク須臾ニ大海ノ激浪高サ四十尺轟然海岸ニ襲来スル三回之カ為メ死者六十三名負傷者三百十余名、流失全潰五百五十戸半潰家六百七十八戸流失全潰船舶二百隻ニ及フ其ノ損害莫大惨憺ナル言語ニ絶ス災后満目荒涼田園見ル影モナク罹災民皆宿ルニ家無ク食フニ食無シ高知県ハ急ヲ聞速カニ米穀其他ヲ輸シ内外仁人亦全員物質ヲ寄セ之ヲ救ハル町役場ハ直ニ仮舎ヲ建テ其ノ居ヲ給ス、…</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・室戸市史（平成元年3月発行）より</li> <li>・室戸岬小学校入り口に建つ碑文から</li> </ul>
39202 2-6	高知県	室戸市	<p>【災害名】大正元年の暴風雨（台風）</p> <p>【発生日時】大正元年8月23日～24日</p> <p>【被災地】室戸市全域</p> <p>【災害の概要】台風の進路の右半円の中に室戸地方が入ったと想像され、長時間の暴風雨により一丈災害をもたらした。 全壊人家857戸 死者9人 負傷者39人</p> <p>【教訓等】羽根では建物の倒壊、漁船の流出、海浜の松林が八分通り倒れ、波浪浸入という大被害を生じた。吉良川でも、海岸の松がほとんど倒れ、人家にも被害を生じた。室戸では、ほとんど被害のない家はなく、海浜の松も倒れ、高波により、船は転覆、破損、流出した。波は室津川の上流まで押し寄せたという。津呂も同様の被害で、雨量は432ミリの大豪雨であった。佐喜浜では、風が強くと屋根瓦が宇田奥まで飛んでいったと古老は語っていた。この台風は、室戸台風以上に大きかったという古老の言もあるし、羽根役場資料には、「殊に八月以来の暴風雨の被害を受け、家を破られ地を失いたる者等の管外に転住する者多数ありたるに依る」と人口減少の理由を述べている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	室戸市史（平成元年3月発行）より
39205 7-1	高知県	土佐市	<p>【災害名】昭和南海地震</p> <p>【発生日時】昭和21年（1946年）12月21日</p> <p>【被災地】高知県土佐市（当時新宇佐町）</p> <p>【災害の概要】高知東南250キロ地震で発生した津波被害（マグニチュード7.8、沿岸部の最大波高は6mに達した。）</p> <p>【教訓等】この地域においては、過去に何度も大津波を経験したことから地震の規模に対して人的被害が少なかった。特に、過去の地震を記録した石碑に過去の地震津波に際しての教訓を記した「欲を捨てて逃げしものは助かりし」の言い伝えが市民に浸透し、昭和の津波の避難行動に活かされた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・碑文「土佐市宇佐町市場前「震災復興記念碑」</li> <li>・写真（石碑全体をとらえた写真）</li> </ul>	a 高知県土佐市：津波対策マップ、2003年版 b 碑文 c デジカメによる写真画像1点
39206 5-1	高知県	須崎市	<p>【災害名】昭和南海地震</p> <p>【発生日時】1946年</p> <p>【被災地】須崎市</p> <p>【災害の概要】南海トラフ上で発生した、マグニチュード8.0の巨大地震。冬の早朝に発生し、市内の半分が浸水した。</p> <p>【教訓等】冬の早朝に発生したこともあり、暗闇で避難方向などが分からず、津波に飲み込まれ亡くなった人や、流木等に挟まれて亡くなった人、合わせて61名</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・須崎市史</li> <li>・海からの警告（須崎市発行）平成9年8月1日</li> </ul>
39206 5-2	高知県	須崎市	<p>【災害名】チリ津波</p> <p>【発生日時】1960年</p> <p>【被災地】須崎市</p> <p>【災害の概要】南米チリで起こったマグニチュード9.5の巨大地震により、津波が発生</p> <p>【教訓等】地球の裏側で発生した津波が1日で日本の太平洋側に来襲。須崎市においては、死者はでなかったが、船舶流出や浸水家屋が多数出た。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・谷陵記</li> <li>・海からの警告（須崎市発行）平成9年8月1日</li> </ul>

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
39208 1-01	高知県	宿毛市	<p>【災害名】宝永の地震による災害                      【発生日時】1707年(宝永4年)10月4日                      【被災地】宿毛市大島                      【災害の概要】宿毛付近の被害 榑(栄喜)亡所(亡所とは全滅という意)。福良亡所。山谷の家が少し残る。小尽(小筑紫)亡所。湊亡所。民家と田が海中に没す。伊与野 汐は全部の水田に入る。家にも入ったが流れた家はない。田ノ浦亡所。小浦亡所。内ノ浦亡所。外ノ内亡所。呼崎亡所。坂ノ下亡所。山腹の家が少し残る。宿毛亡所。汐は和田の奥まで入る。はじめの地震でほとんどの家が倒れ、各所で火災が発生した。錦 家が少し流された。田は海に没した。貝塚亡所。大島亡所。深浦(小深浦)亡所。栂亡所。薄(宇須々木)亡所。藻津亡所。 大島の震災状況については、大島の庄屋、小野家々譜に「宝永4亥年10月4日、大に地、震動し、山穿て水を漲し、川埋りて丘と成、浦中の漁屋悉く転倒す。逃れんとすれ共、眩暈て圧に打れ、或は頓絶せんとする者若干なり。係りし後は、高潮入りなるよしつがやく所に、大津波打て島中の在家一所として残る方なし。昼夜11度打来る。中にも第3番の津波高くて、当浦社の石垣階段三ツ残。」とある、神社の石段は42段であるので、39段つかった事になる。いかに大きな津波であったかがわかる。                      【教訓等】</p>	・文献資料	『宿毛市史』(昭和52年3月20日宿毛市教育委員会発行)
39208 1-13	高知県	宿毛市	<p>【災害名】枕崎台風による災害                      【発生日時】1945年(昭和20年)9月17日                      【被災地】                      【災害の概要】鹿児島県枕崎に上陸して米子に抜けた台風、県下の被害、死者11、不明6、家屋全半壊2291                      【教訓等】</p>	・文献資料	『宿毛市史』(昭和52年3月20日宿毛市教育委員会発行)内、高知測候所の気象観測資料による記載
39208 1-15	高知県	宿毛市	<p>【災害名】南海道沖大地震による災害                      【発生日時】1946年(昭和21年)12月21日午前4時20分                      【被災地】宿毛市大島                      【災害の概要】地震による被害は宿毛の町が大きかったが、津波による被害は大島、片島方面が大きかった。津波は最高1・9メートルを記録し、大島、片島を経てその奥にある防潮堤3か所を破壊して、林新田その他の田畑に浸水し、道路や家屋も浸水した。潮はまたたくまに宿毛片島間の防潮堤を越え、やがて貯木場の木材等を流しつつ引きはじめたが海底にはるか沖まで干上ってしまった。干上ったとみるや又も濁流となって押寄せ物すごい流れであったが、段にはならず、こみ潮の規模と速度を早くした様なものであった。大島や片島の人々は地震とともに歩くことができず、ただはいまわただけであったが、やっと地震がおさまると、津波の来襲をおそれて山上に避難して夜を明かした。夜が明けるにしたがって津波の状況をつぶさに見ることができた。大島小学校では、津波が運動場にも上っていたと見えて運動場一面がぬれていた。2回目の津波が一番高く、運動場に30センチ位は上った様である。校舎の床上には上っていないかった。片島大島間の橋は橋脚がつぶれてこわれかかり、大島には全壊の家もあり、多くの家が浸水した。被害は相当なものであった。この津波は大島の神社の石段には上らず、もう少しの所で止った。嘉永の地震では石段が7段つかり、宝永の地震では39段つがっているの、それらの地震の時の津波に比べるとはるかに小さいということになる。                      【教訓等】</p>	・文献資料	『宿毛市史』(昭和52年3月20日宿毛市教育委員会発行)
39208 1-20	高知県	宿毛市	<p>【災害名】伊勢湾台風による災害                      【発生日時】1959年(昭和34年)9月26日                      【被災地】                      【災害の概要】室戸岬南を経て紀伊半島に上陸した。高潮害が加わり被害甚大 県内死者4、傷者78、家屋全半壊172                      【教訓等】</p>	・文献資料	『宿毛市史』(昭和52年3月20日宿毛市教育委員会発行)内、高知測候所の気象観測資料による記載
39208 1-21	高知県	宿毛市	<p>【災害名】第2室戸台風による災害                      【発生日時】1961年(昭和36年)9月16日                      【被災地】                      【災害の概要】室戸岬に上陸、海岸沿いに北東進した最大級の台風 死者2、傷者78、家屋全半壊305                      【教訓等】</p>	・文献資料	『宿毛市史』(昭和52年3月20日宿毛市教育委員会発行)内、高知測候所の気象観測資料による記載
39208 1-24	高知県	宿毛市	<p>【災害名】日向灘地震による災害                      【発生日時】1968年(昭和43年)4月1日                      【被災地】                      【災害の概要】高知・愛媛で被害が大きく、宿毛では震度5、津波の全振幅は224cm、2,000戸以上が一部損壊。                      【教訓等】</p>	・文献資料 ・写真	・高知新聞 ・市役所の保存している写真記録

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
39208 1-08	高知県	宿毛市	【災害名】室戸台風による災害 【発生日時】1934年(昭和9年)9月21日 【被災地】 【災害の概要】奈半利町に上陸した912ミリバールの大型台風、この台風による被害は全国各地に及び、高知県でも死者122、傷者508、家屋、船舶の被害甚大 【教訓等】	・文献資料	『宿毛市史』（昭和52年3月20日宿毛市教育委員会発行）内、高知測候所の気象観測資料による記載
39209 0-1	高知県	土佐清水市	【災害名】安政南海地震津波 【発生日時】嘉永7年11月5日（1854年12月24日） 【被災地】高知県土佐清水市中浜 【災害の概要】安政南海地震の津波災害（マグニチュード8.4、市内沿岸に5～6mの津波襲来。） 【教訓等】大地震の前には井戸の水が急に減る又は濁りが出る。津波は押し波より引き波の方が強いなどが記載され後世に教訓を伝えている。	・文献資料	嘉永七寅年地震津波記（池道之助清澄記）高知県土佐清水市中浜在住 池家所有
39210 3-1	高知県	四万十市	【災害名】安政地震 【発生日時】安政元年（1854）11月5日 【被災地】四万十市（中村） 【災害の概要】宝永地震に比べ、中村地区には津波被害は少なかった模様。しかし中村町では9歩通潰込のうえ焼失との記事がある。中村町の被害人口2005、死亡30、全壊156、半壊70、焼失（中ノ丁ほとんど、本町、上町の東側、京町、新町の一部） 【教訓等】地震心得三ヶ条 第一心得方之事 一、大ゆりとなれば早速釜の火を消し立ち出ること。右上ミ町焼失はうろたへ、火も其俣にして出たる故、跡にて出火となり、家財、着類口迄不残消失に成もの也。 二、必ず、狭き小路へ逃出間敷事。此時小路にて家にしかれて死失の人多し。 三、ひさし軒下にて油断不相成事。ひさしにしかれ怪我人数多有故記也。 〆此三廉第一心得入用之事也。	・文献資料	・中村市史 ・南海大震災誌 ・木戸助八文書
39301 1-1	高知県	東洋町	【災害名】昭和南海地震津波 【発生日時】昭和21年12月21日 【被災地】東洋町甲浦 【災害の概要】M8.0の地震 【教訓等】甲浦地区は過去に何度も津波を経験したことから、大地震の後には、津波がくることを知っている人が多かったため人的被害は少なかった。	・文献資料	甲浦物語 寿美金三郎著 昭和43年11月初版発行
39323 1-1	高知県	香美市	【災害名】繁藤山くずれ災害 【発生日時】昭和47年7月5日 【被災地】繁藤追い廻し 【災害の概要】高知県災害史上に残る大惨事 【教訓等】崩壊発生前、湧き水が突然止まった。また、崩壊斜面では樹齢10数年のヒノキヤスギが一斉に伐採されており、古い林のある斜面は無事だったといい、急斜面の伐採に特に注意が必要だとしている。	・文献資料	『昭和47年7月豪雨・繁藤山くずれ災害記録』
39401 7-1	高知県	中土佐町	【災害名】安政南海地震 【発生日時】安政元年11月5日（1854年12月24日） 【被災地】高知県中土佐町（当時 久禮村、上ノ加江村、矢井賀村、小矢井賀村） 【災害の概要】高知東南250キロ地震で発生した津波災害（マグニチュード7.8、沿岸部の最大波高は6mに達した。） 【教訓等】明治24年12月に、久礼神山地区にある熊野神社境内へ寄進された石碑には、地震当時の様子が刻印されている。また、矢井賀地区では、「船中で津波に遭遇した戸田久四郎氏が、津波が何度も押し寄せては引き、この時ほど恐い思いをしたことはない。」と語っていたと矢井賀小学校史に記述されており、当時及び後世の児童への言い伝えとなって活かされた。	・碑文 ・写真（石碑）	中土佐町史 発行：中土佐町 発行年月日：昭和61年1月30日
39401 7-2	高知県	中土佐町	【災害名】火災 【発生日時】大正4年1月4日（1915年1月4日） 【被災地】高知県中土佐町（当時 久礼町） 【災害の概要】午前1時久礼八幡宮より出火し、近隣の家屋237戸を焼失 【教訓等】被災に対し、大正天皇より義援金350円を賜り復興に充てる。当時大正天皇の名前にあやかり、旧地藏通りを改修後大正町と改名した。それにより、この大火については今も住民の間に忘れられることなく語り継がれている。	・文献資料	中土佐町史 発行：中土佐町 発行年月日：昭和61年1月30日

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
39404 1-3	高知県	四万十町	<p>【災害名】南海大地震</p> <p>【発生日時】昭和21年12月21日</p> <p>【被災地】旧窪川町全域</p> <p>【災害の概要】突如として土佐湾一帯を襲った激震は水平・上下同時に大地に振動を与え、家屋損壊や数多くの人名を奪った。旧窪川町においては他市町村と比較して、被害そのものは少なかった。被害状況…死亡1人、負傷者数2名、家屋倒壊18軒、家屋半壊63軒、家屋浸水32軒、道路損壊217ヶ所、罹災者数221人。</p> <p>【教訓等】四万十町寺野出身で地方自治、県政界で活躍した宮本迪氏が震災時高知市長代理助役を勤めており、その時の惨状を書き残した手記があるのでこれを後世の教訓としている。</p>	・文献資料	旧窪川町史（2005年）P413～414
39423 8-1	高知県	黒潮町	<p>【災害名】南海大地震</p> <p>【発生日時】1946年12月21日</p> <p>【被災地】高知県幡多郡黒潮町</p> <p>【災害の概要】高知県沖南海トラフを震源とする地震・津波（M8.0、波高4～5m）</p> <p>【教訓等】旧大方町で行われていた安政の地震津波の恐怖を語り継ぐため、旧暦の11月5日に行っていた「大潮まつり」が、昭和初年に途絶え約20年が過ぎた頃に発生。「天災は忘れた頃来る」の言葉通りであった。津波による被害はほとんど無かったが、家屋の倒壊等による犠牲者があった。（以上、大方町史）</p> <p>佐賀町郷土史によれば、この年は例年にない暖冬で、人々は天災の不安を抱いていたようである。地震による津波の襲来に際しては、早期に避難していたので幸いにして死傷者は無かったが、家屋の倒壊や流出、道路や橋の破損、山崩れ等、甚大な被害が出た。</p>	・文献資料	大方町史（1994年発行） 佐賀町郷土史（1965年発行） 佐賀町農民史（1983年発行）
39423 8-2	高知県	黒潮町	<p>【災害名】安政の大地震</p> <p>【発生日時】1854年12月24日</p> <p>【被災地】高知県幡多郡黒潮町</p> <p>【災害の概要】高知県沖南海トラフを震源とする地震・津波（M8.4、波高6～8.5m）</p> <p>【教訓等】①安政4年に建立。前日に発生した東南海地震の津波を「鈴波」と称し、津波の前兆現象として後世への継承としている。なかでも、今回の被災事実だけでなく、過去の宝永地震でも被災した事実があったことを例にあげ、今後も百年余り気をつけるように訴えているのが特徴的である。②江戸時代の住職が建立。東南海地震の津波を前兆現象と捉え、すずなみが来たら船を沖に出すこと、また、津波により浦（伊田浦）一帯が流失したことから、これより140～150年先まで用心するように記している。</p> <p>なお、佐賀町農民史によれば、1854年12月24日の大地震の前に起きた、鈴波と呼ばれる現象に関しては、23日に発生した東海道沖地震の津波の余波であり、東南海地震との因果関係はないものと記されている。</p> <p>佐賀町郷土史の中には、2日続いて大きな地震が起こり、山鳴り、山崩れ、伊与木川の濁水、津波等甚大な被害に見舞われた、とある。また余震が7日間続いたため竹藪に避難して余震が止むまでその場にとどまっていたと記されている。</p>	・文献資料 ・碑文	大方町史（1994年発行） 佐賀町郷土史（1965年発行） 佐賀町農民史（1983年発行） ①黒潮町入野加茂神社境内「安政津波の碑」 ②黒潮町伊田海岸伊の岬付近
39423 8-3	高知県	黒潮町	<p>【災害名】宝永の大地震</p> <p>【発生日時】1707年10月28日</p> <p>【被災地】高知県幡多郡黒潮町</p> <p>【災害の概要】高知県沖南海トラフを震源とする地震・津波（M8.4、波高8～9m）</p> <p>【教訓等】大方町史には、奥宮正明の「谷陵記」を引用し、町内のいたるところが津波により「亡所」もしくは「半亡所」となるという甚大な被害を受けたことが記されている。</p> <p>この地震では、過去に類を見ない大津波が発生し、約15mとなって押し寄せ、佐賀地区は壊滅的な打撃を受けた。</p> <p>宮地直知（旧大方町）の「地震大潮記」によると、山々は崩れ土煙が上がり、地面は割れて潮水が湧出し、家屋は全て倒壊し、津波によって人家は流され・・・とある。</p> <p>南路志によると主な寺社は津波によってそのほとんどが流失し、この地震の津波の規模の大きさを示すものとして、宿毛市大島ハイタカ神社の階段に、この津波の到達した跡が残されている。この津波がいかに大きなものであったかを示すものとして物語る証拠となるものである。</p>	・文献資料	大方町史（1994年発行） 佐賀町郷土史（1965年発行） 佐賀町農民史（1983年発行）
39423 8-4	高知県	黒潮町	<p>【災害名】白鳳の大地震</p> <p>【発生日時】684年11月29日</p> <p>【被災地】高知県幡多郡黒潮町</p> <p>【災害の概要】高知県沖南海トラフを震源とする地震・津波（M8.0）</p> <p>【教訓等】白鳳の大地震のため、当時の入野地区付近は陥没し、一面に海水をたたえた「大瀉」であった。それが転じて「大方」町となったという、町の名称の由来が南海地震に起因しているらしきことを記している。（大方町史より）</p>	・文献資料	大方町史（1994年発行）

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
40000 9-1	福岡県		<p>【災害名】安政大地震                      【発生日時】安政元年(1854年)11月5~7日                      【被災地】遠賀郡芦屋村・鞍手郡木屋瀬宿                      【災害の概要】潰家 遠賀郡芦屋村4軒 鞍手郡木屋瀬宿14軒 潰蔵同 1間                      【教訓等】黒田藩の記録「御家事記 変災之巻」をはじめ、多くの古文書(日記・書簡等)に記録が残されている。</p>	・文献資料	東京大学地震研究所：収新日本地震史料 第五巻 別巻五ノ二、1987年 P2359~2363
40000 9-2	福岡県		<p>【災害名】暴風雨                      【発生日時】明治28年7月24日                      【被災地】福岡県全域                      【災害の概要】死傷者429名 家宅損害 流焼4軒・全半壊23,699軒                      【教訓等】この夏は気温が低く、日照不足の「実に尋常の天候に非ざりしなり」という天候が続いていた。前夜から雨が降り、冷気も増したが台風の季節ではないことから、多くの人は窓戸などに備えをするなどの用心を行わなかった。</p>	・文献資料	福岡市役所：福岡市史 第一巻明治編 P1432~1434
40000 9-3	福岡県		<p>【災害名】東中洲の大火                      【発生日時】大正12年(1923年)1月17日                      【被災地】福岡市東中洲                      【災害の概要】全焼52戸半焼 7戸発火当時は干潮時であったため水の手不足があり、そのうえ折からの烈風に煽られて大火となった。                      【教訓等】福博の歓楽街東中洲の、その目貫であったために、博多商業会議所、劇場、活動写真館、飲食店、商店などが被災し、焼失した規模とともに、損害額の大きさも多大なものであった。この火災では水道布設以来はじめて防火栓が使用された。水道事務所に徹夜で詰めていた水道職工数名が、火事と聞くや直ちに駆けつけ、防火栓を放って消火に努力し、消防組と力を合わせて市水道最初の大活躍を見せた。</p>	・文献資料	福岡市役所：福岡市史 第二巻大正編 P1317~1340
40000 9-4	福岡県		<p>【災害名】昭和28年西日本水害                      【発生日時】昭和28年6月25~29日                      【被災地】九州および山口県(ただし、以下の情報は福岡県内のもの)                      【災害の概要】死者284名、行方不明13名、重軽傷5587名 家屋 全壊3512戸、半壊7506戸、流失1115戸、浸水 床上94608戸、床下116417戸 ほかに道路・橋梁・堤防決壊、鉄道不通、山崩れなど                      【教訓等】福岡県において水害の規模としては未曾有のものであることがあげられる。とくに被害の大きかった筑後川流域は、古来よりたびたび洪水に見舞われており、筑後川の歴史は洪水と治水の歴史ともいえる。流域の町や村では危険区域の住民にサイレンや警鐘を鳴らして避難命令を出し、また甘木町丸山公園内の貸ポート30隻を借上げ、救助用とした。</p>	・文献資料 ・碑文(未確認) ・写真	・土木学会西部支部：昭和28年西日本水害調査報告書 1957年 ・古賀益城編：あさくら物語 1963年 P727~734 ・復興碑…筑後川流域でも被害が最もひどかった朝倉町多々連にあり(『目で見る北筑後の100年』P126による) ・写真『目で見る北筑後の100年』P126~127
40130 7-1	福岡県	福岡市	<p>【災害名】6. 29 福岡豪雨災害                      【発生日時】平成11年6月29日                      【被災地】福岡市御笠川流域(博多駅周辺)                      【災害の概要】死亡1名、負傷1名 浸水被害：床上1,019戸、床下2,154戸 崖・土砂崩れ、河川・道路被害 地下施設浸水被害：浸水規模132ha、浸水棟数81棟 地下鉄被害：一時運転打ち切り                      【教訓等】御笠川からの氾濫水や道路・下水道などで排水処理能力を越えた雨水が周辺部でも特に地盤の低いJR博多駅付近に向かって流れ出し、ビルやホテル、店舗が集中する博多駅周辺において1mほどの深さに達した。これらの影響によりJRや地下鉄が一時運休したほか、道路冠水により動けなくなる車が続出、また、地下に電気施設を備えているビルなどでは停電が相次いだ。その他ビル地下の飲食店で逃げ遅れた従業員がなくなるなど、都市型水害の脅威を見せつけた。</p>	・文献資料	6.29博多駅周辺浸水調査連絡会(福岡県、福岡市、ほか)：1999.6.29 福岡豪雨災害～博多駅周辺の状況～
40130 7-2	福岡県	福岡市	<p>【災害名】7. 19 福岡豪雨災害                      【発生日時】平成15年7月19日                      【被災地】福岡市博多区御笠川流域(博多駅周辺)                      【災害の概要】負傷4名 浸水被害：床上876戸、床下850戸 家屋被害：半壊3棟、一部破損7棟 崖・土砂崩れ、河川・道路被害 地下施設浸水被害：浸水規模128ha、浸水棟数97棟 地下鉄被害：一時運転打ち切り                      【教訓等】18日から19日にかけて、九州北部に停滞した梅雨前線の活発化に伴い、記録的な集中豪雨に見舞われた。御笠川流域や宇美川流域で河川が氾濫するなどして、平成11年6月29日と同様にJR博多駅周辺では、地下施設が浸水、地下鉄の一部で不通になるなど浸水被害が相次いだ。</p>	・文献資料 ・写真	・福岡県土木部河川課：福岡豪雨災害 平成15年9月作成 ・福岡市に保存している記録写真

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
401307-3	福岡県	福岡市	<p>【災害名】福岡県西方沖地震</p> <p>【発生日時】平成17年3月20日</p> <p>【被災地】福岡県</p> <p>【災害の概要】</p> <p>【教訓等】これまで経験したことのない規模の地震に突然襲われ、市内は一時混乱に陥った。都市の機能は比較的速やかに回復したものの、震度6弱を記録した都心・中央区ではブロック塀の倒壊、建物の壁が剥がれ落ちるなどの被害が多発したほか、高層ビルのガラスが割れて歩道に落下し通行人がけがをする事態が発生した。この地震により市内では計6件の避難勧告を出した。また、特に被害が甚大であった玄界島では住民全員が避難し避難所生活を余儀なくされた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・写真</li> </ul>	
402125-1	福岡県	大川市	<p>【災害名】台風19号</p> <p>【発生日時】平成3年9月27日</p> <p>【被災地】福岡県田川市、柳川市、山田市、筑後市、大川市、旧三潴三町</p> <p>【災害の概要】長崎県佐世保市の南に上陸。佐賀、福岡、山口県を斜断して各地に大きな被害をもたらした。福岡県内の被害状況は、9月29日時点で死者・行方不明者11人、負傷者311人、家屋全壊226戸に上った。</p> <p>【教訓等】先に来襲した台風17号とほぼ同じコースをたどり、その被害と相まって更に被害が拡大した。阿蘇山では、最大瞬間風速60.9mを記録し、福岡市では、同管区気象台の最低気圧の観測記録を49年ぶりに更新した。九州・山口地方では、過去最高の約275万戸が停電した。県内では、初めて1年間で3回も災害救助法が適用された。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その他(当時の新聞記事)</li> </ul>	
402184-1	福岡県	春日市	<p>【災害名】昭和48年集中豪雨(通称筑紫豪雨)</p> <p>【発生日時】昭和48年7月31日</p> <p>【被災地】春日市内全域</p> <p>【災害の概要】雨量232ミリ 家屋半壊1戸、床上浸水613戸、床下浸水1,173戸 道路破損42箇所、河川破損2箇所、土砂崩れ3箇所</p> <p>【教訓等】春日市の桜ヶ丘区は、この豪雨はもちろんのこと、その後の平成の水害でも多大な被害を受けた。その教訓をいかし、「自分たちの街は自分達で守る」という理念から、自主防災組織を先駆けて設立した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	春日市史 平成6年3月31日発行 春日市史編集委員会
403423-1	福岡県	篠栗町	<p>【災害名】昭和48年の大水害</p> <p>【発生日時】昭和48年(1973)7月31日</p> <p>【被災地】篠栗町全域</p> <p>【災害の概要】7月31日午前1時頃から僅か2時間で238ミリの局地的集中豪雨となり、山間部から多々良川全域にわたり被害が広がり、死者6名、重軽傷者35名、全半壊42戸、浸水693戸や道路、橋梁、井堰等が甚大な被害を受けた。</p> <p>【教訓等】かつて、昭和28年の大洪水の際、米ノ山の北西側が皆伐されていたので、中腹からの谷は滝のように流れ、崩れ落ちた。巨岩や流木は、1箇所に溜り、水を湛え支えきれなくなり、一度に山津波となって下流を襲い大被害を発生させた。また、流木により橋げたや川土手が破壊され、建物等に被害を受けた。このことを教訓に、庄屋の発案で、川土手には巨木よりも真竹等の根を張るものを植えている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・写真(多々良川及びその周辺の被害の様子)</li> </ul>	モノクロ写真数点(篠栗町立歴史民俗資料室に保管)
403814-1	福岡県	芦屋町	<p>【災害名】28水害</p> <p>【発生日時】昭和28年6月28日～29日</p> <p>【被災地】芦屋町浜口町、祇園崎(現祇園町)周辺</p> <p>【災害の概要】昭和28年6月下旬、北部九州に停滞していた梅雨前線は28日から豪雨となって荒れ狂い、遠賀川の堤防は上流の直方市植木で決壊した。そこから流れ出した水は、遠賀平野に広がり、西川に流れ込み始めた。水位がたちまち上昇し、浜口付近で氾濫、遠賀川との合流箇所付近でも兩岸の土手がしだいにえぐられ、川沿いの民家が次々と、大音響とともに崩壊して流された。さらに、流れてきた家の一部が祇園橋に詰まり、29日午前1時30分頃、橋が流失した。被害状況は、家屋の流失倒壊38戸、床上浸水94戸、床下浸水302戸、田畑の冠水、浸水は2,640反におよんだ。被害者は約1,000人で、芦屋中学校と芦屋小学校に避難したが、祇園崎の子供や婦人など300人はバスで遠賀川橋を渡り、山鹿小学校へと避難した。</p> <p>【教訓等】28水害は、家屋の被害もさることながら、当時の人々にとっては、祇園橋という生活に欠かすことのできない橋が流失したということで、現代まで語り継がれている。また、芦屋町においては、戦後、アメリカ軍が駐留しており(昭和35年12月1日引揚げ)、本水害時の人命救助および復旧には消防団とともに、米軍芦屋基地からも、ヘリコプターや救助艇が出動し活躍した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	芦屋町制百周年記念誌
404250-1	福岡県	筑穂町	<p>【災害名】大火</p> <p>【発生日時】明治の始めころ</p> <p>【被災地】筑穂町山口</p> <p>【災害の概要】大火</p> <p>【教訓等】こうじ断 資料1-1①</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	筑穂町誌 筑穂町誌編集委員会 平成15年

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
40425 0-2	福岡県	筑穂町	【災害名】大火 【発生日時】明治の始めころ 【被災地】筑穂町内野 【災害の概要】大火 【教訓等】こうじ断 資料1-1②	・文献資料	筑穂町誌 筑穂町誌編集委員会 平成15年
40428 4-1	福岡県	穎田町	【災害名】平成15年7月梅雨前線豪雨 【発生日時】平成15年7月18日から21日まで 【被災地】嘉徳郡穎田町大字勢田 【災害の概要】穎田町役場庁舎一帯が床上・床下浸水。町内各地で倒木や浸水（町全体で175世帯が浸水）などが出て大きな被害となった他、溜池が決壊し家屋3棟が半壊した。 【教訓等】近年にないおおきな災害であり、穎田町だけでなく近隣の市町村一帯に多大な被害がでたため。		
40428 4-2	福岡県	穎田町	【災害名】昭和54年6月豪雨浸水 【発生日時】昭和54年6月26日から7月2日まで 【被災地】嘉徳郡穎田町大字勢田（主に勢田橋左岸） 【災害の概要】雨量が飯塚測候所開設（昭和10年9月1日）以来、最高の722ミリもあり、6月30日に勢田橋上の左岸が決壊した。上勢田地区は66世帯が床上・床下浸水をする被害となった。ナギノ川の氾濫による口原地区の浸水や、鉄砲水による家屋の浸水等、町内全域にわたって多くの被害が発生した。 【教訓等】この地区はもと水田地帯で、内水が溜まりやすいため大きな被害となった。「このとき多くの被害を受けた、上勢田四反田地区の堤防（鹿毛馬川左岸）は、右岸の堤防より低かったため、翌55年2月に嵩上げされた。」（穎田町史より抜粋）	・文献資料	穎田町史 p 482～p 487
42000 0-1	長崎県		【災害名】享保大水害 【発生日時】享保6(1721)年 閏7月28日 【被災地】長崎80町の内38町、その他近隣在郷（小地名は不明） 【災害の概要】連日降雨のあと、28日夜半に大雨地震。烽火山から泥水噴出し、市中大洪水。眼鏡橋に流材掛かる。38町浸水。水死46人（男性17人、女性29人）。橋崩流14、損壊8。流家潰家120かまど、家内人数458人。破損家96かまど。石垣崩壊372間、船破損22艘など。 【教訓等】流家人民へ銀499貫500目を貸与。罹災貧民へ1戸あたり米6升、流家へ1戸あたり米1斗銭300文施す。8月14日、水害死者の供養のため、今紺屋町・中紺屋町の町民が、一ノ瀬街道に青銅の供養塔を建立。「からかね青銅塔」という（現在、長崎市指定有形文化財）。	・文献資料	・『増補長崎略史』 ・市制百年長崎年表編さん委員会編集『市制百年長崎年表』（1989年）
42000 0-2	長崎県		【災害名】明和大火 【発生日時】明和3年(1766年)2月27日・28日 【被災地】長崎80町の内、15町。 【災害の概要】夜、西古川町より出火。翌朝辰の刻（朝8時頃）鎮火。 全焼：本古川町・東古川町・今鍛冶町・出来鍛冶屋町・今籠町・今石灰町・新石灰町・油屋町・榎津町・万屋町・東浜町。半焼：西古川町・西浜町・銀屋町・磨屋町。 【教訓等】取崩、半取崩を行って、延焼を防ぎ、仮屋33を造って收容した。罹災者には家持1人あたり銭1貫文、家族1人あたり米5升、かまど主1人に米5升、半取崩のかまど主に2升5合、家族1人あたり1升5合を与える。その他、富者による米、苮、筵、銀の寄付や報償、銀の貸付などがあった。	・文献資料	『長崎志正編』 『増補長崎略史』 市制百年長崎年表編さん委員会編集『市制百年長崎年表』（1989年）
42000 0-3	長崎県		【災害名】寛政大水害 【発生日時】寛政7年(1795年)7月19日 【被災地】中島川流域ほか 【災害の概要】5月以降断続して降った長雨のあと、18日、19日の大雨で彦山・烽火山その他山々から泥水噴出し、川筋の水があふれ、床上4～5尺まで増水。未曾有の大水害となる。水死者5名（男性3人、女性2人）。家屋流失166かまど、全壊39かまど、半壊194かまど。木戸流失16、破損14。番所・木戸番所流失8、全壊1、破損17。橋崩落、破損、流失計25。船流失、破損各1など。その他浸水。 【教訓等】諸役人に銀の貸付。罹災町民には分に応じて、1人あたり銀10匁・5匁・銭300文・200文、また1かまどあたり銀6匁4分・3匁2分を施与した。また町人石崎太兵衛ら9人、米202俵を被災者に寄付。町人河内屋勘右衛門ら3人、自費で仮橋を11箇所にする。流失した10橋については寛政11(1799)～文化1(1804)年にかけて再架された。	・文献資料	『長崎志続編』 『長崎古今集覽』 市制百年長崎年表編さん委員会編集『市制百年長崎年表』（1989年）

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
42000-0-4	長崎県		<p>【災害名】文政台風(「シーボルト台風」とも呼ぶ)</p> <p>【発生日時】文政11年(1828年)8月9日</p> <p>【被災地】長崎市、および近隣9村</p> <p>【災害の概要】台風、雨や高潮が加わって、未曾有の被害となる。市中は出島・唐館・新地・俵物役所・港番所などの公共建物・石段石堀その他付属施設を破損崩落。死者24名、負傷者2名。潰家34軒、崩家53軒。流失船21艘、大破中破55艘。近隣9村は風損田393町8反3畝余、風損畑565町9反4畝余。死者47名、負傷者53名。百姓潰家1578軒、半潰1004軒、小屋潰2806軒。船流出難破486艘。その他山林資源の被害など。またこのとき、シーボルトを乗せて帰帆予定の船が難破、流出した積荷の内容から、「シーボルト事件」の発端となった。</p> <p>【教訓等】市中罹災者に対し、家持には、潰家は1人あたり白米1斗銭1貫文を、崩家は白米5升銭500文を宛てた。かまど主には、潰家は1人あたり白米5升銭500文を、崩家は白米5升を宛てた。別に家内7歳以上の者に人別銭300文を支給した。11日には長崎奉行が、台風の影響で高騰する材木や日用品の価格、大工の手間賃などを抑圧した。また水死人や雑具が漂着したら直ぐ届けることを布告、同様の達しを佐嘉藩・大村藩にも出した。</p>	・文献資料	『長崎志続編』市制百年長崎年表編さん委員会編集『市制百年長崎年表』(1989年)
42000-0-5	長崎県		<p>【災害名】佐世保炭鉱ボタ山崩れ</p> <p>【発生日時】1955年(昭和30)4月16日</p> <p>【被災地】佐世保市黒髪町</p> <p>【災害の概要】前日から続いた豪雨により、ボタ山と山肌の上に溜まった雨水が一気に噴出したため、一種の山津波が起こり炭鉱住宅を直撃。死者73名、重傷2名を出した。</p> <p>【教訓等】ボタ山にはもともと排水路が設置されていたが、排水能力を超える雨が降ったためにボタ山内に雨水が溜まり、山崩れが起こった。事故の後、ボタ山の排水設備が見直され、同様の事故防止に役立った。</p>	・慰霊碑碑文・石碑写真	佐世保市史 通史編 下巻 2003年 佐世保市
42000-0-6	長崎県		<p>【災害名】寛政島原地変による土砂災害と津波</p> <p>【発生日時】寛政4年(1792年)4月1日</p> <p>【被災地】島原周辺及び有明海沿岸一帯</p> <p>【災害の概要】1791年から地震が始まり翌年雲仙普賢岳が噴火。地震や地割れが頻発する中、旧暦4月1日夕刻にマグニチュード6.4前後の地震が発生。このため島原市西側の眉山の一部が崩壊し、島原城下の南部を土所崩れが襲った。この土砂が有明海に達し津波を発生させ、島原周辺はもとより対岸の肥後など有明海沿岸が津波の被害を受けた。このため俗に「島原大変肥後迷惑」といわれ約15000人の死者があった。</p> <p>【教訓等】雲仙普賢岳の噴火は、粘性の強い溶岩だったため、慣れにくくと見物人が出、藩が見物禁止するほどだった。1792年3月にはかなり強い地震が頻発したため、藩主はじめ多数の住民が避難した。地震が弱まり避難者が帰り始めた時に眉山崩壊が起こり、大惨事となった。このため現在でも噴火や地震のたびに眉山崩壊の恐れを抱くものが多い。行政においては、避難とその解除のタイミングに教訓を残した。平成の噴火においては、寛政地変の伝承を活かし、最大限の注意と警戒を行った。</p>	・文献資料 ・写真	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長崎県島原市：島原の歴史 藩制編 1972 p.139-146</li> <li>・長崎県島原市：深溝世紀 巻16 2002 p.25-41</li> <li>・流死菩提供養塔、回向堂、各種供養碑など(市教育委員会に写真保存)</li> </ul>
42000-0-7	長崎県		<p>【災害名】雲仙普賢岳噴火災害</p> <p>【発生日時】平成2年(1990年)11月17日～平成8年(1996年)6月3日</p> <p>【被災地】島原市・深江町</p> <p>【災害の概要】平成2年に噴火を開始した雲仙普賢岳は、粘性の強い溶岩が溶岩ドームを形成し、成長したドームが崩落して引き起こす火砕流、火山堆積物が雨により流れ下る土石流により島原市、深江町に甚大な被害を与えた。特に平成3年6月3日、死者行方不明者43名をだした大火砕流は、その流下する様子が映像で放送され大きな衝撃を与えた。噴火終息宣言が出された平成8年までに死者行方不明者44人、家屋被害2511棟、避難者最大2047世帯などの大きな被害を受けた。</p> <p>【教訓等】平成3年6月3日の火砕流被害による、火砕流の速度の速さと熱風の脅威が認識された。また雨のたびに発生した土石流災害では、流路に当たる区域に大きな損害を与え、継続・拡大する火山災害への対応の困難さが認識された。</p>	・文献資料 ・写真	長崎県島原市：平成島原大変(2002年)島原市役所企画課に災害資料として多数所蔵
42201-1-1	長崎県	長崎市	<p>【災害名】7.23長崎大水害</p> <p>【発生日時】昭和57年(1982年)7月23日</p> <p>【被災地】長崎市</p> <p>【災害の概要】長崎市を襲った集中豪雨は、降り始めの23日から25日までの3日間に573ミリの未曾有の降水量をもたらした。特に23日午後7時から8時までの一時間に111.5ミリを記録、長崎市の北部にある長与町役場の雨量計は187ミリの日本記録を更新した。このため、全市にわたり多くの尊い人命と財産が奪われ、経済活動、都市機能などに甚大な被害をもたらした。</p> <p>【教訓等】当該災害を伝承情報として語り継ぐ特定の言葉は聞いていない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文</li> <li>・写真</li> <li>・記録フィルム</li> <li>・体験記、手記</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長崎市7.23大水害誌(s59.3.20長崎市)</li> <li>・語り継ごう長崎大水害(h14.7.1長崎市)</li> <li>・長崎大水害証言集(h17.7.23長崎大水害)証言集編集委員会 など</li> <li>・写真集7.23長崎大水害(s57.11.25長崎新聞社) など</li> <li>・ビデオ「豪雨の爪跡」</li> </ul>



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
42203 7-2	長崎県	島原市	【災害名】雲仙普賢岳噴火災害 【発生日時】平成2年11月17日～平成8年6月3日 【被災地】島原市・深江町 【災害の概要】 【教訓等】		
42204 5-1	長崎県	諫早市	【災害名】本明川大洪水 【発生日時】1699年(元禄12年)8月13日 【被災地】本明川流域 【災害の概要】8月11日から降り始めた雨が、13日本明川を氾濫させる大洪水となった。死者487人、損失3,930石 【教訓等】江戸時代を通して本明川は11回の洪水に見舞われているが、この年に発生した洪水が最も被害の甚しかったもののひとつである。この災害に対し、領主諫早茂晴は、死者の供養と今後の災害防止祈願として、本明川上流の富川溪谷の地を開いて大雄寺を建立し、その岩石の壁面と、川中の巨巖に503体の羅漢像を刻み、1709年(宝永6年)これを完成させた。磨崖仏としては、長崎県内随一のものである。	・文献資料 ・碑文 ・写真等 ・その他	・諫早近代史 編修：諫早近代史編修委員会 P47～P49 発行：諫早市(平成2年9月1日) ・諫早水害誌 編集：諫早市教育委員会 P23～P24 発行：諫早市(昭和38年3月5日) ・諫早水害誌 編集：諫早史談会 25周年記念刊行委員会 P116～P121 発行：昭和堂印刷設立40周年記念実行委員会(平成5年11月27日) ・諫早市西小路町天祐寺「元禄水難者供養碑」 ・磨崖仏(諫早市富川溪谷「五百羅漢像」)
42204 5-2	長崎県	諫早市	【災害名】諫早大水害(諫早豪雨) 【発生日時】昭和32年7月25日 【被災地】旧諫早市、旧北高来郡 【災害の概要】集中豪雨により、本明川等の河川が決壊。一瞬のうちに多数の人命と財産が失われた。死者・行方不明者630人、重軽傷者1,547人。人家、公共建物、農地、道路、橋梁等被害総額 98億1,134万円 【教訓等】7月25日、大村市から島原半島北部にかけての帯状の地域で雷を伴う記録的な大雨が降り、とくに諫早市中心部では市街地の中心を流れる本明川が氾濫して、一瞬のうちに多数の人命と財産を奪った。25日9時から翌日9時までの1日雨量で600mm以上の大雨となり、特に諫早市に隣接する瑞穂町西郷では、日雨量1,109mm、3時間雨量377mm(22時～1時)を記録している。これらの記録は、ともに日本の観測史上第2位となっており、日本における集中豪雨の原点として語り続けられている。水害直後に、本明川は国が管理する一級河川に指定され、建設省によって大規模な改修工事が行われてきている。	・文献資料 ・碑文 ・写真等 ・その他	・諫早水害誌 編集：諫早市教育委員会 発行：諫早市(昭和38年3月5日) ・諫早大水害20周年復興記念誌 編集・発行：諫早市(昭和52年7月22日) (他にも郷土誌など水害関係書籍多数あり) ・諫早市高城町高城公園「諫早大水害復興記念碑」 「水難者慰霊大悲観音像」 「本明川洪水痕跡標」 ・諫早市本明町「水害復興記念碑」 ・諫早市永昌東町「水害復興記念碑」 ・諫早市富川町大雄寺参道「水害復興記念碑」 ・諫早川まつり 水害の犠牲者の冥福を祈り、防災の誓いを新たにすため、諫早商工会議所などが本明川河川敷一帯で毎年7月25日に開催している。
42204 5-3	長崎県	諫早市	【災害名】長崎大水害 【発生日時】昭和57年7月23日 【被災地】旧諫早市、旧飯盛町、旧多良見町、旧高来町 【災害の概要】我が国の観測史上初めて観測された時間雨量187mm(長与町)という激しい集中豪雨により、長崎市を中心に洪水、がけ崩れ等が発生した。諫早市関係被害：死者21人、軽傷者36人 人家、田畑等被害総額276億4,595万円 【教訓等】7月23日、長崎県中部から南部に停滞した梅雨前線は、降り始めから翌24日までの総雨量572mmの降雨を記録した。県南部の各地で時間雨量100mm以上を観測したが、とりわけ長与町役場では、7月23日の19時～20時の1時間で187mmを記録している。また、諫早市飯盛町でも、23日20時～21時までの時間雨量が137mmという記録的な雨量を記録し、死者18人を出す甚大な被害となった。諫早市中心部においても、降り始めからの雨量は492mmに達し、本明川の堤防も越流の危機となった。	・文献資料 ・写真等	・7.23長崎大水害の記録 編集・発行：長崎県(昭和59年3月30日) ・恐怖の集中豪雨(7.23災害記録集) 編集・発行：飯盛町(昭和58年12月20日)
42205 3-1	長崎県	大村市	【災害名】七・二五水害 【発生日時】昭和32年7月25日(1957) 【被災地】市内全域 【災害の概要】添付資料1-1 【教訓等】諫早大水害として有名であるが、大村市内においても郡川・大上戸川・内田川・鈴田川に接する地域の多くが浸水し戦後最大の災害として語り継がれている。	・その他	昭和32年7月新聞報道

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
42384 0-1	長崎県	佐世保市	<p>【災害名】台風12号災害(旧宇久町)</p> <p>【発生日時】昭和62年8月30日から8月31日</p> <p>【被災地】島内全地域</p> <p>【災害の概要】台風の12号の接近通過に伴う建物・漁港設備等の被害(最大風速は57m以上(風向風速計破壊))</p> <p>【教訓等】この地域においては、他県の島々と同様に台風の通過が多く時に甚大な被害を被ることがある。昭和62年の台風12号では雨量はほとんどなかったものの風については最大風速57.5m(10分間平均でも44m)を記録した。語り継ぐという程ではないが、毎年台風が近づくと「12号台風は怖かった」との言葉をよく耳にする。現在は防災行政無線が整備され、事前の準備や自主避難等と呼びかけている。</p>	・写真	町役場に保存している、被害状況調査写真
43000 5-1	熊本県		<p>【災害名】寛政大津波</p> <p>【発生日時】寛政4年(1792年)4月1日</p> <p>【被災地】熊本県有明海沿岸地域一帯</p> <p>【災害の概要】寛政4年(1792年)4月1日、長崎県島原半島の眉山が噴火による大崩壊を起こし、大潮の満潮だった有明海に大津波が発生。対岸の熊本県に押し寄せ、熊本平野、宇土半島、天草に甚大な被害をもたらす。津波の高さは10m~20m、最大30mの高さであった。熊本県(肥後国)の死者約4600人。</p> <p>【教訓等】熊本県内には、寛政大津波関係の供養塔が43基、津波境石が5基、墓碑が16基、その他古文書等多数確認されており、被害の甚大さと津波の脅威が伝えられている。例えば、津波が海拔23mの所まで来た等の伝承がある。</p>	・碑文 ・写真	寛政大津波200年事業実行委員会「寛政大津波から200年『雲仙災害』」平成3年8月発行
43000 5-1	熊本県	熊本県	<p>【災害名】平成15年7月県南集中豪雨災害</p> <p>【発生日時】平成15年7月20日</p> <p>【被災地】熊本県水俣市深川新屋敷、熊本県水俣市宝川内集</p> <p>【災害の概要】平成15年7月20日未明に水俣市深川新屋敷地区と宝川内集地区の2つの地区で発生した土石流災害により19名の方々が犠牲となった。(災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照)</p> <p>【教訓等】添付資料1-1を参照</p>	・ビデオ	ビデオ「熊本県防災消防ヘリコプターが見た水俣市土石流災害」公式記録 平成15年7月県南集中豪雨災害記録 ~水俣市土石流災害等~
43000 5-2	熊本県		<p>【災害名】西日本水害(6.26白川水害)</p> <p>【発生日時】昭和28(1953)年6月26日</p> <p>【被災地】熊本市一帯</p> <p>【災害の概要】6月の降雨量が1,000mmを越す記録的なものとなり、6月26日、ついに熊本市を流れる白川が決壊し、多くの民家が濁流に吞まれた。一般には「西日本水害」とよばれるが、最大の被災県は熊本で、通信と交通が寸断されたため、情報が中央に届くのが遅れた。最終的には400名を超える死者・行方不明者を出す大災害となった。</p> <p>【教訓等】県民の間では「6.26白川水害」と呼ばれており、以降これほどの水害はおこっていない。大災害の背景として、①2ヶ月前に阿蘇中岳が爆発(死者10名)し、その火山灰が豪雨とともに流出した。②山崩れが多発した。③白川にかかる多くの橋が流出し、豪雨の時間帯も夜で通信・交通が寸断され麻痺した。④堤防の決壊した時間と有明海の満潮が重なった。</p>	・文献資料 ・写真	・6.26白川水害50年 昭和28年6月26日の記録と記憶「熊日出版」2003年6月26日
43000 5-2	熊本県	熊本県	<p>【災害名】6.26白川大水害</p> <p>【発生日時】昭和28年6月26日</p> <p>【被災地】熊本県熊本市</p> <p>【災害の概要】死者291名 行方不明272名 負傷者557名 家屋全壊1005戸 家屋半壊6512戸 家屋流出850戸 床上浸水48,987戸 床上浸水39,006戸</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料 ・写真集	・昭和28年6月25日からの豪雨による被害調書 ・熊本県大水害写真集
43201 6-1	熊本県	熊本市	<p>【災害名】熊本地震</p> <p>【発生日時】1889年(明治22年)7月28日</p> <p>【被災地】熊本市とその周辺</p> <p>【災害の概要】地震災害(マグニチュード6.3の直下地震) 添付するには、ボリュームがあるため、表紙のみ添付します。</p> <p>【教訓等】熊本市は市制が公布された、明治22年に金峰山南東麓付近を震央とする、直下地震に襲われている。この地震により家屋の全半壊は475棟、死者20名、負傷者74名と人命に係る被害を出した。幸いにして、火災の発生はなかった。当時の熊本市は人口4万人、面積6km<sup>2</sup>にすぎなかった。</p>	・文献資料	・「熊本明治震災日記 全」 編著者 水島貴之 ・翁巷迂叟

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
43206 7-1	熊本 県	玉名 市	【災害名】昭和32年の山津波 【発生日時】1957年昭和32年7月25日～7月26日 【被災地】天水町全域 【災害の概要】昭和32年7月25日、午後から翌26日にかけて、県北地方に集中豪雨が襲い、1時間の雨量は最大76mm、降り始めからの総雨量は500mmに達した。この集中豪雨で、金峰山周辺の熊本市西部地域や玉名郡一帯で山津波などによる大災害が発生。 【教訓等】天水村では、26日午前2時ごろに発生した山津波が、大地を揺るがす大轟音とともに一瞬にして本村川に流下し、沿線の下所有や本村地区の民家は根こそぎ流下した。この山津波で、死者53人を出し、天水町史上最大の被害を受けた	・文献資料 ・碑文	文献：「天水町史」 著者：旧天水町（現玉名市） 平成17年10月1日発刊 碑文：実山公園の中の「先人の努力に報いて」
43212 1-1	熊本 県	上天 草市	【災害名】集中豪雨 【発生日時】昭和47年（1972）7月6日 【被災地】上天草市 松島町・姫戸町・龍ヶ岳町 【災害の概要】天草上島の東海岸一帯に3時間340mmもの驚異的な集中豪雨となり大被害をもたらした。 【教訓等】6月中旬より断続的に降っていた梅雨は7月の始めより本格的に降り続き、当日の早朝より次第に雨足が早くなり集中的に降り始め、午前11時頃には異常な増水となり益々激しさを増した豪雨は死者、負傷者をだし、家屋倒壊、道路の決壊、田畑の流失等の大災害となった。松島町（死亡4名、全壊家屋43軒） 姫戸町（死亡43名、不明者2名、全壊家屋124軒） 龍ヶ岳（死亡34名、不明者2名、全壊家屋218軒）	・文献資料（広報まつしま・姫戸町・龍ヶ岳） ・姫戸町の写真集	・広報まつしまNo.92 ・広報姫戸7.6災害特集号・No.195 ・広報龍ヶ岳No.194
43213 0-1	熊本 県	宇城 市	【災害名】平成11年台風18号高潮災害 【発生日時】平成11年9月24日 【被災地】熊本県宇土郡不知火町松合・永尾地区（当時） 【災害の概要】台風18号による高潮災害 死者12名、負傷者4名、住宅全壊47棟、半壊30棟、床上浸水163棟等 【教訓等】高潮・高波の直撃を受けた不知火町の海岸部では、ほとんどの家屋が倒壊・浸水などの破壊的な被害を受け唯一の幹線道路である国道266号も随所で決壊・寸断され、救援・復旧活動が阻害された。又、湾内に注ぐ大小河川を遡上した高潮は、沿岸低地にも奔流、浸水被害を拡大した。なかでも松合地区では押し寄せた高潮が一気に船だまりの堤防を越えて、低地にある集落へ流入し、高齢者や子どもを含む12人が死亡するという大惨事となった。	・文献資料	不知火高潮災害誌（平成14年3月発刊）
43213 0-2	熊本 県	宇城 市	【災害名】6・20水害 【発生日時】昭和40年（1965年）6月20日 【被災地】熊本県宇城市松橋町（当時松橋町大野地区など） 【災害の概要】九州中央部を襲った集中豪雨（災害・被害の詳細については、添付資料1-2・1-3・1-4を参照） 【教訓等】ため池（牛尾）の塘の決壊、川の氾濫（明神川、大野川、五丁川）による集中豪雨の教訓。	・文献資料	・熊本県松橋町：広報まつばせ（昭和40年8月1日発行） ・松橋町史（1979年発行）p436 ・松橋町50年の歩み（2004年発行）p29
43213 0-3	熊本 県	宇城 市	【災害名】7・6水害 【発生日時】昭和47年（1972年）7月6日 【被災地】熊本県宇城市松橋町（当時松橋町大野地区など） 【災害の概要】7月4日～6日の集中豪雨（災害・被害の詳細については、添付資料1-5・1-6・1-7を参照） 【教訓等】大野川の氾濫、堤防の決壊による水害の教訓。この水害等により河川の改修、湛水防除のための樋門改修、排水ポンプ機場の建設が町施策の重点事項にあげられる。	・文献資料	・熊本県松橋町：広報まつばせ（昭和47年7月10日発行） ・松橋町史（1979年発行）p448 ・松橋町50年の歩み（2004年発行）p36
43213 0-4	熊本 県	宇城 市	【災害名】台風18号高潮被害 【発生日時】平成11年（1999年）9月24日 【被災地】熊本県宇城市松橋町（当時松橋町松橋、砂川地区など） 【災害の概要】台風18号による高潮被害（災害・被害の詳細については、添付資料1-8・1-9を参照） 【教訓等】不知火海沿岸で気圧の低下と大潮の満潮が重なり、高潮が発生。八枚戸川、大野川沿いの地域で海水が川を逆流して護岸を越え、冠水した。高潮被害の怖さが教訓になっている。	・文献資料	・熊本県松橋町：広報まつばせ（平成11年11月発行） ・松橋町50年の歩み（2004年発行）p63
43214 8-1	熊本 県	阿蘇 市	【災害名】阿蘇山噴火 【発生日時】昭和54年9月6日 【被災地】檜尾岳周辺 【災害の概要】火砕サージが発生し火口東駅付近で観光客が3名死亡し、2名が重傷、9名が軽傷を負う被害がでた。 【教訓等】	・その他	阿蘇火山噴火災害危険区域予測図作成業務報告書

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
43484 1-1	熊本県	津奈木町	【災害名】辰の歳の洪水 【発生日時】寛政八年六月六日 【被災地】熊本県葦北郡津名木町（津名木手永） 【災害の概要】古川の堤防決壊による洪水災害（災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照） 【教訓等】古川大洪水 沖田（中村会所前）の堤防が切れ中村町浜村方面湖水と化し、人畜死傷家屋倒壊 農作物被害甚大 よって新川開削の機運おこる この時の雨は「辰の歳の大水」といわれ、肥後全域に被害をもたらした。	・文献資料	編集：津奈木町誌編集委員会 発行：津奈木町 タイトル：津奈木町誌 上巻 発行年：平成五年五月一日
43511 2-1	熊本県	五木村	【災害名】集中豪雨災害 【発生日時】昭和38年8月17日 【被災地】熊本県五木村全域 【災害の概要】集中豪雨による災害（災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照） 【教訓等】昭和38年の豪雨災害以降、昭和39年、昭和40年と3年連続で大水害が発生し、その後の川辺川ダム建設計画発表（昭和41年）につながるものであった。また、昭和38年の1月には記録的な豪雪に見舞われたことから「大雪の年は豪雨になる」という伝承情報が今日まで続いている。（科学的根拠は不明）	・文献資料 ・碑文（碑文の全景写真、刻印文字情報） ・写真（役場所有の写真から）	「五木村誌」（五木村公民館、昭和45年4月10日発行） 「横手公園内碑文」 「五木村役場所有水害記録写真」
44000 1-1	大分県		【災害名】文禄 文禄別府湾岸地震(瓜生島地震) 【発生日時】1596年9月 【被災地】府内の港 沖ノ浜 【災害の概要】地震による府内の港 沖ノ浜（瓜生島）の海没 【教訓等】1596年12月28日イエズス会の報告。文禄5年（1596年）7月12日の地震と津波については、他に記録がなく、当時の府内の状況を証言する貴重な資料となっている。	・文献（古文書、書簡等）	フロイス：耶蘇会日本通信 一 1596年の自然災害について
44201 1-1	大分県	大分市	【災害名】古来これなき水災 【発生日時】文化元年（1804）8月29日 【被災地】大分市（鶴崎・戸次） 【災害の概要】大野川増水二丈余（約6m） 「府内より東南、此の害にかかるもの、溺死・圧死凡三百人余、流屋・倒舎とも三千余」戸次地域では100名近くが死亡（災害・被害の詳細については、添付資料1-1を参照） 【教訓等】大分川、大野川により形成された扇状地が、水害の常襲地域であったことを語り継いでいる。	・文献資料	大分市史 大分市 昭和62年1月30日
44201 1-2	大分県	大分市	【災害名】慶長大地震 【発生日時】慶長元年（1596）7月12日 【被災地】大分市他別府湾沿岸全域 【災害の概要】沖の浜町（瓜生島）の海没 大津波（災害・被害の詳細については、添付資料1-2を参照） 【教訓等】津波被害の悲惨さと、早期避難の重要性を教訓としている。（瓜生島伝説）	・文献資料	大分市史 大分市 昭和62年1月30日
44201 1-3	大分県	大分市	【災害名】宝永大地震 【発生日時】宝永4年10月4日九つ半（午後1時頃） 【被災地】大分市 【災害の概要】府内城天守閣瓦崩落、本丸台所倒壊 府内城下浄龍寺本堂崩壊 上村（大石町）で、長さ七町（約763m）幅一、二尺の亀裂（裂け目より泥水が四、五尺噴き上がる） 海岸部では津波（海辺の村は全員背後の山に退避）（災害・被害の詳細については、添付資料1-3を参照） 【教訓等】津波被害の悲惨さと、早期避難の重要性を教訓としている。	・文献資料	大分市史 大分市 昭和62年1月30日
44201 1-4	大分県	大分市	【災害名】安政元年大地震 【発生日時】安政元年（1854）11月5日七つ半（午後5時頃）、7日四つ過（午前10時頃） 【被災地】大分市 【災害の概要】5日：府内城中の過半が破壊さる。また、「御家中、町在共大破」という甚大な被害 7日：5日のそれよりも「殊更震り」というようすで、城内では残っていた建物のほとんどが倒壊した。（災害・被害の詳細については、添付資料1-3を参照） 【教訓等】	・文献資料	大分市史 大分市 昭和62年1月30日
44201 1-5	大分県	大分市	【災害名】明治26年台風2号による大水害 【発生日時】明治26年（1893）10月13日午前1時頃、14日午前5時頃 【被災地】大分市 【災害の概要】14日：「午前5時、大分川俄に氾濫して漸く市街に横溢せんとするや、是時海潮膨張し、加ふるに北東の強風猛烈を極めしを以って、激流怒涛洶湧として一時に陸地に侵入し、其勢恰も百川を倒すが如く、瞬間にして全市を変じて湖海となせり」（災害・被害の詳細については、添付資料1-5を参照） 【教訓等】潮位と河川氾濫の関係が教訓となっている。	・文献資料	大分市史 大分市 昭和62年1月30日

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
44201 1-6	大分県	大分市	<p>【災害名】 ルース台風</p> <p>【発生日時】 昭和26年（1951）10月14日夜</p> <p>【被災地】 大分市</p> <p>【災害の概要】 「この台風はそれまでの最悪とされ、雨量は300mmを越し、県下で死者29人、行方不明3人を出したのをはじめ、被害総額は88億3千6百余万円にのぼった。」（災害・被害の詳細については、添付資料1-6を参照）</p> <p>【教訓等】 台風銀座と呼ばれる大分県の地域特性を象徴している。</p>	・文献資料	大分市史 大分市 昭和62年1月30日
44201 1-7	大分県	大分市	<p>【災害名】 昭和28年の集中豪雨禍</p> <p>【発生日時】 昭和28年（1953）6月25日から29日にかけて</p> <p>【被災地】 大分市</p> <p>【災害の概要】 「大分市では降雨量が848mmに達し、大分川が危険水位を超して随所で堤防が決壊、濁流の中に取り残された人や、交通の要所である舞鶴橋が流失したり、また市街地が腰までつかれる日が何日も続いた。」（災害・被害の詳細については、添付資料1-7を参照）</p> <p>【教訓等】 水害常襲地域に居住する住民への警鐘。</p>	・文献資料	大分市史 大分市 昭和62年1月30日
44201 1-8	大分県	大分市	<p>【災害名】 仏崎の電車埋没事故</p> <p>【発生日時】 昭和36年（1961）10月26日午後2時55分</p> <p>【被災地】 大分市</p> <p>【災害の概要】 九州南部で発生した低気圧が北上し、25日夜半から風雨が激しくなった。26日午後2時55分ごろ、大分から亀川へ進行中の大分交通の電車が崖崩れで押しつぶされ、死者31人、重軽傷者36人という大惨事となった。（災害・被害の詳細については、添付資料1-8を参照）</p> <p>【教訓等】 死者の中に、豪雨のため下校途中だった小・中・高校生7人が含まれていたことから、土砂災害の悲惨さを象徴する事故として語り継がれた。</p>	・文献資料	大分市史 大分市 昭和62年1月30日
45000 6-1	宮崎県		<p>【災害名】 寛文2年日向灘大地震・津波（外所（とんところ）地震）</p> <p>【発生日時】 寛文2年（1662年）9月19日夜（陰暦）</p> <p>【被災地】 日向国飩肥藩領「清武」（現宮崎市南部、清武町など）</p> <p>【災害の概要】 後世の試算では、マグニチュード7.6でその被害は日向国一円に及ぶが震源地に近い飩肥領「清武」だけでも海岸の一集落海没、本田畑460町高8000石、死者15人、水没家屋56軒、海没家屋123軒、被災者2398人で、その他日向一円とくに河口流域では大きな被害を出した。</p> <p>【教訓等】 「清武」に限って言えば真夜中の地震としては死者が少ないのは前兆があったためではないかとみられるが、その被害からみると清武河流域に被害が集中し、津波では河川流域の対策が重要であることを教える。この災害の供養碑が海没地に近い「島山」に50年ごとに連立されているのも、この地震の教訓を忘れないようにするためのものであろう。</p>	・文献（古文書、書簡等） ・碑文	<ul style="list-style-type: none"> <li>・清武町湯地家文書「万覚」宮崎県史料編近世4、p726～738</li> <li>・「木花郷土史」木花郷土誌編集委員会 p84～87（昭55）</li> <li>・「日向纂記」平部嶺南</li> <li>・「日向地誌」</li> <li>・その他各藩史料にみえる。</li> </ul>
45000 6-2	宮崎県		<p>【災害名】 享保の霧島山の大噴火</p> <p>【発生日時】 享保元年（1716年）9月26日～同3年2月27日</p> <p>【被災地】 鹿児島藩領日向国諸県郡12郷</p> <p>【災害の概要】 長期にわたる大噴火の被害は中間の享保2年3月のまとめで判明分だけでも焼失建物寺社41庶家604耕地作物6万6182石余（田畠6240町）死者6人、けが33人、死牛馬405頭、石・砂入被害は12郷に及ぶ。</p> <p>【教訓等】 この噴火災害の特徴は人的被害は少ないが、長期にわたる多数回の噴火で大量の降灰、大量の硫黄の流出による田畑、草地の被害、河川の水質の悪化、水量の減少等によって生活条件がすべて失われたこと。特に避難にあたっては、牛馬を放置しても飼料を得ることができず死に至った。噴火災害後、降灰除去など救援対策に藩をあげて取り組んだ。</p>	・文献資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宮崎県史通史編近世下、p282～289</li> <li>・高原町永浜家文書「高原所系図」（宮崎県史料編近世5 p931）</li> <li>・「古記」上</li> <li>・「三州御治世要覧」</li> <li>・「旧記雑録」追録3 ほかも多数</li> </ul>
45203 3-1	宮崎県	延岡市	<p>【災害名】 昭和18年9月の大洪水</p> <p>【発生日時】 昭和18年（1943年）9月20日</p> <p>【被災地】 延岡市</p> <p>【災害の概要】 五ヶ瀬川沿いの野田堤防、桜小路堤防が破壊されて、中央地区（現：川中地区）は濁流にあふれ、中央地区の各町はほとんど浸水して商品などの流出も多く、特に桜小路は家屋の倒壊及び流失し、多数の死傷者、行方不明者を出した。</p> <p>【教訓等】 この水害は戦時中であつたが、惨状は各地方に伝わり、各方面からの慰問者及び調査団が来て復旧に協力した。また、多くの義捐金品が送られ、さらに近隣町村からは奉仕団をつくって復旧作業の協力があつた。戦時下、特に物資不足のおり、大災害にあい延岡市は大きな試練をうけることとなった。</p>	・文献資料	「延岡市史」P278～281 発行：延岡市役所 昭和38年2月11日

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
45203 3-2	宮崎県	延岡市	<p>【災害名】明治15年の大火</p> <p>【発生日時】明治15年（1882年）1月28日</p> <p>【被災地】鹿児島県日向国臼杵郡岡富村（現：延岡市）</p> <p>【災害の概要】今町（現在の延岡市北町、市役所の東通り）から出火、南町、船倉中町、北町と火が移り、一夜に474戸が焼失、北町の一角を残すのみの大火災であった。</p> <p>【教訓等】この大火災は延岡の大火のなかで、これ以上の焼失規模のものではなく、門川、細島、富高町からまでも消防組が駆けつけたが、寄りつけず、消防どころの騒ぎでなく、火は手がつけようがなく延焼していった。この火事騒ぎで荷物を出したが、命からがら避難した為、火事場ドロ稼ぎが多く発生し、刑に処せられた火事泥が数十名に及んだ。</p>	・文献資料	「延岡市史」P273～278 発行：延岡市役所 昭和38年2月11日
45206 8-1	宮崎県	日向市	<p>【災害名】美々津の大津波</p> <p>【発生日時】明治32年、明治37年、明治38年、明治39年の4回</p> <p>【被災地】日向市（美々津町一帯）</p> <p>【災害の概要】明治30年代は日向灘や四国沖でマグニチュード6～7規模の地震が発生し、それによる津波が発生しており、明治32年には石並、明治37年と38年には中町、そして明治39年には中町、松原町、崎田町の3地区が大きな被害を生じ、38軒の家屋が流出、被災者は160人にも及んでいる。</p> <p>【教訓等】太平洋戦争直後には、美々津海岸で陶磁器を拾い集め、これで生計を立てる人たちがいました。こうした人たちが集めたのは、明治の大津波で流出した回船問屋のお宝だったといわれています。このように度重なる津波により、美々津には明治の時代に多額の費用をかけた防波堤が建設されたといわれています。</p>	・文献資料	美々津民俗史（日向市発行）
45206 8-1	宮崎県	日向市	<p>【災害名】美々津の大津波</p> <p>【発生日時】明治32年、明治37年、明治38年、明治39年の4回</p> <p>【被災地】日向市（美々津町一帯）</p> <p>【災害の概要】明治30年代は日向灘や四国沖でマグニチュード6～7規模の地震が発生し、それによる津波が発生しており、明治32年には石並、明治37年と38年には中町、そして明治39年には中町、松原町、崎田町の3地区が大きな被害を生じ、38軒の家屋が流出、被災者は160人にも及んでいる。</p> <p>【教訓等】太平洋戦争直後には、美々津海岸で陶磁器を拾い集め、これで生計を立てる人たちがいました。こうした人たちが集めたのは、明治の大津波で流出した回船問屋のお宝だったといわれています。このように度重なる津波により、美々津には明治の時代に多額の費用をかけた防波堤が建設されたといわれています。</p>	・文献資料	美々津民俗史（日向市発行）
45207 6-1	宮崎県	串間市	<p>【災害名】台風第5号</p> <p>【発生日時】昭和34年7月15日</p> <p>【被災地】上町地区</p> <p>【災害の概要】総降水量370mm、時間雨量107.5mm、死者1人、重傷1人、軽傷13人、一般罹災者2,378人、家屋全壊20戸、半壊36戸、大破以下51戸、床上浸水397戸、床下浸水1,018戸、被害総額1,297,280千円</p> <p>【教訓等】台風5号と梅雨前線の影響をうけて、午後3時過ぎから来襲した豪雨は瞬間107.5mmの最大雨量を記録し、瞬間に市街地道路に氾濫して一時は交通杜絶に陥り、特に福島川の水位は其の極に達し午後5時頃上町橋上流の堤防決壊による濁流は渦をまいて上町市街に溢れ、床上浸水は一挙に家財道具を呑んで軒を洗い、逃げまどう市民の声は惨の巷を現出するに至った。各地域からの被害情報は相次ぎ、橋梁の流失は遂に20数ヶ所を数え、道路損壊、山崩れは実に未曾有の災害となり、鉄道、バスも不通となって混乱を極め同日午後9時災害救助法の適用を受ける。</p>	・写真	
45209 2-1	宮崎県	えびの市	<p>【災害名】集中豪雨による山津波</p> <p>【発生日時】昭和47年7月6日</p> <p>【被災地】えびの市西内堅地区</p> <p>【災害の概要】6月上旬から降り始めた梅雨が数日おきに集中豪雨をもたらし、4年前に発生したえびの地震で亀裂を生じていたと思われる急傾斜地帯に山津波は7月6日14時15分から5回に分かれて発生し、高さ350m、幅280mに渡って山地が崩壊しました。又30万㎡に及ぶ土砂が肥薩線を切断して白川沿いに1.5Kmにわたり流出し、住家28戸、非住家29戸が流され4名の方が亡くなりました。</p> <p>【教訓等】多くの地区住民は、過去の土石流の教訓を踏まえ発生直前に避難して難を逃れたという事です。更に山腹崩壊が起こる直前に杉、檜林の異常な揺れに気付いた集落の古老が「山津波が来る」と言って、集落の人々をいち早く高台に避難させたからであるとも言われています。</p>	・その他	市広報えびの 昭和47年8月10日

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
45362 5-1	宮崎県	野尻町	<p>【災害名】東麓の大火</p> <p>【発生日時】大正2年10月30日 午後3時40分頃</p> <p>【被災地】宮崎県西諸県郡野尻町大字東麓西町 周辺地域</p> <p>【災害の概要】家屋80戸あまりを焼き尽くす大火であった。(災害・被害の詳細については、出典情報資料を参照)</p> <p>【教訓等】本町でおきた最大の惨事であるこの大火を伝承し、火災の恐ろしさを啓蒙するため、毎年10月30日に消防関係者・地域住民が参集し祈念行事を催す。また、被災した地域毎にも同様に祈念行事が催されている。</p>	・文献資料	野尻町史 P224～P229 著者：野尻町
46000 1-1	鹿児島県		<p>【災害名】桜島の大正大噴火</p> <p>【発生日時】大正3(1914)年1月12日</p> <p>【被災地】鹿児島県鹿児島市及び周辺市町</p> <p>【災害の概要】大噴火。2箇所の山腹火口から噴石、溶岩等を噴出し、大規模な地震を引き起こした。</p> <p>【教訓等】火山爆発は、一度発生すると噴石、地震、溶岩等によりその被害は甚大なものとなる。</p> <p>しかし、爆発の前には前兆現象が見られることから、これらの情報を監視し、確実な情報を把握することが重要である。</p> <p>また、大爆発に備え、昭和46年から毎年1月12日に桜島火山爆発総合訓練を実施している。</p>	・文献資料 ・碑文	・鹿児島県「桜島火山対策ハンドブック」平成元年2月
46000 1-2	鹿児島県		<p>【災害名】ルース台風</p> <p>【発生日時】昭和26(1951)年10月14日</p> <p>【被災地】鹿児島県西部</p> <p>【災害の概要】昭和26年10月14日、鹿児島に上陸時の中心気圧は940hPa、最大風速は40m/sを観測し、最大瞬間風速は60m/s(推定)に達した。台風の上陸が満潮と重なったために、鹿児島湾から枕崎付近にかけての沿岸で高潮が発生、強風の中、船舶の沈没や流出が多発し、高潮で家屋の倒壊や浸水が相次ぎ、県内の死者約200人、全壊・半壊家屋は約48,000戸の被害をもたらした。</p> <p>【教訓等】過去最大級の台風であり、また、満潮時の台風襲来のおそろしさを知らしめたものであった。</p>		
46000 1-3	鹿児島県		<p>【災害名】平成5年鹿児島豪雨災害</p> <p>【発生日時】平成5(1993)年6月12日～9月20日</p> <p>【被災地】鹿児島県鹿児島市をはじめ県内全域</p> <p>【災害の概要】平成5年夏、鹿児島を襲った集中豪雨や台風は、予想をはるかに超える「100年に1度」といわれる豪雨や戦後数回の大型台風で、県内各地に未曾有の大災害をもたらした。この一連の災害における死者行方不明者は121人にのぼり、被害総額は3千億円を超えるもので、過去最大級の被害を被り、県土はもとより県民の心にも深い爪痕を残した。</p> <p>【教訓等】平成5年夏、特に8月6日に鹿児島市と市周辺を襲った集中豪雨では、随所で発生したがけ崩れや甲突川等の氾濫による浸水被害により、国道3号及び10号をはじめ、多くの県道が不通になったほか、水道・電話・電気等のライフライン施設も被害を受け、市民生活や経済活動に深刻な影響を与えた。</p> <p>死者・行方不明者を災害の原因別に見ると、9割以上が土砂災害によるものであり、また、半数以上が高齢者であった。危険箇所の掌握と点検などの取り組みや高齢者への配慮が重要ということが認識された。</p>	・文献資料 ・記録フィルム ・写真	・鹿児島県「平成5年夏 鹿児島豪雨災害の記録」(平成6年)
46000 1-4	鹿児島県		<p>【災害名】針原川土石流災害</p> <p>【発生日時】平成9(1997)年7月10日</p> <p>【被災地】出水市針原川</p> <p>【災害の概要】深夜に発生した出水市針原川の土石流災害により、21名もの尊い人命や財産が奪われた。</p> <p>【教訓等】7月7日から雨が降り続いており、9日までに出水市をはじめ防災関係機関は連日警戒警備にあっていた。</p> <p>9日午後9時前には雨も止み、午後11時40分頃には針原川の水位もピーク時の半分程度になっていたが、その後、10日午前0時44分頃土石流が発生し、21名が犠牲になった。</p> <p>このような災害に対しては、砂防施設等のハード対策を計画的に進めるとともに、警戒避難体制の整備などソフト対策の重要性が再認識された。</p>	・文献資料 ・記録フィルム ・写真	・針原川土石流災害記録誌編集委員会「針原川土石流災害記録誌」(平成13年)

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
462063-1	鹿児島県	阿久根市	<p>【災害名】46年災(集中豪雨)</p> <p>【発生日時】昭和46年7月23日</p> <p>【被災地】市街地</p> <p>【災害の概要】7月23日、午後4時から5時まで70ミリ、5時から6時までの間に106ミリの集中豪雨に見舞われ、総雨量は550ミリに達した。この災害で死者10名を出し、畑の流出、埋没、冠水、住宅の全壊、道路や河川の決壊、橋の流出などの被害を及ぼし、被害総額も24億円にも上った。</p> <p>【教訓等】災害対応のために市役所に集合した職員、消防団員等の自家用車等がみるみる内に濁流に飲み込まれ、なすすべもなかった様子を見て、自然の驚異と市街地の河川、側溝対策の遅れを痛感したとのこと。また、時の記憶として、退職者のあいさつには必ず「46年災が記憶に残っている。」という言葉を聞く。</p>	・その他	市広報8月号 第295号 昭和46年8月10日発行
462080-1	鹿児島県	出水市	<p>【災害名】針原川土石流災害</p> <p>【発生日時】平成9年(1997年)7月10日</p> <p>【被災地】出水市針原地区</p> <p>【災害の概要】7月7日から9日までの豪雨を引き金として10日深夜に発生した出水市針原川の土石流災害により、21名もの尊い人命や財産が奪われた。</p> <p>【教訓等】7月7日から雨が降り続いており、9日までに出水市をはじめ防災関係機関は連日警戒警備にあっていた。9日午後9時には雨も止み、午後11時40分頃には針原地区を流れる針原川の水位もピーク時の半分程度になっていたが、その後、10日午前0時44分頃針原川上流右岸側斜面に発生した山腹崩壊土砂が針原川に流れ込んで土石流が発生し、21名が犠牲になった。このような災害に対しては、砂防施設等のハード対策を計画的に進めるとともに、警戒避難体制の整備などソフト対策の重要性が再認識された。</p>	・文献資料 ・写真	<p>・針原川土石流災害記録誌 発行年：平成13年 発行者：針原川土石流災害記録誌編集委員会</p> <p>・出水市針原地区土石流災害の記録 発行年：平成11年 発行者：出水市</p>
462136-1	鹿児島県	西之表市	<p>【災害名】秋前線停滞による集中豪雨災害</p> <p>【発生日時】平成13年9月2日、6日</p> <p>【被災地】西之表市</p> <p>【災害の概要】時間雨量126ミリの豪雨により、農林水産施設、公共土木施設を中心に本市の一般会計予算額を上回る規模の被害を受けた。また、電気、水道などのライフラインが途絶し、復旧まで一週間、住民の約半数以上に影響を及ぼした。死者が1人、家屋流出に伴う行方不明者も1人いる。</p> <p>【教訓等】台風常襲地で、住民の台風対策は万全に近いものがあるが、その他の自然災害対策について考えさせられる災害であった。</p>	・HP	西之表市(平成14年)
462209-1	鹿児島県	南さつま市	<p>【災害名】ルース台風</p> <p>【発生日時】昭和26年10月14日</p> <p>【被災地】鹿児島県南さつま市(当時笠沙町)</p> <p>【災害の概要】ルース台風の勢力(中心気圧942ミリバール、風速60メートル以上、集落を襲った高波10メートル以上)被害の程度(死者17人、行方不明者20人、重症15人、軽症100人、全壊32棟、半壊116棟、流失44棟、床上浸水3棟、床下浸水138棟) ※行方不明20人は、遭難船の救助に出勤した消防団員である。</p> <p>【教訓等】</p>	・文献資料(南さつま市笠沙支所に資料あり)	<p>1. 鹿児島県笠沙町：郷土誌、町報かささ</p> <p>2. 編集：笠沙町郷土誌編さん委員会</p>
462209-2	鹿児島県	南さつま市	<p>【災害名】台風第13号</p> <p>【発生日時】平成5年9月3日</p> <p>【被災地】南さつま市大字大坂扇山(当時金峰町)</p> <p>【災害の概要】台風13号による土砂災害、930hpa最大風速54m、1時間雨量114mm、1日の総雨量329mmの記録的な雨量により、扇山集落において山腹崩壊がおこり、21名の尊い人命が失われた。</p> <p>【教訓等】記録的な大雨のため地区の人たちは危険を感じ自主的に避難をし、安全であろうと思った民家にいた所を山腹崩壊を起こした土砂が民家を直撃し大惨事となった。この災害を教訓に防災無線の戸別受信機の全戸設置、自主防災組織の育成強化、避難所の増設、新築を行い、住民の災害に対する意識の高揚を行い、早めの自主避難を心がけている。</p>	・その他	南さつま市金峰支所に資料あり
463230-1	鹿児島県	頰娃町	<p>【災害名】枕崎台風</p> <p>【発生日時】昭和20年9月17日</p> <p>【被災地】町内一円</p> <p>【災害の概要】住家倒壊1,503棟</p> <p>【教訓等】未曾有の台風であった。9月17日南薩地方は大型の台風に見舞われた。枕崎台風というが、風速45以上 瞬間風速60を記録するというもので、頰娃村の被害は大きかった。死者は6名、負傷者十数名、住家の倒壊1,503戸、半壊1,394戸、非住家の倒壊1,245棟、半壊1,412棟しかも残った家屋もほとんど全部が瓦や茅を吹き飛ばされて雨漏りもひどかった。いっぽう農作物は、水稻7割5分減、陸稲・粟・そばは収穫皆無、甘藷は3割5分減という大被害を受けた。</p>	・文献資料	頰娃町郷土史



事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
46345 1-2	鹿児島県	川辺町	<p>【災害名】松崎の山崩れ</p> <p>【発生日時】1951年7月10日</p> <p>【被災地】川辺町宮松崎地区</p> <p>【災害の概要】長雨で表土がゆるんでいたところに、ケイト台風の影響で大雨となり、山はだがシラスからはぎ取られてすべり落ちた災害である。午前9時頃ものすごい砂・水煙が立ち、70m先の民家まで押しつぶされた。12戸21棟が全壊、死者12名、重傷者6名、軽傷4名の被害が出た災害である。</p> <p>【教訓等】それまで毎年7月10日に行われていた、宮の飯倉神社の「お田植え祭り」を、災害が発生した直近の日曜日に実施したところ、この災害が起こった。それ以降必ず「お田植え祭り」は、7月10日に実施している。</p>	・文献資料	川辺町郷土史 1976年 P 99～100・P1115
46345 1-3	鹿児島県	川辺町	<p>【災害名】高田の大火</p> <p>【発生日時】1962年2月4日</p> <p>【被災地】川辺町高田</p> <p>【災害の概要】高田は純農村地帯であり、ほとんどの家が茅葺きだけで、煙草乾燥場の瓦葺きが点在していたが、異常乾燥注意報発令中の気象下で吹き荒れる風に、茅葺きから茅葺きへの飛び火で燃え移り、一瞬の間に火の海となり大火災となった。全焼51世帯、半焼2世帯の51世帯を焼失、損害額合計34,854千円の損害であり災害救助法が適用された。</p> <p>【教訓等】この大火災の時、水利がなく消火活動が遅れ被害が拡大した。このため、この地区では各家庭の庭先に、溜め池等を整備した。</p>	・文献資料	川辺町郷土史 1976年 P 1164
46392 2-1	鹿児島県	さつま町	<p>【災害名】昭和47年7月梅雨前線による集中豪雨</p> <p>【発生日時】昭和47年7月5日～6日</p> <p>【被災地】さつま町湯田(旧宮之城町)宮之城温泉</p> <p>【災害の概要】低気圧と梅雨前線の活発化によって鹿児島県北薩地方で集中豪雨となり、7月2日9時から7日9時までに大口市で659mm、宮之城で400mmの降雨量を観測した。このため川内川が氾濫し、特に「宮之城温泉」(さつま町湯田地区)では大半の家屋(120棟)が流出し、一夜にして温泉街が跡形もなくなり、過去にない未曾有の大災害(水害)となった。</p> <p>【教訓等】一級河川「川内川」の流域の当該地区では過去において多少の水害は発生したが、昭和47年の災害は「鶴田ダム」の洪水調節機能を上回る集中豪雨により、一夜にして温泉街が消滅する大災害であり、地域住民に強い衝撃を与えた。その後、湯田地区は河川改修、復興事業により、温泉街を取り戻したが、洪水への備え、水防に対する関心が強くなった。</p>	・文献資料 ・写真	・町誌 ・宮之城温泉復興誌
46392 2-2	鹿児島県	さつま町	<p>【災害名】鹿児島県北西部地域地震</p> <p>【発生日時】平成9年3月26日、5月13日</p> <p>【被災地】鹿児島県北西部</p> <p>【災害の概要】鹿児島県北西部は地震が少ない地域であり、安心していただるところであるが、突如として震度5以上の地震が2回にわたり発生し、広い範囲にわたって大きな被害をもたらした。この地震は震度が浅い直下型であったため、被害も大きく、さつま町管内で負傷者16人をはじめ、住宅被害も5,389棟にのぼった。</p> <p>【教訓等】かつて経験した事のない直下型の地震であったため、住民の衝撃、地震に対する恐怖感は大きくなった。当地域においては、この災害のあと地震災害を想定した「防災訓練」を定期的に行っており、地震に対する備え、防災意識が住民に高まってきた。</p>	・文献資料 ・写真	町誌
46447 -1	鹿児島県	湧水町	<p>【災害名】えびの地震</p> <p>【発生日時】昭和43年2月21日</p> <p>【被災地】鹿児島県吉松町、宮崎県えびの町など</p> <p>【災害の概要】死者2名、重傷者2名、軽傷者7名、罹災人員6567名、住家全壊棟数47、住家半壊388、住家一部損壊棟数1253</p> <p>【教訓等】手早く火の始末。1分過ぎたらまず安心、力を合わせて火の消火。大地震のときはまず丈夫な家具に身を寄せる。狭い路地、へいのわき、がけや川べりに近寄らない。山津波、がけくずれに注意。デマに迷わず、ラジオに注意。</p>	・文献資料	・町広報紙『広報よしまつ』昭和43年4月13日発行、新聞記事(南日本新聞昭和43年2月24日付)等
47000 7-1	沖縄県		<p>【災害名】明和の大津波</p> <p>【発生日時】明和8年(1771年)4月24日</p> <p>【被災地】沖縄県宮古・八重山諸島</p> <p>【災害の概要】石垣島白保崎から南南東40kmで発生した地震に伴う津波被害。(M7.4、津波の高さは85.4mの地点まで到達している。)八重山諸島では、津波の襲来で9,313名の死者を出す大災害であった。また津波後の飢餓、疫病などの災害続現象と合わせて人口の減退現象など住民の生活に影響を与えている。</p> <p>【教訓等】珊瑚礁が津波の衝撃によって破碎され、島の奥深くまで運ばれている。これら珊瑚礁の大石は、現在も石垣島の南および東部地域に多数点在し、巨大な津波があったことを物語っている。</p>	・文献資料	・牧野清『八重山の明和の大津波』昭和43年

事例 No	都道府県名	市町村名	災害伝承情報の内容	データ形態	出典情報
47000 7-2	沖縄県		<p>【災害名】明和の大津波</p> <p>【発生日時】1771年(明和8年)4月24日午前8時頃</p> <p>【被災地】沖縄県宮古・八重山諸島 宮古諸島：友利・砂川・新里・宮国・池間・前里・伊良部・仲地・佐和田・塩川・仲筋・水納 八重山諸島：真栄里・大浜・宮良・白保・仲与銘・伊原間・安良・屋良部・新川・石垣・大川・登野城・平得・黒島・新城</p> <p>【災害の概要】宮古・八重山諸島を襲った大津波で、低平なサンゴ礁の島々は、3回も繰り返した大波に蹂躪され、未曾有の惨害を被った。地震の規模はM7.4、震源地は石垣島の南南東40kmとされている。災害は石垣島、とくにその東面と南面で激甚をきわめ、波高は宮良牧中で85.4mに達し、石垣島は4カ所で東から西へ怒濤が横断した。石垣島で8439人、離島で874人の合計9313人、宮古諸島でも2548人が死亡するとともに、その後の餓死者や伝染病死者も加わり、とくに八重山では人口の減退現象が生じた。(災害・被害の詳細については、添付資料1-1・2・3・4を参照)</p> <p>【教訓等】大津波によって大石が打ち上げられたという伝承や村が津波により押し流されたという伝承等が多くある。津波という希有な自然災害のため、当時の人々がなんらの心構えや警戒心もなく、大量の遭難者を出したことに状況がよく現れている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料(古文書、書簡等)</li> <li>・石垣島他に残る津波による大石</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・牧野清『八重山の明和大津波』昭和43年</li> <li>・石垣市『石垣市史叢書11 御手形写』平成10年</li> <li>・石垣市『石垣市史叢書12 大波之時各村之形行書・大波寄揚候次第』平成10年</li> <li>・(財)亜熱帯総合研究所『亜熱帯研究の総合的推進のための研究可能性の調査—沖縄における自然災害リスクとその対応力に関する基礎調査—』2000</li> </ul>
47000 7-3	沖縄県		<p>【災害名】チリ地震津波</p> <p>【発生日時】1960年(昭和35)5月24日午前5時30分～6時30分</p> <p>【被災地】沖縄県羽地村真喜屋、稲嶺、屋我地など</p> <p>【災害の概要】南米チリ中部の近海で起きたM8.5の地震にともなって発生した大津波。</p> <p>沖縄ではおもに久志・羽地村(現名護市)、石川市その他の中北部の各地にわたり来襲し、北部の大浦湾では平均海面385cmにも達し、石川市では大波が1.5mもある護岸を越え、低地では瞬時に大人の肩まで浸水した。</p> <p>この津波で羽地村真喜屋では3人の死者を出し、橋梁流出9カ所、道路決壊11カ所、家屋全半壊137戸、住家浸水1415戸、小型船流出8隻、その他田畑の冠潮などの大きな被害があった。(被害の詳細は、添付資料1-7参照)</p> <p>【教訓等】稲嶺では当日早朝、海岸の警鐘が鳴り響き、海岸方面から「津波だ」との叫び声が聞こえ、まもなく波が護岸の岸壁を乗り越え区内に押し寄せてきた。全家屋が浸水し、なお余波の来襲警報のため、青年団は常に警戒にあたり、一般の人々は浸水していない公民館や旧学校敷地内に避難し、一夜を過ごしたという。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料・碑文・写真(津波災害直後の様子(6点))</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・稲嶺誌編集委員会編『稲嶺誌』名護市稲嶺区、1988</li> <li>・『名護市立真喜屋小学校創立百周年記念誌』1996</li> <li>・名護市『名護市史叢書4 名護碑文記』1987</li> <li>・(財)亜熱帯総合研究所『島嶼地域における危機管理に関する研究—沖縄における1960年チリ地震津波の証言と被害実態分析—』2002</li> <li>・「津波被災地跡」の碑 平成7年(詳細は名護市史の名護碑文記参照)</li> <li>・名護市『名護市史別巻1 写真集・名護のひとびとの100年』1990</li> </ul>
47000 7-4	沖縄県		<p>【災害名】硫黄島島の噴火及び鳥島移住</p> <p>【発生日時】1903年(明治36年)4月 硫黄島島の噴火</p> <p>【被災地】奄美諸島の徳之島西方に位置する硫黄島島は、幾たびか噴火しており、1631年の噴火では多数の死傷者を出し、1829年の爆発時は住民は徳之島へ避難した。1903年の噴火では久米島への集団移住「鳥島移住」が行われた。</p> <p>【災害の概要】1903年4月に、突如として噴火が起こり、住民は恐怖にさらされた。5月8日、状況は島尻郡役所から沖縄県庁、内務省へ報告され、現地調査の結果、久米島への集団移住が適当と判断され、「鳥島移住」が実施された。同年12月に69世帯345人、翌年2月に31世帯183人、計100世帯528人が久米島具志川間切大田の仲泊海岸に移住し、鳥島村落を新設した。移住資金は国が援助した。島には硫黄採掘要員として93人が残留した。</p> <p>【教訓等】1631年の噴火や1829年の爆発は、『球陽』等に記載されている。また、1903年の噴火による久米島への集団移住「鳥島移住」は、当時の島尻郡長であった斉藤用之助の英断のもとにおこなわれ、その著書『鳥島移住始末』にその詳細を知ることができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> <li>・碑文(明治37年に「鳥島移住記念碑」が建てられている)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・斉藤用之助『鳥島移住始末』1920年</li> <li>・具志川村『久米島具志川村史』1976年</li> <li>・球陽研究会『球陽』昭和49年</li> <li>・碑文(鳥島集落「鳥島移住記念碑」)</li> </ul>
47375 8-1	沖縄県	多良間村	<p>【災害名】明和の大津波</p> <p>【発生日時】明和8年(1771年)</p> <p>【被災地】多良間島・水納島</p> <p>【災害の概要】地震・大津波で3324人中362人が溺死。水納島は人畜・家屋はすべて押し流される。</p> <p>【教訓等】</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献資料</li> </ul>	<p>村の歴史散歩(p35～36) 多良間村教育委員会 平成7年8月5日発行</p>